秋月家から見た九州の歴史

平成二十一年六月

石　井　秀　夫　・　伊　藤　　久
共　編

デジタル化：シニアネット久留米デジタルアーカイブ研究会
連絡先　：　snkpost@view.ocn.ne.jp

目　　次

はじめに　4

第一部　応神天皇の頃

帰化した渡来人たち　5

応神・仁徳期の中国遺民受け入れと倭政権強化　14

軍事王権（雄略天皇）と東漢氏　17

第二部　飛鳥時代

帰化人活用で体制整備　20

壬申の乱の裏方、東漢氏　28

第三部　奈良時代

軍制スタート　32

恵恵押勝の乱と東漢氏　33

藤原広嗣の乱　35

第四部　平安時代、

国司と受領　38

平安時代の社会情勢　39

藤原純友追捕と大蔵氏（東漢氏一族）　45

刀伊入倭を機に九州武士の成長　47

九州武士団の形成　50

大蔵氏の嫡流、原田氏　53

平安末期の九州　57

第五部　鎌倉時代

九州支配の方式と「九州三人衆」　60

平家方武士団の没落　62

元寇と戦った武士達　65

東漢氏家系図（秋月氏まで）　70

第六部　南北朝時代

鎮西探題滅亡と建武の新政　74

南北朝下で室町幕府を開く　77

観応の撹乱と南朝勢力の衰微　79

南北朝合一まで　81

第七部　室町時代

室町時代の政治の仕組み（守護制度）　90

北部九州への大内氏の進出 91
各氏の動き 95
第八部 戦国時代
応仁の乱と九州大名 100
西国四大大名 103
応仁の乱後、九州での覇権争い 109
①戦国期九州の概観 109
②大内・大友・少弐・千葉・馬場・龍造寺・筑紫・星野・鍋島氏周辺の出来事 110
③九州諸大名と将軍 113
後期戦国時代の九州（九州三国志） 121
①大友宗麟と毛利元就の抗争・和睦 122
②島津動く 126
③毛利再来、肥前の龍造寺台頭 129
④島津対大友 139
⑤冷徹政治の末、龍造寺家の最後 142
⑥秀吉来襲、九州戦乱の結末 151
（後日談）関が原の戦乱の果て 163
第九部　秋月氏
原田家より分家の秋月氏 167
高鍋藩の秋月氏 173
第十部 米沢藩
上杉鷹山 175
あとがき 184

引用・参考文献 186

は　じ　め　に

「なせば成る、なさねば成らぬ何事も、成らぬは人のなさぬなりけり」と詠ったのは、財政的に瀕死の状態にあった米沢藩を見事蘇えらせた上杉鷹山で、その鷹山は１０才の時、九州の秋月家から米沢の上杉家に養子に入り、幾多の労苦を重ね見事名家上杉家を蘇らせた人物です。１８２２年７２才で亡くなり既に１８７年が経ちますが、今の世にも通ずる有能な済士だったのです。

鷹山の米沢藩再建の話は最後に譲りますが、秋月家は古代から名の知れた名家で、特に九州においてはその足跡が、時に深く、時に浅く歴史に刻まれており、同家の足跡を辿れば九州が見えてくるのではないかと思い、「秋月家から見た九州の歴史」として、同家の記録を再録してみることにしました。

秋月氏は大蔵氏を遠祖としています。その大蔵氏は後漢霊帝の玄孫が、来朝し帰化したものの後裔といわれます。大蔵春実は天慶三年、朱雀天皇より錦の御旗および天国の短刀を賜わり、小野好古らとともに藤原純友を追討している。その勲功によって西征将軍となり、御旗に大和撫子の紋があったことにより、大和撫子をもって家紋としたという。

秋月氏は筑前国朝倉郡（現在の朝倉市）を本拠とした。大蔵党とも呼ばれ、田尻氏などと共に大蔵氏の後裔、「原田」「秋月」「江上」「高橋」は同系と言われます。通し字は「種」です。

秋月氏の祖大蔵氏の一人が、播磨国明石の近く「大暗谷（おおくらや）、大蔵、大倉」　と云う所に着き、「大暗谷氏」と号して代々相続してきた、とあります。

ある時、「天子(天皇)」が明石の月を御覧になるための行幸があった。そのとき大暗谷氏もお供した。そのおり、「明石」の近辺には「大暗谷」と云う「名字」は相応しくない、「秋月」とせよと仰せられた。以来、代々「秋月」と号し、その後、筑前国に来てからも、所の地名も「{秋月」としたとある。以上は筑前国続風土記の記録です。

時代は移り戦国時代の秋月家は、血なまぐさい騒乱・戦争の続く九州にあって、あるときは大内氏に、あるときは大友氏に付き、名家の誇りを維持しつつ戦い続けますが、秀吉にはかなわず、ついに降伏します。お家断絶かと思いきや、献上した銘壷が命を救ってくれることになり秋月家はそのまま存続、ただし、宮崎県の高鍋藩へ移植となります。

本編中に記載している大名家の変遷や、たくさんの戦闘の経緯などは、主に石井秀夫が担当し、秋月家の系図にかかわる話は主に伊藤久が担当して編纂しました。九州の歴史を探求される方々の参考になれば幸甚です。

第一部　応神天皇時代（３２９－３９４）

第一部の一、　帰化渡来人たち

秋月氏の祖、大蔵氏、そしてその祖先は渡来人の東漢氏とされていますが、以下、秋月家の系図を辿りながら米沢藩の上杉鷹山までたどり着くことにします。順序としてまずは、渡来人の様子から筆ろ起すことにします。

日本への原初の渡来人たちは，紀元前をはるかにさかのぼるが，日本（九州を中心として）に米作りを伝えた人たちの渡来は紀元前でも精々ＢＣ３００年頃、弥生人と呼ばれるようになる人たちであった。その後、応神天皇期に再び大規模な渡来人の波があったとされているが，このころ朝鮮半島では動乱が起きていた。それから逃げるように日本に渡来し，製鉄の技術や鉄製の農具，灌漑（かんがい）技術などを伝えた人たちがいた。かれらがもたらした道具や技術によって，それまでの生産方法や労働形態を一変させる一大改革が起こったようである。また，馬や馬具ももたらされ，乗馬も行われるようになった。その後５～６世紀、特に雄略天皇の頃の渡来人たちによって，政治にも影響を与えるような知識や文化，技術がもたらされた。７世紀には，白村江の戦いで敗れた百済からの亡命者たちが入ってきた。彼らもそれまでの日本にはない最新の技術や文化を伝えたり，朝廷の政治に大きく関わったりした。渡来人の持ち込んだ技術や文化によって当時の日本（倭国）は高度に発展していったのである。

渡来時期を区分すると次の四つとなる・・・

Ⅰ　紀元前２～３世紀　日本に定住し、弥生時代を築いていく。
（３－４世紀にはヤマト政権が国内を統一する）

Ⅱ　４～５世紀　　多くが朝鮮半島からの渡来であった。（４世紀、倭が高句麗と戦う）
（応神期）阿知使主（東漢氏の祖）および秦氏渡来。秦氏は葛野を拠点（嵐山・嵯峨野）。その後全国に広がり土豪化。５世紀、倭の五王が中国に使いを送る。倭国王讃・珍・済・興・武など。（晋書・宋書など南朝史書による）

Ⅲ　５世紀後半～６世紀
（雄略期）今来漢人（いまきのあやひと）・百済才伎（くだらのてひと）が最新技術をもたらした。大和高市郡に居住、官僚化。
５３８年、百済から仏教伝わる。百済の聖明王の使いで訪れた使者が欽明天皇に金銅の釈迦如来像や経典、仏具などを献上。

Ⅳ　７世紀　　百済･高句麗などから亡命してきた。扶余城陥落 660、白村江敗戦 663。

４・５世紀の渡来人で代表的な集団といえば秦（はた）氏と漢（あや）氏（ともに個人名ではなく，集団名・一族名を指している）である。彼ら渡来人たちは優れた技術と能力を持ち，日本の国づくりを根底で支えたと言える。本稿では秦氏については省略し、以下漢氏を中心に記述する。

漢氏の起源は、高祖劉邦の漢帝国を西暦二十五年に再興した劉秀（光武帝）から九代目の後漢霊帝と言われる。戦乱で朝鮮半島（帯方郡）へ逃れた漢王二十九代阿知王は、その子都賀使王及び七姓氏・十七県人を率いて２８９年９月５日に備中国窪屋郡大倉谷に渡来する。

応神天皇(329-394)の下での大和朝廷は彼らを優遇し、東漢の姓と臣（おみ）の位を賜り斉蔵（大蔵）の長官に任じられ、奈良県高市郡飛鳥村桧隈に住む。
その後、呉国に使いを出し、４人の織目を連れ帰り養蚕・染色・機織・裁縫の技術を教える。諸国からの貢物を管理する大蔵大臣に任命されると共に「大蔵」と「坂上」の姓を賜る。大蔵忌寸の後に宿禰を賜り、一族　坂上田村麿の功（征夷大将軍）により朝臣の位を賜る。

阿智神社（岡山県倉敷市本町）

磐境の鶴石，亀石
（本殿横にある石組み）

上の写真の通り、岡山県倉敷市に阿智神社がある。

４世紀，応神天皇の時代，社記によると岡山県倉敷一帯（倉敷市の美観地区）は阿知潟あるいは吉備の穴海と呼ばれていて，その中の小島（内亀島，現在の鶴形山）に漁民が社殿を奉祀したのが阿智神社とされている。東漢氏の祖である阿知使主（あちのおみ）とその子の都加使主（つかのおみ）が漢人を率いて帰化し，一部がここに定住した。帰化するにあたって帰属意識を明らかにするために，日本古来から伝わる盤座（神が岩に宿る思想）や磐境を設けたとされる。この思想に中国の神仙思想が導入された。盤座は日本庭園の石組みの起源をさぐる貴重な存在とも言われている。

また、奈良県明日香村にも次の遺跡がある。

桧隈（ひのくま）寺跡（明日香村）
於美阿志（おみあし）神社の境内に礎石が残る

於美阿志（おみあし）神社（明日香村）
阿知使主を祀る

明日香村稲淵の棚田（初夏）－渡来人が開墾したと言われている

明日香　稲淵地区に龍福寺がある。ここにある石塔は，原形を止めてはいないが，もとは

朝鮮式の五重の石塔（日本最古の銘文入り層塔）といわれる。台の部分には「天平勝宝三年（７５１年)」「竹野王」の文字が彫られている。この地域が渡来人と深く関わっていたことがわかる。

５世紀後半，雄略天皇の頃(427-489)、今来漢人（いまきのあやひと-新たに来た渡来人という意味をもつ）を東漢直掬（やまとのあやのあたいつか）に管轄させたという記述がある。東漢氏は百済から渡来した錦織（にしごり）鞍作（くらつくり）金作（かなつくり）の諸氏を配下にし，製鉄，武器生産，機織りなどを行った。蘇我氏はこの技術集団と密接につながることで朝廷の中での権力を大きくしていった。

漢氏にはさらに本系の同族のほかに、阿知使主が帰化したときに連れてきたという「七姓の漢人」の子孫と、その後に、阿知使主の旧居地帯方にすむ人民はみな才芸ありとして連れてきたものの子孫とをあわせて、三十以上の村主姓（すぐりせい）の諸民が付属していた。

桧隈から多武峰方向を見る（秋）

高松塚古墳

キトラ古墳

高松塚古墳やキトラ古墳はともに桧隈の地にある。被葬者の解明はされていないが，渡来人と深く関係する古墳と見られている。（現在，高松塚古墳内部に発生したカビの除去と防止策が検討され，改善されつつある。また，キトラ古墳の前に調査施設が建築され，写真のような姿を見ることはできない。）

東漢氏の分化

東漢氏は飛鳥の檜前（桧隈：ひのくま－奈良県高市郡明日香村）に居住して，大和王権（大和朝廷）のもとで文書記録，外交，財政などを担当した。また，製鉄，機織や土器（須恵器：すえき）生産技術などももたらした。

もともと応神期に「党類十七県」をひきいて帰化した阿知使主は大和高市郡檜前村に居住したという。

彼らは実際には百済から渡来したものと思われ,同族に百済王から出自したと称する者が多い。そしてこの氏は、阿知使主の子の都加使主（つかのおみ）（東漢直掬やまとのあやのあたいつか）の三人の男から、三腹に分かれ、ひきつづき分化を重ねたらしく、七世紀以前に、川原・民・谷・内蔵・山口・池辺・文・蔵垣・荒田井・蚊屋などの枝氏に分かれた。

平安初期に漢氏を代表した坂上氏の家系を示す「坂上系図」にひかれている「姓氏録」逸文によると、その頃、倭漢氏が同族と考えていたのは約６０にのぼる忌寸姓の氏で、他に九つの宿禰姓と三つの直姓を含んでいた。

漢氏の分化はこのようにはげしく、同族中に多くの異姓が並立し、そのうち、天武天皇壬申の乱の頃には書直（ふみのあたい）が、養老より天平年間にかけては民忌寸（たみのいみき）が、天平時代から後は坂上忌寸が、それぞれ勢力を得て、族長の立場を占めた。これは、朝廷の官人として有力化した一族が、現実の権力関係によって同族を統制したもので、その時々の同族内の勢力の浮沈を表している。しかし、彼らも、阿知使主を共通の祖とする同族意識に結ばれ、苅田麻呂の奏言にあるように「檜前忌寸（ひのくまのいみき）および十七県の人夫」として、大和高市郡内の地に満ちてすみ、他姓の者は十中一、二に過ぎない有様であったという。

その東漢氏の同族については、『続紀』の苅田麻呂上表文、坂上系図・『新撰姓氏録』坂上氏条逸文になどにみえるところでは、阿智使主とともに来朝した七姓漢人（朱・李・多・皂郭・皂・段・ 高）の子孫である桑原・佐太氏等と、仁徳期に阿智使主が朝鮮から連れてきたとされる「村主」のカバネをもつ氏族集団がおり、その同族的広がりは関東におよぶほどのものであった。阿智使主直系の子孫は後代、天武朝において忌寸姓を賜ることとなり、その他の氏族とはカバネ的に区別がなされることとなった。

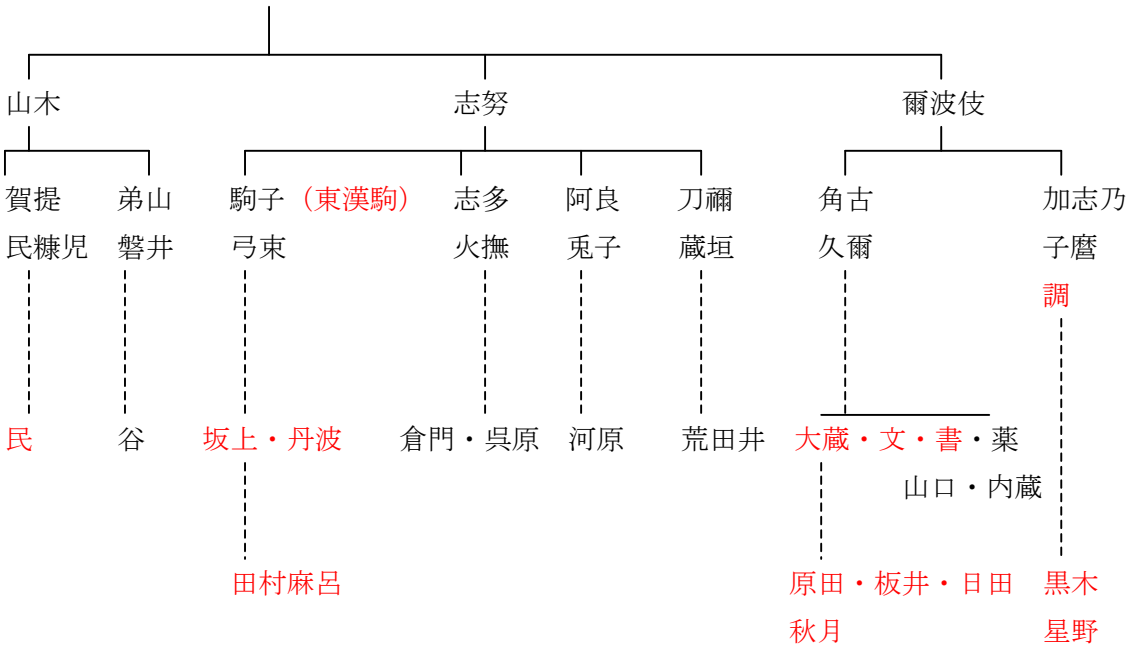
渡来時期については、５世紀末の雄略紀に応神紀と重複する伝承が記載されていること

から、応神期のそれは雄略紀の渡来関係記事を元につくられたものと考えられており、５世紀末に求める説が有力である。同じく５世紀末から６世紀初頭にかけて渡来してきた今来漢人等、渡来系技術集団を配下に取り込み支配することによって、勢力をましていったものと考えられている。秦氏の新羅系精銅・製鉄技術より新しい百済系の製鉄技術をもたらしたものと考えられ、東漢氏の配下にいた忍海漢氏などは製鉄技術をもって奉仕を行ったいたらしい。

東漢氏は、技術者集団を取り込むと同時に、文筆業を主としたらしい（東）文氏を輩出するなど、文人としての官人を多く排出した。７，８世紀には内蔵・大蔵官人を多く輩出するなど、算術をもとにした高度な管理能力なども身につけていたものと思われる。また東漢氏は蘇我氏の門番や宮廷の警備に多くかかわっている。崇峻天皇暗殺の際にも東漢氏が担当しており、蘇我氏の兵士として奉仕していたが、壬申の乱では、蘇我氏を見捨てることもあった。その後天武天皇にそれら推古天皇以来の武力の技をとがめられている。東漢氏は奈良時代以降も、武人を輩出しつづけており、平安初期には蝦夷征討で名を馳せた東漢氏の首長氏坂上氏の苅田麻呂・田村麻呂親子がみえることもその伝統によるものである。

その後、七姓の漢人は、東漢氏とともに大和国飛鳥付近で活躍した。そしていわゆる飛鳥文化の中心的役割を演じたのである。「山尾幸久」氏はその著書の中で「北山茂雄」氏の論文（「飛鳥朝」文英堂１９６８年）を引用して次ぎのように記している。
―――「飛鳥文化の創造主体は、蘇我氏ではない。蘇我氏的仏教圏ではぐくまれた聖徳太子でもない。６世紀の渡来知識人である。」この渡来知識人の主体こそ東漢氏である、と。

漢高祖劉邦
光武帝（AD２５年　漢を再興）
後漢霊帝（光武帝から九代目）
献帝
　┆
石秋主
康王
阿知王　（魏の乱を避け朝鮮帯方へ逃れる、漢王から二十九代目）
都賀使主、七姓氏・十七県人を率いてAD２８９年９月備中国窪屋郡大倉谷に渡来。東漢の姓と臣の位を賜り斉蔵（大蔵）の長官に任せられ、奈良県高市郡飛鳥村桧隈に住まう。
阿多倍
東漢直掬（雄略天皇 427-489　時代）



さて東漢氏といえば坂上氏と言われるほど坂上氏がその代表のように扱われている。ところが歴史的には、系図でも明らかなように必ずしも坂上氏だけが東漢氏ではない。

東漢直掬の次の世代で３系統（３腹）に分かれる。

兄腹山木より約２５氏派生しており主な氏族は、民、谷、檜前氏らである。

中腹志努から坂上、丹波氏である。

弟腹爾波伎から、山口、調、大蔵、内蔵、文、書氏など８姓である。

これらの中で主な氏族のみ概説する。第五部の四、東漢氏系図を参照。

＜大蔵氏＞

大蔵氏の祖は大蔵広隅だとされている。ここから以降は同一血統であろう。大蔵という呼称の言われは諸説あるようである。主なものは、イ）東漢氏の元祖「阿知王」が播磨国大蔵谷に館を構えていたからだ。

ロ）１７履中天皇の時三蔵（忌蔵、内蔵、大蔵）を造り、その管理を秦氏と東西文氏に分担させた。この時大蔵を担当したのが直姓を賜り大蔵直となった。

などである。この大蔵氏から内蔵氏が派生している。この大蔵氏の本流は、平安中期くらいまで平安貴族として京都にいた模様である。大蔵春実（母は三十六歌仙の一人南家藤原敏行の娘でこれからもかなりの位にいたことが予想される）の時春実の妻が参議小野好古の娘であった関係と思われるが、小野好古が藤原純友の乱の鎮圧の総大将になった縁で九州太宰府に随行、ここで功績を挙げた。以後太宰府の役人となり、世襲することになり、九州に大蔵党と言われる一大武士集団をつくるきっかけとなった。

この一派は後に多くの戦国大名（原田氏が嫡流）、江戸時代にも高鍋藩主家秋月氏を輩出

した。非常に多くの系図が残されている。

板井氏

大蔵一族　豊前国に土着して在庁官人となる。種遠の頃には京都郡板井の神楽城を本拠に、その所領は築上・京都・仲津・田川の各郡内に分布した。板井氏は宇佐宮とともに豊前国における平氏与党勢力の中心。

日田氏

日田の地は長年大蔵氏の治めるところであった。何時の頃からか日田の姓を名乗り、地名として残った。

記録には大蔵氏一派がこの豊後国日田郡を本拠としていたこと、大蔵鬼蔵大夫郡司職、天仁年中高家日田冠者と号し、郡を支配、永俊郡内を諸子に譲る。文永・弘安に永基・永資軍功有り、21 代七郎丸で断絶、大友永世郡司職をつぐ。親将自害、郡司職断絶、子親永朝鮮に死去、滅亡する、と遺している。

＜調（つき）氏＞

調氏の祖は調老人とされている。元々租税の徴収をする役人であったらしい。調老人は懐風藻に記事が一寸記されている程度で詳しくは分からない。この後の系図は不詳であるが調能高なる人物が九州薩摩国の豪族として登場する。その累孫として筑後国上妻郡黒木郷の領主として猫尾城を本拠とした黒木助能なる武将が調氏嫡系として現れる。これが調党三家（黒木・星野・河崎）の中心となり、南北朝で南朝方につき活躍することになる。さらに戦国大名に発展する。

この助能の妻が秦氏考で登場した島津氏の祖ともされる「惟宗基言（秦氏末裔)」娘とされている。

黒木氏　（吉永正春著　「筑後戦国史」　葦書房　1997、より）

筑後国上妻郡黒木荘木屋村（八女郡黒木村木屋）を本貫とした豪族。大蔵大輔助能に発し、その子孫黒木四郎定善が猫尾城の城主となったのを始めとする。建武年間菊池武敏らとともに終始宮方として活躍した。黒木氏の出自については、いろいろ伝説があるが〃調〃というのもそうである。大番役として京都に上った大蔵大輔助能が滞京中に内裏で管弦の楽が行われ、その際笛の妙技を奏でた。帝（後鳥羽天皇か）が御感のあまり〃調〃という姓を賜わったという。黒木、河崎、星野氏らはこの調の一党である。調の本家は黒木氏を称し、黒木町木屋の猫尾城が本城であった。長子貞宗は六百町を領し、河崎氏を称して大尾城（八女市山内）を居城とし、現在の八女市北部を領した。また義子胤実は星野氏を称して星野三十二村、六百町を領し星野谷に拠った。

星野氏　筑後国生葉郡星野村（八女郡星野村十籠）を本貫とした豪族。黒木氏を祖とする。弘安の役では博多湾沿岸の石塁築造に当たり、なお戦闘にも参加し功をあげた。南北朝時代、南朝方として行動した。『大日本地名辞書』に、「星野氏は黒木と同族にして、南北朝の乱に官軍に応じ、終始一節、以て矢部、菊池の宮方を擁護せり。戦国の頃大友氏に

属せしが、天正中叛き島津氏に付く。同 14 年筑前に出戦し、立花宗茂に敗れ、星野兄弟共に死し、遂に亡ぴぬ」とある（角川日本地名大辞典）。

川崎氏（または河崎氏）　河崎荘は天授 2 年（1376）に初めて見えるが，現在の矢部村，黒木町の大淵をも含んだ当市東部の馬場以東に広がっていた。山内の大尾城址は黒木助能の子川崎定宗が鎌倉初期に築いたという。蒙古襲来に際し博多湾岸の石築地（元寇防塁）役を勤めた中に川崎氏が見える。川崎氏は戦国末期には大友・龍造寺・島津にあるいはつき，あるいは離れたが、天正 15 年（1587）豊臣秀吉の九州仕置により領地を没収された。ほかの市域の荘園としては南北朝期に安楽寺領吉田荘や忠見別符があった。

木屋氏　木屋氏は黒木氏の一族で，木屋の立華城を居城としたと伝えられている（角川日本地名大辞典より）。

＜丹波氏＞

丹波氏の祖は「丹波康頼」とされている。

丹波康頼は１０世紀の平安中期の人物である。日本の針灸など東洋医学の祖と言われる人物である。

この一族は代々典薬頭を勤め、堂上貴族「錦小路」家となり、明治まで続く名家となった。俳優の丹波哲郎氏がその末裔だというから面白い。この丹波氏からの派生氏族として小森氏、施薬院氏などが有名である。

＜坂上氏＞

坂上氏の祖は中腹と言われた「志努 」だと言われている。「志努 」から日本で生まれた（丹波国）という説有力。これより前の世代は、百済生まれというのである。坂上という呼称の言われは諸説ある。一つは志努が生まれた丹波国の土地の名前（その場所は比定されてないが）にちなんだという説。有力な説は大和国添上郡坂上里（奈良県法華寺町西北付近）とされている。

志努の子供とされる駒子こそ日本書紀に登場する東漢駒であるとされている。この人物は、蘇我馬子の命により３２崇峻天皇を暗殺したことで古代史上、有名人物である。現役の天皇を家臣が殺した例は日本の歴史上前にも後にもこの一例だけである。崇峻天皇は蘇我馬子と対立の姿勢を取り始めた矢先のこの事件は、その後の日本の歴史を変えたとされる。即ち、完全に蘇我氏傀儡政権の確立である。３３推古天皇、聖徳太子、大化の改新へとなるきっかけとなったのである。ところが馬子はこの忠臣？を崇峻天皇の后である馬子の娘河上姫に駒子が横恋慕して起こした暗殺事件として、駒子を殺してしまった。

しかし、これによっても東漢氏が蘇我氏から離反していない。東漢氏は入鹿が暗殺され蝦夷が自害するまで蘇我氏の忠実な護衛兵の役目をしていた。しかし、ことここにいたり、蘇我氏を捨てて逃亡したとされている。

駒子の孫の代に壬申の乱が勃発。この時本来３８天智天皇方についていたはずの坂上熊

毛・老などの東漢氏系の武士が賊軍である４０天武天皇方に寝返った。そして大伴氏らとともに大和で活躍し功をあげて天武天皇派の勝利に導いたとされる。しかし、老の子供である大国の時代でも未だ貴族の扱いは受けていない。坂上氏が歴史上急浮上するのは大国の子供犬養からである。犬養は４５聖武天皇に寵愛され信頼を得た。これにより正四位上という渡来系の氏族出身としては破格の地位（一般的には現在もこのように評価されている）を得た。貴族の仲間入りをしたのである。その「武」の力が認められたのである。

その子供「苅田麻呂」は父親の遺徳の上にさらに藤原仲麻呂の乱、弓削道鏡排斥などで貢献し、７８５年（長岡京時代）には父親の位を超えて従三位となり、姓も宿禰姓を賜り、他の豪族と完全に肩を並べた。また娘を５０桓武天皇妃とし、北家藤原氏嫡男内麻呂の側室にも入れた。これは渡来系氏族の雄、秦氏もなしえなかったことである。秦氏はせいぜい四位の位までであった。苅田麻呂の子供は、多くいたが、次男とも三男とも言われていたのが田村麻呂である。父親が従三位になった年７８５年には従五位下（２７才）となり武士の道を歩んでいた。７９７年には日本で初めて（そうでないとの説もある）征夷大将軍となりそれ以後数々の武功をあげた。８０５年遂に渡来人系では考えられないとされた参議に就いた。（一般的には現在でもこのように評価されている。）これは父苅田麻呂も到達出来なかった地位（苅田麻呂は非参議であった）である。即ち国政の中枢に入ったのである。８０６年に桓武天皇は没したが、８１０年には大納言（嵯峨天皇朝）となりその翌年没した。これは桓武天皇という特異な天皇に寵愛されたという事情があるにしても東漢氏系全氏族にとっても画期であった。

ところがである、この田村麻呂の子供らは何故か正四位下以上にはなっていないのである。本人の器量がそこまでだったと言えばそれまでであるが、時代が既に藤原氏単独政治体制に突入していたこともいなめない。他の古代豪族もことごとく政治の中心から排除されていったのである。

第一部の二、応神・仁徳期の中国遺民受入れとヤマト政権強化

ヤマト政権が最も関心をしめし、新羅や百済などに求めたのが、先進技術や中国文化であった。とくに製鉄技術が遅れていたので、良質な鉄の産地であった新羅や百済から鉄の延板（鉄鋌）を大量に輸入しなければならなかった。当時は鉄製の武器が戦争を有利にみちびき、鉄製の農具が著しく農業生産を高めたことを考えれば、政権がその原料を強く新羅に要求したことは明らかである。

「神功皇后紀」四十七年の条にも、百済の肖古王が五色の綵絹と、角弓箭と、鉄鋌四十枚を献じたとあるが、この鉄鋌の一部に当たると言われる遺物が奈良県の宇和奈辺古墳の陪冢（ばいちょう）から出土している。また、大型の鉄鋌２８０個以上、小型の鉄鋌も６００個近く出土したと言われる。

ヤマト政権にとっては中国の先進文化を取り入れることも緊急課題であった。文化国家としての体面を保ちつつ中国や朝鮮諸国と接することは、外交上、欠くことできない重要な要素であった。そのために、早くから百済や新羅に中国文化を身につけた人物の派遣を求めたのである。

「応神紀」十五年の条には、百済の王が阿直岐を遣わして良馬二頭を送ってきたところ、阿直岐が「能く経典を読む」ことを知った応神天皇が、皇子菟道稚郎子の学問の師に任じた。そして阿直岐に命じて優れた学者を招請せしめている。その人物が王仁である。王仁は「王」姓であるから、中国遺民の可能性が強い。百済はかって中国の植民地の拠点であった帯方郡を中心とした地域から興って建国したから、百済の領内には少なからぬ中国遺民が残存しており、代々中国の文化遺産を伝えていた。

王仁は書首らの祖である西文氏の始祖といわれるが、文字通り王仁の子孫は朝廷の文書作成や管理にかかわっていた。国家の体制が整えられていくに連れて政治・外交・経済関係の文書の作成が必要となり、大和朝廷は漢文に習熟した人物がぜひとも欲しかったのである。

王仁だけでなく、応神天皇の時代の前後に「漢氏（あやし）」や「秦氏（はたし）」などが日本に渡来し、その後、文化面だけでなく政治面にも大きな影響を与えたことは注目されるべき事実である。なぜなら、国家が大きく飛躍する時期に、大量の中国遺民が渡来するという現象が起きているからである。その大きな波の一つがこの応神・仁徳朝である。

「漢氏」は四、五世紀の頃に朝鮮半島の帯方郡のあたりから日本に集団で移民した中国系の一族だったようである。帯方郡は後漢の建安年間（１９６－２２０）から西晋の建興元年（３１３）まで中国による朝鮮支配の政治的拠点で、多くの官人やその家族が居住していた。だが、建興元年に北の楽浪郡が高句麗の手に落ち、それと前後して帯方郡も韓族の支配下に入る。百済は扶余族という騎馬民族の一族が農民を支配して帯方郡に建国した国である。その都がどこに置かれたいたのかについては定説がないが、一説では現在のソウル市付近の漢江流域としている。

百済の古都は「漢城」と称し、ソウル市を流れる河川を「漢江」と呼ぶことから、この地域こそ百済の中心地の一画であったと思われる。そして、この地域には中国遺民が少なからず居住し、百済の建国にも大きな影響を与えていたのではないだろうか。

しかし、高句麗の勢力が拡大し、漢江北岸近くまで迫ってくると、百済は必然的に高句麗の脅威にさらされる。百済の王族は扶余族という騎馬民族の一族であったが、民衆の多くは韓民族である。ほとんどが農民であったから、その兵力は農民兵であり、歩兵を主体とする者であった。そのため、機動性に優れた馬を駆使して集団で戦う高句麗軍にしばしば敗れ、苦戦する。このような状況下に、百済も急いで騎兵の養成につとめ、対抗しようとしたが、十分に成果を上げるにはいたらなかった。

一方、高句麗との戦いの苦い経験から、ヤマト政権も朝鮮半島から駿馬を輸入し、各地に牧をもうけて繁殖させる必要性に迫られたのである。それでもヤマトでは馬は依然として高貴なもので、軍馬に用いることもままならない有様であった。当時の馬は一種のステータスシンボルだったようである。
豪族の墳墓から出土する埴輪の多くは「飾り馬」である。

話を戻すと、ついに百済は高句麗に圧倒されて漢城を放棄せざるを得なくなり、南遷して白馬江流域に後退し、公州や扶余に都を遷すのである。長期にわたって戦場となった漢江流域の人々は家を焼かれ、田畑を荒されて、命からがら南へ逃れなければならなかった。そして、その一部の集団が安住の地を求めてヤマトに渡ったのである。彼らは中国遺民の系統であり、百済の「漢」と呼ばれる地域の住民であったことからヤマトに渡来して「漢氏」と自称したのである。
「新撰姓氏録」の逸文にも、応神天皇の時代に「本国の乱を避け」て一族の者が他氏族を率いて帰化したと記されている。

「秦氏」は、「応神記」によれば弓月君が百二十県の民を率いて来朝した部族集団とされている。「漢氏」が漢の高祖を祖先に担ぎ出しているのと同じように、秦氏は自ら秦の始皇帝の子孫だと主張している。両氏とも中国の有力な朝廷の始祖を自らの血統の源としているのは、お互いに対抗する意図があったからであろう。
「太秦公宿禰」について、「新撰姓氏録」左京諸蕃上には、応神天皇の十四年に融通王（弓月君）が二十七県の百姓をひきいて帰化し、天皇に金・銀・玉帛（ぎょくはく）などを献上したという記述がある。ここでいう百姓は多くの姓を持つ人々をさし、現在の農民の意味ではない。
仁徳天皇の時代には二十七県の秦氏を日本の各地にすまわせ、特に養蚕を司らせて、蚕の繭からつむいだ絹糸で絹織物を生産させたという。天皇は秦氏が貢納する絹布が大変しなやかで暖かく、あたかも肌膚（はだ）のようだと褒められ、「波多」の姓を与えたという。
雄略天皇の時代に秦公酒は美しく織れた絹布をうず高く山のように積んで天皇に献じた。そこで、天皇は秦公酒に「兎都方佐（うづまさ）」の姓を与えた。「ウヅマサ」は、「太秦」とも表記されるが、「ウヅ」は「うづ高し」を現し、「マサ」は「勝る」で、優れた品質と技能をしめす。秦公酒は秦氏の本宗としてしだいに力を蓄えていったが、彼の本拠は現在の京都市太秦を中心とする地域である。
この一族からは聖徳太子のブレーンとして活躍した秦造河勝が出るが、彼は太子から弥勒菩薩像をさずかり、太秦の地に蜂岡寺を建立した。この寺が広隆寺の前身であり、この仏像こそ、わが国の国宝第一号として選ばれた半跏思惟像（はんかしいぞう）と見られている。

『漢氏』が百済系とされるのに対して、この「秦氏」は新羅から来朝した一族であったようである。かって、新羅の北東部に辰（秦）韓と呼ばれる地域があった。「魏志倭人伝」に

よれば、辰韓は馬韓の東にあったが、この地の古老たちは、秦の始皇帝の時代に過酷な労役にたえかねて亡命した人々の一部が、朝鮮半島に逃れてこの地に来たと伝えている。そこで馬韓は東側の土地を彼らに割譲したが、その地には柵がめぐらされ、長い間隔離されていたという。そのため、彼らはながい間、韓族とは異なる風俗を保っていた。話す言葉も韓族の言葉とはきわめて異なっていたようである。

だが、秦韓も安住の地ではなかった。「三国史記」「雑志」に、辰韓は馬韓の東にあって海に面し、北は濊(わい)に接していると記されているように、この地は国境に近いところにあった。現在の地名では蔚珍(うるちん)付近と言われるが、濊(わい)や高句麗が大挙して押し寄せた来たために、秦韓の人々は再び故郷を失うことになったのである。四世紀後半にいたって新羅と高句麗の友好関係が破れ、高句麗が新羅に兵を進めて国境地帯を蹂躙したからである。

第一部の三、　軍事王権（雄略天皇４２７－４８９）と東漢氏

雄略天皇はいろんな顔を持つ大王である。即位前夜の果敢な行動や南宋に送った上表文からは、武人としての性格が強い人物だったようだ。だが、万葉集の巻頭を飾る「籠(こ)もよ　み籠持(こも)ち　掘串(ふくし)もよ　み掘串(ぶくし)持ち　・・・」の歌は、雄略天皇の御製とされている。良い籠と掘串を持って岡で菜摘をしている娘に、名前と家柄を教えてと呼びかけるこの歌は求婚の歌であるという。武人とは思えないナイーブな優しさが伝わってくる。

雄略天皇の時代は、外交で一つの画期をなした時代であると言える。『日本書紀』は、雄略天皇は史部（ふみひと、朝廷の書記官）の身狭村主青（むさのすぐりあお）と檜隈民使博徳（ひのくまのたみのつかいはかとこ）を寵愛し、たびたび呉へ使節として派遣している。派遣先の「呉」とは、南朝の宋のことであろう。また、朝鮮半島問題にも盛んに関与している。ちなみに雄略天皇５年(461)、百済の蓋鹵（かふろ）王が弟の昆支（こにき）王を倭に派遣して大王に仕えさせた。このとき、昆支王は蓋鹵王の子を孕んだ臨月の女性を同道してきたが、各羅島（かからのしま、佐賀県東松浦郡の加唐島か？）で男子を出産した。皇子は斯摩（しま）と名付けられた。後の武寧王（在位 501～523)、すなわち我が国に仏教を伝えた聖王の父である。

蓋鹵王の乙卯年(475)、高句麗の攻撃を受けて、百済の王都・漢城は落城し、蓋鹵王をはじめ大后、王子らは皆敵の手にかかって殺害された。ただ落城寸前に新羅に救援を求めるために、蓋鹵王は王子の文周に木劦満致（もくらまち）と祖弥桀取を付けて南に行かせている。百済が高句麗のために敗れたと聞いて、雄略天皇は久麻那利（こむなり、熊津？）を文周王に与えて百済を復興させたという。さらに、雄略天皇２３年(479)百済の文斤王（もんこんおう、三斤王）が薨じると、昆支王の第２子・末多王に兵器を与え、筑紫の兵５００人に護衛せしめて百済へ送っている。末多王は即位して東城王(在位 479～501）と呼ばれ

た。

こうした韓半島、特に百済との深い外交関係を結んでいた雄略朝であってみれば、高句麗を糾弾する上表文を南宋に送ったのも当然のことに思われる。だが、雄略天皇は内政にも尽力していたことを伺わせる記述が『日本書紀』には散見する。朝廷の諸部の起源を雄略朝に求める記事が多い。なお、上記の昆支王は作家の黒岩重吾氏によって蘇我氏の始祖とされている人物である。また木劦満致は門脇貞二氏によって蘇我氏の始祖とされている人物である。

雄略天皇の宮居は記紀によれば、泊瀬朝倉宮であるが、「日本霊異記」には磐余宮にも居住したとする。泊瀬朝倉宮の所在地は城上郡長谷郷で、五世紀後半の大型掘立柱建物の以降が検出さらた桜井市脇本の脇本遺跡を朝倉宮の跡とする説がある。一方、磐余は桜井市の谷・阿部・戒重から天香具山山麓にかけての一帯を指す広域的な古地名で、この地には雄略の磐余宮のほか、伝承的なものも含めると、神功皇后と履中天皇の「磐余稚桜宮」，清寧天皇の「磐余甕栗宮」、継体天皇の「磐余玉捕宮」、敏達天皇の「磐余訳語田宮」，用明天皇の「磐余池辺双槻宮」、崇峻天皇の「石村神前宮」などの宮居が存在した。

雄略天皇には泊瀬朝倉宮と磐余宮の二つの宮居が存在したが、稲荷山鉄剣の銘には、さらに獲加多支鹵（わかたける）大王の「斯鬼宮（しき）」の名が見える。斯鬼は大和国の磯城（しき）の地を指し、この宮も含めると、雄略の宮はいずれも現在の桜井市かその周辺にあったことになる。軍事的専制旺盛の確立者として、彼が三つの宮を所有したことは不自然ではなく、むしろその権威の表象としてとらえることが出来るが、雄略の諱（いみな）が「オオハツセノワカタケル」であることを念頭におくと、彼の本来の宮居は泊瀬朝倉宮であり、そこから西方へ進出する形で、斯鬼宮、磐鬼宮と、新たに宮を建造していったのであろうとされる。

雄略以後、磐余には代を重ねて大王の宮が営まれるようになった。崇峻五年（５９２）、推古天皇が飛鳥豊浦宮で即位するまで、一時的に他の地域に都が遷ることはあっても、原則として磐余が宮都としての機能を果たしていたのである。また欽明天皇磯城嶋金刺宮や崇峻天皇の倉橋柴垣宮は、それぞれ磐余に近い桜井市金屋や同市倉橋に宮の所在地をもとめることができるから、これらも広義には磐余の宮都の中に含めることができる。

檜前や今来への渡来人の大量移住が始まる時期と、磐余に大王宮が営まれるようになる時期とは、どちらも五世紀後半から末で、ほぼ一致している。しかも檜前・今来の地と、磐余やその周辺の大王宮とは、距離的にそれほど離れていない。これを偶然の一致とみることは出来ず、王権の側が、意図的に新たな宮都の近くに渡来人を配置させた結果と見るべきであろうとされている。

雄略期に始まる軍事的専制王権の時代は、一方で、渡来系の人々が王権の直接的な支配下に組み込まれ、さまざまの先進的な技術や知識を持って、大王に職務奉仕するようにな

った時代である。先に述べたように、「今来才伎」とよばれる技術者たちが、大王の要請により、五世紀後半から六世紀にかけて、朝鮮半島、特に加耶や百済方面から大量かつ継続的に畿内各地に移住してくるようになった。このような状況にあわせて、それ以前から日本列島に渡り、機内や西日本の在地土豪たちの下に従属していた旧来（古渡）の渡来人たちも、しだいに王権の支配が及ぶようになったのである。

彼らは、特定の職務を有する伴造やトモとして王権に奉仕するようになるが、同時に個々の集団を相互に結びつける組織として、ウジが形成される。このような背景のもと、軍事的専制王権の成立期に、渡来系諸氏中、もっとも有力な氏族の一つである東漢氏のウジの組織が誕生することになるのである。

東漢氏とは単一の氏族名ではなく、文氏・民氏・坂上氏・谷氏・内蔵氏・長氏など多くの枝氏によって構成される集合体を表す総称であり、枝氏の数は史料的に確認できるものだけでも、七世紀末までに十八氏を数えるという。

東漢氏はヤマト政権の軍事・財務分野で手腕を発揮し、頭角を現すが、さらにこの氏の下には、今来才伎をはじめとして、次第に多種多様な渡来系の技術者・有識者集団が所属するようになる。東漢氏は、漢人と呼ばれたこれらトモの集団を率いて王権に奉仕し、漢人が分掌するヤマト政権の生産組織や行政組織の運営に影響を及ぼし、中央政界に隠然たる勢力を保持するに至るのである。

東漢氏のウジの成り立ちについて、もっとも詳細にその内容を伝えているのは「坂上系図」所引「新撰姓氏録」逸文の古伝承である。

その逸文には、阿智王（阿智（知）使主）の渡来の経緯や、阿智王が率いてきた「七姓漢人」とその後裔氏の名、大和国檜前郡郷（高市郡檜前郷）を賜りここに住んだこと、入朝時に離散した阿智使主の「本郷の人民」が、仁徳朝に朝鮮諸国から呼び寄せられたことと、その後裔の村主姓氏族三十氏の名、阿智使主の奉請により「今来郡」が建部（後に高市郡と改名）されたことなどが記されている。

ついで、都賀使主の条所引の逸文には、次のように記されている。

阿智使主の男、都賀使主、大泊瀬稚武天皇（雄略）の御世に、使主を改め直の姓を賜ひき。子孫、因りて姓と為せり。男、山木直。是、兄腹の祖なり。次に志努直。是、中腹の祖なり。次に爾波伎直。是、弟腹の祖なり。

第二部、飛鳥時代（５９３－７０８）

第二部の一、帰化人活用で体制整備

（１）　ミヤケ（土地区分）制とトモ・ベ（人的区分）は５，６世紀の統治組織。
これにより人的支配から土地支配へ展開する。「雄略天皇」の頃、427-489 年
「推古紀」をもってその設定は終わる。
（２）　「大化の改新」による展開。　646 年
土地は国家のもの。公地公民の制。

（１）　トモ・ベについて

大和朝廷は服属したクニ（郡）の氏上（地方豪族）には「国造」、県の氏上（地方豪族）には「県主」という姓を与えて、地方分権的に地方支配を拡大していった。その土地を田荘といい、そこで働く農民集団（部）を部曲といった。部の構成員を部民という。

大和朝廷に服属しなかった地方豪族に対しては、土地を奪い「屯倉」（大和朝廷の直轄地）を設け、そこで働く農民集団（部）を田部といった。部の構成員を部民といった。

他方、国造という姓を与えた氏からは、部曲の一部を割いて、大王家やその一族の生活の資を後納する農民集団である部を設定した。これを「名代」「子代」「品部」とう。長谷部・春日部のように后の名を付けたり、皇子の名を付けたりしていた。舎人部・刑部のように大王近侍の職名を付けたのもある。
この方法を発展していけば、中央集権的に地方支配を拡大できることになる。
この屯倉的・名代的方法で中央集権化を推進していったのが、屯倉の管理者である蘇我氏だったといえる。

伴（とも）は朝廷に仕える同一職種グループのことである。伴造の造は、リーダーを意味する。つまり、伴造とは、朝廷に仕える同一職種グループのリーダーである。伴を率いて朝廷に奉仕する首長ということになる。

５世紀以降朝廷内の様々な業務を、貴族の子弟に出仕させ、その仕事に従事させた。これが「伴」の誕生である。その後日本に渡来人が多数やってきたので、職能を生かした仕事に従事させた。百済の官司制度が「部」という呼称を用いていたので、これまでになかった職能集団もあわせて「部」の字をつけて呼ぶようになった。これが「部」の誕生の経

緯である

品部というのは農民以外の隷属労働者たちの総称で、それぞれの技能にあわせた部に別れていた。主なものに宮廷官的な馬飼部、史部や、生産に携わる鍛冶部、錦織部、陶部などがある。この品部を管理統制していたのが伴造だ。世襲的職業で朝廷に奉仕する官人の団体を伴と言い、その首長が伴造ということになる。

品部は、大化前代においては、土師部・馬飼部・忌部など職名を帯びる部（職業部）のことを指していたが、雄略朝になると、渡来人披術者によって編成された陶作部・錦織部・鞍作部などの部（トモ）の組織も受け継いでいく。品部は、伴造に統率され、ヤマト政権にさまざまな物資や労働力を貢上した。

実際の政治の仕事は、伴造とよばれる豪族や、それをたすける伴とよばれる氏人によって分担され、伴造や伴は品部とよばれる人々をしたがえて、代々決まった仕事を行っていた。

（2） 政治制度としての氏姓制度

原始共同体においては、氏族や部族が社会の単位となった。氏姓制度の基盤は、血縁集団としての同族にあったが、それが国家の政治制度として編成し直された。その成立時期は、5～6 世紀をさかのぼらない。

大和朝廷が中央集権国家を目指す過程で中央・地方の諸豪族をその支配体制下に組み入れるために朝廷は色々工夫したが、その一つに氏姓制度がある。時代時代で変化しているので非常に分かり難いが、この中で姓（かばね）について簡単に記す。

姓は大和朝廷から諸豪族に与えられた政治的地位・家柄を表す称号である。これは世襲であった。

本稿の中心氏族東漢氏（秋月家祖）は、始祖東漢掬本人がすでに「直」の姓を賜っており、それだけでなく「第一部一、帰化渡来人たち」で示したとおり、始祖に続き子孫の多くが臣、連、朝臣、忌寸、宿禰などの姓を賜っていた。より具体的には末尾「第五部の四、東漢氏家系図（秋月氏まで）」の一覧表に、賜った姓と人物の一部を示しているのででご参照願いたい。「姓」の他に「壬申功臣」とあるのは、壬申の乱で功があり、それなりの褒賞を賜った人物たちである。また、一覧表に記載されていない東漢氏一族の中にも、たくさんの人物が姓を賜っていることを注記しておく。

臣（おみ）

臣（おみ）は基本的には天皇家から分かれた皇別氏族の姓である。

それが葛城氏（かつらぎ）、平群氏（へぐり）、巨勢氏（こせ）、春日氏（かすが）、蘇我氏（そが）のように、ヤマト（奈良盆地周辺）の地名を氏（ウヂ）の名とし、かつては王家と並ぶ立場にあり、ヤマト王権においても最高の地位を占めた豪族にも与えられた。

連（むらじ）

連（むらじ）は天皇家とは祖先が異なる神別氏族に与えられた姓である。

大伴氏、物部氏、中臣氏（なかとみ）、忌部氏（いんべ）、土師氏（はじ）のように、ヤマト王権での職務を氏（ウヂ）の名とし、王家に従属する官人としての立場にあり、ヤマト王権の成立に重要な役割をはたした豪族に与えられた。

君（きみ）

君は天皇家から分かれた地方有力豪族。

伴造（とものみやつこ）

連（むらじ）とも重なり合うが、おもにそのもとでヤマト王権の各部司を分掌した豪族である。秦氏（はた）、東漢氏（やまとのあや）、西文氏（かわちのあや）などの代表的な帰化氏族、それに弓削氏（ゆげ）、矢集氏（やずめ）、服部氏（はとり）、犬養氏（いぬかい）、舂米氏（つきしね）、倭文氏（しとり）などの氏（ウヂ）がある。連（むらじ）、造（みやつこ）、直（あたい）、公（きみ）などの姓（カバネ）を称した。

百八十部（ももあまりやそのとも）

さらにその下位にあり、部（べ）を直接に指揮する多くの伴（とも）をさす。首（おびと）、史（ふひと）、村主（すくり）、勝（すくり）などの姓（カバネ）を称した。

国造（くにのみやつこ）

造（みやつこ）は国造や中央の伴造や品部、子代、名代などの首長に与えられた姓である。

国造は代表的な地方豪族をさし、一面ではヤマト王権の地方官に組みこまれ、また在地の部民（べみん）を率（ひき）いる地方的伴造の地位にある者もあった。国造には、君（きみ）、直（あたい）の姓（カバネ）が多く、中には臣（おみ）を称するものもあった。

直（あたえ）

５－６世紀に服属した国造（郡司）に対して統一的に与えられた姓。

渡来人としては東漢氏系の氏族のみに与えられた姓。

県主（あがたぬし）

これより古く、かつ小範囲の族長をさすものと思われる。いずれも地名を氏（ウヂ）の名とする。

このように、氏姓制度とは、連―伴造―伴（百八十部）という王のもとでヤマト王権を構成し、職務を分掌し世襲するいわゆる「負名氏」（なおいのうじ）を主体として生まれた。その後、臣のように、元々は王とならぶ地位にあった豪族にも及んだ。

首（おびと）

地方の伴造、県主、など地方村落の首長や渡来人の子孫に与えられた姓。

村主（すぐり）
　下級氏族や渡来人の子孫に与えられた姓。
史（ふひと）
　渡来人の子孫で文筆の職能に優れた氏族に与えられた姓。

　時代とともに直姓も首姓も共に連姓となり、さらに忌寸姓、宿禰姓、朝臣姓と上位の姓に替わっていったようである。

（３）「大化の改新」（６４５）での改革

　倭では、かって遣隋使によって隋に派遣された僧旻（みん）、高向玄理（たかむくのくろまろ）、南淵請安（みなみぶちのしょうあん）らが、唐の建国をまのあたりにして帰国し、大化の改新に参画したが、大化の改新の必然性が整っていたのである。

改新の内容
１．「国」「郡」「里」の新たな地方組織
２．公地公民。「臣・連・伴造・国造」など豪族が所有する「部民」と「田荘」を廃止し、代わりに「大夫（まえつきみ）」以上に「食封」を給する規定である。また大王・后・王子らの領有する「子代（こしろ）の民」と「屯倉」も廃止された。これは「私地・私民」を廃して「公地・公民」とする律令制の大前提となる改革であった。

（４）「八色の姓」、新姓制度が代わる。（天武朝６８４年）
　八色の姓制度で渡来系の氏族の最高位は忌寸姓であった。この姓までは令制で五位以上の官人（貴族）を出す氏族に対応していた。これに東西漢氏、西文氏は入っている名族である。
但しこれらの氏族の支族総てが忌寸姓になった訳ではない。
　記録上では東漢氏系の氏族はさらに宿禰、朝臣姓まで上った者もあるが、西文氏、西漢氏は忌寸姓止まり（五位まで）であったようである。

飛鳥時代	593	聖徳太子が摂政になる。
	603	冠位十二階が定められる （大縵 小縵 大仁 小仁 大禮 小禮 大信 小信 大義 小義 大智 小智）

	604	憲法十七条が定められる （日本書紀「夏四月　丙寅朔戊辰　皇太子親肇作憲法十七條」と記述されている 17 条からなる条文。官僚や貴族に対する道徳的な規範を示したもの）
	607	小野妹子が隋に送られる（遣隋使）
	630	犬上御田鍬が唐に送られる（第一回遣唐使）
	645	大化の改新（改新の詔・新たな施政方針を示すために発せられた詔） 中大兄皇子が蘇我氏を滅ぼす。
	663	白村江の戦いで倭国と百済の連合軍が唐・新羅の連合軍に敗れる。
	672	壬申の乱が起きる 天智天皇の太子大友皇子（弘文天皇の）に対し、皇弟大海人皇子（天武天皇）が反旗をひるがえした。反乱者である大海人皇子が勝利。
	694	都が藤原京に移される（現在の奈良県橿原市を中心）
	701	大宝律令が完成する。 日本史上初めて律と令がそろって成立した本格的な律令
	708	和同開珎が作られる 日本で最初の流通貨幣と言われる。皇朝十二銭の第１番目

大宰府と防人

大宰府は、いつの世に設けられたのか不詳であるが、推古十七年（６０９）、「筑紫大宰」（ちくしのおおきみ）の官名がはじめて日本書紀に記されている。その後、大化元年（６４５）、大和朝廷の「大化の改新」で年号が制定され、大化五年（６４９）、初代の長官「大宰師」（だざいのそち）に蘇我氏が任命され、天皇の詔を奉じて「遠の朝廷（とおのみかど）」と呼ばれた。

西海道の総督府として政治・経済・軍事を司り、特に朝鮮や中国などとの外交官として重要な任務を帯びていた。

大宰府政庁跡
（都府楼跡）

６６３年、朝廷は友好国であった朝鮮の百済を支援し、唐・新羅の連合軍と戦い、日本の水軍は「白村江」の戦いで全滅し、百済は滅亡した。

この敗戦から筑紫大宰府がにわかに重要性を持つようになったのである。唐・新羅の連合軍がわが国に進攻してくるおそれがあったからで、防衛軍事基地として「也良の崎」（博多湾内の能古島の北端）「対馬・壱岐・筑紫」の各地に徴兵による防人を配置した。

防人は「大化の改新」で設置され、初期は諸国から徴兵し、７３０年に東国兵士、７３７年からは現地採用制となった。国防的大事業として水城の大堤を築き、大野・基山には百済の帰化人による朝鮮式大城城の山城を構築している。

日本書紀に記されている第三十八代天智天皇六年の条に「半島からの烽燧（とぶひ）制にもとづく一大軍事拠点」とは、当時大宰府に属した対馬の金田城跡といわれ、現在、国の特別史跡に指定されている。

東漢氏の軍事力

東漢氏は改めて述べるまでもなく、軍事氏族として著名であった。蘇我氏との関係が深く蘇我入鹿が殺害されるまでは、馬子、蝦夷と歴代の蘇我宗家の邸宅を警護していた。

皇極 3 年（644〉11 月、蝦夷と入鹿は、甘檮岡の上に家を雙（なら）べ構えた。この家が、蘇我本宗家の終焉の地となる。蝦夷の邸宅は「上の宮門（うえのみかど）」、入鹿の屋敷は「谷の宮門（はざまのみかど）」とよばれた。家の外には城柵をめぐらせ、門の傍らには武器庫が設けられた。門毎に水を蓄えた水槽がひとつと、木釣数十本が置かれ、火災の備えとされていた。そして、常に東国出身の兵士が武器を携えて邸宅の警護にあたっていたという。

さらに、畝傍山の東にも家を構えた。池を掘って城とし、庫を建てて矢を蓄えた。そして、常時五十人の兵士を率い護衛をさせて家を出入りした。これらの人を、健人（ちからひと）として東方（あづま）の償従者（しとべ）といった。諸氏の人々がその門に侍り、これらを名づけて祖子需者（おやこのわらわ）とよんだ。漢直（あやのあたい）らは専らふたつの家の門を警護したとされる。

飛鳥の展望台として有名な甘橿丘には、現在も「エベス谷」の地名が残る。入り組んだ西麓の地形は、まさに「谷の宮門」にふさわしいものとされてきた。これまでの居宅に比べて、甘橿丘そして畝傍山東の家をめぐる記述には、ことさら軍事的な側面が強調されている。これら二つの家と同時に、蝦夷は東漢（やまとのあや）氏の長直（ながのあたい）に命じて大升穂山（おおにほやま）に桙削寺（ほこぬきのてら）をつくらせている。大丹穂山は、明日香村入谷（にゅうだに）。栢森（かやのもり）からさらに東へ入っていったところである。緊張を増す東アジア世界の中で、蘇我氏はこれらの土地に、飛鳥防衛のため

の砦をつぎつぎとつくっていったのだろう。

皇極４年（６４５）の乙巳（いっし）の変（＊）の際には、漢直（東漢直）らが族党をすべて集めて、武装して蘇我蝦夷のために軍陣を設け、壬申の乱（＊）には大海人皇子側の軍勢に、書直智徳・同成覚・民直大火・同小鮪・大蔵直広隅・坂上直国麻呂・同熊毛・同老・路直益人・長尾直真墨・倉墻直麻呂・谷直根麻呂・蚊屋直木間らが加わり、また「一、二の漢直」らが、大伴吹負・坂上熊毛の密計により、大海人皇子側に寝かえっている。これに対して大友皇子の陣営には書直薬・忍坂直大摩侶・谷直塩手が属し、まさに骨肉相食む形で戦闘に参加している。

天平宝宇８年（７６４）の恵美押勝の乱（＊）（えみのおしかつ）には坂上苅田麻呂が軍功をあげ、押勝を湖上で捕らえその首を斬った石村村主石楯（いわれのすぐりいわたて）も、「系図」逸文に阿知使主の「本郷の人民」の裔を記す村主姓氏族中の一氏である。押勝の乱の後には、賊と戦い、内裏に宿衛した檜前忌寸二百三十六人にそれぞれ爵一級（位一階）が与えられている。奈良時代から平安時代にかけて、犬養・苅田麻呂・田村麻呂の三代の著名な武人を出した坂上氏は「家は世々弓馬を事とし、馳射を善くす」「家は世々武と尚び、鷹を調え馬を相る」と特記された武芸の名門である。

＊　乙巳の変（いっしのへん・おっしのへん）は中大兄皇子、中臣鎌子らが宮中で蘇我入鹿を暗殺して蘇我氏（蘇我本宗家）を滅ぼした飛鳥時代の政変。その後、中大兄皇子は体制を刷新して大化の改新と呼ばれる改革を断行した。俗に蘇我入鹿が殺された事件のことを指して「大化の改新」と言うこともあるが、厳密にはクーデターである「乙巳の変」の後に行われた一連の政治改革が「大化の改新」である。

＊　壬申の乱（じんしんのらん）とは天武天皇元年（672 年）に起きた日本古代最大の内乱であり、天智天皇の太子・大友皇子（おおとものみこ、明治 3 年（1870 年）、弘文天皇の称号を追号）に対し皇弟・大海人皇子（おおあまのみこ、後の天武天皇）が地方豪族を味方に付けて反旗をひるがえしたものである。反乱者である大海人皇子が勝利するという、例の少ない内乱であった。天武天皇元年は干支で壬申（じんしん、みずのえさる）にあたるためこれを壬申の乱と呼んでいる。

＊　恵美押勝の乱は奈良時代に起きた内乱である。藤原仲麻呂の乱ともいう。孝謙上皇・道鏡と対立した太帥（太政大臣）・藤原仲麻呂（恵美押勝）が乱を起こして、滅ぼされた。

以上により、東漢氏が長期にわたり一貫して軍事に秀でていたことは明白であるが、とくに、壬申の乱の際に、大伴吹負が留守司（飛鳥古京防衛のために近江朝がおいた官司）

の坂上熊毛や東漢氏の諸氏と事前にはかりごとを巡らし、挙兵していることである。飛鳥古京（倭京）を近江朝軍の手から奪い取る為には、檜前や今来を本拠とし、古京防衛の軍事的要となっていた東漢氏を大海人側に内応させることが不可欠であったが、それを可能ならしめたものは、大伴氏と東漢氏との間の伝統的な軍事交流であったと思われている。

ただ両氏の軍事的関係は、東漢氏が大伴氏配下の軍事的トモに編入されるような公的な関係ではなかったようである。天武天皇が東漢氏の「七つの不可」を弾劾した詔のなかで、垂古朝から天智朝に至るまで、「常に汝等を謀るをもって事とす」と述べたように、東漢氏は時の権力と結び、その側近として勢力の拡大を図ることに長けていた。東漢氏の軍事力は、権力者たる大伴氏の私兵的な性格を帯びていたと見られ、むしろこの氏は軍事力の提供によって、私的に大伴氏とのつながりを深め、軍事的専制王権内部での地歩を固めて言ったと見ることが出来るという。

東漢氏の発展

東漢氏の氏族的発展は、①支配下集団の組織化と拡大、②檜前・今来から周辺諸地域への進出という形で行われた。具体的に①は、渡来系の才伎や有識者をトモである漢人に組織化し、その技術や知識を東漢氏が伴造として公的に掌握することを意味するが、漢人に編入された人々は、当初は今来地方の居住者に限られ、その数もさほど多くはなかったようである。この氏が、大和以外の諸国を含む多数の漢人を配下に擁する大伴造に成長するのは、６世紀移行のことであろう。

ただ、②の周辺地域への進出にあわせて、それぞれの地の渡来系集団に対する東漢氏の支配力が強まり、五世紀末から徐々に漢人に組織化されるものが増加したことは間違いないようである。たとえば、葛城地方の渡来人たちの中には、葛城氏の滅亡後、王権の支配下に置かれ、東漢氏配下の漢人に編入されたもの、東漢氏の葛城進出にともない、檜前から葛城に移住した漢人や東漢氏の枝氏などがいた様である。東漢氏系の渡来人の分布は、統計的に見ると、葛城が高市郡に次いで高い集中率を占めるのである。

南郷遺跡群の工房に象徴されるように、葛城地方の渡来系工人たちの有する高い生産性とその豊富な人的資源は、王権にとって魅力に満ちたものだったと思われる。そのため葛城氏滅亡後、王権による渡来人の直接支配と技術者集団の再編成が進められることになる。

限定的な形ではあるが、既に軍事的専制王権内で漢人を率いる伴造としての地位を確立しつつあった東漢氏は、王権を支える勢力の一環として、葛城地方に進出し、この地の渡来人に対して部分的に支配を及ぼすに至ったのであろう。

東漢氏自身の有する軍事力や行政能力にあわせ、さらにその配下の漢人集団の多種多様な職能が加わることにより、東漢氏の伴造としての実力は一段と強化されることになる。６世紀半はに大伴氏が「大連」の職位を失うと、東漢氏は新たに興った大和の在地土豪出

身の「大臣」蘇我氏と手を結び、引き続き発展を遂げることになる。

６世紀に入り、大和政権は内政・外交上のさまざまな問題に直面せざるを得なくなった。その過程で軍事専制王権を支えてきた二大伴造の大伴・物部両氏の間には深刻な対立が生じ、一方で葛城氏滅亡後、政権中枢から疎外されていた大和や畿内の在地土豪が政治的復権の機会を得ることになる。彼らは新設された「大臣」やマエツキミ（大夫）の職位につき、「大連」とともに、重要政務の合議にあずかるようになった。氏族合議制という政治体制の樹立にあわせて、中央豪族の政治への関与の方法や渡来人との交流の面にも大きな変化が見られるようになる。そして「大臣」蘇我氏が登場してくる。蘇我氏の出身は、葛城地方の葛城氏に深いつながりがあったようである。

第二部の二、壬申の乱の裏方、東漢氏

東漢氏は日本各地に広がったが（岡山県に痕跡が多い、後述）、もっとも有力なものは大和盆地の南部、のちの高市郡地方を本拠として栄えた。東漢氏と呼ぶのはそのためで、倭漢氏とも書く。とくに「東」の字を用いるのは、同じく応神朝に渡来した王仁の子孫と伝えられる文氏が、河内の古市郡の地方を中心に栄えたのと対照的であるためで、大和（倭）の漢氏を東漢氏、河内の文氏を西文（かわちのふみ）と称する。この両氏と、山城盆地に根拠をおく秦氏とを、渡来系氏族の三雄と言っている。

この三氏のうち、大和政権ともっとも深いかかわりを持ったのは東漢氏である。文字を知り、計算が出来るので、政治とくに財政に関与したというのが理由の一つだが、それだけなら西文氏も山城の秦氏もそれほどの違いは無い。やはり、本拠とした高市郡の地域が、６世紀以降の大和政権が都を置いたところに近いという地理的条件の有利さが、もう一つの理由であろう。ただしそれは偶然のことではなく、東漢氏の経済力や武力を利用するために、大和政権がその近くに遷都したのだという解釈もある。いずれにせよ、５世紀後半以来、東漢氏が大和政権とともに発展したことは事実であろう。

伝承ではあるが、仁徳天皇の死後(427)、住吉仲皇子（すみのえのなかつみこ）が反乱を起こしたとき、阿知使主が履中天皇（400-432）を助けて馬に乗せ、大和へ逃げたという話があり、雄略天皇(427-489)は東漢氏の一族の身狭村主青（むさのすぐりあお）と檜隈民使博徳（ひのくまのたみのつかいはかとこ）を特に寵愛したという。「古語拾遺」には、履中朝に阿知使主が内蔵の出納をつかさどり、雄略朝に東漢氏が蘇我麻智の支配下にあって内蔵・大蔵の出納に関与して、内蔵・大蔵の姓を賜ったとある。６世紀の欽明(539)・敏達朝(584)には外交にもかかわったことが「日本書記」に見えるが、６世紀末には東漢直駒が、蘇我馬子の命に従って崇峻天皇を暗殺(592)したという。

このように東漢氏は、大王家やそれにつぐ有力氏族に利用されながらも、着々と高市郡の地に勢力を築いた。のちの記録だが、８世紀の末近い宝亀３年４月に、東漢氏の一族の

坂上苅田麻呂は、「先祖の阿知使主が高市郡檜前（ひのくま）村に住んでより子孫繁栄して、高市郡内で東漢氏の系統以外のものは、十のうち一、二である」といっている。誇張はあろうが、この地域の有力豪族であったことに間違いない。

ところで、大和政権の都であるが、６世紀以降は高市郡の地におかれることが多い。たとえば、安閑朝の勾金橋宮（まがりのかなはし）、宣化朝の檜隈蘆入野宮（いほりの）、推古朝の小治田宮（おはりだ）、舒明朝の飛鳥岡本宮、皇極朝の飛鳥板蓋宮、斉明天皇の飛鳥川原宮などなど、いずれも高市郡の地であり、そうでなくても高市郡に隣接する十市郡に位置するものが大部分である。

とくに推古朝以後、近江朝にいたる七十余年間は、孝徳朝の難波、天智朝の近江大津の計１５年間を除くと、ほとんどの都が飛鳥を中心とする数キロ四方の範囲に収まってしまう。政治の中心がこの飛鳥の地域に収斂し、固定したといってもよい。それはやはり官僚制の発展とともに政治の機構が整備され、財政・軍人の役所や倉庫も作られてくるためで、一代ごとの遷都が慣例だといっても、簡単に遠くへ移ってゆけるものではない。年とともに飛鳥の占める政治上のウェイトが高まってくる。それは同時に政治における東漢氏一族の勢力を増すことでもある。

勢力を増した東漢氏は、いくつかの氏族に分かれた。先にあげた坂上苅田麻呂の坂上氏もその一つだが、関晃氏の著「帰化人」によると七世紀末ごろまでに、次のような枝氏のあったことが知られる。

坂上直・川原民直・池辺直・書（文）直・忍坂直・長直・荒田井長・山口直・蚊屋直・民直・大蔵直・路直・倉墻直・谷直・長尾直・宇閇直（うへ）・調伊美吉・国覓忌寸（くにまぎ）

実際にはもっと多くの氏族に分かれていただろうし、それらがすべて高市・檜隈の地に住んでいたのでもあるまい。また６世紀以降に渡来した、所謂今来の漢人の子孫もこの中に含まれていたかと思われる。しかし彼らはいずれも阿知使主の子孫と称し、大きな勢力を形成していた。

このように、奈良盆地南東部に朝廷を置く大和政権と結んで発展した東漢氏としては、都が大和をはなれることを快く思うはずがない。それでも孝徳朝の難波遷都の場合はまだましである。檜隈の地から横大路を通り竹内峠を越えても、葛城地方を通って水越峠を越える道をとっても、急げば難波へ一日でゆける。しかし天智朝の近江の大津宮となると、まず奈良盆地を縦断して奈良山をこえ、木津川を渡って南山城を北上し、宇治川を渡り山科盆地を通り、逢坂の峠を越えてようやく大津だ。馬ならべつだが、歩いて一日で行ける距離ではない。

そのうえ近江の朝廷には、百済から日本を頼って渡来してきた貴族、知識人層がたくさ

ん迎え入れられていた。新羅と唐に滅ぼされた百済の所謂亡命貴族達である。この人々は、斉明６年（６６０）の扶余城陥落後に、あるいは天智２年（６６３）の白村江の敗戦後に、日本に渡り、天智の朝廷は従来の百済との深い関係から、それらを丁重に歓迎したと考えられる。事実、「日本書紀」天智１０年正月条によると、余自信、射宅紹明が大錦下法官大輔、鬼室集斯が小錦下学職頭を授けられたのをはじめ、五十余人の百済からの渡来人が位階を得て朝廷に用いられている。このように大陸の新しい文化や知識を身につけた渡来人の多く勤めている近江の朝廷に、５、６世紀に日本に来た東漢氏が重く用いられる余地は少ない。時代の推移に伴うやむをえないことだが、彼らは天智の政府から疎外されたという感をもったであろう。

そうした東漢氏を壬申の乱の際にうまく利用したのが大伴氏である。大伴氏自身も、近江朝廷に対して疎外感を抱いていた。

大伴氏はいうまでもなく、ニニギ尊に従って高天原より天下った天忍日命（あめのおしひ）を祖先とするという伝承を持つ、古来の名族である。６世紀前半、欽明朝の初めに大伴金村が外交政策の失敗のために失脚して以来勢力が衰えたが、大化改新の際、大化５年（６４９）に大伴長徳は右大臣に任ぜられ、朝廷に重きをなした。しかしその死後（６５１）は、大伴氏の名は朝廷の上層部から消え、天智１０年（６７１）に定められた政府首脳部の新官制にも、大伴の名を見ることは出来ない。新官制というのは、言うまでもなく太政大臣大友皇子を中心に、左大臣に蘇我赤兄、右大臣に中臣金、御史太夫に蘇我果安・臣勢人（こせのひと）・紀大人を配する陣容である。

このころ大伴氏の族長的な人物は、長徳の弟の馬来田であった（余談ながら、千葉県木更津市に馬来田の地名が残る。大伴氏末裔が進出してきたに違いない。ローカル線の久留里線の馬来田駅周辺）。彼は政情に不満をもち、６７１年１０月に大海人皇子が吉野に入った後、弟の吹負（ふけい）とともに病と称して大和の家に帰った。大海人の決起を期待し、近江の朝廷に見切りをつけたのである。大和の家のあったところは、大伴氏の庄が竹田や跡見（いずれも十市郡）にあったことが「万葉集」に見えるから、その辺りかとも思われるが、壬申紀に「百済の家」というのがある。この百済を広綾町百済に当てるのが通説だが、香具山の麓にも百済等地名があるので、そこに当てたい。

この百済にしても、竹田、跡見にしても、飛鳥にはほど近い。都は飛鳥から近江へ遷ったとはいえ、ここは大和の中心の場所である。近江朝廷も古京留守司をおき、兵庫・兵営をそなえて、厳重に警戒している。ここを抑えれば、大和一国を支配できよう。「大和の家」に帰臥した馬来田・吹負の兄弟は、大海人挙兵の暁には、ただちに飛鳥古京を占拠することをもくろんでいたに違いない。その場合、味方に引き入れてもっとも役立つ勢力は、飛鳥の南の檜隈を中心に蟠居する東漢氏の一族である。しかも東漢氏は近江朝廷に反感をもっているはずである。これを抱き込まない手はない。

大海人皇子の挙兵以前から、馬来田らはひそかに東漢氏に働きかけていたのであろう。

彼らが特に目をつけたのは、留守司高坂王のもとで、同じく留守司の任にあった坂上直熊手とおもわれる。そして熊毛を介してか、直接かは分からないが、檜隈に住む東漢氏への働きかけも行われたに違いない。

一方、吉野に入った大海皇子に従う舎人（とねり）や、近江京に残った高市皇子の従者のなかにも、東漢氏の人々がいた。書直知徳（ちとこ）・路直益人（以上大海人の舎人）・民直大火・大蔵直広隅・坂上直国麻呂（以上高市の従者）らである。檜隈の東漢氏への働きかけは、この線からも行われたであろう。

こうして内応の約束は、大海人の挙兵以前に結ばれていたと思われる。

壬申の（６７２）６月２４日、大海人皇子はついに吉野の隠れ家を打ちたって、反乱に身を投じた。知らせを受けた馬来田は大海人の一行に従って東国へ向かったが、弟の吹負は大和に残り、予定通り挙兵の計画を進めた。そして５日後の２９日、留守司の坂上熊毛と図って、飛鳥の営中にある一、二の東漢氏に内応の約束を取り付け、みずからは一族のものなど数十騎をひきいて、飛鳥古京を急襲した。不意を撃たれた上に内応者が出ては、ひとたまりもない。古京の守備隊はたちまち混乱潰走し、古京は吹負の手中に入った。そしてその報が外部に伝わると、三輪君・鴨君など大和の在地の豪族は、たちまち「響のごとく」ことごとく吹負の元に帰伏し、大和はその手中に入った。それは壬申の乱の帰趨を決する大戦果であった。

その功績が第一に大伴馬来田・吹負の力によることはいうまでもないが、それに次ぐのは東漢氏の協力であろう。壬申の乱後の論功行賞を見ると、公・臣・連姓（天武八姓施行後は真人・朝臣・宿禰）の一流豪族を除くと、少紫の村国男依、大錦下の坂上熊毛と文直成覚、直大壱の文忌寸（もと直）智徳、直広壱の坂上忌寸（もと直）老、正四位上の文忌寸（もと首）禰麻呂が目立つが（いずれも死後の贈位）、その七人のうち坂上熊毛・文成覚・文智徳・坂上老の四人までが東漢氏の一族である。

四人のうち坂上熊毛が古京留守司であり、文智徳が大海人皇子の舎人であったことは先に述べた。坂上老は熊毛の従兄弟で古京奪取の報を大海人に伝える使者となっているから、古京攻撃にも参加したであろう。文成覚だけが「仁申紀」に姿を見せないので、どのような功績があったか明らかでないが、もらった位階の高さからすると、文直氏の族長的な地位であり、氏族を纏めて大海人皇子を支援するように指導したのであろう。

そのほかにも、長尾直真墨・倉墻直麻呂・民直根麻呂・谷直根麻呂・蚊屋忌寸木門など大海人側に加わった東漢氏一族は少なくない。同じ東漢氏でも近江朝廷側についたものもあり、書直薬・忍坂直大麻呂・谷直塩手の名が知られるが、全体としては大海人側に従ったものが多い。その力が大海人皇子の反乱を勝利に導く大きな要素となったことは先に見たとおりである。そうして都は東漢氏の希望がかない、飛鳥に戻った。しかし、東漢氏の時代はもう終わっていた。東漢氏が政界の中心に返りさくことは出来なかった。

第三部　奈良時代（７１０－７５９）

第三部の一、　軍制のスタート

８世紀、奈良時代の律令国家は、一般農民である公民一戸から一人を徴兵する大規模軍隊を保持していた。一戸一兵士とした場合、全国総戸数約２０万戸から徴兵された律令国家の総兵力は約２０万人に達していた。

ちなみに、人口は６００～７００万人と推定されており、現在の人口約１億２０００万人に対する陸上自衛隊総兵力約１５万人と比べると、律令国家が、いかに巨大な軍隊を持っていたかがわかる。徴兵された兵士は、基準兵力量１千人の軍団に配属され、交替で年間６０日間、「陣法」と呼ばれるマニュアルによって画一的訓練を受けた。歩兵集団戦術を主体とする律令軍制において、訓練の中心は号令通りに整列・行進するマスゲームであった。徴兵制軍隊における兵士は、公的訓練を施すことによって製造されるものなのである。装備も規格生産された官給武器であった。

公戸皆兵制ともいうべき徴兵制が成り立つ為には、兵士役の負担がすべての「戸」に公平にかかるような配慮と、一人の兵士を出してもなお「戸」の生活が成り立つような経営保障を、制度として作り出さなければならない。編戸制と班田制は律令国家の公民支配の根幹であるが、この仕組みによって初めて一戸一兵士の軍団兵士制＝律令軍制の創設が可能になったのである。律令国家が編戸制・班田制という恐るべき人民統制システムを採用したのは、軍団兵士制を建設・維持する為であったとさえいえるのである。また、兵士は庸（よう）・雑徭（ぞうよう）が免除されていた。庸は中央での労働力雇用財源であり、雑徭（ぞうよう）は６０日間の公共土木事業への強制労働であった。莫大な有効労働力を犠牲にして律令軍制を維持していたのであるが、この巨大軍隊を成り立たせた中央集権的システムは、同時に平城京・東大寺・大仏など古代文明の記念碑の建設を可能にした地方の富を中央に一極集中するためのシステムでもあったのである。

地方では国司の重要性が増す（国造から国司へ）

大化の改新によって、それまでの国造を廃止して、諸国には新しく国司や郡司が置かれるようになり、国司は中央から派遣されるようになった。

８世紀初頭には、本格的な法典体系である大宝律令が公布され（７０１年大宝律令完成）、中央集権的な律令制が布かれることとなった。律令制において、国司は非常に重要な位置に置かれた。律令制を根幹的に支えた班田収授制は、戸籍の作成、田地の班給、租庸調の

収取などから構成されていたが、これらはいずれも国司の職務であった。このように、律令制の理念を日本全国に貫徹することが国司に求められていたのである。

第三部の二、恵美押勝（藤原仲麻呂）の乱と東漢氏

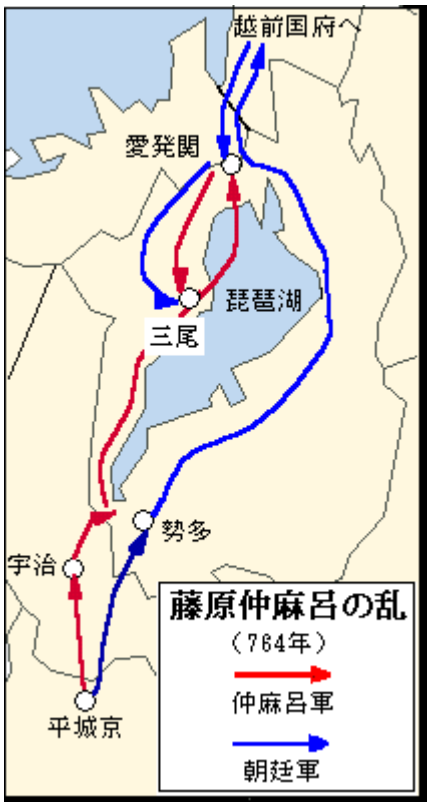
藤原仲麻呂の乱（ふじわらのなかまろのらん）は奈良時代に起きた内乱である。恵美押勝の乱ともいう。孝謙上皇・道鏡と対立した太帥（太政大臣）・藤原仲麻呂（恵美押勝）が乱を起こして、滅ぼされた。

経緯

藤原仲麻呂は光明皇后の信任を得て紫微令に任じられて次第に台頭し、孝謙天皇が即位すると仲麻呂は孝謙天皇と光明皇太后の権威を背景に政権を完全に掌握した。天平宝字 2 年（758 年）、仲麻呂の推す淳仁天皇を即位させて、太保（右大臣）に任ぜられ、恵美押勝の名を与えられる。天平宝字 4 年（760 年）には遂に太師（太政大臣）にまで登りつめた。

栄耀栄華を極めた仲麻呂だが、光明皇太后が死去し、孝謙上皇が弓削道鏡を寵愛しはじめたことで暗転する。仲麻呂は、淳仁天皇を通じて孝謙上皇に道鏡への寵愛を諫めさせたが、これが上皇を激怒させた。孝謙上皇は怒りのあまり出家して尼になるとともに「天皇は小事を行い、大事と賞罰は自分が行う」と宣言してしまった。孝謙上皇の道鏡への寵愛は深まり、逆に仲麻呂を激しく憎むようになった。

焦った仲麻呂は軍権をもって孝謙上皇と道鏡に対抗しようとし、天平宝字 8 年（764 年）9 月、淳仁天皇に願って都督四畿内三関近江丹波播磨等国兵事使に任じられた。諸国の兵 20 人を都に集めて訓練する規定になっていたが、仲麻呂は 600 人の兵を動員するよう大外記高丘比良麻呂に命じた。仲麻呂は都に兵力を集めて反乱を起こそうと企んでいた。



藤原仲麻呂の乱拡大

9 月 11 日、比良麻呂は孝謙上皇に動員令を密告。孝謙上皇は少納言山村王を淳仁天皇の居る中宮院に派遣して、皇権の発動に必要な玉璽と駅鈴を回収させた（一説には淳仁天皇もこの時に中宮院内に幽閉されたという）。これを知った仲麻呂は子の訓儒麻呂に山村王の帰路を襲撃させて、玉璽と駅鈴の奪回を図った。しかし、直ちに授刀衛の少尉坂上苅田麻呂と将曹牡鹿嶋足が出動して、訓儒麻呂を射殺した。

孝謙上皇は仲麻呂の邸に勅使紀船守を送り、官位の剥

奪と藤原姓の剥奪を通告した。その夜、仲麻呂は一族を率いて平城京を脱出、宇治へ入り、仲麻呂が長年国司をつとめ勢力地盤だった近江の国衙を目指した。孝謙上皇は吉備真備を召して従三位に叙し仲麻呂誅伐を命じる。

仲麻呂の行動を予測した真備は、山背守日下部子麻呂と衛門少尉佐伯伊多智の率いる官軍を先回りさせて勢多橋を焼いて、東山道への進路を塞いだ。仲麻呂はやむなく子の辛加知が国司になっている越前国に入り再起を図ろうとし、琵琶湖の湖西を越前に向い北進する。淳仁天皇を連れ出せなかった仲麻呂は、氷上塩焼（かつての塩焼王）を偽帝に擁立し、太政官符をもって諸国に号令した。ここに、二つの朝廷ができたことになる。

官軍の佐伯伊多智は越前に馳せ急ぎ、まだ事変を知らぬ辛加知を斬り、物部広成に愛発関（近江と越前の国境の関所）を固めさせた。仲麻呂軍の先発隊精兵数十人が愛発関で敗れた。辛加知の死を知らない仲麻呂は愛発関を避け、舟で琵琶湖東岸に渡り越前に入ろうとするが、逆風で舟が難破しそうになり断念して、塩津に上陸し陸路、愛発関の突破をはかった。佐伯伊多智が防戦して、仲麻呂軍を撃退する。

仲麻呂軍は退却して三尾（近江国高島郡）の古城に篭った。官軍は三尾を攻めるが、仲麻呂軍は必死で応戦する。9 月 18 日、官軍に討賊将軍・藤原蔵下麻呂の援軍が到着して、海陸から激しく攻めたので、ついに仲麻呂軍は敗れた。仲麻呂は湖上に舟を出して妻子とともに逃れようとするが、官兵・石村石楯（東漢氏一族、村主氏）に捕らえられ殺された。塩焼王も琵琶湖畔で処刑された。

仲麻呂の一族は滅び、淳仁天皇は廃位され淡路に流された。代わって孝謙上皇が重祚する（称徳天皇）。以降、称徳天皇と道鏡を中心とした専制体制が確立した。

奈良時代	710	平城京に都が移される 奈良市を中心に大和郡山市にかけて。唐の都「長安」を模倣して作られた
	712	古事記が作られる 太朝臣安萬侶（おほのあそみやすまろ）によって献上。日本最古の歴史書
	720	日本書紀が作られる 日本伝存の最古の正史で、六国史の第一。舎人親王らの撰で神代から持統天皇の時代まで。
	723	三世一身の法 墾田の奨励のため、開墾者から三世代までの墾田私有を認めた法令

	741	国分寺の詔は出される 聖武天皇が国状不安を鎮撫するために各国に国分尼寺（こくぶんにじ、こくぶにじ）とともに建立を命じた寺院
	743	墾田永年私財法が定められる 墾田（自分で新しく開墾した耕地）の永年私財化を認める法令
		東大寺の大仏を作る詔が出される
	752	東大寺の大仏完成
	754	鑑真が平城京にくる 帰化僧。日本における律宗の開祖
	759	唐招提寺が建てられる 鑑真ゆかりの寺院。南都六宗の１つである律宗の総本山

第三部の三、藤原広嗣の乱

近畿の大王は、天武の時代に国家体制の整備がほぼ出来上がり、６８９年の浄御原令により、「倭」にかわる国号「日本」、「大王」にかわる王の称号「天皇」、さらに皇后、皇太子などの制度を定めた。また天皇をささえる氏族としては、藤原鎌足、その子不比等、さらにその四子が活躍した。

この間に九州北部での変化は、６９８年に筑前国の名前がはじめて見え、７０１年に太宰府の官制が定まる。（初期は大宰府、のちに太宰府）

白村江の敗戦のあとでは、筑紫地区に水城が築かれたり狼煙台が設置されたり、また防人の制度ができて関東からの武士が大勢九州に配備されたりして、国防上の重要拠点となり、また九州の内政の拠点として、太宰府の責任者「太宰師や太宰大弐」には大きな権限が与えられた。しかし懸念された大陸からの侵略はなく、直接筑紫・粕屋・古賀地区に関連した歴史的事件はしばらく発生していない。

律令官制度などが敷かれて、田地の管理や納税の方法などが、逐次定まっていく。奈良の都以外では、「天下一の都会」と歌われた太宰府だが、都で平和に過ごしてきた貴族からみれば「遠の朝廷」と思われ、師や大弐の地位は高く、任を終えると、大納言や参議という太政官の中枢部に返り咲くことが出来たが、実際の人事では中央政界の争いに敗れて、左遷される例が見られるようになる。

藤原一族内部の争いで敗れて、太宰少弐に左遷されてきた藤原広嗣もその例である。中央の腐敗に不満をもっていた広嗣は、７４０年に政府の失政を糾弾して九州の軍団を動員

して反旗を掲げ、７０２年の大伴旅人の軍により制圧されて反感をもっていた隼人グループを味方につけて反乱を起こす。

軍事と内政の大きな権限をベースにしていたので、かっての「磐井の乱」に次ぐ、大きな九州独立戦争ともいわれている。

天平 9 年（737 年）朝廷の政治を担っていた藤原四兄弟が天然痘の流行によって相次いで死去した。代って政治を担ったのが橘諸兄であり、また唐から帰国した吉備真備と玄昉が重用されるようになった。藤原氏の勢力は大きく後退した。

天平 10 年（738 年）藤原宇合の長男・広嗣（藤原式家）は大養徳（大和）守から大宰少弐に任じられ、大宰府に赴任した。広嗣はこれを左遷と感じ、強い不満を抱いた。

天平 12 年（740 年）8 月 29 日、広嗣は政治を批判し、吉備真備と玄昉の処分を求める上表を送った。

9 月 3 日、広嗣が挙兵したとの飛駅が都にもたらされる。聖武天皇は大野東人を大将軍に任じて節刀を授け、副将軍には紀飯麻呂が任じられた。東海道、東山道、山陰道、山陽道、南海道の五道の軍 1 万七千人を動員するよう命じた。4 日、朝廷に出仕していた隼人 24 人に従軍が命じられる。5 日、佐伯常人、阿倍虫麻呂が勅使に任じられた。

朝廷からは伊勢神宮へ幣帛が奉納され、また、諸国に観世音菩薩像をつくり、観世音経 10 巻を写経して戦勝を祈願するよう命じられた。

近畿の朝廷が一万七千の軍勢を動員して鎮圧に向かったのに対し、藤原広嗣は「三道狭撃作戦」をたて、一万五千の兵を、鞍手道、田川道、豊後道にそれぞれ約五千に分けて、近畿軍の動向をさぐりながら東進する。これは奈良時代の北九州地区の交通ルートを知るうえで、非常に参考になる作戦である。

主力の鞍手道の軍隊は広嗣が直接指揮をして、太宰府から阿恵（夷守）、香椎（美野）、古賀（席打）経由で鞍手を通り、さらに遠賀川の島門村（今の島津付近）で河をわたり、到津（板櫃）の鎮所に入る。したがって各通過地区の配置軍や住民は何らかの形で参加や協力を要請されたと思われる。

田川道軍は多胡麻呂が指揮をして、太宰府から嘉穂郡内の伏見、綱別の古駅を経由して田川郡の香春採銅所横を北上し、小倉南区に入り、到津鎮所で広嗣と合流する。

豊後道軍は、広嗣の弟綱手が指揮をして、太宰府から筑後川の北岸沿いに朝倉郡を通り、日田、玖珠経由の久大線ルートで大分に出て、日豊線ルートで北上し、行橋（京都）の鎮所に入り、門司（杜崎）に上陸した官軍を挟み打ちする体制をとる。

古代の官道

小倉の到津が最大の戦場となるが、隼人グループの投降や裏切りなどにより、官軍が優勢となり、敗走した広嗣は、太宰府の役所や寺社を焼き払い、朝鮮半島の新羅に亡命しよ

うとするが、運悪く逆風にあって吹き返され、五島列島の宇久島で捕らえられて斬殺される。

三ヶ月位で反乱軍は鎮圧される。政府軍ともいうべき九州配置の軍団の鎮長、営兵はきびしく処分されたが、地元の郡司の兵には宥和的に投降をすすめ、解放したといわれている。

この反乱にこりた朝廷は、政治と軍事に大きな権限を持つ太宰府を一旦廃止する。
しかし対外関係の対処に必要な部署として７５４年に再開し、当時の政界第一人者の橘諸兄が太宰師を兼任する。

当時の粕屋郡の郡司は、香椎宮の宮司「膳伴宿禰」で、近畿の朝廷に近く、太宰府とは密接な連携のもとに、朝廷の行政を支えたと思われる。

乱の鎮圧の報告がまだ平城京に届かないうちに、聖武天皇は突如関東に下ると言い出し都を出てしまった。聖武天皇は伊賀国、伊勢国、美濃国、近江国を巡り恭仁京（山城国）に移った。その後も難波京へ移り、また平城京へ還って、と遷都を繰り返すようになる。遠い九州で起きた広嗣の乱を聖武天皇が極度に恐れたためであったとされる。

鞍手道の途中にある古賀市の「庄」あたりの田地は、奈良時代から存在したと言われている。古賀市の調査により、次のようなことがわかったという。この頃の「班田収授の法」の概要は、６年毎につくられる戸籍に従い、６才以上の公民の男子に２反、女子にその２/３が与えられ、家人その他にはさらに１/３の口分田が与えられたという。さらに方形の地割りを基礎に田地を整然と区画した条里制が実施され、「公私その利を共にす」とされる「無主」の地として共同利用された。租税は古くは天皇の食料にあてる官田、神社や寺院に与えられる神田・寺田をのぞいて、収穫の３％位が賦課されたようである。

第四部　平安時代（７９４－１１８５）

第四部の一、国司と受領

受領（ずりょう）とは、国司四等官のうち、現地に赴任して行政責任を負う筆頭者を平安時代以後に呼んだ呼称である。

9 世紀中期～10 世紀頃になると、従来の律令制（編戸制・班田制など）による統治に限界が見られるようになり、中央政府は租税収入を確保するため、社会の実情に即した国制改革を進めた。その改革は、地方官（国司）へ租税収取や軍事などの権限を大幅に委譲するというもので、国司は中央へ確実に租税を上納する代わりに、自由かつ強力に国内を支配する権利を得たのである。

国司は、国内の国衙領（公田）を名田へ再編成し、当時台頭していた富豪層へ名田の経営と租税徴収を請け負わせることで、租税を確実に収取するようになっていった。この租税収取システムが軌道に乗ると、国司は現地へ赴任する必要がなくなり、特に上位官である守の多くは遥任するようになった。すると、現地赴任する国司の筆頭者に、様々な責任やそれに伴う権限が集中するようになり、事実上の国衙行政の最高責任者となった。当時、国司交替の際に、後任の国司が、適正な事務引継を受けたことを証明する解由状という文書を前任の国司へ発給する定めとなっており、実際に現地で解由状を受領する国司を「受領」と呼ぶようになった。これが「受領」という呼称の起源である。

受領が強大な権限を得た一方で、補佐官である任用たちは権限を奪われ、受領の私的従者のように使役されるようになる。こうした状況に不満を募らせた任用の中には、現地の有力者である富豪層（田堵層）と結んで受領を襲撃する者も現れた。9 世紀末から 10 世紀初頭にかけて紛争の火種となる任用たちの現地赴任は行われなくなり、受領のみが任国に赴任し、京から伴った私的な側近を目代に任命し、また現地の有力富豪層を在庁官人に任命して国衙の実務に当たるようになった。

受領は、その強大な権限を背景に、莫大な蓄財を行うことも可能であった。事実、受領になると巨額の富を得ることができたため、国司に任命されるために人事権に強い影響を及ぼしうる摂関家へ取り入る者が後を絶たなかったと言われている。また、蓄財によって任国へ根を生やした受領の中には、任期後、そのまま任国へ土着した者も多かった。

受領は通常長官である守（かみ）、及び権守（ごんのかみ）であるが、親王任国の上野国、

常陸国、上総国など守、権守が現地赴任しない国では次官の介（すけ）、権介（ごんのすけ）であった。おおよそ四位、五位どまりの下級貴族である諸大夫がこの任に当てられた。彼らの補佐官を務める掾（じょう）、目（さかん）は任用（にんよう）と呼ばれた。
なお、任官されながら実際に任国に赴かず官職に伴う給付だけを受ける国司を遥任と呼ぶ。

第四部の二、平安時代の社会情勢

９世紀を通じて中央集権的統制が緩和され、受領の国内支配における裁量権が拡大されたとは言っても、なお編戸制・班田制・調庸制は建前としては堅持されていた。この現実と建前との矛盾が、９世紀後半、郡司富豪層と王臣家との結託による租税の未進を深刻化させ、国家財政と受領の国内支配を危機に陥れた。この危機を克服するため、宇多天皇は、関白藤原基経（もとつね）が没した寛平３年（８９１）以降、受領経験のある菅原道真らを抜擢して、受領による国内支配を建て直し、中央への税収を安定化させるための国税改革に着手した。この改革は次の醍醐天皇の治世でも、左大臣藤原時平による右大臣菅原道真左遷事件などとは関係なく、一貫して継続された。国制改革は支配層にとって、個別的な利害を超えた、成し遂げなければならない共通の課題だったのである。

改革は中央行政機構や宮廷儀式でも行われたが、地方支配に関する改革の主な内容は次の通りである。

第一に、富豪層と王臣家との私的結合を分断したことである。富豪層の王臣家への田宅寄進の禁止、富豪層の王臣家人化の禁止、王臣家人化した富豪層の納税拒否の禁止などの政策が次々と出され、納税を拒否する王臣家人の国外追放権・逮捕権などを与えた。こうして国内居住者は所属・身分にともなう免税特権を否定され、国衙支配に服さなければならなくなった。

第二に、中央財政の構造改革が行われた。政府は、国司に正丁数を基礎とする庸・調を大蔵省へ一括納入させ、大蔵省から受給者（官司・官人）に分配する中央集権的財政構造を放棄した。そして受給者が政府から随時、必要物品の給付を特定の国に命じる手形の交付を受け、直接受領に必要物品を請求する財政構造に転換した。受給者の請求総額はあらかじめ固定され、固定された総支出を基礎とする京内外の倉庫にモノを集積したが、任国からの運送は受領の私的な活動になった。こうして郡司富豪層が国衙から大蔵省までの調・庸運送を請け負う方式は廃止され、財政官司や王臣家から未進追及を受けることも無くなったかわりに、運送請負にかこつけてピンハネのうまみも無くなり、郡司富豪層が王臣家と結託する大きな要因が除かれた。

第三に、土地制度改革を実施した。延喜２年（９０２）、延喜御荘園整理令とよばれる土地調査令を受けて、諸国国府は、寺社・王臣家・富豪層に公験（権利書）を提出させて土地の権利関係を明確にし、それまで富豪層が脱税のための隠れ蓑として寄進し、爆発的に増加していた「王臣家の荘」の免税特権を否定して公田（課税地）に引き戻した

第四に、受領は国衙機構改革を行った。

これらの一連の改革によって、受領は任期４年分の貢納物を完済することを条件に、国内支配を委任されることになった。受領は中央政府には固定額の貢納物を納めるが、国内では公田面積に対して税率を変動させたり付加税を加えたりしながら徴税した。両者の差額が、受領の私的収益になる。この税制上の二重構造が、「受領は倒るるところに土をつかめ」（今昔物語集）といわれた受領の貪欲さの根源であった。

上述した国制改革に平行して軍制改革が進められた。それは寛平・延喜のころ全国各地で未曾有の反乱が起きたからである。改革は二つの面で行われた。

第一に、軍事動因における受領の裁量権を強化したことである。従来国衙が軍事動員する為には、発兵勅符（天皇の動員令）を出してもらわなければならなかった。それを、より簡便な太政官の鎮圧命令である追捕官符を下すことにしたのである。この方針は、国内支配を受領に委任する国制改革の基調と同じである。

第二に、国衙の群盗追捕指揮官として、国ごとに押領使を任命した。押領使とは、追捕官符を受けた受領の命に従い、国内武士を動員して反乱を鎮圧することを任務とする、国単位の軍事指揮官である。

押領使は将門の乱後に常置されるようになり、鎌倉幕府の守護制度に受け継がれていく軍事的官職であるが、この押領使が初めて置かれたのが、寛平・延喜の群盗鎮圧のときだったのである。これにより、鎮圧責任を負わされた受領は、押領使にそれを委任した。この押領使の任命こそ、延喜の軍制改革の目玉であった。

押領使から武士へ

押領使とは、上述したが、基本的には国司や郡司の中でも武芸に長けた者が兼任し、主として現代でいう地方警察のような一国内の治安の維持にあたった。中には、一国に限らず一郡を兼務していた者や、一時は東海道・東山道といった道という広範囲に渡っての軍事を担当した者もある。 いずれにしても、地元密着型の職務であることから、押領使には土地の豪族を任命することが主流となり、彼らが現地において所有する私的武力がその軍事力の中心となった。下野国押領使として天慶の乱にて平将門を滅ぼした藤原秀郷などが

有名。なお荘園にも押領使は存在し、荘園内の治安の維持にあたったと思われる。
延暦 14 年（795 年）、防人の移動に携わっていた任務が文献に初めて登場している。このときの職務は兵を率いたのみで、実際の戦闘には服役していないが、やがて押領使の職務内容は、移動させる兵の戦闘等の指揮官へと変化していく。

次に挙げる三人ほど、この時期の押領使に任命された人物にふさわしい者はいない。すなわち、桓武平氏の祖、平高望、「利仁将軍」の通称で親しまれた伝説上の武士、藤原利仁、そして「俵藤太」の通称で親しまれる伝説的武士、藤原秀郷である。
この三人こそ、群盗勢力との激しい戦闘を通じて新たな騎馬個人戦術を開発し、武名を挙げた武士第一号といってよいであろう。乱平定後、平高望は上総介になり、利仁は上野介からさらに鎮守府将軍になっている。これらの任官は勲功によるものであろう。高望も利仁も秀郷も、通常ではもはや貴族社会に参入する見込みは無かった。彼らは、勲功の恩賞によって貴族社会に復帰することを夢見て、反乱鎮圧に志願したのであろう。

武士団の誕生

明治維新までつづく７００年にわたる武士社会の萌芽が、何時、どのようにして育まれたのか。後で述べる平安時代末期の平将門の乱、藤原純友の乱を生み出した社会情勢の中と見る見方や、西欧の騎士団誕生と同じく、仕組みとしての貴族社会の成立の中にすでに「芽」が含まれていたと見る見方など、色々ある。
人間の欲と闘争心は生まれながらのもので、場所を選ばない。結果として世の中に盗み、殺し、裏切りなど負の影を作り出す。そうすると、それを打ち負かそうとするプラスの力が働く。今日でいう警察力、ひいては軍隊というシステムが生み出される。他面では、負の影そのものが武力化し、時の社会情勢によってはそれが正当化され、統治の主体になることもある。西洋でも騎士集団が発生したごとく、日本の武士も元はといえば、根底にある人間の欲が原因で派生したものである。
そして今日武士は形の上ではいなくなったとはいえ、人間の欲や闘争意識は未来永劫続くし、形は変わっても武士の必要性はなくなっていないのである。今後もまだ戦争はなくならないであろう。そして国と国との戦争で戦うのは兵士である。一方、限られた社会の治安を維持する為の集団は警察であるが、武士の誕生はこの両面を持ち備えて古代に発生した。

日本の中世史を彩った武士集団は、古代から中世への社会進化を推進する変革の担い手であったことも間違いないし、今日の日本の原型を形作りもした。
その姿は鳥瞰図的に日本史を把握すれば足りるが、九州という限られた地域で、どのように進化してきたのか、これを見るのが本稿の目的の一つでもある。

九世紀になると、既に見たように、八世紀には見られなかった新たな軍事問題として群盗海賊が登場する。九世紀の物流の中心は、地方諸国から京への調・庸の運送であったが、郡司富豪層が調・庸運送を請け負うというシステムそのものの中に、群盗海賊を生み出す要因が内在していたのである。諸国受領が政府に「郡司富豪層らは綱領（運送責任者）に指名されると、預かった調・庸を盗んで他国に逃走してしまう。これが国々の弊亡の最大の要因である」と報告しているように、九世紀には綱領による調・庸の着服が横行していた。

受領は着服分を弁償させるため、綱領の私邸を差し押さえようとした。一方、上京した綱領たちは、着服分を王臣家に納めて王臣家人になり、彼らの田宅を王臣家に寄進して差し押さえを免れようとした。着服した調・庸は、郡司富豪層が王臣家と結託して受領の支配から離脱するための資金として利用されたのである。

他方で、受領の呵政に対して、任用・郡司・富豪層が共謀して受領を襲撃し殺傷する事件も多発した。天慶（てんぎょう）７年（８８３）６月、筑後国赤司（久留米市北野町）では群盗百余人が受領都御酉（みやこのみとり）の館を囲み、彼を射殺して財物を略奪した。部下の任用たちは叫び声を聞きつけ御酉の館に駆けつけたが、犯人は逃散したあとだった。首謀者は筑後掾藤原近成であり、共謀者に前掾・目・王臣子孫らがいた。このほか、対馬守立野正岑の射殺事件、石見国での同様の事件など例に暇がない。以下に御酉殺害事件についての福岡県三井郡北野町発行「北野町史誌」（現在は久留米市）から引用する。

筑後国司都御酉殺害事件

良積の石

久留米市北野町赤司に、俗に「良積の石」と称する大石がある。この石は筑後国史の著者、矢野一貞氏の説によれば、筑後の国司「御酉の墓」といわれている。

御酉が国司として着任（８８０年）した筑後の国府（久留米市御井町）も地方官僚の精神的腐敗が目立ち、私腹を肥やすものが多く断固として不正を取り締まり、大いに綱紀を粛正して班田収授の法を厳守し正常の姿に返すよう御酉は努力した。ところが悪習に堕落した官民は、御酉の努力を認めるどころでなく、元慶７年（８８２）正月三日国司御酉は賊によって官邸を襲われ殺害された。朝廷は直ちに殺害の推問使藤原良積を派遣して糾弾した結果、少目建部貞道とその直属の

部下藤原近成外二十余名の仕業であることが判明した。藤原良積の力が功を奏し事件発生後五ヶ月にして犯人をあげることが出来た。

筑後国史によると、「良積の石」は伝えられているような藤原良積の墳墓ではなく、国司御酉の墳墓であろうと述べられている。大化の改新の詔が公布され（６４６）、その後住民百姓の生活も安定して大化改新の功績も多かった。しかしせっかくの大化改新も２００年で崩壊した。こうした複雑な混乱の中で国司御酉が断固として立ち上がり、綱紀を立て直そうとした勇気も実らず終わったことは心に残るところである。北野町赤司に座する巨大な自然石の碑は聖人御酉の心がこもっていることを思い永遠の郷土の護り神として残したいものである、と。

（注；筑後の国司の居館―御酉の官邸―が赤司にあったことは、当時の赤司が筑後における政治的な要所であったことを物語るものである。国府の庁舎そのものは久留米市合川枝光（御井町）にあったので、国司は赤司の居館から通ったものであろう）

南蛮の賊

我が国が異民族の侵略を受けるのは、鎌倉時代の元寇が初めてではない。平安中期から末期にかけて、新羅・高麗・南蛮等、様々な異民族が、たびたび九州に攻めてきている。侵略は北九州のみならず、薩摩大隅に及んだ。その中で比較的知られた入寇が平安時代１０１９年の「刀伊の入寇」であるが、それよりずっと以前から次のような賊の来襲が続いていたのである。それに対し大蔵（原田）種村が活躍したことも記録されている。

●弘仁４年（８１３）、新羅の賊百十人が平戸に来寇し、九人を殺して百余人を連れ去った。

●貞観１１年（８６９）５月２２日夜、新羅の船二隻が博多湾に侵入し、豊前国の年貢を奪って逃走した。

●寛平５年５月には肥前松浦郡、閏５月には肥後飽田郡に来寇した。

●寛平６年(８９４)９月、新羅から賊二千五百人が四十五隻の船で対馬に来襲し、文室善友らが士卒百人を率いて防戦にあたった。のみならず、これに加えて島分寺の僧・面均など島民も戦闘に参加した。合戦には、賊三百二人を射殺して勝利した。

侵攻の発端は、捕虜が言うには「人民飢苦、倉庫悉空、王城不安、然王仰為取穀絹、飛帆参来」と、財政の窮迫によって、王が命令したことを述べている。当時の新羅は地方勢力の割拠相次いでいたため、王といっても「新羅王」ではなく、地方勢力の自称かもしれぬ。むろん、自称であっても免罪は出来ないが。

●同年には、上のほかに２月２２日、３月１３日、４月１４日にも大宰府より賊侵入の報告がなされている。

●長徳３年(９９７)には高麗と「南蛮」の賊が攻め寄せた。
●翌４年２月には高麗の、９月には南蛮の凶徒が大宰府の討伐を受けている。
●長保元年８月、朝廷は大宰府に南蛮の討伐を命じ、大蔵春実が戦果をあげた。
●長和３年（刀伊の入寇の５年前）にも高麗が攻め寄せ、大宰府の討伐を受けている。
●その翌年には南蛮が薩摩に侵攻した
●刀伊の入寇については、次項に詳しく記す。

平安時代の主な出来事

７９４　都が平安京に移される。京都府京都市。桓武天皇により定められた
８３８　山陽・南海道の諸国司に海賊追捕の命令が出される
８４２　承和の変の勃発
８６６　藤原良房が摂政になる。人臣最初の摂政。藤原氏の地位を確立
８６９　新羅の海賊が博多津へ襲撃する
８８２　藤原純友の父良範井が正六位上太后宮少進で従五位下になる
８８７　光孝天皇死去、宇多天皇即位。藤原基経が関白となる。日本史上初の関白
８９７　宇多譲位、醍醐天皇即位
８９４　遣唐使が廃止される。菅原道真の建議により停止
８９９　藤原時平左大臣となる
９０１　右大臣菅原道真を大宰府へ流す
９３０　醍醐天皇死去、藤原忠平摂政となる
９３１　この年から海賊が活動を再開する。純友はこれ以前に伊予掾であった
９３４　海賊追捕のため諸家兵士と武蔵の兵士を派遣する
９３５　平将門、源護・叔父国香と戦う。将門、関東一帯を制圧して独立勢力圏を打ち立てようとした。
９３６　純友海賊追捕のため伊予へ向かう。伊予守紀淑人と純友により西瀬戸内海地域の海賊が服従する。純友、伊予にとどまる。
９３９　将門が下野・上野国衙を襲撃し「新皇」と称す。しかし、平貞盛、藤原秀郷らの攻撃を受けて短期間で滅ぼされた。伊予国より純友が「巨海」へ出ようとすると報告あり。純友の配下藤原文元が攝津須岐駅に備前介・播磨介を襲撃する。
９４０　正月、追捕使小野好古が出発する、備中軍が海賊のため敗走する、純友に従五位下を授けることを決定する。二月、淡路国へ海賊が襲撃す、備後国の警固使の任命、将門が処刑される。六月、純友配下の暴悪士卒の追捕決定。九月、諸国で兵士を挑発、讃岐国より海賊紀文度を逮捕進上する。
９４１　正月、伊予国より海賊藤原三辰の首が進められる。二月、伊予へ官軍が進撃する。五月、純友軍大宰府を襲撃し、博多津で官軍と戦い純友軍敗退する。六月、純友伊

予に逃れ伊予警固使橘遠保に討ち取られる。八月、日向国へ逃れた海賊が討ち取られる。九月、豊後へ逃れた海賊が討ち取られる。備前播磨へ逃れた三善文公が播磨で討たれる。十月、藤原文元・文用京大但馬国朝来郡で討たれる。十一月、「天下安寧、海内清平」と記される。藤原忠平が関白太政大臣となる。

９４２　三月、東西の凶賊追捕使の軍功を定める。

１０１６　藤原道長が摂政となる

１０１９　刀伊の入寇

１０５１　前九年の役が起こる。陸奥の長であった安倍氏の乱。源頼義らによって鎮圧される

１０５３　平等院鳳凰堂が建立される。藤原氏ゆかりの寺院。極楽浄土の世界

１０８３　後三年の役。奥州清原氏の内乱。清原武貞の養子清衡が勝利し母方のその後藤原姓を名乗り、奥州藤原氏初代となった。

１０８６　白川上皇が院政を始める。天皇が余力ある内に引退し、若き子の天皇を後見する。善仁皇子（堀河天皇）へ譲位し上皇となったが、白川院と称して、引き続き政務に当たった

１１５６　保元の乱が起こる。対立関係の、崇徳上皇に後白河天皇が奇襲を仕掛けた事件。後白河天皇が反対派の排除に成功した。武者の世の始まり

１１５９　平治の乱が起こる。後白河天皇（二条天皇へ譲位し、治天の君院政）院の近臣らの対立により起きた政変。平氏政権確立の礎。

１１６７　平清盛が太政大臣になる。武士では初めて太政大臣「平氏にあらずんば人にあらず」と言われる時代

１１８０　源頼朝が伊豆で兵をあげる。伊豆（蛭ヶ小島）で以仁王の令旨を受け平家打倒の兵を挙げる

１１８５　壇ノ浦の戦いで平氏が滅びる。壇ノ浦（山口県下関市）で行われた合戦。治承・寿永の乱の最後の戦い。源頼朝が守護地頭をおく。守護・武家の職制で、国単位で設置された軍事指揮官・行政官。地頭・公領を管理支配するために設置した職

上述の１０世紀半ばの藤原純友の乱時に、在地勢力の武士化の傾向が見られる。また、１１世紀初め、（１０１９年）、博多湾をおそった刀伊の入寇で、防戦した大蔵春海等の府官たちは、武士化した姿をあらわしていたという。警固所合戦での、藤原蔵規、大蔵（原田）種材（春実の孫）、藤原明範、藤原助高、また海上で活躍した者としては平致行、藤原致高、源知などがいた。

平安末、大蔵（原田）種材の子孫から平家方であった原田種直、三毛、板井が出ている。大蔵（原田）種直は、平家によって権少弐に任じられている。

第四部の三、藤原純友追捕と大蔵氏（東漢氏一族）

大宰府の藤原純友の乱鎮圧のため、大蔵春実は源経基・小野好古らとともに出陣している。この戦乱によって大宰府の国府のみならず、筑後国府（久留米市合河町）も焼き討ちにあい消失する。 「大蔵春実」は戦功により菊桐の御紋と日の丸の御印を拝領、西征将軍となり、御旗に大和撫子の紋があったことにより、大和撫子をもって家紋としたという。そして大宰府の官人となり、筑前・豊前・肥前・壱岐・対馬の管領職となる。 城を築き移り住んだ御笠郡の地名をもって原田氏と名乗る（現在のＪＲ原田駅周辺）。一方の秋月家は、「大蔵春実」より数えて七代後・種俊の子「原田種雄」が原田氏より分れ「秋月氏」の姓祖となったとされている。（詳しくは「第五部の四、秋月家の家系図」参照ください）

９４０年正月、小野好古が追捕使として出発するが、このときのメンバーの中に、大蔵春実が含まれていたのである。すなわち追捕使長官右近衛少将小野好古、次官源経基、判官右衛門尉藤原慶幸、主典左衛門志大蔵春実（はるざね）である。その配下には勿論多数の兵士が配置されていた。
大蔵春実は以後土着化し、平安時代後半期の西国での大勢力大蔵流原田氏の祖となる。

瀬戸内で海賊行為が頻発するようになった背景は、支配層の独善的行為が民衆を苦しめていったことにあったようである。理由を二つ述べる。

まず、一つは、８世紀後半から９世紀前半にかけて瀬戸内海沿岸各地で中央貴族・寺院による「海・島・浜」の占有が推し進められ、大規模な塩生産が進展した為に海岸部から班田農民（漁民）が追い出され、彼らの浮浪化が進んだことである。寺院の例としては東大寺、西大寺、法隆寺、元興寺、大安寺・住吉大社、中央貴族としては大伴氏、秦氏、紀氏などが上げられている。

二つ目の理由は、９世紀前半に制定された「引仁式」で、瀬戸内海沿岸諸国からの諸税物の海上運送が公的に規定されたために、国衙における海上交通手段の確保が重要課題となったことである。

一般的に、律令国家の交通制度は、情報伝達手段としての駅馬制度や律令官人の交通手段としての伝馬制度が中心で、それは、陸上交通が基本であった。また、律令官物の輸送については、基本的に無規定であった。そのような中で、米塩を代表とする重量物は西海道諸国・古代に四国地域では水上交通が利用されていた。特に、８世紀中期の天平勝宝８年（７５６）になり、山陽南海諸国からの米輸送は水上交通によるべきことが決定されたことを契機にして、瀬戸内海各地に造船瀬所を設置して港の造営が推進され、国・郡衙による水上交通は発展し、その運送手段の需要は増大していった。

律令国家が律令官物の海上輸送を公認したことにより、水上交通が飛躍的に増加したが、このことは、従来から貴族・寺院の海上輸送の担い手として組織されていた漁民集団以外に、国衙所属の挟抄（かじとり）・水手（かこ）集団が大量に必要となったことを物語っている。塩田を追い出された漁民などの浮浪者の一部が、労働力として一部吸収されたことはあるが、この国家による海上運送集団の勢力はますます増大し、中央貴族・寺院を中心とする輸送集団を凌駕するようになる。

そうした結果として発生してくるのが、略奪行為であり、海賊行為である。古代で海賊活動がもっとも活発であった時期は、九世紀の後半の８６２年から８８３年にかけての２１年間と、１０世紀の９３１年から９４１年にいたる１０年間である。藤原純友は最初、海賊を取り締まる立場で活躍するが、１０世紀の時点で自分自身が海賊行為に邁進することになる。これに対して大蔵春実などが活躍したのが９４０年ごろのことである。

余談になるが、藤原純友と呼応するように、東国で反乱を起こしたのが平将門であった。その背景も瀬戸内海と同じく、民衆の貧困に起因するところが多い。東国の場合の理由は三点挙げられると思う。

一つは、７７０－８２４年間の大規模な対蝦夷軍興（蝦夷に対する軍事行動）で、これが人員・物資の両面で東国に重圧となり、疲弊の原因を作っていったこと。

二つには、捕虜になった俘囚の反乱。彼らは東北地方貧困化のしわ寄せを特に受け、群盗化し社会情勢を一気に悪化させていった。

さらに、武装集団「シュウマの党」の発生である。これは、東国へ進出した王臣家が輸送手段に窮し、馬匹を盗む集団の裏方になったことである。「シュウマの党」は富豪の輩と称され、東海道・東山道をまたにかけ広範かつ縦横に運送活動をしていたが、これが社会の窮乏化とともに貨物の略奪に走り、蜂起を起こす集団に変わっていった。彼らはあらゆる物品を略奪したというが、群盗が貧農を襲っても獲物は知れたものである、襲撃の主要目標が官物になっていき、ますます社会不安をあおったのである。そのような情勢の中で、将門は身内の土地争いから始まり、思わぬ方向に騒乱が広がり、ついに新しい王国樹立の宣言を発するに至るのである。

第四部の四、刀伊入寇を機に九州武士団成長

寛仁３年（１０１９年）３月２８日。沿海州に住む刀伊（とい）の船団およそ５０隻（1隻あたりの乗船人数は約５０人）が対馬・壱岐の両島を襲撃した。突然の襲撃に両島は大混乱に陥り、壱岐守の藤原理忠はじめ、多くの島民が殺害され、あるいは捕虜となってしまう。さらに対馬の銀鉱にも火が放たれ、凄惨なありさまとなってしまった。

突然現れたこの「刀伊」は、高麗が北方の蛮族を呼ぶ時の蔑称だという。彼らは普通「女

真」と呼ばれ、彼らの子孫はやがて金王朝を建国し、さらに後には中国を席巻して清王朝を樹立することになるが、この頃は契丹（遼）の支配下に組み入れられていた被支配民族であった。

刀伊の船団は４月７日に筑前沿岸に姿を現し、志麻郡（現福岡市）の住人・文室忠光（ふんや　ただみつ）らが迎撃してこれを撃退する。異民族襲来の報を受けた太宰権師・藤原隆家（ふじわらのたかいえ：４１歳）は、北九州の武士団を自ら率いて前線に進出。４月９日には、博多上陸を目指す刀伊軍と、隆家の軍で激しい戦闘となる。刀伊が使う矢の長さは３０ｃｍほどだったいうが、隆家軍の盾を貫通するほどの力を持っていたという。しかし、隆家軍は７０歳を超えた前少監・大蔵種材（おおくら　たねき）をはじめとした太宰府官人らが馬上から弓矢で応戦し、刀伊軍の上陸を阻んだ。しかし、刀伊軍はなおも上陸を試み、４月１２日、１３日にも水際で合戦となったが、日本軍は刀伊軍の上陸を阻むことに成功。刀伊軍はそのまま行方をくらましたという。

刀伊の入寇で殺害されたのは３６５名、捕虜となって連れ去られたのは１２８９名、牛馬の損害はおよそ３５０頭、人家４５戸が焼失と、甚大な被害を受けている。九州上陸に失敗した刀伊の軍は、帰りに高麗を襲撃したがこれも失敗。その際、捕虜となっていた日本人の一部（およそ３００名）が救出され、高麗の手で太宰府まで帰された。

刀伊の入寇はこれで幕を閉じるが、日本側は当初、どの国が攻め込んできたのかがわからなかった模様である。後に高麗から侵入者が刀伊であったことを初めて知らされた、とか。この間、朝廷の貴族達は何らなすこともなかったと伝えられる。そもそも、刀伊が攻めてきた事実も、隆家らが勝利した後になってから知り、武功のあった隆家らに恩賞を出すこともしなかったという。

大宰権師（長官）藤原隆家は、刀伊の賊撃退後、将兵達の戦功に対し、恩賞を朝廷に上申しているが、時の大納言藤原公任や中納言藤原行成は、「追討の命の達しない以前の行為」で行賞には及ばぬと取り合わなかったという。当時の中央政庁の高官達は、形式的で地方の実情や政治に不見識であり、想像以上に堕落したいた。これがやがて武家の台頭を迎える結果となる。

平安時代の末期には、官吏の素行の低下や官制の緩みがはなはだしくなり、最高責任者師（そち）、次官大弐、その下の少弐にいたるまで任命されても遥任（任地に赴任せず名義のみ）で堕落し、府政が弱体化していった。そして土着の豪族出身者の監、典といった、下級官吏が行政の実権を握る始末で、そのため次項で述べる源為朝の九州での暴威に対しても、府官はこれを捕らえることも出来なかった。

天慶の乱（平将門）・承平の乱（藤原純友）、そして刀伊の入寇の一連の事件は、藤原氏による摂関政治の行き詰まりを暗示しており、また新興勢力「武士」がやがて台頭してくる踏み台となった事件となったのである。

九州での源為朝の動き、そして「保元の乱」

源為朝は 13 歳の時、父為義に勘当されて九州に追放されてしまった。尾張権守家遠が後見となって豊後国に住んでいたが、肥後国阿蘇の平忠国の婿となり、自ら鎮西総追捕使と称して暴れまわり、菊池氏、原田氏など九州の豪族たちと数十回の合戦、城攻めを繰り返して 3 年のうちに九州を平らげてしまった。香椎宮の神人が為朝の狼藉を朝廷に訴え出たため、久寿元年（1154 年）に出頭の宣旨が出されてしまう。為朝はこれに従わなかったが、翌久寿 2 年（1155 年）に父が解官されてしまった。これを聞いて為朝は帰参することにし、九州の強者 28 騎を率いて上洛した。

翌保元元年（1156 年）、鳥羽法皇の死後、皇位を巡って対立していた崇徳上皇と後白河天皇の武力衝突が不可避の情勢になり、双方の陣営が有力な武士を招聘していた。父の為義は上皇方に大将として招かれ、老齢であると固辞したものの遂に承諾させられ、頼賢、為朝ら 6 人の子を引連れて崇徳上皇の御所白川北殿に参上した。一方、関東を地盤としていた為義の嫡男の義朝は多くの東国武士とともに天皇方へ参じている。「保元の乱」の起こりである。結論は敗北に終わり、源為朝は伊豆へ島流しとなる。

この頃になると大宰府政庁は衰退の兆しを見せ始めていたが、中央では「平家」が着々と勢力を拡げていった。１１５８年の「保元の乱」の功績によって平清盛が大宰少弐に任ぜられ、一族の平家貞を代官として大宰府に派遣し、１１６６年には清盛の弟・頼盛を太宰大弐として赴任させている。清盛は遙任が慣行化している大宰府や博多に目をつけて、博多大津の港湾施設の拡張整備を行うとともに、荘園を設け、博多の貿易の実権を握った。清盛は後に神戸にも港を築き、貿易船を瀬戸内海へ誘致し、都の近くへ招きよせて、その沿岸の港町は、大いに繁栄した。筑前の清盛の重臣となったのは、刀伊の賊撃退に武功を挙げ、土着の豪族の長であった大蔵種材（原田氏）と、藤原氏の一族の筑豊の山鹿氏であったといわれている。

刀伊の入寇に関して「小右記」・「朝野群載」等に詳しく述べられているが、その中に、朝臣（大蔵）種材や大蔵光弘（原田流ではない）の名が表れるので「朝野群載」の一部をここに引用する。

“同日筑前怡土郡に襲来し、志摩・早良郡を経て、人物を奪い、民宅を焼く（中略）、男女の壮なるもの、追いとりて船に載せるは４５４人、また所々の運び取る穀物の類、その数を知らずと云々（中略）。人兵を召すと雖も、来たるにいまだ多からず。舟船を整えると雖も、勢いまだ（不明）、然れども差し遣わす所の兵士ならびに彼の郡の住人文室忠光等と組し、合戦の場で賊徒は矢に当たる者数十人（中略）。　同８日、同国那珂郡能古島に移り

来る（中略）前少監大蔵朝臣種材（たねき）、藤原朝臣明範、散位平朝臣為賢、平朝臣為忠、前監藤原助高、傔仗（けんじょう）大蔵光弘、藤原友近などをもって警固所に遣わし、相禦がしむ。（中略）

同日９日朝、賊船襲来し、警固所を焼かんと欲す。距て却くの間、奮い呼び合戦す（中略）その後二個日風猛く波高し、相い攻めること能わず、１１日未明、同国早良郡、志摩郡船越の津に至る。これより先に精平を分ち遣わし、あらかじめ相い待たしむ。同１２日酉の時、上陸す。大神守宮・検非違使弘延ともに合戦（中略）、少弐平朝臣致行・前監種材・大監藤原朝臣致孝・散位為賢・同為忠等、差し加わる兵士等、船三十余艘をもって、攻め遣わしむ。同１３日賊徒肥前国松浦郡に至り、村閭（そんりょ）を攻却す。ここに彼の国の前の介源知、郡内の兵士を率いて合戦す（中略）賊船進み攻むること能わず。遂に以って帰す。（中略）且在状を録し謹みて解す。“

第四部の五、九州武士団の形成

九州では１２世紀中頃になると、五百人規模の軍兵を率いた事件が起ってくる。１１５２年、府検非違使執行の大監大蔵種平と大蔵季実等は五百騎を率いて筥崎・博多に乱入している。筥崎・博多大追捕といわれる。この事件の背後には、府官層内部の対立や権師―目代の筥崎宮支配の強化、つまり筥崎宮内の反対勢力を排除して、貿易を直接把握する意図があったと推定されている。大蔵季実とは、大蔵一族の一つ三毛家の大夫季実である。

その三毛季実（みけのすえざね）は、筑後三池一帯を地盤にしていた（三毛から三池？）。１１４４年の正月に、筑後国生葉郡薦野郷（浮羽郡浮羽町の一部）をめぐって薦野郷司らと観世音寺との間に紛争が起こった際、府目代の大江国道・薦野資綱の与力人として、観世音寺から訴えられることになる。５００余の軍兵を率いた「大将軍」として、観世音寺領大石・山北封内の大野・袋野に乱入し、乱暴・放火したと訴えられたのである。この季実配下の人名から見ると、ほぼ筑後国全域から肥前国東半分に及ぶ武士団の地縁的・血縁的な結合が浮かびあがるという。

板井種遠（いたいたねとう）。豊前国のこの板井氏も大蔵一族であった。豊前に土着して在庁官人となり豊前国内に所領を拡大していった。平安末に原田種直の従兄弟に当たる板井種遠のころには、京都郡（みやこ）城井の神楽城を本拠地に、その所領は築上・京都・仲津・田川の各郡内に広がっていた。種遠の娘は、宇佐大宮司公通の子である公房の妻であり、板井氏は宇佐宮とともに豊前国内での平氏党勢力の中心であった。

原田種直―平安末期に大蔵氏嫡流であった原田種直は、原田荘（糸島郡）など３７００町歩に及ぶ広大な所領をもち、２０００余騎を動員できる大武士団に成長していた。平清盛の大弐時代に、その家人となったらしく、養和元年（１１８１）に権少弐に任命され、北部九州の平氏の重要な基盤だったが、源平合戦では、文治元年（１１８５）豊後に上陸

した源範頼軍に敗れている。

大蔵一族に並んで、九州で一大勢力を保持していたのは藤原氏である。その系列には次の諸氏がいた。

粥田経遠（かいたつねとお）－１２世紀中ごろ、藤原姓を名乗る粥田経遠は、鞍手・嘉麻・穂波の三郡にわたり約１０００町歩に登る広大な領地を所有し、筑豊の一大勢力になっていた。経遠は父・兄に続いて鳥羽院武者所に勤めていたが、後に経遠ら在地土豪は私領を鳥羽院に寄進して粥田荘が成立する。ここは遠賀川中流域に広がる肥沃な土地であったが、後に平家没官領から源頼朝を経て北条政子に移り、さらに高野山金剛三昧院領となる地である。

山鹿秀遠―源平合戦の時の山鹿秀遠は、粥田経遠の子と伝える。山鹿荘を本拠地にしているから、叔父の山鹿経成の跡を継いだものと見られている。山鹿の地は、遠賀川河口に芦屋と対したところにあり、遠賀川流域に点在する諸荘園の外港として、また海外交通・貿易の上で重要な地点であった。秀遠は１１８３年、山鹿城に平家一門を向かえ、数千騎を率いて守り、また壇ノ浦合戦では「山賀の兵藤次秀遠、五百余艘で先陣」をつとめ、「九国一番の勢兵」である秀遠は、「勢兵とも五百余人をすぐって」矢を放ち源氏方を圧倒したと、「平家物語」は伝えている。

この大蔵氏・藤原氏両系統の氏族は二大グループに分かれ、それぞれが婚姻関係を重ねながら、ますます勢力を拡大し、西国に圧倒的な力を築いていくのである。

肥後の北部で勢力を張っていたのは菊池氏である。菊池氏の四代経宗、五代経直は鳥羽院武者所だったという。

菊池氏は、1019 年（寛仁 3 年）刀伊入寇に戦功のあった藤原北家大宰権帥藤原隆家の子で太宰少弐となった藤原政則が、その子（隆家の孫）藤原則隆とともに肥後国に土着したのを祖としている。　鞠智城に連なる豪族の末裔で約 1000 年の歴史を有している。

菊池一族とは 菊池家=>豊田家=>阿蘇家=>詫磨家=>大友家が家督を奪い合いながら、二十六代続いた九州肥後の武家集団のことである。このため、武家集団菊池一族としての血脈は継続していないといわれる。

院政時代全国の在地支配層は、こぞって中央の有力者に荘園を寄進してその庇護を受け、院の武者として勢力を拡大しようとした。四代菊池経宗・五代菊池経直が鳥羽院武者と記録されていることからも、菊池氏がその例に漏れなかったことが推定される。このころまでに菊池氏一族は在地名を名乗るようになり、菊池氏一族は肥後国の在地勢力として定着拡散して行ったのである。

平家台頭後は日宋貿易に熱心だった平清盛が肥後守に就任するなど、平家による肥後国統制が強化されると菊池氏は平家の家人と化したが、1180 年（治承 4 年）源頼朝が兵を挙げると翌 1181 年（養和元年）六代菊池隆直は養和の乱を起こして平家に反抗した。隆直は

翌年平貞能追討軍に降伏し、以後、平家の家人として源平合戦に従軍したものの、壇ノ浦の戦いにおよんで源氏方に寝返り御家人に名を連ねた。源平の間を揺れ動いたことで頼朝の疑念を招き、隆直への恩賞は守護に任じられた少弐氏や大友氏・島津氏に遠く及ばず、逆に多くの関東系御家人を本拠地周囲に配置され、その牽制を受けた。

肥後の中央部の阿蘇氏は１２世紀、大宮司を称し、一大武士団を形成し、一般に神官のトップが武士団の長となった。資料では１１３７年の大宮司宇治惟宣が最初という。１２世紀半ばには、阿蘇氏の勢力は、阿蘇・益城両郡を中心に飽田・詫麻・宇土・八代の六郡にまたがる肥後中央部に東西にまたがる広大な地域を占めるようになった。

菊池家略歴

平安時代から室町時代にかけては、菊池家は九州武家集団の雄とされていた。南北朝時代は、南朝の忠臣として活躍したが、家督をめぐる内部抗争は激しく、嫡流は十四代武士で絶え、庶流の豊田十郎武光が菊池武光と改名して十五代惣領となった。しかし、庶流も二十三代政隆で絶え、阿蘇家の阿蘇惟長(阿蘇家の十七代当主で阿蘇神社大宮司)が二十四代菊池武経を名乗り菊池家の惣領となった。

そのあと、庶流の託摩家から二十五代菊池武包(菊池家庶流で詫磨武安の子)が家督を継いだが、室町時代の後期永正 17 年(西暦 1520 年)に大友義長の子大友重治が、二十六代菊池義武を名乗り菊池家の当主となった。しかし、この菊池義武も天文 23 年(西暦 1554 年)に甥の大友義鎮に攻められ、自害して果ててしまう。これが、九州肥後の武家集団菊池家の最後であったという。

(最初の「八つ足日足紋」、「鷹の羽紋」は阿蘇神社、「菊水紋」は楠正成公との縁を表す)

龍造寺氏に立ち入ってみよう。

１１５４年、源為朝が九州で威を振るっていた頃、朝命によって鎮西監視五名が派遣された。その一人藤原季清は子の季喜とともに肥前に下向し、戦功を尽くし、肥前国の津東郷に領地を給わり、定住することになった。この父子は藤原秀郷の子孫と伝えられ、父季

清の代までは北面の武士であった。また季清は西行法師（藤原義清）の叔父とも言われている。鎌倉時代になってからのことであるが、季喜が養子に迎え入れたのが同じ藤原系の高木季家で、彼が龍造寺氏を名乗ることになる。

高木氏は肥後の菊池氏や筑後の草野氏と同族で、藤原道長の甥隆家の子、または郎党である政則（蔵規）の子孫と言われている。季家の父は高木季経である。

１１８６年、肥前の神崎荘の住人海宿祢重実等と所領のことで高木宗家との間に対立が起こった。院と鎌倉という大きな勢力の対立であった。海重実が平家に味方していたので、頼朝に味方した高木宗家に佐賀郡甘南備の地頭が与えられた。

１１９４年には、高木季家は龍造寺地頭職を補任され、龍造寺を名乗った。

以上の系統のほかに、九州では次の氏族も成長する。

薩摩大隅両国では、１２世紀の中頃、府官の系譜を引く薩摩平氏一族の平忠景の乱が起きた。一族抗争の過程で、源為朝を婿にし、忠景与力の勢力は支配領域を薩隅両国に及んでいた。平治の乱で平氏が勝利すると、平氏の支配が南九州にも及んできた。平氏は薩摩国に清盛の弟忠度を守に補任した。忠度は遥任であり、政務を執っていたのは目代の肥前平氏一族・平忠景の娘婿の平宣澄であった。

平氏が滅亡すると、薩摩国内では為朝の子義実の乱が起こっている。義経に従い、義経没後薩摩国に下向していたのである。

日向では、１１８５年５月、日向国住人富山義良らを鎮西御家人とする命令が出されている。１１８９年の源頼朝による陸奥国の藤原泰衡らの討伐軍には、島津忠久に率いられた軍勢には島津荘の北郷弥太郎兼秀も加わっている。

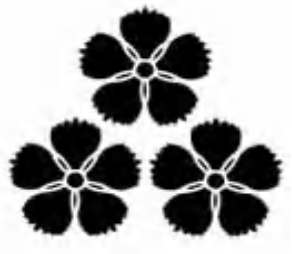
島津氏は惟宗氏から出た説がある。惟宗氏は帰化人秦氏の後であるという。また日向守惟宗基言の子広元が、京都で比企能員の姉と結婚し、忠久を生んだという。忠久は後に播磨の少椽となり、近衛氏に仕えて、その領地島津荘の地頭を命ぜられた。別の説に島津忠久の外祖母の比企禅尼が、頼朝の乳母であったから、頼朝が興った時、忠久がこれに従い戦功あり、後に日向・大隅・薩摩の守護となったというのである。

筑紫野市には通古賀や古賀の地名が残っている。これは筑前国御笠郡古賀庄と関係があるようだ。戦国時代少弐一門に古賀庄に住んでいた一族がいた。後に古賀姓を名乗るようになる。少弐氏（武藤氏）は鎌倉時代から戦国時代を経て、太宰府を中心に筑前・肥前の国で活躍した一族である。

第四部の六、大蔵氏の嫡流、原田氏

大蔵一門とは、大蔵広隈を祖とし子孫の一人大蔵春実が太宰少弐となり九州北部に住するようになるが、大蔵一門の主な家を上げると原田・高橋・秋月・田尻・三原・原・江上・鞍手・岩戸・美気・山崎・古賀・枝吉・米倉・小金丸・波多江・海頭・別府・安永・天草・山鹿・坂井・粥田・砥上などである。

三つ撫子
大蔵氏族の家紋



大蔵氏の起源は既に述べたように、高祖劉邦の漢帝国を西暦２５年に再興した劉秀（光武帝）から九代目の後漢霊帝と言われる。戦乱で朝鮮半島（帯方郡）へ逃れた漢王二十九代阿知王は、その子都賀使王及び七姓氏・十七県人を率いて２８９年９月５日に備中国窪屋郡大倉谷に渡来する。大和朝廷は彼らを優遇し、東漢の姓と臣（おみ）の位を賜り斉蔵（大蔵）の長官に任じられ、奈良県高市郡飛鳥村桧隈に住まう。呉国に使いを出し、４人の織目を連れ帰り養蚕・染色・機織・裁縫の技術を教える。諸国からの貢物を管理する大蔵大臣に任命されると共に「大蔵」と「坂上」の姓を賜る。大蔵忌寸の後に宿彌を賜り、一族坂上田村麿の功により朝臣の位を賜る。９４０年に伊予の豪族藤原純友が大宰府で反乱を起こすと朝廷は大蔵春実に討伐を命じ、箱崎浜や肥前鏡山で見事打ち破る。その功により太宰少弐の官位を与えられ筑前・肥前・豊前・壱岐・対馬を管理することになる。

当初は肥前基山城を拠点にしていたが便利の良い原田庄へ移り（筑紫野市原田）、以後「原田氏」を名乗る。後に岩戸城（那珂川町城山）を築く。原田種村は刀伊賊を、原田種光は南蛮の賊を撃退し、鎮西の守りを固める。

１１５２年、府検非違使執行の大監大蔵種平と大蔵季実等は五百騎を率いて筥崎・博多に乱入している。このことは先述の通りであるが、筥崎・博多大追捕といわれる。この事件の背後には、府官層内部の対立や権師―目代の筥崎宮支配の強化、つまり筥崎宮内の反対勢力を排除して、貿易を直接把握する意図があったと推定されている。大蔵季実とは、大蔵一族の一つ三毛家の大夫季実である。その三毛季実（みけのすえざね）は、筑後三池一帯を地盤にしていた（三毛から三池？）

平安時代末期、源氏と平氏が戦った保元の乱（１１５６）・平治の乱（１１５９）では原田種雄と種直が六波羅に入り平氏勢として戦い、平氏との関係が深くなる。平清盛の長男

である平重盛の養女（平家盛の娘）を種直が娶り、自身も従五位下となり大宰少弐の職を継いで事実上の大宰府の長官となり、九州における平氏の基盤を築く。種直の次男種国は後白河法王が幽閉された時の警護を命じられている。元暦２年（１１８５）２月１日芦屋浦にて種直と種国（吾妻鏡では賀摩兵衛尉・嘉摩田種国）が源範頼と戦い、種直の弟の美気三郎敦種が討ち取られている。平氏都落ちの際には岩門城の私邸を安徳天皇の仮皇居にする。横道にそれるが、筑紫郡那珂川町に「安徳」の地名が残っている。それは背振山の東裾野で那珂川源流部である。その「安徳」の東側に１９５メートルの低い山があるが、これが城山であり、山頂には岩門城址がある。下の写真の高祖山の東側（裏側）は早良地方で、さらに東行すると筑紫郡那珂川町に達し、岩門郷があった。

壇ノ浦で平氏が惨敗すると原田氏は岩門郷三千七百町の領地を没収され、種直も十三年近く鎌倉に幽閉される。開放された種直は源氏に味方させていた子　種成（早良種成）を頼り、建仁３年（１２０３年）筑紫郡岩門より怡土郡五郎丸（糸島郡三雲）に移り住み、伊勢（怡土）ノ山（現在の高祖山）に館を構える。後に頼朝より怡土庄の地を与えられる。

高祖山と博多湾遠景
（点線内が高祖山城域）

建長元年（１２４９年）原田種直から四代目の種継・種頼親子が怡土城（朝鮮式山城）の遺構を利用し、高祖山に高祖城（高祖山城）を築城し、麓に館や武家屋敷を構える。

文永１１年（１２７４年）１０月の元寇「文永の役」では原田種照・種之兄弟が六千五百騎を引き連れて防戦するも、八幡宮（箱崎宮？）裏手の深田で討ち取られる。種照は４２歳であった。

弘安３年（１２８１年）の「弘安の役」では原田種照弟　種之・種房が今津で防戦している。弘安の役の功により原田種房は大宰大監に任じられる。

南北朝時代には足利直義軍に加わり各地に転戦。征西府の全盛期には菊池氏の縁戚となる。南朝の没落後、一時家運は衰退するも、室町後期には大内氏の家臣として原田弘種・原田興種・原田隆種が少弐氏との戦いで活躍し再興を果たした。大内氏滅亡後は龍造寺氏、

毛利氏、島津氏と盟を結ぶ。

その後、北条氏が足利尊氏により滅ぼされると日本が南北朝に分かれる。延元元年（１３３６年）に足利尊氏・直義兄弟が九州へ下ると原田種時はこれに味方する。しかし、嫡子の種宗は足利氏討伐の軍を起こした菊池陣営に入る。多々良川合戦で足利勢三百騎に対し菊地勢五千騎という状況ながら足利勢が勝利する。この一戦での勝利により九州を治めた足利軍は京都に攻め上り、湊川合戦では原田種時も奮戦する。原田種宗は帰参することが出来ず筑後で原氏の養子となる。足利尊氏が京都に上った後の九州北部は再び菊地・大友・少弐の支配となったので、応永三年（１３９６年）に足利義満は大内義弘を九州へ下向させると原田氏はこれに組みする。その後大内義弘は足利義満と不和となり、応永七年（１４００年）に京へ軍勢を進めるが幕府軍に破れる。原田氏は大内義弘の嫡子である大内新介や弟の大内盛見と供に義弘の遺志を継ぎ筑前を統一していく。

戦国時代、原田家最後の当主・原田信種の代には大友氏を駆逐し糸島全土を領土となした。しかし、豊臣秀吉の九州征伐の際に大失敗を犯してしまう。経緯は次の通りである。

豊臣秀吉が島津征伐の軍を九州に進めると原田信種は島津との同盟から徹底抗戦を主張する。笠・波多江両重臣は豊臣勢を見定める為に門司へ向かい、毛利軍を主力とする第一陣の陣形を見て驚き、浅野長政に降伏を申し入れる。豊臣秀吉は快く受け入れ、忠臣として褒め称えるが、事情を聞いた原田信種は怒り武門の意地を貫き潔く戦う決意を固める。

天正１５年４月１７日　小早川勢一万騎の布陣を見て戦意を失った原田信種は黒田家家臣　久野四兵衛の勧告に応じ高祖城を明渡す。小早川隆景は原田家とは旧知の仲であったので秀吉に助命を嘆願する。豊臣秀吉は反旗を翻した事に怒りを覚えたが、負けると知りながら抵抗した事は誉めるに値すると考え、原田信種と直に会い裁断を決める事にする。

秀吉が原田の所領を尋ねたところ、広すぎると没収されるとの考えから少なく報告するが、全てを知っていた秀吉の神経を逆撫でする事となる。その結果、「小身にて一家を立てる事は無い」との裁断が下され佐々成政の与力として筑後に三百町歩を与えられ肥後へ国替えとなる。その後秀吉の兵により高祖城は破壊され、ここに高祖城の歴史も終わる。家臣達は帰農したり他家へ仕官していく。

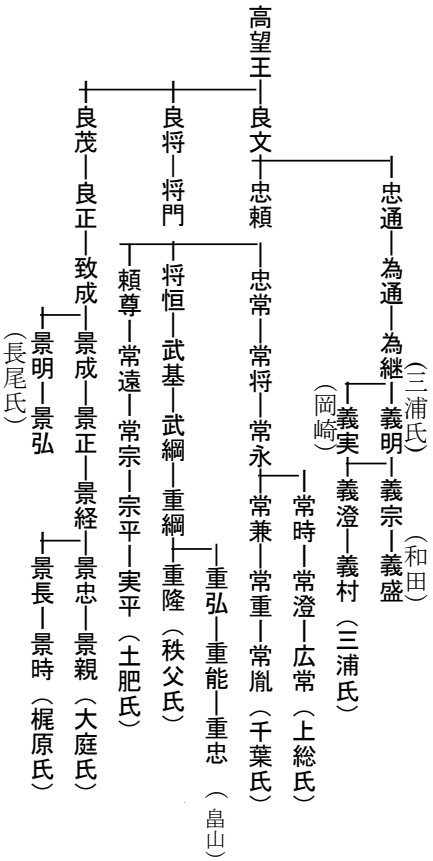
原田信種の死後、原田嘉種が四七代目を継ぎ加藤清正に仕える。ある年、清正の息女が毛利に輿入れする事となり、原田嘉種の母は龍造寺氏の養女なので古事に明るいと考えたので息女に付き添って欲しいと言われる。しかし、原田嘉種はこれを拒否し、それ以来清正との関係が不和となり領地没収され追放される。原田嘉種・種房は寺沢広高を頼り食客として遇される。寛永１４年（１６３７年）島原の乱が起こると原田嘉種・種房兄弟は寺沢興高（広高の弟）に従いこれを出陣し翌寛永１５年２月に唐津へ戻る。寺沢広高が島原の乱の責任と財政悪化を理由に改易されると原田嘉種は江戸に向かい、天海僧正と出会う。

徳川の世となり「豊臣に抗いし原田は徳川に忠義を果たしたと同じである」との事から慶安４年（１６５１年）２月１日　会津若松城主　保科正之に二千石で仕えるようになる。

原田嘉種は六十七歳と高齢であったが、保科正之公に手厚く遇された。弟の原田種房は現世を愁いて僧籍に入り長崎に居たが、原田嘉種は会津に呼び戻し五百石を与える。原田嘉種が万治３年（１６６０年）８月２９九日に七十七歳で大往生すると嫡子　原田種長が四十八代目を継ぐ。

第四部の七、平安末期の九州

武士団は平家方・反平家方に分裂、そして源頼朝の挙兵



１２世紀中頃、東の源氏・西の平家といわれるように、正盛・忠盛以来九州を含む西国は平家の支配が強く及んだ地域であった。平家は院権力と密着し、院領荘園の領家職預所職を占め、南九州では島津荘の現地管理権を掌握した。知行国主や受領として太宰府や国衙機構を動かし、平家支配を受け入れるか、反抗するかの二者択一を平家は武士団に迫ったのである。前者の代表が筑前の原田種直であり、後者は肥後の菊池隆直である。

１１８０年秋、頼朝が挙兵した頃、九州では鎮西の菊池隆直・阿蘇惟安らは平家に背き反乱を起こした。翌１１８１年４月、平宗盛の娘をもらっていた原田種直は太宰府少弐に任命され、九州の反平家を押さえる総大将になった。この両者の戦いは二年半にも及び一時は源氏方が平家の拠点太宰府にまで攻め上る勢いであった。源氏の与党には南郷の大宮司惟安、豊後の緒方惟能等がいた。原田種直は菊池の本拠を攻めたが攻略しきれず、平家は平貞能を菊池隆直追討のため、筑後守・肥後守として鎮西に下向させ、翌１１８２年４月、菊池隆直を降伏させた。

平氏の追討使・平貞能によって鎮圧された菊池隆直の反乱は、これより少し前、薩摩・大隅での平忠景の反乱に続くもので、一国棟梁を目指すものであったという。

寿永２年（1183 年）７月、源義仲に敗れた平氏は安徳天皇と三種の神器を奉じて都を落ち、九州大宰府まで逃れた。一行が８月に大宰府に到着したとき、菊池・原田以下、臼杵・

戸次・松浦党の面々は、天皇を守護して皇居を築造した。

この安徳天皇の迎え入れに対する論功行賞では、原田種直・菊池隆直（たかなお）は勲功抜群として筑前守・肥後守に補任されたが、しかし鎮西諸国より募兵に応ずる者は少なかったという。

これに対し緒方惟義（緒方惟義の居城が、滝廉太郎の荒城の月で有名な豊後竹田の岡城である）が三万余騎を以って大宰府を襲撃するとの噂がとび、天皇を襲撃するなど最初は信じられなかったが、実際に緒方惟能が迂回し肥後より北上する動きをし、惟義の兄臼杵惟隆も豊前より板井と戦い、弟佐賀惟憲と日田永秀等が日田方面より西に進み、平家方とぶつかり、高野本庄（田主丸・久留米方面）で戦うこととなったのである。

そして筑後の反平家の勢力は、高良山に陣を取った。１０月、反平家勢力の緒方惟義らが太宰府を攻め始めたので平宗盛（むねもり）らは水城の関戸から博多湾の箱崎、そして遠賀郡山鹿城に至った。さらに海上に出て、しばらく船で流浪していたが、阿波国の田口成良に迎えられて讃岐国屋島に本拠を置くことができたのである。

源平合戦の折、肥前の武士である龍造寺季家、高木宗家、草野永平等は、緒方惟義等の太宰府攻撃に源氏方として加わって戦った。その戦功により、１１８５年、藤原永平は筑後国在国司、草野の地の押領使に補任されて、草野氏を名乗り、翌年、松浦郡鏡社宮司となっている。

寿永 3 年（1184 年）1 月 20 日、鎌倉の源頼朝と義仲の抗争が起き、義仲は滅びた（宇治川の戦い）。その間に平氏は勢力を立て直して、摂津国福原まで進出するが、頼朝の弟の範頼・義経に攻められて大敗を喫した（一ノ谷の戦い）。この戦いで平氏は一門の多くを失う大打撃を蒙った。

平氏は屋島に内裏を置いて本拠とし、平知盛を大将に長門国彦島にも拠点を置いた。平氏はこの拠点に有力な水軍を擁して瀬戸内海の制海権を握り、諸国からの貢納を押さえ力を蓄えていた。一方の鎌倉方は水軍を保有しておらず休戦が続いた。
後白河法皇は三種の神器の返還と源平の和平を打診させる使者を平宗盛へ送るが、平宗盛はこれを拒否した。

一ノ谷の戦い後、範頼は鎌倉へ帰還し、義経は頼朝の代官として京に留まった。頼朝は後白河法皇に義経を総大将として平氏を討伐したい旨の意見を奏請した。

同年 6 月、頼朝は朝廷に奏上して範頼を三河守、一族の源広綱を駿河守、平賀義信を武蔵守に任官させた。一ノ谷の戦いで最大の殊勲を上げた義経は任官から外されており、これは古来、頼朝が義経の軍事的天才を警戒したとも、義経の忠誠心を試したとも言われている。

同年 7 月、後白河法皇は安徳天皇を廃し、その弟の尊成親王を三種の神器がないまま即位させた。後鳥羽天皇である。これにより、朝廷と平氏は完全に決裂した。

以上のような前提があったからこそ、屋島の戦いに敗れた平氏は、九州を起死回生の拠所にしたのである。だが、豊後の緒方惟義（これよし）・臼杵惟隆（これたか）、肥後の菊池隆直らの反乱が相次ぎ九州への上陸は不可になる。かくして彦島を根拠地にして、北部九州の武士に総動員令をかけ、門司関をかため、早鞆（はやとも）の瀬戸にのぞみ、西下する源氏と対決することになったのである。

元暦２年（１１８５）２月、北条時政ら源氏軍は豊後に渡った後、原田種直らと芦屋浦で激戦、また源範頼（のりより）も原田氏の要害、筑前岩門城を攻略して原田一族の多くを滅ぼし、山鹿秀遠を出奔させた。屋島合戦後の３月、長門の壇の浦において、原田・菊池・山鹿氏らは軍船５００艘で源義経の軍船８４０艘と戦って大敗北し、平家軍の大部分は入水した安徳天皇とともに海底に没したのである。

文治元年（１１８５）３月２４日、壇ノ浦の合戦で終止符が打たれた後、原田・板井・山鹿氏らの広大な所領は、平家没官領として没収され、安楽寺別当の安能はその地位を追放され、広大な宇佐宮領とともに安楽寺領も没収されて、九州の平氏勢力は一掃された。

かくして鎌倉から派遣される御家人による支配下に組み込まれ、鎌倉時代の新しい体制の成立にむかうのである。

１１８６年、高木宗家は、佐賀郡甘南備の地頭となっている。この高木家は藤原姓の府官武士であった。これら九州の小規模な小地頭職と、広大な没収地を恩給された東国御家人の惣地頭職が存在する二重構造の地頭制が成立することになった。高木家や龍造寺家は小地頭職であった。

第五部　鎌倉時代（１１９２－１３３３）

第五部の一、九州支配の方式と「九州三人衆」

１１８５年３月、平家を長門国（山口県）壇ノ浦に滅ぼした後、源頼朝は、九州の戦後処理役として弟範頼（のりより）を差しくだした。しかし、戦後の混乱に乗じて範頼配下の武士の狼藉行為が相次いだので、京都の公家政界から頼朝に対して範頼召還の要求が突きつけられてきた。範頼は早急に占領行政に目鼻をつけて九州を去り、新しく武士を取り締まる為に中原久経・藤原国平の二人が鎌倉殿御使として派遣された。

ところが、同じ年の暮れごろには、頼朝と弟義経の対立が決定的となり、義経は後白河院に強要して、頼朝追討の宣旨を獲得した上に、九国地頭の補任を受けて九州の支配権を与えられた。頼朝はこの院の失策を逆手にとって、いわゆる「守護地頭設置」の要求を飲ませ、九州には、挙兵以来の腹心、伊豆国御家人天野遠景を鎮西奉行として下向させた。九州全体に及ぶ強い権限を授けられた鎮西奉行の天野遠景は、義経や平氏残党の逮捕に当たるとともに、幕府の九州諸国支配権の強化に努力したが、必ずしも鎮西御家人らの支持を得ることが出来ず、また荘園領主の反発も強かったので、ついに建久５年（１１９４）ごろ関東に呼び戻された。代わりに中原親能（ちかよし）が後任となるが、彼もすぐに鎌倉に呼び戻される。

天野遠景の権限は九州全域に及ぶものであったが、その後、鎮西奉行の機能は各国別の守護に分化を遂げていった。とにかく、九州の平家追討には、頼朝は徹底を極めた。これによって鎌倉幕府は着々と、九州支配の実権を固めていったのである。

すなわち、中原親能（ちかよし）に代わって、頼朝の重臣である武藤資頼（すけより）と大友能直の二人を「鎮西奉行」として派遣した。そして武藤資頼には三前（筑前・豊前・肥前）と二島（壱岐・対馬）を、大友能直には三後（筑後・豊後・肥後）を治めさせた。

武藤氏は大宰府少弐を兼任し、帥（そち）や大弐の高官が遥任のために不在であり、実質上の最高権力者であった。このため大宰府は「大宰府守護所」と呼ばれた。しかし、この頃までは朝廷の大宰府支配は、名目上は存続していた。

併せて、島津忠久が奥三カ国（薩摩・大隅・日向）の守護に任命され、中世九州政治史の主役を勤めた、いわゆる「九州三人衆」のもとが築かれたのである。

九州の守護には遠国ということで、一般の守護が持つ大犯三か条（京都大番役の催促、謀反人・殺害人の逮捕）を超えて、地頭御家人の訴えを処理する権限を特別に認められて

いた。武藤氏は武蔵国戸塚郷（神奈川県横浜市）、大友氏は相模国大友郷（同県小田原市）を本拠とする。東国出身の有力御家人である。島津忠久は大友能直と同じく源頼朝落胤説もあったが、代々摂関家につかえた惟宗氏（これむね）出の畿内武士とするのが、一般的である。いうまでもなく、国御家人を統括し、治安維持の任務を担う守護は、幕府地方支配の要のポストである。幕府が要地とみた九州の守護には、鎌倉幕府が滅亡するまで地元生え抜きの豪族が採用されることはなかった。

筑前守護を鎌倉時代を通じて世襲した武藤氏は、当初から守護正員が現地に常住した。鎌倉期の守護としては珍しい存在である。初代の武藤資頼は、平知盛の家人であった。資頼の伯母が知盛の北の方という説がある。一の谷合戦で平家の戦いぶりに失望した資頼は、源氏の将梶原景時の降人となり、源平合戦後に三浦義澄にお預けの身分となっていた。二代将軍源頼家の元服の式典で典礼を指導する機会にめぐまれ、平家の公達に仕えていた資頼は、公式の礼儀作法を心得ていた武将として認められたのである。奥州の義経討伐にも従軍して軍功をたて、その実力を認められた。

平家滅亡後、頼朝は上述の通り天野遠景を鎮西奉行人として太宰府に配置して九州の処置に当たらせた。その処置に失敗し天野遠景を解任し、後任にはいったん中原親能が任命された。しかし彼は鎌倉で有用な人材であり、代わりに武藤小次郎資頼の起用となり、太宰大弐及び、鎮西守護職に任じられたのである。

武藤氏は武蔵野国戸塚郷の藤原氏の説と武者所の藤原氏の説がある。先祖が藤原秀郷の説では、千常、文脩、文行、脩行、行景、景親、景頼、頼平となる。また藤原道長の説では、長家、長頼、頼氏、頼家、頼兼、頼平となっている。武藤資頼は頼平の二男である。どちらの説も信頼性があるとするならば、時の権力者の平家に仕えていた頼兼の家に頼平は養子になっていたのかもしれない。

古代から九州には、外交関係と九州の広域行政権を担当する役所として大宰府が置かれていたが、まだ鎌倉時代には、九州全域に対して強大な影響力を維持していた。大宰府に送り込まれた武藤資頼は、大宰府機構内の特殊な地位につくとともに、現地の府官を自身の主催する大宰府守護所のスタッフに取り込んで行くことで、着実に勢力を蓄えていった。

さらに、嘉禄二年（１２２６）、武藤資頼は朝廷から正式に太宰少弐に任命される。これ以降、武藤氏歴代は大宰府に住んでこのポストを世襲したので、いつのころからか職名にちなんで「少弐氏」を名乗るようになった。既に大宰府の長官は赴任しないから、名実ともに次官の少弐氏が大宰府の現地最高責任者となったのである。

鎌倉時代前半期、幕府守護と王朝官職をあわせもつ少弐氏は、大宰府を拠点に北部九州に目覚しい勢力を築いていった。少弐氏は寛元三年（１２

少弐系図１　藤原秀郷―千常・・景頼―頼平―①資頼―②資能

大友系図１　―能茂―①能直

島津系図１　惟宗基言―広元―①忠久―②忠時―③久経

４５)、被官の宗氏を派遣して、対外交易上の障害となっていた対馬の在庁阿比留氏（あびる）を討伐させるが、これ以降、対外交易の要衝対馬は代官宗氏を通じて少弐氏の掌握するところとなった。この創始は大宰府の有力府官惟宗氏の一族ともいわれ、後の対馬島主宗氏につながる。

島津氏の守護職

島津氏の祖忠久は『島津家文書』では惟宗氏である。惟宗氏は、朝廷や摂関家に実務官人として仕えていた。惟宗氏の前身は、渡来系氏族秦氏であるという。

１１８５年、惟宗忠久は領家下文に任せて、島津荘下司職に任ぜられてから島津氏を名乗った。１１８９年、藤原泰平らの源氏の討伐軍に、島津忠久は島津荘の軍勢を率いて加わっている。しかし、島津荘の荘官には忠久の下司に従わず関東に行かなかったものも多いという。

その後、忠久は１２０３年までは日向の守護を任じられていた。同年、将軍頼家の舅であった比企能員が殺害されると能員の義理妹丹後内侍を母とした島津忠久は日向国守護職を解任された。忠久は丹後内侍と頼朝の間に出来た子であるという伝説もある。その後は日向の守護職は北条義時の子・重時の流れに継承された。

将軍実朝就任により、島津氏は薩摩守護職に安堵されている。島津氏は忠久、忠時、久経までの三代は鎌倉に住み、蒙古襲来により久経時代になって任地に下向した。

伊東氏

鎌倉初期に工藤祐経が日向地頭職を与えられたようだ。伊東氏は工藤氏の支流で、伊東祐経の孫祐明が田島に、七男祐景が門川に下向している。鎌倉中期に下向した伊東氏は日向国の所領の現地支配を強めた。祐明の弟祐光が家督を継いでいる。

薩隅日三州

鎌倉幕府より、惣地頭を賜ったものに、薩摩に千葉介常胤、鮫島宗家、島津忠久、後に相模の渋谷氏、二階堂氏があった。

第五の二、平家方武士団の没落

源氏軍に追われ都を落ちた平家が、安徳天皇を奉じて九州大宰府を目指したのは、筑前の原田・山鹿・粥田・筑前の三毛、豊前の板井など、大規模な武士団を形成する有力府官層を家人化し、ここに代々培ってきた強力な基盤があったからに他ならない。原田・三毛・板井氏は大蔵一族、山鹿・粥田氏は刀伊入寇の頃の最有力府官藤原蔵規（まさのり）の子孫で、肥後の菊池氏と同族である。中でも平家の強引な引きで権少弐にまで昇進した原田

種直は、「九州軍士二千騎」を率いて反乱鎮圧にあたり、名字の地である原田荘（前原市）や那珂東郷岩門（なかとうごういわと）（筑紫郡那珂川町）を中心に広大な地域を領有していた。これらの武士団の棟梁を中心にほとんどの九州武士は平家方として戦い、敗北を喫した。

しかしながら、鎌倉幕府は九州の安定を重視し、原田・板井ら有力武士については、「平家与同張本の輩」として所領没収という厳しい姿勢で臨んだのに対して、それ以外の一般武士には、平氏に味方したことを問わず、むしろ本領を安堵して彼らを積極的に鎌倉御家人に取り立てることで幕府の基盤を早急に整えようとした。九州武士が御家人となるには、現地で希望者のリストを作成して鎌倉に送り、頼朝の許可を仰ぐという簡略な手続きが採用されたので、他の地域と違って名主クラスでありながら御家人化したものが少なくない。

文治元年（１１８５）１２月、源頼朝は、全国の荘園や公領に地頭を置くことを朝廷から許可された。ところが、平家支配が深く浸透していた九州では、「張本の輩」の所領が没収された一方で、その下にあった一般武士は本領を安堵され御家人となったために、九州武士の小規模な地頭職のうえに、広大な没収地を恩給された東国御家人の地頭職が存在する、という特殊な二重構造の地頭制が成立したのである。小規模な国御家人を小地頭と言うのに対し、東国御家人を惣地頭と呼ぶ。ここで地域の歴史に大きな足跡を刻んだ、主な東国御家人を紹介しよう。

一説に３７００町ともいう広大な原田種直旧領は武藤資頼に給与され、筑前における武藤（少弐）氏繁栄の基盤となった。また、筑後国の旧平家領巨大荘園の惣地頭には、天野遠景・和田義盛らの頼朝重臣が補任されたが、これらは一時的である。武藤資頼の庶子為頼は、宇佐宮領の嘉麻郡立岩府（飯塚市立岩）に進出するとともに、宗像大宮司氏忠（うじただ）の妻張氏（博多綱首の娘）から養子として宗像社領内の名主職（小地頭職）を譲与されるなど、土豪化の道を歩んでいった。このように早くから九州に根をおろした武藤一族は、守護職を有する惣領家を中心に、筑前国をはじめ北部九州各地に根を広げていく。

豊前国の雄族板井種遠の旧領は、下野国の有力御家人宇都宮信房に与えられる。宇都宮氏は一族庶子を下向させ、豊前国全域に勢力を張った。宇都宮一族には、野仲・山田・成恒（なりつね）・深水・大和・西郷・如法寺（以上豊前国）、山鹿・麻生（以上筑前国）などの諸氏がある。これら庶家が新しい住所を名字としたのに対して、蒙古襲来を契機に下ってきた惣領家は、坂東武者のほこりをすてず、本姓を名乗り続けた。

豊後の大神一族の緒方惟義は、平氏でなく源氏方であったが、義経に加担したのを理由に、後に領地を取り上げられ、中原親能に与えられた。肥後の菊池は、源平合戦の折はすでに鎮定されていた。平家方にいた菊池隆直の子、隆長、秀直兄弟は壇の浦で平家と運命を共にした。しかし、菊池氏は隆長の養子・隆継が家督を嗣ぎ、その子・能隆は大友能直の娘を妻にして、鎌倉幕府の元で有力御家人として存続する。

筑前国の麻生氏は、北条得宗領（とくそう）の山鹿荘内麻生荘の地頭代官職を獲得したのをきっかけに、遠賀川河口域に勢力を拡大し、室町期には幕府奉公衆にまで成長した。海上交通の要衝門司関も平家没官領として鎌倉幕府に没収され、後に得宗領となり、麻生氏と同じ得宗被官の下総氏が現地の支配に当たった。下総氏は南北朝ころに土着化し、門司氏を名乗る。

一方、元から九州に住む国御家人は、源平合戦で大豪族が没落した結果、荘官・名主クラスの小地頭が主流であったが、中には古代以来の権威をほこる宗像大宮司宗像氏・住吉社神主佐伯氏や筑後国衙の有力官人草野氏などのように、郡司クラスの者もいた。鎮西探題打倒に活躍した筑後国後家人三原種昭（たねあき）は「原田大夫種直五代孫子」と高らかに自称したが、筑前の秋月・深江、筑後の三原・田尻をはじめ、美気、江上、高橋、別府など府官大蔵氏を称する国御家人も少なくない。豊前の長野氏は、平安時代末に本家から宇佐宮領長野荘園（北九州市小倉南区）の地頭に補任された開発領主中原氏の子孫で、中世規矩（きく）郡を代表する豪族として勢力があった。以上の比較的規模の大きな領主に対して、筑前の榊氏や中村氏のように、村や名に基盤を置く国御家人（小地頭）たちは、守護などの軍勢催促に応じる一方で、村の指導者層としても活躍した。

このように一口に国御家人といっても、それぞれ社会的立場は一様ではない。さらに異国警護番役などの幕府公役をつとめることで、後から御家人身分を獲得したものもあり、非御家人との境は思うほど明確ではなかった。

鎌倉時代	1192	源頼朝が鎌倉に幕府を作る 源頼朝が征夷大将軍に任官される
	1205	新古今和歌集が完成 後鳥羽上皇の勅命によって編まれた勅撰集
	1219	源実朝が殺されて源氏が滅びる 第三代征夷大将軍源実朝、鶴岡八幡宮で兄の源頼家の子公暁に襲われた
	1221	承久の乱が起こる 後鳥羽上皇が鎌倉幕府に対して討幕の兵を挙げて敗れた兵乱
		京都に六波羅探題がおかれる 鎌倉幕府の職名。承久の乱ののち、幕府がそれまでの京都守護を改組し京都六波羅の北と南に設置した出先機関。朝廷の動きをいち早く掴むための役所。

	1232	北条泰時が御成敗式目を制定 武士政権のための法令。貞永式目（じょうえいしきもく）ともいう。
	1274	文永の役 元及び高麗によって二度にわたり（弘安の役）行われた日本侵略の戦争。
	1281	弘安の役
	1297	永仁の徳政令 元寇での戦役や異国警護の負担から没落した御家人の借入地などを無償で取り戻すことを目的として出された日本で最初の徳政令
	1333	鎌倉幕府が滅びる 足利高氏（尊氏）が六波羅探題を落とし、北条氏が新田義貞らの軍に滅ぼされて幕を閉じた

第五部の三、元寇と戦った武士達

承久の乱

１２２１年、後鳥羽上皇を中心とした、朝廷の幕府に対する反乱が起きた。鎌倉幕府は朝廷側に対して十九万という大軍を持って対抗した。幕府側は、この時朝廷側が「錦の御旗」をかざして進軍してきたら、無条件降伏するつもりでいたとしている。天皇という権威の魔力を幕府側の武士も抱いていたのである。しかし、幕府はこの乱を治め、京都に六波羅探題を置き、義時の後執権となった泰時は連署をおき評定衆による合議体制をつくり、１２３２年には、御成敗式目を制定した。

承久の乱の勝利で幕府の基盤が西国に拡大されていった。この時、肥後の菊池能隆は、京都警備の大番役に当たっており、代番者の叔父二人が在京し、上皇側に組み込まれたのである。その結果、北条義時から本領数ヶ所を没収されたにとどまったようである。この能隆の妻は肥後守護職の大友能直の娘であった。１２２６年、調一族である黒木氏、星野氏、河崎氏は筑後の領地で地頭職を受ける。

蒙古襲来と鎌倉幕府

「元」の使者が、最初に国書をたずさえて来日したのは文永五年（１２６７）で「元に臣従せよ、さもなくば武力をもって征服する」というものであった。これに対する鎌倉幕府はもはや源氏の時代ではなかった。

源氏はわずか三代で滅亡し、代わって頼朝の妻政子の出自である北条氏が政権を握って

いた。北条氏は平家一門のため将軍の座には就けず、摂政家の親王を将軍として鎌倉に迎えて執権職をつとめた。しかし、事実上の将軍であった。

元の文永・弘安の来襲は、共に執権職は八代時宗のときで、文永５年にはまだ１８才であった。

時宗は、再三の蒙古の使者に対し何の返答も与えず、代わりに九州の防備態勢をととのえ、九州に所領を持った御家人達に鎮西へ赴くよう命じている。当時の御家人達は所領が分散され、本人が九州に在住していないものが多かった。

鎮西奉行の大友氏でさえ豊後に本家を移したのはこの時で、三代頼泰の頃であったといわれている。守護・地頭も同様で、これがきっかけとなり、関東武者が九州に“むらがり”土着したのである。

これによって公家による九州支配の行政権限が、武家の掌握となった。守護に続き地頭も「下り衆」と呼ばれ、門司に藤原氏、遠賀に麻生氏、同城井に宇都宮氏、小倉に少弐一族の吉田氏。他の国には渋谷氏（鹿児島市来）、二階堂氏（宮崎）、相良（熊本人吉）らが下向した。

地頭（じとう）は、鎌倉幕府・室町幕府が荘園・国衙領（公領）を管理支配するために設置した職。地頭職という。守護とともに設置された。

千葉氏の九州下向

千葉氏が肥前国小城に下ったのは常胤の四代あと七代頼胤の時である。千葉氏は当時、肥前国・小城郡周辺に所領を持っていた。幕府が蒙古襲来にそなえ、九州に領地を持つ御家人に下向を命じた。千葉頼胤は一族を連れて下向した。１２７４年の文永の戦いで、頼胤は敵の毒矢をうけ、その傷がもとで翌１２７５（建治元）年８月１３日に亡くなった。彼の死が下総国に伝えられると、八幡庄で下総の政務を見ていた十二歳の長男・宗胤が千葉氏の家督を継ぎ、九州へ下向した。

蒙古襲来・文永の役（第一回元寇）

１２６６年から１２７３年まで、蒙古からの使者は六回に及んだが、それらの使者を無視した。１２６８年、１７歳の若さで、北条時宗が執権となり、幕府は合議制から、権力集中型になった。幕府は御家人を九州に遣わし、「異国の防御と領内の悪党を鎮めよ」との命令を出し、博多湾岸に石塁を築いて大軍を防ぐ備えをした。朝廷は各地の神社に国を守るように祈らせた。

１２７４年４月、高麗において元の支配に最後まで抵抗した勢力（三別抄）が壊滅した。

元の皇帝フビライは、１２７４年（文永の役）１０月、元・高麗を中心とする三万数千人が、対馬、壱岐に上陸して、１０月１９日に朝博多湾に侵入した。２０日早朝から上陸、博多湾に結集した九州の武士たちとのあいだで激戦が展開された。日本軍は元軍の集団戦に圧倒され、夕刻には本営の太宰府に近い水城まで退却した。この日の夕方からの暴風に、

一夜にして多数の元の軍船が難破したのである。

この戦いでは二代目少弐資能は老齢のため、実戦の指揮は子の経資、景資兄弟があたった。わき道にそれるが、この兄弟は後に反目しあうことになり、景資は兄の経資に「岩門城」（筑紫郡那珂川町）で殺されている。

原田種照・種之兄弟が六千五百騎を引き連れて防戦するも、八幡宮（箱崎宮？）裏手の新田で討ち取られている。

元軍に肥前国の松浦党数百人も討ち取られ、一般民衆も殺戮を受けたようである。豊後の大友貞親、豊前の宇都宮通房、肥後の菊池武房・詫磨頼秀も参戦している。島津久経（弟長久？）は薩摩国御家人を引き連れて、奮戦している。日向の伊東氏は宗家祐光の代官として弟木脇祐頼が一族を率いて戦っている。祐経の孫の時代である。

島津久長は父久経に従って薩摩に下向し、１２７５年には警護役を務めた。久経は１２８４年、筥崎で死去し、嫡子忠宗が家督を継承している。菊池武房の弟隆康の子三郎有隆は、その時、旗に鮮血がついたので、菊池に赤星の号を与えられ、有隆は赤星氏と称するようになった。その他、山鹿、筑後の草野、豊前の紀井、豊後の大友、戸次、臼杵、肥前の千葉、龍造寺、大村、肥後の竹崎、大矢野、西郷、葉室らが奮戦し軍功があった。

蒙古再襲来への対応

１２７５年、杜世忠が宣諭日本使として来航したが、鎌倉に送られ斬られている。元の再来襲は必至だった。幕府は、高麗征伐の軍を発することと、博多湾岸一帯に石塁を築くことの二つの対策を立てた。

１２７６年３月、幕府は少弐経資と大友頼泰に、鎮西諸国の武将を指揮して博多湾岸に防塁を築くことを命じた。高麗遠征計画は、この年の末に公表され、少弐経資を司令官に九州軍士をもって翌年の４～５月に実施すべき計画であった。しかし、二つの計画の同時遂行は、到底困難ということで、遠征計画は取り止めとなった。１２７９年、元は南宋制圧に成功した。

日本と元は政治的には敵対関係にあったが、民間貿易は行われていた。文永の役の戦いの後の１２７７年、日本商人が元に渡って、金と銅銭を換えてもらいたいと元に交渉し、認められている。

蒙古襲来・弘安の役（第二回元寇）

１２８１年（弘安の役）６月、元軍・高麗軍からなる東路軍四万博多に押し寄せたが、石築地や日本軍の奮戦によって元軍の上陸は阻まれていた。南宋の降兵を主力とする江南軍十万は出発に手まどり、７月初めに、肥前平戸で東路軍にやっと合流したのである。７月末、四千艘を超える大艦隊は、博多攻撃を伺い伊万里湾沖に移動した。ここで、いわゆる神風によって船団は壊滅的な打撃を受けたのである。

少弐経資は西方奉行として、大友頼泰は東方奉行として、諸士を率いて奮戦した。この

弘安の戦いでは、幸いに再び襲った台風で元軍は壊滅したのであった。この弘安の役において、少弐資能は、八四歳で戦傷死している。

この役では原田種照弟　種之・種房が今津で防戦している。弘安の役の功により原田種房は太宰大弐に任じられている。

龍造寺季家の孫の季時、家時等が戦っている。武藤資時は壱岐に向かった元軍を船で追って戦い、討ち死にした。龍造寺季時も討ち死にしている。ほとんどの九州の豪族が参戦した。筑前の秋月、少弐、武藤、筑後の田尻、星野、豊後の大友、志賀、野中、大野、肥前の龍造寺、大村、草野、肥後の阿蘇、相良、日向の伊東、大隅の小松、薩摩の島津氏等の名が見える。

元寇の戦後処理

１２８４年４月、幕府の責任者執権の北条時宗は三十四歳の若さでなくなった。執権になった十四歳の貞時の外祖父安達泰盛により後継者となり、「弘安の徳政」と呼ばれる政治改革が推進された。九州には、明石行宗ら三人が派遣され、博多において九州の三人の有力守護（少弐経資・大友頼泰・安達盛宗）と組んで①主要な神社の神領の回復、②名主職の保護と回復の二つの任務が与えられた。

九州千葉氏

幕府は、博多湾の警備のために御家人たちの関東への帰郷を認めなかった。千葉宗胤は１２８３（弘安６）年から１２９１（正応４）年にかけて大隅守護職に任じられ、九州に駐屯して、下総国に帰ることができなくなった。九州千葉氏初代・宗胤は肥前の小城郡北浦に館を構えることになった。祇園社（須賀神社）を勧請し、牛頭（祇園・千葉）城を築き、小城町を作る。彼の死後はその嫡男・胤貞が九州へ赴くことになる。

島津系図１

①[illegible]久―②忠時―③久経―④忠宗―⑤貞久―⑥師久
　　―⑥氏久

鎌倉の霜月騒動・九州の岩門合戦

１２８５年１１月、鎌倉では、執権貞時の命により、勢力の大きくなった外祖父一族、安達泰盛とその与党が滅ぼされるという霜月騒動が起こった。

九州でも争いが起こった。この時、泰盛の子・盛宗が肥後守護の父の代官として赴任していた。少弐景資は盛宗と組み、兄経資と戦い、敗死する。岩門合戦である。合戦の鎮定者の中に肥前の武藤盛資、綾部重幸、白石通継等がいた。これらの戦いは幕府の基盤を揺るがした。

この後、博多に鎮西談議所が置かれ、少弐経資、大友頼泰、宇都宮通房、渋谷重郷の四人が九州の訴訟処理にあたった。弘安の役の後は、蒙古襲来の危機を理由に、北条一門は九州三人衆の守護職を削り、北条一

門の守護職を増やした。博多の守備における、軍事の指揮系統（幕府、守護、惣領、一族（庶子））での支配体系は一層強くなった。守護職を削られた九州の三人衆との間に、幕府への不信感が生まれ、反北条の機運をたかまらせることになる。

宇都宮氏

宇都宮氏は関白道兼を祖とし、初代・宇都宮宗綱の子朝綱（下野初代）、信房（豊前初代）は源頼朝に仕えた。霜月騒動では、宇都宮通房は得宗方になり、安達方であった下野宇都宮氏と戦ったという。通房、頼房、冬綱（養子）の三代は筑後守護職になっている。冬綱は下野宇都宮貞綱の子である。

再度高麗の国書が渡来

１２９３年北条一門の兼時・時家が大軍を率いて、あいついで九州を目指した。前年の暮れ、高麗の国書が渡来していたのである。これを第三次征討の予告と考え、兼時・時家は少弐氏・大友氏らを指揮して防御体制を固めた。しかし、翌１２９４年正月、フビライが死去する。１２９５年元の襲来の危機がやや緩和された中で、兼時・時家は鎌倉に戻った。この二人にかわって金沢実政が鎮西探題として博多に下向した。実政は、評定衆・引付衆を設置するなどの裁判所としての機能を充実させた。

鎌倉幕府滅ぶ

二度にわたる元寇は、「元」の国力を弱めたばかりでなく、日本にもたらした影響も大きく、鎌倉幕府の寿命を縮める結果ともなった。九州の御家人達は、両役の出陣、防塁構築工事で疲弊していた。武士ばかりでなく、敵国降伏の祈祷をした神社や寺院も、幕府に対して恩賞を期待した。しかし幕府は恩賞を与えるにも領地がなく、しかも、三度目の元寇がないともいえない。防備の手を抜くことは出来なかった。

幕府は鎮西探題として、北条一族を九州へ派遣し、土着の豪族を押しのけ、肥後の守護職を与えるなど、九州の六カ国を一族で固めて露骨な独善支配となり、御家人の恨みと不信となった。さらに幕府は恩賞を打ち切り、無足御家人が続出して、「鎌倉幕府打倒」に天皇や武士が立ち上がった。

１３３１（元弘元）年には後醍醐天皇を中心とした倒幕計画は失敗し、天皇は隠岐へ流された。その後を護良親王が反幕勢力の結集に乗り出した。親王の令旨は九州でも少弐、大友、菊池らに届けられた。同年、二代目千葉胤貞は得宗・北条高時に命じられて肥前国の反乱軍を討伐している。

正慶２年（１３３３）閏年２月、後醍醐天皇が配所の隠岐を脱出して、伯耆（ほうき）の船上山に立て籠もった。この動きに呼応して西国各地で反乱が起こり、九州でも菊池武時・阿蘇惟直が鎮西探題を攻めるが、一様に挙兵するはずだった少弐貞経・大友貞宗が探題側に寝返ったために、武時は敗死をとげる。他方、激しい攻防戦の続く京都からの知ら

せを受けて、幕府は名越高家（なごえたかいえ）と足利高氏（尊氏）を大将に大軍を差し上らせた。しかし、高氏は後醍醐方に転じ、５月７日に六波羅探題が陥落。ついで５月２２日、得宗北条高時以下が自刃をとげ、鎌倉幕府が滅亡した

それから３日後、六波羅陥落の報を得た少弐・大友・島津の九州三人衆が寝返りをうち、九州の軍兵を率いて鷲尾山（愛宕山）にあった鎮西探題北条英時の城に攻撃をしかけ、これを滅ぼした。鎮西探題の滅亡を聞いた長門探題北条時直も降参し、諸国の北条氏一門の守護・地頭が次々と討たれていった。

室見川沿いの丘陵に「愛宕神社」がある。鎮西探題北条英時の「鷲尾山（愛宕山）」はこの付近にあったという。

第五部の四、東漢（やまとのあや）（倭漢）家系図（秋月氏まで）

漢高祖劉邦
光武帝（AD２５年　漢を再興）
後漢霊帝（光武帝から九代目）
献帝
⋮
阿知王　（魏の乱を避け朝鮮帯方へ逃れる、漢王から二十九代目）
都賀使主、七姓氏・十七県人を率いてAD２８９年９月備中国窪屋郡大倉谷に渡来。東漢の姓と臣の位を賜り斉蔵（大蔵）の長官に任せられ、奈良県高市郡飛鳥村桧隈に住まう。
阿多倍
東漢掬（東漢直）

- 山木　志努
  - 駒子
    - 坂上弓束（坂上連）
      - 老（大錦上　壬申功臣）
      - 大国
      - 坂上犬養
      - 苅田麻呂
      - 田村麻呂（征夷大将軍）
- 爾波伎
  - 角古　加志乃
  - 久爾
    - 古閑
      - 1.大蔵広隈（大蔵祖）
      - 2.国足（大蔵姓）
      - 3.泉（大蔵姓）
      - 4.麻呂（内蔵朝臣）（大蔵姓）
      - 5.子足（大蔵姓）
      - 6.真勝（大蔵姓）
    - 福因
      - 文成覚（文直）
    - 書県
      - 智徳（書忌寸）（壬申功臣）６７０頃

（８００頃）　　大蔵広勝（大蔵宿禰）

7.常直（大蔵姓）

（原田祖）8. 大蔵春実（大蔵朝臣・追捕使９４０年）（筑前原田に住す）

純友の乱鎮圧、太宰少弐となる

9. 種光（太宰貫首）南蛮の賊を倒す

10.種材（太宰小監）

11.種村　刀伊賊を撃つ　１０１９年

12.種弘

13.種輔または種資

14.種平または種生（保元・平治の乱では種直とともに六波羅に入り平氏として戦う）

（原田姓）

15.種直　（平清盛の家人）

（平家滅亡後筑前怡土荘へ）

種成・種国兄弟

16.種栄（益）

種照・種之（文永の役）

種之・種房（弘安の役）

17.種秀

18.種政

19.種次（継）（糸島高祖城を築く

20.種頼

種時（多々良浜の戦）

種宗（原氏へ養子入り）

種泰（二丈岳の戦い）

種親

種吉・種門・親種

弘種・興種・隆種

↓

46.信種（最後の当主）

47.嘉種

48.種長

幕末には種竜・種英が官軍と戦う。

種俊　　（以下　秋月姓）

種雄（種生の孫）、初代秋月氏（１２０３年）

筑前古処山麓に居する

種幸（秋月次郎）

種家（三代）弘安の役（元寇）に出陣、武勲をたてる（１２８１年）。（文永の役は１２７４年のこと）。

種頼（四代）元軍の再襲来に備えて、博多湾岸の石塁を構築。

種資（五代）

種貞（六代）足利尊氏との戦（多々良浜の戦）に敗れ、大宰府まで落ちのびるが、足利直義などに取り囲まれ一族郎党２０余人枕を並べて討ち死。

種高（七代）足利方の小弐頼尚と共に、宮方である菊池武光軍と筑後川を挟んで対陣する（筑後川の戦い）。

種顯（八代）

種道（九代）多々良浜合戦為宮方１３３６年、自刃。

種忠（十代）

種氏（十一代）幕府より所領安堵さる。

種照（輝）（十二代）「応仁の乱」にて、西軍の「山名宗全」に従い戦う。（１４６７－１４７７）

種朝（十三代）種月山大竜禅寺を建立する。大友義継・菊地武重の軍を古処山下に誘い寄せ、これを撃退する。

種時（十四代）大友義継と知略の和議を行い、益々兵備を厳にする。古処山城の防備を固めつつある時に、死去。

種方（十五代）叉の名を「文種」。大友義鎮ら２万の大軍に敗れて戦死（自害ともいわれている）。

種実（十六代）秋月家の再興者。秋月種方の次男。

種実　家督を「種長」に譲る（１５８５）

秋月種実「豊臣秀吉」に降伏（１５８７）。伝家の秘法、茶碗「楢柴」米二千石、金百両献上。人質「娘 16 歳」　筑前、筑後、豊前の所領返上

種長（十七代）豊臣秀吉との戦の際の大将。

実子がいなかったので家督争い起こる

高鍋藩秋月家初代　種長（秀吉に仕える）

二代　種春（家康に仕える）

三代　種信　種信(たねのぶ)は、延宝 4 年に財部を高鍋と地名を改称している。１６７６年。

四代　種政　種政は、殖産を奨励し財政の確立に尽力。

五代　種弘　種弘は､財政事情の悪化により､幕府からの 3000 両の借金で急場をしのぐ。妻・豊姫が米沢藩より。

六代　種美　妻には秋月藩主黒田長貞の娘春姫を娶る。そして長男種茂　次男上杉鷹山（治憲）

七代　種茂　藩校明倫堂を１７７８年に開いた。名君。

この次男が秋月藩主黒田長舒（ながのぶ）(1785)

八代　種徳　種茂の長男・秋月種徳(たねのり)。

九代　種任　種徳の 2 男・秋月種任(たねただ)

十代　種殷（たねとみ）

文久 3 年に軍制改革を行い海防に務めている。早くから勤王的で、薩摩藩に従い新政府軍に与し、東北地方にも転戦した。慶応 4 年正月、鳥羽戦に御所諸門の警衛を担当した。

十一代　種樹（たねたつ）

天保 4 年（1833）～明治 37 年（1904）)は高鍋藩の世子であった。

少年時代、塩谷宕陰に学び秀才の誉れ高く、小笠原明山・本多静山と合わせて、「天下の三公子」と称された。

文久 2 年学問所奉行となり、翌 3 年若年寄格を兼ね、将軍家茂の侍読となった。外様大名の世子としては異例の抜擢であった。

慶応 4 年参与となり、ついで明治天皇の侍読となった。

十二代　　種繁

１８７１年　高鍋藩は高鍋県となる

藩主家は子爵となる（１８８４）

十三代　　種英（明治子爵）

秋月種実　墓所（串間市西方　西林院）　　右「種実」中「五男　石見守種守」左「種実室」

串間市は志布志湾に近い。高鍋城のある藩中心地から相当南方である。しかし、この地域も領域であったようで、現に高鍋藩の馬「牧」の名残が都井岬に野生馬として残っている。

第六部　南北朝時代（１３３４－１３９２）

第六部の一、鎮西探題滅亡と建武の新政

鎌倉時代末にあたる寛元 4 年（1246 年）、後嵯峨天皇の退位後に天皇家は皇位継承を巡って大覚寺統と持明院統に分裂してしまった。そこで鎌倉幕府の仲介によって、大覚寺統と持明院統が交互に皇位につく事（両統迭立）が取り決められていた。

鎮西探題北条英時が鷲尾城で自害する百日ほど前に、後醍醐天皇は配所の隠岐島を脱出して、伯耆（ほうき）（鳥取）の船上山に立て籠もり、第一皇子の護良親王は吉野山に、楠木正成は千早城を構築して兵を挙げていた。

北条英時は九州の有力武士達を博多に招集した。肥後の菊池武時も招かれた一人だが、菊池武時は、このときすでに護良親王の令旨をうけて倒幕の覚悟を固めていた。少弐貞経、大友貞宗両家も同時に令旨をうけ、三者は、ひそかに盟約をかわして「探題館」を襲撃する計画を打ち合わせていた。

菊池武時は元弘３年（１３３３）３月１１日、２５０騎を従えて博多に到着し、袖の湊の沖の浜を陣屋とし、少弐・大友両家へ挙兵を促す使者を送ったが、両家はこのとき掌を返し、少弐家にいたっては使者の首をはねて探題館へ差し出している。この辺の事情は先述した通りである。

武時は大いに怒り博多の町々に火を放ち、単独で探題館へ攻め入った。攻め入ったとはいえ、せいぜい２５０騎の軍勢である。その中には武時の長男武重、次男武隆、弟の覚勝など一族が名をつらねていた。

武時は討死を覚悟し、長男武重に再起を託して肥後に帰らせ、錦旗を先頭に味方と信じた少弐・大友の軍勢や探題方と戦ったが、菊池勢のほとんどが壮烈な最期を遂げたのである。

北条英時は先述の通り３ヵ月後には九州三人衆の島津・少弐・大友に攻め滅ぼされている。

1333 年（元弘 3 年/正慶 2 年）、大覚寺統の後醍醐天皇は全国の武士に討幕の綸旨を発した。これに応えた足利高氏（当時）や新田義貞らの働きで鎌倉幕府は滅び、建武の新政と呼ばれる後醍醐天皇による親政がはじまった。

鎮西探題滅亡と同じ５月２５日、後醍醐天皇は幕府の擁立した光厳天皇（こうごん）とその年号を廃して、元の「元弘」に戻す。正慶二年は元弘三年にあたる。さらに翌年正月２９日、「建武」と改元。後醍醐天皇の画期的な改革政治は「建武の新政」と呼ばれるが、

天皇親政の世の中にしようとしたものである。

大胆な地方行政の改革にも着手し、改めて各国に国司と守護を置いた。筑前・豊前両国の守護に少弐貞経、筑後国の守護に豊前の有力武士宇都宮冬綱が任命された。また、大友・島津両氏にも、北条氏に奪われた守護職が一カ国ずつ返されている。一方、筑前・筑後・豊前の国司には、在京の実務官人である菅原在登（ありのり）・万里小路宣房・坂上明清がそれぞれ任命された。後醍醐は手足として動かせる国司を通じて、地方行政を直接的に掌握しようとかんがえたのである。

しかし、大方の支持を得る為には、建武政権の改革はあまりに大胆すぎたし、また、公家に対する速やかな報償にくらべて、命がけで戦った武士達への恩賞は遅々として進まなかった。天皇を擁護した武士達の多くは、天皇の新政や公卿による支配を望んだわけではなく、北条政権に対して元寇以来の不満と反感を抱く御家人衆たちが、天皇派に組したにすぎなかったのである。

早くも、元弘３年も暮ごろには、公家と武家の対立は危険水域に近づきつつあった。こうした政権凋落模様を見て、全国各地で北条氏の残党の蜂起が相次ぐ。

北九州では、建武元年（１３３４）正月、規矩高政・糸田貞義の反乱が起こった。高政・貞義らは鎮西探題金沢政顕（まさあき）の子で、幕府滅亡時までおのおの肥後・豊前の守護を勤め、いずれも豊前国北部（規矩郡・田川郡糸田荘）を本拠としていた。得宗被官の門司氏や山鹿氏を始め、長野氏・星野氏・問注所氏など北条氏と関係の深い武士達が反乱軍に身を投じたという。規矩郡吉田村を本領とする吉田氏は、少弐氏と同じ武藤一族であるが、惣領頼村は規矩高政に味方した。事態を重く見た建武政権は、少弐貞経・宇都宮冬網らを下向させ、鎮圧に当たらせた。この反乱が完全に収まるのは、翌年の初めのことである。

建武２年７月、北条高時の遺児時行が信濃で兵をおこし、足利軍を一掃して、鎌倉に入った。足利高氏はこれの討伐に向かい、鎌倉奪回に成功した。しかし、この反乱がきっかけとなって、同年１１月ついに尊氏が政権を離反し、長い動乱の時代に突入する。

足利尊氏は、箱根・竹の下の合戦で新田義貞を一蹴したが、１３３６（建武３）年１月、足利尊氏は北畠顕家・楠木正成との戦いに敗れて京都を放棄した。翌２月には追撃してきた楠木正成・新田義貞の軍と摂津打出・豊島河原で戦って再び敗れ、畿内から脱出して九州へと向かった。足利尊氏に千葉胤貞・相馬親胤が従軍した。

１３３６年２月、尊氏が九州に落延びてくる時、少弐氏は兵力を二分して貞経が大宰府を守り、子・頼尚が赤間関（下関）に尊氏を迎えに出た。菊池武敏はこの機会を逃さず他の豪族と語らって三千の兵で大宰府を攻撃した。少弐貞経は守りきれぬと見て大宰府の東北にある要害・有智山城に篭って戦ったが、遂に敵わず２月２９日に、一族数百人と共に討死した。息子頼尚が尊氏に忠節を尽くし天下人とする事が遺言であったという。この戦いに星野家能、秋月種貞（第六代当主）、草野永久は菊池軍に加わり参戦している。

大宰府を落とした菊池武敏の軍勢は博多へ進撃する。これには阿蘇氏、秋月氏、松浦氏など天皇方の有力武士を糾合し、その軍勢は６万余に達していたといわれる。

一方の尊氏軍は、弟直義、少弐頼尚、大友氏泰などの軍勢を合わせて千余騎、「太平記」によれば、三百騎であったともいわれ、敵味方ひどい人数のひらきであった。そして日本合戦史上、物理的に奇妙な戦い「多々良浜の合戦」が始まる。

多々良浜合戦の勝利が尊氏に開運をもたらす（１３３６）

（後代、毛利軍と大友軍の間にも多々良浜合戦がある。二者同名ではあるが、まったく別の合戦である）

３月２日、尊氏は宗像社に陣を置き宗像社から武器・馬を借り受けて出陣した。菊池軍は多々良浜という干潟の南の外れにある小川の南岸で箱崎八幡の松原を背に布陣した。一方足利軍は香椎宮を背後にした赤坂と松原の間に布陣する。正面に三百騎余、東側に少弐頼尚の五百騎余、歩兵も合わせるとそれぞれ千余・千五百余であった。尊氏は余りの兵力差に落胆し切腹を口にするが、弟直義らに止められて気を取直していたという。そして全滅を避けるためまず直義・少弐勢を先陣として出撃させた。菊池勢は正面から攻めかかるが、足利軍は歩兵が矢を射掛け、敵が怯むのを見て決死の勢いで突撃した。

菊池軍は折悪しく北風に吹き上げられた砂塵が兵達の目に入ったため動揺、一方で直義らは追風に乗る。菊池軍は豪族の寄集まりで菊池直属の兵は千人に満たなかった。菊池方の武士の中には、後醍醐政権に不満を抱き尊氏に好意を抱く者が多かったので、烏合の衆の集団として、戦闘に加わる者も多かったのである。

そういう菊池軍への風や足利軍の猛撃であるから菊池勢は浮足立った。勢いに乗った足利直義は追撃し松原を過ぎた。そこで菊池武敏は大軍に物を言わせて松原の方面と東の二方向に軍勢を分け、足利直義を挟討とうとした。直義は討死を覚悟し直垂の片袖を形見として尊氏に届けさせる。足利軍はこれを見て感嘆した。菊池軍のうちで千ほどの隊が小川を渡ろうとした際、足利軍の千葉大隅守が一騎でそれを防ごうとしたのであった。それに菊池軍が気を取られた一瞬、尊氏は自ら手勢を率いて突撃した。こうして足利軍が有利に戦いを進めていった。こうした情勢の中、菊池勢の中の松浦党らが寝返ったのである。更に直義・少弐勢が息を吹返し、菊池本隊の奮戦も空しく情勢は逆転し、宮方は敗れたのである。

この戦いに原田種時は足利方に味方するが、嫡子の原田種宗は菊池陣営に、また秋月種貞（六代）は菊池氏に味方し、秋月種貞は阿蘇氏、蒲池氏などと共に戦い敗れ、大宰府まで落ち延びるが、足利直義などに取り囲まれ、一族郎党２０余人枕を並べて討ち死している。

６万余騎の菊池勢が、たかが千余騎の足利勢に数時間で敗北したとは、信じがたい史実である。もし両軍の人数にまちがいがないとすれば、菊池方の数万騎のうち一応は顔をつられたものの、建武の新政を不満として足利氏へ好意を寄せ、ろくに戦わなかった武士が相当数あったとも考えられる。

この戦いで、阿蘇惟直・惟成・惟澄兄弟は、千葉胤貞の所領・肥前小城郡をとおって肥後に向かって逃れた。途中、千葉領の領民の攻撃にあい、防戦むなしく惟直・惟成は天山の山頂で自刃している。末弟の惟澄は傷を受けながらも、阿蘇へと帰り着いた。

３月８日、尊氏は九州の宮方勢力掃討を開始し始めた。尊氏は２０日間で九州はほぼ平定し、４月３日、上洛軍を編成して九州を出立した。

足利尊氏はその時（１３３６年４月３日）、一族の一色範氏（のりうじ）を博多に残して、鎮西大将軍を名乗らせ、全九州の軍事指揮権を与えた。これが室町幕府の九州探題の始まりであり、北条氏の鎮西探題と同質であった。

第六部の二、南北朝下で室町幕府を開く（１３３８）

足利尊氏は、多々良浜の戦いに勝利して勢力を立て直したのちの翌年に、持明院統の光厳上皇の院宣を掲げて東征する。迎え撃つ宮方は新田義貞・楠木正成が湊川の戦いで敗れ、比叡山に篭った。湊川の戦いでは原田種時が奮戦している。一方嫡子の原田種宗は帰参することが出来ず、筑後で原氏の養子となっている。尊氏は後醍醐天皇との和解を図り、三種の神器を接収し持明院統の光明天皇を擁立（北朝）した。その上で建武式目を制定し、施政方針を定め正式に幕府を開く。

後醍醐天皇は京都を脱出して吉野へ逃れ、「北朝に渡した神器は贋物であり光明天皇の皇位は正統ではない」と主張して吉野に南朝（吉野朝廷）を開き、北陸や九州など各地へ自らの皇子を奉じさせて派遣する。この時から５０年に及ぶ「南北朝動乱」の幕開けとなる。大覚寺統の「南朝」と京都の持明院統の「北朝」の対立だが、それに加えて足利幕府も「尊氏派」と弟の「直義派」に分裂し、三つ巴の政争が繰る返された。

懐良親王、九州薩摩に入る

１３３６年、後醍醐の命により懐良親王は征西将軍に任命され、１３４０年五条頼元に補佐されて九州を目指して吉野を出立した。瀬戸内海の海賊衆である熊野水軍の援助を得て伊予忽那島へ渡った。その後、宇都宮貞泰と共に九州へ向かうことになる。

１３４２年５月１日、懐良親王は九州は南九州の薩摩に入り、谷山隆信の谷山城に入った。目的は肥後入国で、頼みは当時不振の菊池氏ではなく、阿蘇惟時・惟澄であった。

１３４４年、一色範氏は宮方の筑後の妙見城の側面を攻めようとして、妹川城を攻撃し

たが、失敗し退却する。

１３４５年３月、合志幸隆に占領されていた菊池本城は菊池氏庶子武光が阿蘇（恵良）惟澄の援助を受けて回復させた。武光は南朝から肥後守に補され、事実上の菊池氏の惣領となった。

１３４７年正月以来、薩摩では谷山城に集結した宮方は、６月６日、渋谷一族の拠った東福寺城を攻めた。１９日、三州の軍勢を集めた島津貞久軍は宮方と戦ったが敗退した。

１３４８年、親王は薩摩から肥後に入り、菊池武光や阿蘇惟直に擁立されて肥後の隈部城に入り、征西府を開いたのであった。

１３４９年、足利氏の内部で、尊氏の弟直義と執事高師直の間に対立が起こった。これが九州の戦況にも大きな影響を与えた。足利尊氏の子で、弟直義の養子となっていた直冬が、北九州に下った。探題の存在を不満としていた少弐頼尚はこれを助けた。直冬は恩賞を乱発して、多くの武士を味方にしている。龍造寺家種は直冬の催促に応じて弟の家定と共に参戦している。これより九州は三分され、一色範氏を中心とした探題方（尊氏党）、少弐頼尚、大友氏泰などの直冬を中心とした佐殿方（直冬党）、懐良親王をいただく菊池武敏・武光ひきいる宮方（南朝）の間で争った。この三派の戦いは、１３５２年、足利直義が尊氏に鎌倉で殺されるまで続いた。

足利方の九州探題と九州武士の対立、加えて朝廷が絡み大混乱

九州御家人は、新しい九州探題一色範氏（のりうじ）にすさまじい反発を抱いた。特に少弐・大友・島津の三人の守護は、幕府樹立に貢献しているだけに、中央権力の統制を嫌い、大きな不満となった。ことに少弐頼尚は、一色範氏（のりうじ）を目の仇にし、貞和５年（１３４９）に足利直冬が、父の尊氏に追われて落ちてくると、喜んで迎え入れた。

これ以後、黒木、星野の調一族は、菊池方と共に宮方となって働いていた。それに対し、問注所氏は大友氏の元で尊氏方として動いた。龍造寺一族は、探題方として菊池勢と戦っている。

足利尊氏に従った少弐頼久は、筑前・豊前・肥後・対馬の守護となるほか、肥前にも軍勢催促などの権限を持った。しかし、幕府が探題を設置したので、幕府に恭順しながら探題とは対立することになった。

１３３９年、宮方（天皇方）の菊池武敏は筑後に出陣し、武家方（足利方）の一色範氏と戦った。宮方の筑後武士には松田・溝口・草野・星野・黒木・西牟田・諸冨・南条・蒲池・深沢などがあり、武家方には武藤・引地・酒見などがいた。この時、少弐資時が宮方に味方して、筑後に出陣したので、情勢がかわった。この資時は肥後御船の住人で盛経の弟資時ではないかと思われる。尊氏は大友氏泰を九州に帰し、一色範氏に協力させている。

その他、宮方（天皇方）には、日向・大隅に肝付兼重・伊東一族の木脇祐広がいた。尊氏側で戦っている宗家の伊東祐持は代官として小山田氏を都於郡に派遣した。現地では先に下向していた木脇伊東氏一族の祐広や田島伊東氏の祐貞らが宮方にいた。前年の１３３５年１２月、日向では足利方の土持宣栄と宮方の伊東祐広の間で戦いが起こっていた。この頃の日向守護職は細川頼春が補任されている。１３３６年３月、足利氏は島津荘の維持に畠山直顕を派遣していたのであった。

１３３７年２月、寺尾野城（菊池市）で挙兵、以後益城郡を中心に、菊池と建武政権によって八代荘の地頭職を得て活動していた名和氏と結んでいた恵良（阿蘇）惟澄の活動も活発化した。惟澄は４月１９日には武重軍と合流し犬塚原（御船町）で一色軍と戦った。

九州千葉氏の誕生

１３３６（建武３）年１０月、千葉胤貞は足利方として南朝方の従兄弟・千葉介貞胤の居城である千葉亥鼻城（今の千葉市内）を攻撃した。その後、斯波高経に従って越前・木の芽峠において宿敵・貞胤を攻めて降伏させた。千葉胤貞は貞胤を伴って千葉に向かう途中、三河において病に倒れ、１１月１９日、四十九歳で没した。

九州千葉氏四代胤泰は胤貞の実弟である。兄胤貞の養子であった。下総に伝来された所領は、胤泰の弟胤継系の千葉氏（千田氏）が継承していった。胤泰以降の九州千葉氏は下総千葉氏とは完全に独立し、九州に新たな地盤を築いていったのである。

胤泰は河上神社の大宮司職に就任していた。１３４０（興国元）年１月１８日、肥前一宮である河上神社に田地を寄進した。その時の「興国」元号は南朝の元号である。正平６（１３５１）年１２月には、胤泰はふたたび尊氏方として一色範氏の軍と合流し戦っている。尊氏と敵対する足利直冬（尊氏の実子で直義の養子）が小城郡へ攻め寄せると、岩部・金原・中村など、千田庄から引き連れてきたと思われる一族を率いて、松浦氏と合戦し、これを撃ち破った。一色範氏はこの功績を賞し、１２月２０日に感状を発給していた。河上社への寄進状にある「暦応２２（１３５９）年正月１０日」の「暦応」は北朝元号である。胤泰は南朝と北朝を渡っていたと思われる。

第六部の三、観応の擾乱と南朝勢力の衰微

南朝方は名和長年・結城親光・千種忠顕のほか、北畠顕家・新田義貞らが 1338 年（延元 3 年/暦応元年）までに次々と戦死し、軍事的に北朝方が圧倒的に優位に立つ。1348 年（正平 3 年/貞和 4 年）には四條畷の戦いで楠木正成の子楠木正行・楠木正時兄弟が足利方の高師直に討たれ、吉野行宮が陥落して後村上天皇ら南朝一行は賀名生（奈良県五條市）へ逃れ、衰勢は覆い隠せなくなる。しかしその後、尊氏が政務を任せていた弟の足利直義と足利家の執事の高師直の対立が表面化し、観応年間には観応の擾乱（１３５０）とよばれる

幕府の内紛が起こる。政争に敗れた直義は南朝に帰順し、尊氏の子で直義の養子になっていた足利直冬も養父に従い九州へ逃れて戦う。山名時氏など守護の一部も南朝に属して戦い、京都争奪戦が繰り広げられるなど南朝は息を吹き返すことになる。後村上天皇は南朝方の住吉大社の宮司家である津守氏の住之江殿（正印殿）に移り、そこを住吉行宮（大阪市住吉区）とする。

1351 年（正平 6 年/観応 2 年）には、尊氏が直義派に対抗するために一時的に南朝に降伏し、年号を南朝の「正平」に統一する「正平一統」が成立した。これにより、尊氏は征夷大将軍を解任された。南朝はこの機に乗じて京都へ進攻して足利義詮を追い、京都を占拠して神器も接収する。義詮は北朝年号を復活させ、再び京都を奪還するが、南朝は撤退する際に光厳・光明両上皇と、天皇を退位した直後の崇光上皇（光厳の皇子）を賀名生へ連れ去った。このため北朝は、光厳の皇子で崇光の弟の後光厳天皇を神器無しで即位させ、併せて公武の官位を復旧させ、尊氏も征夷大将軍に復帰した。

南朝の北畠親房は関東地方で南朝勢力の結集を図り、篭城した常陸国小田城にて南朝の正統性を示す『神皇正統記』を執筆する。1339 年（延元 4 年/暦応 2 年）に後醍醐天皇が死去すると親房が南朝の指導的人物となるが、親房が 1354 年（正平 9 年/文和 3 年）に死去すると南朝はまた衰微し、幕府内での抗争で失脚した細川清氏が楠木正儀らと南朝に帰順して一時は京都を占拠するものの 1367 年（正平 22 年/貞治 6 年）に敗れ、以降は大規模な南朝の攻勢もなくなり、足利義詮時代には大内弘世や山名時氏なども帰服する。義詮の死後は、足利幕府は幼い将軍足利義満を補佐した管領細川頼之の指導により、南朝方の中心的武将であった楠木正儀（正成の子）を帰順させるなど対南朝工作を行い、幕府体制を確立する。

懐良親王、五条、菊池等と共に筑後国府に入る。

１３５１年、懐良親王は、五条・菊池・恵良勢らを促して北上し、筑後溝口城を破り、瀬高庄を経て筑後国府（久留米）に入った。

１３５２年、懐良親王は肥後から肥前方面を攻略、さらに日田から玖珠・由布を経て、豊後国府を落とした。速見郡・豊前宇佐郡を経て筑前植木（直方市）から博多へ侵入した。この時、豊後の国・守護大友氏時（氏泰弟）も宇佐宮大宮司も降伏する。

１３５２年１１月、守護代の一色頼行が肥前の国府（小城）を出発して太宰府に帰るところであった。そして、武家方を催促して筑前に討ち入ったのである。足利直冬・少弐頼尚は観音寺で防戦したが、打ち負けて浦の城へ退いた。

針摺原の戦

１３５３年、守護代の一色軍は、少弐頼尚の太宰府・浦の城に猛攻を加えたので、城兵は支えることが出来ず、直冬・頼尚は自殺する覚悟を決めていた。その頃、菊池武光は高

良山に陣取っていた。このことを聞きつけて急いで浦の城へ応援に駆けつけ、守護代の軍勢を追い払って直冬・頼尚たちを助けたのである。この時、少弐頼尚と共に、足利直冬は宮方に降りている。

太宰府南方の探題方との戦いを針摺原の戦という。宮方として草野孫次郎永幸、木屋弾正行実等これに従った。この戦いで、少弐頼尚は菊池武光に救ってもらった礼に『七代までも弓を引くまじ』の誓約書を出した。しかし、少弐頼尚は数年後には約束を破り、菊池氏と戦っている。同年１０月、一色範氏は長門に遁走した。

１３５５（正平１０）年８月、懐良親王が指揮する南朝軍に一色範氏は大敗を喫し、中国地方へ退却を余儀なくされ、九州は南朝勢力が制圧することになった。範氏は二十年に及ぶ九州経営を放棄して京都に帰った。親王は肥前討伐のために出征して肥前国府（小城）に在陣した。

１３５７年、少弐頼尚は妙見城に星野実忠と謀って、探題方の一色・大友軍と戦っている。

南九州では島津氏の支配領域が拡大する

１３５７年、大隅では島津貞久と畠山直顕の二派に分かれて戦っていた。貞久は畠山を倒そうと宮方の三条泰季に降りる。薩隅日の三州はほとんど宮方の勢力に入ることになった。

島津貞久の兄弟から多くの庶子が出て、南北朝戦乱の時代に島津一族は支配領域を拡大した。島津庶家は守護に従った。守護島津氏は直轄領を設定し、島津庶家を城主に任命し、被官化した国人を地頭として被官の組織化を行った。地頭は一城を与えられた城持であった。

大友氏時、北朝方となり高崎山に籠る

１３５８年、宮方に降っていた大友氏時はまもなく離反して、高崎山に籠った。同年、足利尊氏死す。

同年、北朝方の厚東義武は南朝方に立つ大内弘世の攻撃を受け、豊前国に敗走した。九州で南朝方として再起をはかるが衰退した。周防国では、大内氏は勢力を拡大していった。

１３５９年、親王・菊池武光は筑後から日田・玖珠を経て高崎山を囲み攻撃したが、攻略できなかった。少弐頼尚が肥前で挙兵すると聞いて筑後に急ぎ戻った。

第六部の四、南北朝合一まで

九州では、多々良浜の戦いで足利方に敗れた菊池氏などの南朝勢力と、尊氏が残した一色範氏や仁木義長などの勢力が争いを続けていた。南朝勢力を強化するために、後醍醐天

皇の皇子である懐良親王が征西将軍として派遣され、筑後川の戦い（大保原の戦い）では、南朝方の懐良親王、菊池武光、赤星武貫、宇都宮貞久、草野永幸らと北朝方の少弐頼尚、少弐直資の父子、大友氏時、城井冬綱ら両軍合わせて約 10 万人が戦ったとされる。この戦いに敗れた北朝方は大宰府に逃れ、九州はこの後 10 年ほど南朝の支配下に入ることとなった。

また観応の擾乱が起こると足利直冬が加わり、三勢力が抗争する鼎立状態となる。この頃、朝鮮半島や中国の沿岸などで倭寇（前期倭寇と呼ばれる）と呼ばれる海上集団が活動し始めており、懐良親王は倭寇の取り締まりを条件に明朝から冊封を受け、「日本国王」としての権威で勢力を強める。室町幕府は今川貞世を九州へ派遣して南朝勢力を鎮圧し、直冬も幕府に屈服したため、足利義満の代には九州も幕府の支配するところとなった。その後、足利義満が新たに冊封されて「日本国王」となる。

弘和/永徳・元中/至徳年間に入ると、南朝は動乱初期からその支えとして活躍してきた懐良親王、北畠顕能、宗良親王の相次ぐ死と、対北朝強硬路線を通していた長慶天皇の譲位により、衰退を極める事となったが、明徳年間の足利義満による相次ぐ有力守護大名勢力削減により、北朝に抵抗する術を殆ど失うようになる。このような情勢の中で 1392 年（元中 9 年/明徳 3 年）、足利義満の斡旋で、大覚寺統と持明院統の両統迭立と、全国の国衙領を大覚寺統の所有とすることを条件に、南朝の後亀山天皇が北朝の後小松天皇に三種の神器を渡し、南北朝が合体した（明徳の和談）。

懐良親王

後醍醐天皇の皇子である。母は二条為道の娘。南北朝時代、南朝の征西大将軍であったことから征西将軍宮（せいせいしょうぐんのみや）と呼ばれる。肥後国隈府（熊本県菊池市）を拠点に征西府の勢力を広げ、九州における南朝方の全盛期を築いた。

建武の新政が崩壊した後、後醍醐天皇は各地に自分の皇子を派遣し、味方の勢力を築こうと考え、延元元年/建武 3 年（1336 年）（時期については諸説あり）にまだ幼い懐良親王を征西大将軍に任命し、九州に向かわせることにした。親王は五条頼元らに補佐されて四国伊予国忽那島（愛媛県松山市）へ渡り、瀬戸内海の海賊衆である熊野水軍の援助を得て数年間滞在した。

その後、興国 2 年（1341 年）頃に薩摩に上陸。谷山城にあって北朝・足利幕府方の島津氏と対峙しつつ九州の諸豪族の勧誘に努める。ようやく肥後の菊池武光や阿蘇惟直を味方につけ、正平 3 年（1348 年）に隈府城に入って征西府を開き、九州経略を開始した。この頃、足利幕府は博多に鎮西総大将として一色範氏、仁木義長らを置いており、これらと攻防を繰り返した。

正平 5 年（1350 年）、観応の擾乱と呼ばれる幕府の内紛で将軍足利尊氏とその弟足利直義が争うと、直義の養子足利直冬が九州へ入る。筑前の少弐頼尚がこれを支援し、

九州は幕府、直冬、南朝 3 勢力の鼎立状態となる。しかし、正平 7 年/文和元年（1352 年）に直義が殺害されると、直冬は中国に去った。これを機に一色範氏は少弐頼尚を攻めたが、頼尚に支援を求められた菊池武光は針摺原の戦い（福岡県太宰府市）で一色軍に大勝する。さらに懐良親王は菊池・少弐軍を率いて豊後の大友氏泰を破り、一色範氏は九州から逃れた。

一色範氏が去った後、少弐頼尚が幕府方に転じたため、菊池武光、赤星武貫、宇都宮貞久、草野永幸ら南朝方は正平 14 年/延文 4 年（1359 年）の筑後川の戦い（大保原の戦い、福岡県小郡市）でこれを破り、正平 16 年（1361 年）には九州の拠点である大宰府を制圧する。

幕府は二代将軍足利義詮の代に斯波氏経、渋川義行を九州探題に任命するが九州制圧は進まず、正平 22/貞治 6 年（1367 年）には幼い三代将軍足利義満を補佐した管領細川頼之が今川貞世（了俊）を九州探題に任命して派遣する。

明の太祖がこの頃北九州で活動していた倭寇と呼ばれる海上勢力の鎮圧を要求する国書を懐良親王に送ると、懐良親王ははじめ断るものの、後に臣従して「日本国王良懐」（『太祖実録』の記述による）として冊封を受け、中央では既に南朝勢力は衰微していたものの、懐良親王は明の権威と勢力を背景に独自に九州に南朝勢力を築く。

その後は今川貞世（了俊）に大宰府・博多を追われ、足利直冬も幕府に屈服したため九州は平定される。懐良親王は征西将軍の職を良成親王（後村上天皇皇子）に譲り筑後矢部で病没したと伝えられる。

また、懐良親王が「良懐」として明と冊封関係を結んでしまったため、義満が日明貿易（勘合貿易）を開始する際に新たに建文帝から冊封をうけ「日本国王」となるまでは、北朝や薩摩の島津氏なども明に使節を送る場合は「良懐」の名義を用いねばならないという事態も発生した。その足利義満も、当初は明国から、「良懐と日本の国王位を争っている持明の臣下」と看做されて、外交関係を結ぶ相手と認識されず、苦労している。

懐良親王軍４万と大友軍６万が小郡市で戦っていた頃、親王が宮の陣（西鉄宮の陣駅横）に手植えされた梅が「将軍梅」として神社境内に残っている。

筑後川の戦い（大保原の合戦）

１３５９年、少弐頼尚は、これまで同盟していた宮方に反抗し、菊地氏の豊後出撃の虚をねらい、星野氏の妙見城を攻略した。菊池武光は、すぐに少弐氏を討とうと、筑前に攻め入る。この７月に足利方と宮方の戦いが起った。懐良親王、菊池武光、筑後の宇都宮貞久ら南朝勢約四万は筑後川の北岸に陣を張り、大宰府を本拠とする北朝・足利勢の少弐頼尚、少弐直資の父子、大友氏時、豊前宇都宮冬綱、秋月種高（第七代当主）ら約六万と対峙し、両軍合わせて約十万の大軍が戦った。（大保原は、今の小郡市の大保付近である）

この時、少弐頼尚六十六歳というから、戦いの指揮は子の少弐直資、冬資がとっていたのであろう。嫡子直資はこの戦いで討ち死に、宮方の懐良親王や菊池武光も負傷し、両軍合わせて二万六千人余が討死にしたといわれる。

この戦いで、懐良親王に従ったのが、菊池氏の他に筑後の五条頼元、木屋行実（黒木氏）、星野忠実（実忠）、赤星氏、溝口氏、草野氏等の武将がいた。この年から翌年にかけて菊池氏は肥前の神崎に出陣して、少弐方の千葉、高木、龍造寺氏と戦っている。この戦いで、宇都宮氏は二つに分かれて戦っている。豊前・宇都宮の養子冬綱は幕府方で、実の弟で、下野・宇都宮惣領の公綱、肥後宇都宮隆房及び、後に筑後の蒲池家を継ぐ久憲（久則）の父懐久や、祖父貞久は宮方で戦い討ち死にしている。龍造寺一族は少弐方に従って菊池軍と戦った。

この筑後川の戦いで宮方は少弐軍を破り、太宰府を占領した。

菊池武光と太刀洗

この戦いで、菊池武光は矢を蒙ること毛虫の如しであったという。顔や首は真っ赤で血で塗られていたが、鎧が丈夫で、矢は一本も貫かず、馬が倒れると他の馬に乗り換えての奮戦で、縦横に斬りまくった。敵勢はたちまち総崩れて少弐方は総敗軍となった。武光は味方の損害の大なるを見、引き返し、山隈原を流れる小川に血刀を洗い（現存する太刀洗川）、諸軍をまとめて高良山に帰陣し、ついで隈府に凱旋した。

懐良親王を擁立した菊池一族は、中央で活躍した楠木・新田一族に劣らぬ活躍を九州の地で果たしている。とくに菊池武光はその誉れがたかく、筑前の主な合戦だけでも次のようなものがある。

一、「月隈・金隈の戦い」観応２年（１３５１）板付空港付近
　　足利直冬・一色範氏との対戦（敗戦）

二、「筑後川の合戦」正平１４年（１３５９）福岡県三井郡大刀洗町
　　少弐頼尚と対戦。懐良親王自ら戦闘に加わり負傷。（大勝）

三、「油山・青柳の戦い」正平１６年（１３６１）福岡市城南区
少弐頼尚と対戦　（勝利）
四、「長者原の合戦」正平１７年（１３６２）福岡市長者原
九州探題斯波氏経と少弐冬資・松浦党との対戦　（勝利）

これらの合戦によって懐良親王はついに大宰府を制圧し、三代将軍足利義満が今川了俊（足利氏の支流、今川義元の同系）を九州探題に下向させるまでの１２年間、九州では「南朝」の全盛時代が続いた。

武光は、豊後の大友氏も制圧し、九州統一をほぼ完成したのであるが、懐良親王にとっての、最終目標は東上であった。

正平２０年（１３６５）、四国の河野氏が帰順し、これを契機に、豊後から長府に上陸を計ったが、中国守護の大内義弘が瀬戸内海の海賊を結集して逆襲し、水軍に不慣れな菊池勢は大敗し急速に衰えていった。

なお、菊池氏の始祖は平安時代に大宰府に仕えて藤原氏を名乗っているが、京都から来て土着したのか、あるいは古代鞠智族（くくちぞく）の一員が藤原氏を名乗るようになったのかは謎である。

今川貞世（了俊）が九州探題に任命される

１３６７年、足利義詮は病のため、政務を義満に譲った。幕府は二代将軍足利義詮の代に斯波氏経、渋川義行を九州探題に任命するが九州制圧は進まなかったのである。三代将軍足利義満を補佐した管領細川頼之は名将といわれた今川貞世（了俊）を１３７１年、九州探題に任命し、大内義弘にその援助をさせたのである。今川了俊は九州探題の任とともに、備後・安芸国の守護にも任じられ、大内氏らの西国の武将の力を結集し九州へ乗り込んだ。了俊任命の直前は、全国的に幕府勢力が南朝方を圧倒していた。九州では全く逆で、したがって九州平定なくして統一政権はなかった。

今川了俊は子息の今川義範を豊後に、弟・今川仲秋を肥前国松浦に派遣した。仲秋が上陸した肥前松浦では、彼を迎える肥前の武将が集まった。松浦党の伊万里貞・山代栄ほか、高木家直、龍造寺家是・家治父子、安富直安、江上四郎らが仲秋に従っていた。今川仲秋は四代目千葉胤泰の娘を妻としている。千葉胤泰は仲秋の指揮下にあったのであろう。今川貞世（了俊）は大軍を率いて豊後国・門司に陣を張って太宰府の将軍府と相対した。

今川了俊の子息義範は豊後で足場を固め、大友一族の田原氏能とともに高崎山に入った。対する菊池武光は、武政を豊後に出陣させた。後に武光も出陣し、共に高崎山城を攻めた。大友家では今川了俊が豊後に入ると、大友惣領家の氏継は、北朝勢力の孤立により、突然南朝方にはしった。兄に代わり、了俊の下向を国人衆に伝えていた親世は、大友家の家督を得ることになった。

幕府方、南朝方の太宰征西府を破る

１３７２（応安５）年２月１３日、今川仲秋は肥前に攻め込んできた南朝方の菊池武政を攻め滅ぼした。８月、仲秋は菊池武安の軍勢と筑前で戦い、これを撃ち破って了俊と合流した。一方、今川了俊も８月１２日、太宰府を攻め落とし、懐良親王・菊池武光は筑後国高良山に下った。同年１１月、宮方の総大将・菊池武光は病没する。（７３年病没説あり）１３７３年８月、豊後では、宮方についた大友氏継は大野郡で挙兵した。

宮方、菊池城まで下がる

１３７４年５月、武光の子・武政は三井郡北野で戦死し、父子が相次いで没する。

同年６月、肥前に陣をとっていた今川了俊は、筑後国へ発向し、川崎氏が籠もる生駒野城を攻め落とした。

同年８月、武光の孫でわずか十二歳の菊池加賀丸（武朝）が懐良親王を奉じて、了俊の攻撃に対抗したが、三井郡福童原（小郡市）で破れる。宮方は高良山でも耐えきれず、援兵もなく、菊池氏の本拠地・肥後国菊池城へ逃れている。

同年、今川了俊は八女東部に兵を出し、山門郡蒲池に陣を移し、宇都宮貞久の城を攻め落とした。また、四條野の高城、木屋の猫尾城、椿原の高牟礼城を攻めて、陥落させ、星野実好（実能）の城も危うくさせた。

幕府方の論功による領土安堵が行われる

これらの戦いによって、今川了俊による論功が行われた。千葉介胤泰には小城郡を安堵した。そのほか、豊後には大友氏継を、筑後・肥前の両国には、少弐冬資を、日向には伊東祐熙を、周防・長門などに加えた豊前には、大内義弘を、肥前のうち佐嘉・杵島・高来三郡には、仲秋を、薩摩には、島津氏久を安堵している。

今川了俊、肥後水島城へ入る

１３７５年、懐良親王は菊池加賀丸（武朝）との意見の不一致もあって、良成親王に譲って引退し、筑後黒木に迎えられ、矢部にはいっている。同年３月、菊地氏を攻めるために、今川了俊は肥後山鹿に入った。降伏した筑後の諸将は旧領地返還安堵の誘降策を受け、了俊に従った。

同年７月１３日、了俊は、菊池の外城の一つ水島城を落とし肥後水島の陣に入った。この頃、肥後南部では、人吉の相良は了俊に協力していたが、八代の名和氏、宇土の、宇土氏らは征西府であった。御船城には阿蘇惟武が兵を入れていた。了俊はこれらの勢力に対して、阿蘇惟村に出撃するように促していた。

少弐冬資の死

１３７４年、今川了俊は八女東部に兵を出し、四條野の高城、木屋の猫尾城、椿原の高

牟礼城を攻めて、陥落させた。１３７５年、懐良親王は良成親王に譲って引退し、筑後矢部にはいっている。

今川了俊は菊池氏を攻めるために肥後水島の陣に大友、島津、少弐の来援を求めた。探題の存在を喜ばない少弐冬資は参陣しなかった。了俊が島津氏久に少弐の来会をすすめさせたので、冬資は氏久の顔を立てて参陣した。ようやく着陣した冬資と面談の宴を開いた今川了俊は、酒宴の最中、弟仲秋に命じて少弐冬資を不意打ちにして切り殺した。８月２６日のことであった。

島津氏久は今川了俊の陣に出かけ弁明を黙って聞き終え、「確かに聞きとめた」とだけ言って、自陣へ帰り、「少弐冬資がこういうことになっては、九州三人衆は面目を失った。・・」という手紙を了俊に届けると陣を払って引き揚げてしまった。この時点では、了俊は島津氏久の反応に驚いて、慌てて、筑後守護職を与えるから、もう一度出陣せよ、と慰撫に努めている。しかし、氏久は動じなかった。島津氏久は１３８７年、亡くなるまで、了俊に敵対した。

この水島の陣を口実に、了俊は島津の大隅・薩摩の守護も奪い、九州の守護は豊後をのぞき探題が独占してしまった。了俊は弟仲秋ら一族をその代官として派遣し、筑前と肥前は直接経営にあたった。南九州には子の満範を派遣し、薩摩の渋谷氏を味方にし、都城の島津一族の北郷義久らを攻撃した。南九州では伊東・土持・相良・和田・高木・肝付・野辺氏らが幕府の勢力下に入った。了俊は、畠山直顕、島津氏久、島津伊久が頼れなくなったので、日薩隅三ヵ国に代官として満範を送ったのであった。

今川軍、良成親王のいる菊池城を攻める

１３７９年に、大内氏の豊前守護職を回復させた。同年６月から今川勢は菊池を攻め始めた。８月には今川仲秋が亀尾城に入り攻撃をしたが、小規模な兵力で行った作戦であったようで、菊池への包囲網を縮めるには至らなかった。

１３８０年、今川了俊が亀尾城に入った。包囲して、征西府方の食糧欠乏をねらう長期戦に出た。その間、阿蘇惟政らが菊池に入り、征西軍も増強していた。この年、了俊は水島城を攻め、守将の菊池武照を戦死させている。

１３８１年４月、肥前勢の他、大友親世、大内義弘の援軍が入り、今川了俊は総攻撃に入った。木野城、吾平（菊鹿町）の砦も落ちた。四月二六日には、菊池本城の寺尾野城も落ち、本城は孤立の状態に追い込まれた。良成親王は山中の染土城に移り、最後の攻防戦に備えた。了俊は菊池城を激戦のすえ占拠した。菊池武朝は本城から脱出し、良成親王も染土城から脱出し、宇土に転じている。

１３８７年、島津氏久が亡くなると、子の元久には大隅守護職を与え、今津了俊は島津氏の協力を求めた。

懐良親王は星野御所で亡くなる

１３８３年、懐良親王は星野御所で亡くなられた。黒木氏が最後まで、親王を御守りしたのは笠原・星野・北河内の界にある高牟礼城であった。この城の北の麓、今の星野村小野にこの御所はあったというのがこの地方に残る古くからの伝承である。御遺体は、大円寺近くの空谷山（大明神山）に埋葬されたとのことである。（注；懐良親王逝去の伝えは三ヶ所ある。一番有力なのがこの星野村玉水山大円寺近くの大明神山で、次が久留米市山本の龍護山千光寺、そして八代市悟真寺である。それぞれに廟所があるが、最後の悟真寺が宮内庁管轄となっている）

１３９０年秋、良成親王と菊池武朝は、八代の名和氏の居城に入った。この間、親王を守ったのは武朝の他に、河尻広覚、阿蘇惟政であった。今川了俊は宇土近くの如来寺と本営を移して、益城地域を転戦しながら、ゆっくりと八代に迫った。

１３９１年７月、征西府は停戦を申し入れた。８月、肥後八代城は落ち、名和顕興、良成親王も探題方に降ったので、八代古麓において両軍は停戦した。その後、良成親王は木屋行実らに迎えられ矢部高屋城に移り、戦いは継続された。

〔良成親王の詩〕

知るやいかに世を秋風の吹くからに　露もとまらぬわが心かな

日にそへて遁れむとのみ思う身に　いとど憂世の事しげきかな

親王の贈歌に対して、京にいる兄の宗良親王は

とにかくに道ある君が御代ならば　事繁くともたれか惑はむ

草も木も靡くとぞ聞くこの頃の　世を秋風と嘆かざらなむ

という二首を返送され、弟宮を激励された。

同年に、幕府方の大友軍は、津江・矢部に進入し、激戦の後、宮方の五条良量、木屋行実らに撃退された。肥前の龍造寺是家の子家治は了俊の子貞臣から若狭守官途推挙状を得ている。今川了俊は九州全土をほぼ制圧したのであった。

南北朝合一なり、今川了俊探題職罷免

１３９２年、南北朝合一がなり、１３９５年に、今川了俊が探題職を罷免された。大内義弘等が了俊を失脚させるために将軍義満に讒言したためと言われている。了俊は「難太平記」で、大内義弘・大友親世・今川了俊の反幕府戦線の提案に応じなかったのを恨んで、失脚させたのだと述べている。

大友親世と島津伊久は了俊解任の知らせを受けて、喜び合った。その書状の中で、少弐・菊池・千葉はさぞ失望したであろうと書いていた。

渋川満頼、九州探題となって下向

１３９５年、大友親世の兵が筑後矢部を襲い、五条頼治らが撃退したと言われる。これ以後、良成親王の消息が伝えられていない。

１３９６年、渋川満頼氏が九州探題となって下向してきた。肥前は探題が守護を兼務していた。

後任の探題職を望んでいた大内義弘は大友氏や今川了俊に対して連合を持ちかけるが、了俊は拒絶。守護職としての駿河統治に従事する。

１３９９年１０月、有力大名となった大内義弘は将軍義満から圧力を受け、堺で反乱を起こし、１２月に敗死した。

第七部、室町時代（１３３８－１４６６）

（室町時代の中に南北朝時代が含まれ、両者がダブっているため、以下では１３９２年の南北朝統一後のみを対象とする。室町時代の足利将軍は、全部で十五代（人）である）

第一期（１３３８－１３６７）

初代尊氏　　優柔不断で一族を抑えられなかった

二代義詮　　幼将軍義満に名伯楽を遺した

第二期（１３６８－１３９４）

三代義満　　「日本国王」を名乗った最強の独裁者

第三期（１３９４－１４２３）

四代義持　　派手好みの父親に反対ばかりした

第四期（１４２３－１４４３）

五代義量　　十五歳で酒乱を諌められた

六代義教　　恐怖政治で暗殺された

七代義勝　　十歳で夭折したお子様将軍

第五期（１４４９―１４８９）

八代義政　　将軍を早く辞めたかった文化人

九代義尚　　華麗な武者行列が最後の晴れ舞台だった

第六期（１４９０－１５４６）

十代義稙（材）　全国各地を流れ歩いた

十一代義澄　　伊豆で生まれ近江で死んだ

十二代義晴　　信長の父と同じ年

第七期（１５４６－１５７３）

十三代義輝　　剣豪の腕前を実践して討ち死にした

十四代義栄　　京の都に入ったことのない哀れな将軍

十五代義昭　　「准后」になった意外にしたたか

第七部の一、室町時代の政治の仕組み（守護制度について）

守護は、鎌倉幕府・室町幕府が置いた武家の職制で、国単位で設置された軍事指揮官・行政官である。令外官である追捕使が守護の原型であって、後白河上皇が鎌倉殿へ守護・地頭の設置を認めたことによって、幕府の職制に組み込まれていった。将軍により任命さ

れ、設立当時の主な任務は、在国の地頭の監督であった。鎌倉時代は守護人奉行といい、室町時代には守護職といった。

制度としては室町幕府滅亡後、幕藩体制成立により守護が置かれなくなり守護制度が自然消滅するまで続いた。

鎌倉時代の守護は親から子への世襲は比較的少なかった。しかし、室町時代、特に三代将軍義満より後は、だいたい世襲になっていったので、腰をすえてかなりしっかりした領国作りをすることが出来るようになり、守護大名といった呼び方もされるようになった。

ただ、長子相続が確立されておらず、分国ごとに相続されることも多かった。このため、頻繁に相続争いが起こり、その裁定は幕府が行った。それが、将軍が守護たちを制御する権力の源泉でもあった。しかも、守護たちは原則として京都の幕府か、関東の場合は鎌倉公方のもとに参勤交代どころか常駐していた。

室町時代は戦乱が絶えず、足利幕府は不安定で力がなかったかのように見えるが、実は、武士や荘園の領主達が争いを起こすからこそ権威を示す機会があったともいえる。

守護が京都にあって現地に赴任しなかったことと、領国が、飛び地になっていることもあったことから、地方の統治は守護代などに任されることが多かった。戦国時代になって幕府の力が衰えると、守護の力も弱まり、守護代が領国をのっとるということもあった。尾張の織田、越後の長尾、美濃の斉藤などはいずれも守護代出身である。

第七部の二、北部九州への大内氏の進出と博多の繁栄

南朝勢力をほぼ一掃することに成功した九州探題今川了俊は、さらに少弐氏らの守護勢力を圧倒して、豊後国をのぞき、ほぼ九州全域を直接的に支配するようになった。しかし、この了俊の強大化を警戒した将軍足利義満は、南北朝合一から３年後の応永２年（１３９５）７月、突如これを解任し、同じく足利氏一門の渋川満頼（みつより）を新しい探題として送り込んできた。九州探題がまがりなりにも九州政治史の中心的な役割を担うのは、渋川満頼・義俊父子が探題職をつとめた１４２０年代が最後で、その後はまったく有名無実化してしまう。

応永３年４月（１３９６）、探題渋川満頼が博多に到着した。室町期に入っても、博多を本拠とする九州探題と従来勢力少弐氏の関連が難しいのはかわりない。筑前国内では、守護少弐氏の領国支配が進展していたために、探題の勢力はあまり活発ではなかった。応永３年、少弐満貞が肥後の菊池兼朝と組んで探題渋川氏を撃ち破った。これを見た幕府は、大内盛見をくだして鎮定にあたらせた。この経過によって九州探題は名ばかりの存在となり、筑前支配を巡る争いの主な構図は、少弐氏と大内氏の対立関係へと移っていった。

国内最大の貿易都市博多を抱える筑前国を支配することは、外交貿易の面で主導権を握

ることを意味する。博多・筑前国のもつ重要性は、タダでさえ激しい少弐氏対大内氏の抗争の図式に、さらに中央・近隣の諸勢力を呼び込み、筑前国の政治情勢をいっそう複雑なものにした。

１３９７年、新探題渋川満頼は大友親世、大内義弘と共に、幕府の命により、少弐貞頼、菊池武朝を破り、太宰府を占領した。同年、将軍足利義満が引退すると九州では少弐・菊池は兵を挙げた。しかし、大内氏の勢力により筑前守護の少弐氏は肥前に押し込められたのである。少弐貞頼は龍造寺家治の子康秀を頼りにした。１３９８年、渋川満頼は小城で千葉氏及び松浦党等と合戦し、翌９９年には神崎郡で戦い、綾部城にはいる。

大内氏の北九州進出は、南北朝末期に大内義弘が南朝勢力の打倒に活躍した功績によって豊前国守護に補任されたことから始まっている。次第に力をつけていくが、足利義満は巨大化する大内氏を許さないようになっていった。これに不満を持った大内義弘は鎌倉公方満兼と結び、１３９９年幕府の軍勢と戦う。これが応永の乱で、大内義弘自身は和泉の堺で敗死する。この応永の乱で大内氏は一時期守護職を失うことになる。ところが、この後が奇怪である。

将軍義持は大内氏を継いだ大内盛見を厚遇するようになり、再び１４０３年豊前国の守護職を与えた。幕府は一方で探題（渋川）が独立勢力として強大になることを好まなかったのである。その一方で、探題渋川義俊は反対に大内氏の力を借りて九州を勢力下に治めたかった。ところがドッコイ大内盛見は探題渋川氏を傀儡として筑前の実質支配権をねらっていたのである。

このような経緯で、豊前では大内盛見（もりはる）が守護職を回復し、代々大内氏が世襲していくことになる。このため大内氏と豊前の武士は深いつながりをもつようになり、弘治３年（１５５７）の滅亡まで、大内氏による豊前国支配が続いた。

（注）大内氏略系図

弘世（24）― 義弘（25）― 盛見（26）― 持世（27）― 教弘（28）― 政弘（29）― 義興（30）― 義隆（31）― 義長（32）

なお、大友氏との血縁関係は次の通り。

（30）義興┬（31）義隆 ―（32）義長（大友宗麟の弟）
　　└ 女（大友義鑑室）― 大友宗麟

豊前国のもともとの地勢力は大友氏である。守護大名大友氏は、筑前の石築地（いしついじ）（元寇防塁）の警備担当地域である香椎方面をはじめ、倒幕の恩賞として建武政権から給与された博多息浜（おきのはま）・怡土（いと）荘地頭職など、博多湾岸一帯に広大な

所領を領有していた。貿易の利潤に目をつけた大友氏は、これを足がかりに博多進出に乗り出した。ところが、永享元年（１４２９）の末ごろ、外交貿易の独占を狙う将軍足利義教（よしのり）が、筑前国を御料国（幕府直轄国）と定め、大内盛見を代官に指名してきた。「料国代官」の看板を背負った大内氏の勢力は、筑前国の在地勢力を圧迫し、さらには大友氏の支配する筑後地方へも広がる勢いをみせた。

これに対して、本国を奪われた少弐氏をはじめ、大友・菊池氏ら在来勢力の反発は極めて厳しかった。大内氏の軍勢は、永享３年４月（１４３１）、大友氏の筑前の軍事拠点、立花新城（福岡市東区）を攻める。城を追われた大友持直は二丈岳に立て籠もったので、大内氏は原田種泰に援軍を要請し二丈岳（怡土郡萩原）で戦う。ところが、そこで総大将の大内盛見自身が戦死を喫し、一時は豊前国からも撤退を余儀なくされる有様であった（詳しくは再度後述する）。しかし、二年後の永享５年８月（１４３３）、盛見の後継争いを統一した大内持世（もちよ）（義弘の子）が、二丈岳城を攻め、大友満貞（持直の弟）の嫡子は深江で、大友満貞は古処山城（秋月）で討たれ、大友持直は豊後へ敗走する。この戦いでも原田氏は活躍し、先年の汚名を雪ぐ。そして再び大内氏のもとに豊前・筑前両国を平定し、以降、大内氏の支配が続いた。

大内氏の強大な政治力の支配によって、博多は「黄金時代」を迎えた。この当時の大内氏は幕府の実権を握り、前将軍足利義稙（よしたね）を周防に迎え、やがて東上させて将軍に返り咲かせているほどであった。

朝貢船の派遣についても幕府に費用を貸し、かわりに船は領地の門司で造り、貨物は博多で集めるという条件で、大内氏の独占貿易であった。

瀬戸内海沿岸に広大な所領を持ち、「堺港」と握っていた細川氏と、応仁・文明の乱で敵対したのも、博多商人と堺商人の争いであったのである。

室町時代	1334	後醍醐天皇による建武の新政が始まる 後醍醐天皇が親政（天皇がみずから行う政治）を開始した事により成立した政権
	1336	南北朝の内乱が始まる 足利尊氏による光明天皇、後醍醐天皇の吉野遷幸により朝廷が分裂した。
	1338	足利尊氏が征夷大将軍になり室町幕府を開く 光明天皇から征夷大将軍に任じられ正式に幕府を開く
	1378	京都の室町に花の御所が建てられる 室町幕府の足利将軍家の邸宅の通称。室町御所とも呼ばれていた。

	1392	足利義満が南北朝を合一する 大内義弘を仲介に南朝方と交渉、南朝が解消される形での南北朝合一を実現
	1404	日明貿易（勘合貿易）が始まる 貿易許可証である勘合符を使用するすることから勘合貿易とも呼ばれる
	1428	正長の土一揆が起こる 凶作、流行病、将軍の代替わり（足利義持から足利義教へ）などの社会不安が高まる中、近江坂本や大津の馬借が徳政を求めた一揆。
	1429	琉球王国が成立する 尚巴志王が南山を滅ぼし三山を統一して成立した。
	1467	応仁の乱が起こる 8 代代将軍足利義政のときに起こった内乱。管領の細川勝元と、山名持豊らの有力守護大名が争い全国に拡大影響し、戦国時代に突入するきっかけとなる
	1485	山城の国一揆が起こる 山城（京都府南部）で国人や農民が協力し、守護大名畠山氏の政治的影響力を排除し、以後 8 年間自治を行った一揆
	1488	加賀の一向一揆が起こる 本願寺門徒らが中心となった浄土真宗（一向宗）の信徒たちがおこした一揆
	1543	ポルトガル人が種子島に漂着して鉄砲が伝来する 種子島は火縄銃の製作が始められた場所でもある
	1549	ザビエルがキリスト教を伝える カトリック教会の宣教師でイエズス会の創設メンバーの 1 人
	1560	桶狭間の戦いが起こる 大軍を引き連れて尾張に侵攻した今川義元に、尾張の大名織田信長が 10 分の 1 程とも言われる軍勢で本陣を強襲、今川義元を討ち取って今川軍を壊走させた戦い
	1573	室町幕府が滅びる 足利義昭は織田信長によって京都を追放され、室町幕府は名実ともに滅亡

第七部の三、各氏の動き　（１３９２年、南北朝合一以降）

少弐氏・千葉氏・渋川氏の戦い

１４０４（応永１１）年４月１２日、渋川満頼は鑰尼泰高・少弐貞頼を佐賀郡川上（佐賀県小城郡大和町）の戦いで破った。小城郡晴気城の近くの松尾城に住んでいた千葉胤基の千葉家では、家宰の鑰尼泰高が少弐貞頼と密約を結んで謀叛を起こしたのである。九州探題・渋川満頼のもとに千葉胤基から救援の依頼があった。肥前西部の国人たちは渋川氏側について戦った。九州探題の背後には大内氏の勢力がいたわけで、渋川・大内軍は小城にしばらく滞陣し、綾部城に帰った。

応永の外寇

１４１８年、対馬の宗貞茂が死去し、子の貞盛は幼少であったため､船越に本拠を置く倭寇の頭目・早田左衛門が島内の実権を握った。翌１９年、対馬の島民は明へ大挙して向かった。その途中で朝鮮の沿岸を襲っている。同年、６月２０日、朝鮮政府は、その留守をねらい倭寇の本拠地である対馬を襲うことを決めた。その朝鮮軍による対馬侵攻が起こった。探題渋川義俊は対馬の変報を知ると諸将に檄を伝えた。それまで義俊と戦っていた少弐満貞は激に応じて義俊と対馬に赴き戦った。九州の諸将は相次いで来り、７月２日は、遂に撃退している。

室町時代の壱岐対馬は、少弐氏の勢力圏であった。少弐氏は九州本土での形勢が悪くなると、しばしば対馬の宗氏のところに逃げ込んでいる。

宗氏は対馬国府の官人であったとみられるが、少弐氏に属する有力者として、対馬のみならず九州本土でも活躍し、筑前の守護代などを勤めたいたこともある。

１４１９年、李氏朝鮮の太宗は、倭寇の再発を防止するという名目で対馬に軍勢を送り、朝鮮軍は多くの島民を殺し、家々を焼いた。これが応永の外寇である。

少弐氏の苦難

南北朝時代に今川了俊に殺された少弐冬資の弟・頼澄は家督を得た後に南朝方に付いていた。頼澄からその子貞頼、そして孫の満貞にいたる三代は少弐家の苦難の時代であった。

１３７８年、頼澄が四十一歳で没した時、その子貞頼は六才であった。貞頼が１４０４年に三十三歳で没した時、その子で当主となった満貞はまだ十歳程であった。頼澄、子貞頼から孫満貞の時代は当主が幼い上に、大内氏の筑前への進出の勢いが強くそれに押され、苦しい時代であったのである。

１４１９年、応永の外寇では一時休戦となっていたが、海外からの敵がいなくなるとまた戦いが始まった。１４２３年、少弐満貞・千葉胤鎮等は渋川義俊を博多から追い払い、

渋川義俊は勝尾城に入る。翌年、菊池・少弐は挙兵した。しかし少弐満貞は京都より下向した大内盛見に破れている。

１４２５年には少弐満貞は、菊池兼朝と組んで、再び探題渋川氏を破った。幕府は大内盛見を鎮定にあたらせた。その後の渋川氏は大内氏を後見として、綾部城を本拠に東肥前の一地方勢力として残存していくことになる。

筑紫氏の家系

「続群書類従」の武藤系図少弐によれば、少弐貞経の弟朝日資法から出た武資―貞法―経稔―経重(筑紫氏)が筑紫の祖となっている。筑紫家はその後、筑紫経重―尚重―尚門―満門―秀門―惟門―広門と続いている。

「筑後国史」の太宰府少弐系図によれば、少弐満貞の子・頼門を筑紫氏の祖とある。１４２４年、肥前勝尾城の筑紫満門は大内氏に気脈を通じていた。

古賀氏の痕跡、筑前に残る

少弐一門に古賀氏がいる。古賀重頼は少弐教経（教頼？）の末子で、文正元年（１４６６）生まれという。幼児の時、一族の資重に養育されて、成長後その婿となり、家督を継ぎ、筑前国御笠郡古賀の庄に住んでいる。その後１４９７年（永正３年)、宗家の少弐政資が敗死すると、重頼の子重房は故郷を去り穂波郡弥山村の山中に隠蟄し古賀姓を名乗ったという。

古賀家の系譜によれば、古賀資重は少弐資能の子盛資より出ている。盛資、重資、頼信、義資、頼勝、景資、資重、重頼となっている。１３７３年、義資は少弐冬資の時、御原郡味坂に、菊池武政と戦い戦死している。頼勝は少弐満貞の頃、御笠郡天拝の城に住んでいる。資重は少弐政資の代に、御笠郡武蔵邑に居住した。妻は菅氏の女である。

筑前朝倉郡平松の古賀家は古賀重頼より出て、重房、重儀（重房次男）となり、天文２３年頃、上座郡菅生村に移り、重儀は農となるという。松一本を植え、平松と号し、平松を以て、里号としたという。重儀は上座郡平松村・須川村・古毛村・田多連村・入地村の農長となっている。天正１５年、小早川隆景入国の時、六十四歳となっていた重儀は、上座郡惣庄屋職を勤め、黒田長政入国の後まで及んだ。重儀は少弐一族の子孫ということで長政に仕官を勧められるが、これを固辞している。舞鶴城の築城に際し、重儀は建築奉行を命じられたという。重儀の次男重勝が入地村座禅寺に分家するに当たり、その屋敷どりを小城になぞらえて、大田道灌の築城方式をそのままに具現している。重儀は慶長１３年八十五歳でなくなる。

窪氏

少弐資頼の子為頼、この子孫を窪氏と称す。

安永氏

少弐資頼の次男頼茂（出雲氏）より四代目定行、初めて安永氏を名乗る。安永姓の出自は筑後国三原郡安永荘にある。安行の子安永但馬守重勝初めて鞍手に住まい、その孫に少弐釈太郎重義、その曾孫に安永釈太郎重友がいる。

大内氏と少弐･大友・菊池氏の争い（既述した争いの詳細）

１４３０年、大内・大友氏の所領争奪をめぐって対立があり、少弐・菊池は大友氏と同盟を結ぶことになった。

１４３１年、大内盛見は、大友氏の筑前の拠点・立花城を攻撃した。６月、少弐満貞は大友持直と共に大内盛見を筑前怡土郡に敗死させる。盛見五十六歳であった。

１４３２年、幕府は大内持世の願いを受け、大友・少弐の守護職を罷免し、菊池持朝に筑後守護職を与え、少弐、大友を攻めさせた。また大友持直の豊後守護職をとりあげ、菊池兼朝（持朝）の所に亡命していた大友親綱に与え、大友家を分裂させた。

１４３３年、盛見死後の大内家では、持世は大友親綱と結び、持盛は大友持直と提携して戦い争っている。結果として持世が持盛を豊前篠崎で滅ぼし、家督を得ている。

同年、大内持世は少弐満貞を攻め、筑前秋月城で自刃させる。原田種泰が活躍したことは先述の通りである。この時、持世と少弐満貞は共に四十歳程の歳であった。少弐満貞の子資嗣は大内持世に追われ、肥前の鹿子で殺される。資嗣は二十一歳であった。その弟初法師丸十三歳と松法師丸九歳は宗貞盛を頼って対馬に逃れた。大内氏は筑前・豊前を支配するようになる。

１４３４年、探題渋川満直は少弐一族の横岳氏や千葉・龍造寺・高木氏等と戦い神崎にて討たれる。同年、新探題渋川教直は、大内持世の援護を受け、大友持直と戦い、これを破った。

１４３５年、大内持世は、再三にわたって豊後を攻めた。同年、大内持世は、少弐嘉頼（初法師丸）を破り、大友持直は、海部郡姫嶽（臼杵・津久見の境）に拠り、持世を破った。

１４３６年、大内持世は大友持直を姫岳合戦にて下した。戦いに破れた大友持直は、豊後の国を出奔している。

１４４１年、筑前を回復していた少弐嘉頼は大内教弘に攻められる。嘉頼は宗氏の力を借りて度々、筑前に出兵したが成功せず、対馬で没した。教頼（松法師丸）十七歳が後を継いでいる。

千葉家の内乱に大内氏介入

千葉家は南北朝時代の胤泰から子の胤基、孫の胤鎮の時代へとなる。胤鎮は七代千葉氏当主であった。兄の六代経胤が若くして没していたのである。この頃の九州千葉氏は小城・佐賀・杵島の三郡を領する肥前の有力者となっていた。

１４３７（永享９）年、突然、家老の中村胤宣が千葉胤鎮に対して謀叛を起こした。中村胤宣は千葉胤鎮の弟・胤紹を奉じて挙兵し、松尾城にいた胤鎮を追放した。その後を中村胤宣は大内持世の庇護の下で千葉胤紹を家督にすえたのである。

１４４５（文安２）年８月、千葉胤紹の勢力が伸びることを恐れた胤鎮の旧臣岩部氏等は胤紹の追討を企て、千葉胤鎮を奉じて挙兵し、胤紹軍を壊滅させた。胤鎮は甘南備峯城に籠って本城とし、同月１７日、小城国府城に胤紹を襲って誅殺し、再び千葉胤鎮は家督に返り咲き、小城郡牛頭山（祇園山）に城を築いて本城とした。

千葉氏の国府

九州千葉氏八代は七代千葉胤鎮の次男元胤であった。１４５９（長禄３）年１１月６日、家老・中村播磨守を杵島郡長島庄橘家領の中に知行を安堵した書状がある。七代千葉胤鎮の時代から、この八代元胤の時代が千葉氏の勢力が最大となった時代であった。亨徳年間（１４５２―５５）には小城郡牛頭山城を「国府」と称し、平安時代より国府と呼ばれていた地域を「府中」と呼ばせて区別させた。父胤鎮は１４５５（康正元）年６月２５日（２２日とも）、五十六歳で亡くなる。元胤十八歳であった。

千葉氏の家督争いさらに続く

１４６４（寛正５）年１０月、七代千葉胤鎮の子・教胤は兄の元胤が二十八才で亡くなったため、十四歳で千葉家を相続し、九州千葉氏九代となった。千葉胤紹の子・胤朝は、父が伯父・胤鎮に討たれたことを恨みに思っていたので、千葉教胤が幼少だということに目をつけて、大内政弘を通じて九州探題・渋川教直に教胤の討伐を依頼した。

千葉家内では、家宰として家政を牛耳っていた中村胤頼は、他の家臣団と軋轢が生じていた。佐嘉郡与賀庄・川副庄の今川胤秋（伊予守）が探題と組んで千葉教胤を討つとのうわさが流れた。中村胤頼はそれを信じ、１４６５（寛正６）年５月２０日に岩部常楽・高木氏等を引き連れて今川胤秋の館・佐嘉郡新庄（鍋島町）に攻め寄せた。しかし、胤秋は中村胤頼に不満を抱いていた中村胤明・岩部常楽を調略して味方に引入れたため、中村胤頼の軍は攻めあぐねて河上山に退却した。５月２４日に和睦が成ってそれぞれ引き揚げていった。

大友・菊池の戦い

１５世紀の半ばになると大友家では、二系統に分かれていた家督は、大友親繁により統一された。１４６２年、大友親繁は嫡子政親に家督を譲る。この時、幕府は、政親の豊後守護を認めると同時に、幕府が菊地氏から取り上げていた筑後国半国の守護を政親（大友

家）に安堵した。豪族の勢力拡大を恐れていた幕府は、氏族の内部の対立を起こさせようとしたのである。大友家内でも家督をねらう親繁の兄弟や従兄弟などの不穏な動きが起こっていた。

１４６５年、菊池持朝の子為邦・為安兄弟は、筑後半国を失ったことを不満とし、筑後の黒木氏、三池氏等の軍士を催して、高良山に陣をしいた。それに対して大友親繁は、豊後勢を率いて筑後に出兵した。大友方の将・阿南惟久は、問注所氏を先陣として星野職泰の拠る妙見城を攻め、また鷹取、麦生等を攻略した。筑後の中央に入り、高良山に陣を敷いていた菊池勢を破った。

この戦いで、菊池勢の菊池為安、黒木之実は戦死し、黒木越前守親実は降伏した。星野伯耆守職泰・集家兄弟も大友方に降伏した。黒木親実は大友方に属し繁実と名を改めた。

大友親繁は、菊池氏の持つ残りの筑後半国を奪い、筑後守護となった。菊池氏はこの戦いで大友氏に筑後守護職を奪われ博多への道も閉ざされ、日朝貿易が途絶え、経済的にも衰退していくことになる。

『吉井町誌』には、「寛正６年（１４６５）大友の部将・阿南惟久が妙見城を攻めたが、星野職泰と和議が成立した」とある。『浮羽町史』では、この時の戦いで、星野職泰は「七代までも弓を引くまじ」の誓約書を書いたであろうと推測している。

第八部　戦国時代（１４６７－１５７３）

（室町時代は足利義昭が織田信長によって京都を追放される１５７３年まで続く。戦国時代という呼称は、その間、応仁の乱勃発１４６７年から１５７３年までを指す）

第八部の一、応仁の乱と九州の大名

応仁の乱は室町時代中頃の応仁元年(1467)に起こった内乱、11 年の長きに渡り争いが続き、京都の町は焦土と化したのである。

応仁の乱は複雑怪奇、細川勝元と山名宗全の権力争い、将軍、足利義政の後を継ぐ義視（よしみ）と義尚（よしひさ）の継嗣（けいし）争い、さらに斯波、畠山の両管領家の相続争いなどが絡み合って勃発した戦いであった。

何のために、誰の為に何が目的で戦ったのか？、調べれば調べるほどによく判らぬ応仁の乱である。

一説には東軍 16 万人、西軍が 11 万人もの将兵が入れ替わり立ち替わり戦い、細川勝元を頭とする東軍の陣地は犬馬場、西蔵口、今の相国寺辺り、地名として馬場と云う名が歴史を伝えている。

御霊神社前にある”応仁の乱勃発地”碑

一方の山名宗全を頭とする西軍の陣地は今の五辻通大宮東の山名宗全邸跡辺り、西陣と云う地名の興りである。

西陣があるなら、東陣もあった筈で、実際に往時はその辺りを東陣と呼ばれていたこともあったようだが、その後の歴史によって消えてしまう。

西陣はその後、西陣織物が発達する事によって、その名が後世にも留めてゆくことになる。

下剋上の時代、当時の室町幕府は江戸幕府などとは異なり、全国を統一しているとはとても云える状況ではなかった。諸国では守護大名の反乱や、豪族の争いが絶えず、時の八代将軍、足利義政はふりかかる難題を避けるかのように政治より芸術を好み、酒好きで、享楽にふけっていたとも伝わる。

義政の夫人は日本一の悪女とも揶揄（やゆ）される日野富子、政治に関心のない義政にとって代わり、口を挟むどころか実権を握っていたのである。

当時、将軍の夫人は日野家から迎えると云う慣例から富子は義政の正室についたけれど、その時、義政の側室に今参局（いままいりのつぼね）と云う女性がいた。義政はどちらかと云えば側室にうつつを抜かしていたようで、このことも後の争乱の火種となっている。

やがて富子は次期将軍となるべき男児を産むが、間もなく亡くなり、いずこからともなく「お今方が呪い殺した」との噂が立つ、義政は琵琶湖の小島に今参局を流すが、往路、何者かに暗殺される。

子供を亡くし落胆する義政は、仏門に入っていた弟の義視を還俗させて、次期将軍に据えようと画策する、皮肉なことに義視が元服式を終えた数日後に、富子は男児、後の九代将軍となる義尚を出産する。

考古資料館前にある”西陣”碑

時を同じくして、細川勝元と山名宗全が権力で争い、斯波、畠山の両管領家は相続で争い合っている最中で、一方の富子は義尚側に加担し、また一方は義視側に加担する、当の義政は、あちら側に付いたり、こちら側に付いたりのどっち付かず。

陣地は洛中だけれど、大将の領地は他にある。諸国の大名もあっちに付いたり、こっちに付いたりで、みんなが出張、この場合は出兵、して来て戦いをくり広げるものだから、いつまで経っても戦乱は収まらず、京都の町は焦土と化したのである。

悪女、富子と云われる所以は、今参局の暗殺は富子の企てと云う説があったり、朝廷が設置した関所を幕府のものとし、通行税を徴収、私服を肥やしたり、高利貸しを商い、こともあろうか、戦費に窮する両軍の大名達に貸し付けて高利をむさぼっていたと云われる。みんな富子の為に戦をやっていた？？？

そんな応仁の乱も、大名達が飽きたのか、借金で首が回らなくなったのか、馬鹿馬鹿しさに気が付いたのか、義政が義尚に将軍職を譲ったことで、何となくの雰囲気、幕府によって「天下静謐（せいひつ)」の祝宴が催され応仁の乱は終わったのである。（１４７７）

西国では、応仁元年（１４６７）、応仁・文明の大乱が始まった時、中国地方に加えて筑前国・豊前国を支配する大内政弘は、２０００艘の船を仕立てて京に攻め上り、山名宗全率いる西軍の主力として奮戦した。原田種親は大内政弘の要請に応じて、波多江種盛などを率いて上洛し、山名宗全方として戦う。東軍の主将細川勝元は、この大内政弘の軍事力を弱める為に、大内氏の分国を内外から撹乱する作戦を立てる。

１４６８年、少弐教頼の兵と大内氏の兵が筑後平野で激しく対戦した。同年１０月、足利義政は、西軍の大内政弘討伐と領地回収を九州の有力諸氏に命じている。

１４６９年５月、大友親繁・政親父子も将軍義政の命を受けて豊前・筑前で大内方の諸城を攻略した。これらは東軍細川勝元の策動であった。大友親繁は豊前に攻め入り、豊前の大半を手に入れ、また筑前の立花城を奪回している。

文明元年（１４６９）年５月、幕命を受け、対馬に亡命していた少弐頼忠（政資）は宗貞国と共に筑前に出兵してきた。この頃、大内氏勢力の大半は京都に釘付けされ、九州には僅かしか残っておらず、その少ない大内勢力を追い、博多・太宰府を回復した。しかし、すぐに戻ってきた大内氏によって太宰府を追われ、少弐頼忠は再び肥前の龍造寺康家のもとに逃げている。まるで子供の喧嘩であるが、同年７月には、少弐政尚（頼忠)、大内軍の排除に成功し太宰府に返咲き、筑前・豊前を支配した。この頃、彼は将軍義政の偏諱を受け少弐政尚と名乗っている。

１４７０年、大内氏の重臣で文武両道の名将として知られた益田兼堯が石見国で離反し、九州の大友親繁・少弐頼忠とともに大内教幸を擁して西軍方の大内領に侵攻している。その結果、少弐政尚は肥前守護になったほか、筑前・豊前・対馬・壱岐に勢力を広げていった。

文明２年（１４７０)、大内政弘の伯父、大内教幸（のりゆき）が長門国赤間関で政弘に反旗を翻し、惣領に対抗していた筑前の麻生家延（いえのぶ）らがこれに応じている。

文明５年（１４７３）に山名宗全、細川勝元があいついで没し、事実上、戦争が終わりかけていたにもかかわらず、賊軍の立場に立たされた大内政弘は、分国の混乱を横目にしながら本国へ帰るに帰れない状況であった。しかし、ようやく文明９年１０月（１４７７）に前将軍義政夫人の日野富子の斡旋で、周防・長門・筑前・豊前の守護職と石見・安芸の所領を安堵するという好条件で講和を取り結ぶことに成功し、翌１１月、京都の陣を払い帰国の途に付いた。これによって都の大乱は、完全に終結した。

あくる文明１０年の９月（１４７８)、大内政弘は九州に渡って少弐政尚を討ち、一挙に豊前・筑前を制圧し、同年１２月に本国周防に帰るまで、しばらく博多で筑前経営の陣頭指揮に当たった。自身が名の通った歌人でもある政弘は、文明１２年（１４８０）に、不世出の連歌師飯尾宗祇（そうぎ）を領国に招いた。この旅行の記録が著名な「筑紫道記」であるが、大内氏の北九州支配の安定ぶりをうかがわせる内容となっている。

一方、本国筑前を追われた少弐氏は、肥前国三根郡を中心とする一地方勢力になり下が

り、やはり既に肥前の地方勢力化していた九州探題渋川氏と小競り合いを繰り返した。大内氏・大友氏といった大守護勢力が、それぞれ筑前・豊前、豊後・筑後を押さえ、肥前で小勢力が割拠するというのが、戦国期北部九州の基本的な政治地図である。

時折少弐氏が筑前をうかがうものの、本国を回復する力は既に無かった。だが、大内義隆は北九州の支配をいっそう確実にするために、天文５年（１５３６）５月、わざわざ太宰少弐の上司である太宰大弐に任命させてもらった。同年９月、少弐資元は大内勢に攻められ、肥前国小城郡多久城で自殺し、少弐氏の勢力は著しく衰退した。さらに大内義隆は、大友氏対策として、一時期筑後守護であった経緯から筑後進出を狙う肥後の菊池氏と手を組んで、大友氏の動きを封じるのにも成功した。このように１６世紀中葉、大内氏の北九州支配は安定期を迎えていた。

ところが、天文２０年９月、大内義隆が重臣陶隆房（晴賢）の反乱によって、長門国大寧寺（だいねいじ）（山口県長門市）で自殺し、ついで、北九州支配の要、太宰権少弐・筑前守護代の杉興運（おきかず）も粕屋の浜で討たれた。陶隆房は大友義鎮（よししげ）（宗麟）の弟晴英（はるひで）を大内氏の後継に迎え、この大内義長（大友晴英）の元で、しばらく大内氏の北九州支配が続いた。

博多の町

１４７１年、筑前は少弐氏の支配であった。また「博多の住民は一万戸余り、大友・少弐両氏が治めていた」との朝鮮と日本・琉球の交渉史「海東諸国紀」に記されていることから、博多の町は両氏によって支配されていたのであろう。

第八部の二、西国四大大名

大内氏

１４６７年に始まる応仁の乱を皮切りに、世はますます混迷を深める中、１４９９年前将軍足利義稙（義材）（よしたね・よしき）は、大内義興を頼って山口に下向する。

周防・長門を本領国にして、東は石見・安芸、西は豊前・筑前をも領国とした大内氏は，周防国衙の有力在庁の出身であり、一族を国衙領内の諸郷保の地頭として出し、また朝鮮や明（みん）と積極的に貿易を展開して富を蓄積し、幕府やそれを支える細川氏と対峙した大勢力であった。応仁・文明の乱中の大内政弘の上洛時もそうであったが、京都の政争は、その当事者の一方をして大内氏を頼らせたのである。

大内義興は、足利義稙を擁して西国の大名・国人領主らを率いて１５０８年に上洛し、将軍足利義澄・管領細川澄元らを追放し、義稙を将軍職に復職させている。そして１５１６年「渡唐船」についての御内書を得て、帰国した。

当時安芸国は、先に京都から帰国した出雲出身の尼子経久（つねひさ）の勢いが強く、

彼が広島湾頭佐東の武田氏や、厳島神主家とも結んだため、不安定な情勢であった。
大内氏の領土としては、陶氏の守る周防、内藤氏の長門、問田氏の石見、杉氏の豊前があり、加えて安芸があったわけであるが、この地は尼子氏との境界線上で、単に代官を在城させ政務をつかさどらせていた。
この一例からもわかる通り、京都政権による西国支配は在地任せといった不均質な面を相変わらず持ち合わせていたのである。

大内氏が先述の京都政権に対する存在感を示した背景に、海の道を介しての東アジアとの取引があったことが大きい。
大内氏の朝鮮貿易は、南北朝時代の義弘から義興の代までの約１５０年間に約９０回に及んでおり、それが行き詰まった頃から今度は日明貿易を独占する。先述の大内義興が日明貿易を一任されて帰国したことは、その間の事情をよく示している。なお、朝鮮貿易が盛んな頃のことを書いた「海東諸国紀」には、対馬宗氏の仲介による朝鮮との通交者３４名の名を載せているが、このうち筑前の怡土・志摩両郡を支配する「絲島大守」大蔵道京（原田種親）以下の名前も書かれており、玄界灘沿いの筑前有力武士が朝鮮と公的交易を行っていたこともわかっている。
当時明は海禁政策をとっていたが、勘合（符号）で認識できる相手にのみ貿易を許す制度をとっていたので、大内氏はこれを一任されたわけである。この外交権は大いに大内氏の財政に寄与することとなる。そしてこのシステムは後に毛利氏に継承されることになり、毛利氏が継承した朝鮮国「通信府」「日本国王之印」や、それを治める「朱漆雲龍鎗金印箱」は、現在毛利博物館に所蔵されている。

ところで、大内義興の京都からの帰国は１５１８年であるが、１５１９年、彼は島津豊後守忠朝に渡唐船についての配慮を求める手紙を出している。島津忠朝は、日向南部の飫肥・櫛間地域を領有していた島津豊州家の当主である。島津は大内氏渡唐船の滞留を認め、大内氏の勘合貿易船の派遣に当たって重要な支援を果たしたのである。
この時期、琉球王国は、朝鮮、明、ルソン、シャムなどの南海諸国と貿易を進め、東アジアの海の要衝であった。島津氏はこの琉球王国との貿易に参入し、ますます活発化する時期であった。大内氏は島津氏を介して渡唐という目的を果たすと同時に、東アジアへの窓も開いていったのである。なお、島津氏の琉球貿易はその後の薩摩国強大化の一因となった。
国際貿易に必要なものは、その取引の基本的材料である地域資源である。たとえば鉄・銅・銀・木材・硫黄などの資源や、その流通、港の管理などを含めた経済構造を自らの権力の下に集中・独占しておれば、広域的・国際的な流通経済は有利に展開するわけであるから、外国から多くの富を獲得しようとすれば、それだけそうしたものの争奪戦が起こるのは自然のなりゆきである。

ヨーロッパ人が日本銀を求める動きに参入した１６世紀中ごろから各地で戦国騒乱が本格化し、そうした中で戦国大名「国家」が成立したことは、地域社会の流通経済の広域化・国際化の展開を抜きにしては語れない。

博多の三傑という言葉があるが、神屋宗湛、嶋井宗室、大賀宗九の三人の豪商のことである。神屋家の一人神屋寿禎は石見銀山を世に出すという幸運に恵まれている。足利幕府は勘合貿易の重要輸出品の一つである銅を、美作・備中・備後・但馬などの守護に命じて献上させていた。大内氏とその麾下の神屋一族は、銅を出雲の口田儀（くちたぎ。現在の島根県多伎町）の、鷺銅山に求めていた。寿禎は地元の人の話で昔そこは銀山でもあったことを知った。そこで三島清右衛門とはかり、堀子を率いて銀山を掘り、地中に深く入り、銀鍵を求めた。得られた銀鍵を寿禎は博多に運び、巨富を得た。これが石見銀山の始まりと言う。

１５４０年代には中国船の九州方面への来航が盛んとなり、増産され始めた日本銀を買った。やがてポルトガル船の日本貿易が始まるが、１５８０年ごろ、ポルトガル船は毎年五千貫（１８、７５０キロ）ほどの銀を日本から持ち出し、大部分を中国に運んだといわれている。

一方、嶋井宗室は大友宗麟との関係が深かったようである。宗室の茶の湯の師匠道叱が大友宗麟と親しかったからである。大友宗麟は「楢柴の肩衝」を宗室から譲りうける為に、直接あるいは家臣を通じて再三手を打ったが、目的を果たすことが出来なかった。この名器は後に秋月種実、豊臣秀吉の手に渡り、最後は徳川家へ移っていった。

毛利氏

大内氏の支配の下で発展した安芸国人領主連合の盟主は、高橋氏である。盟主の役割は、大内氏の命令を受けて行う国人領主への軍勢催促であり、また国人領主の軍忠を大内氏に推挙し、その褒賞としての土地給与などを伝達することなでである。

１５０８年に大内義興に随って上洛した安芸国衆のうち、高橋元次・毛利興元・吉川元経らは、１５１１年８月には細川澄元らの反撃を受けて京都の防衛が危うくなった形勢の中で戦線から勝手に離脱して帰国した。そして翌年の３月３日に天野興次・天野元貞・平賀弘保・竹原小早川弘平・阿曽沼弘秀・野間興勝の六名の安芸国衆と連署の一揆契約を結ぶ。第一条に大内義興や将軍家からの諸要求に対してはこの衆中として結束して対応することを明記している。この後、毛利興元室に高橋元光娘、毛利元就室に古川元経妹と三家間において婚姻が結ばれ、盟約強化される。これらは、大内義興の圧力に屈しない強化策であった。

ところが、高橋元光は１５１５年に備後三吉氏との合戦中に戦死する。その跡は、高橋興光が継いでいる。しかし、高橋興光は、１５２９年に当時中国山間地域で展開していた尼子氏と大内氏の攻防戦中に尼子氏に一味したとして大内氏・毛利氏らの連合軍に滅ぼされる。

その盟主の地位を襲い、広大な所領を奪取したのが、その直前１５２５年に尼子氏方から大内氏方に転じていた毛利元就であった。

毛利元就の三子教訓は著名である。これは元就が家督の隆元、吉川元春、小早川隆景、女婿の宍戸隆家の四人の子の結束を求めたものである。

また、元就の「かさ連判状」も有名である。この契約は、毛利氏と安芸国衆が共存していくために、また、占領者として防長両国の地下人たちと共存していく為に創出された一つの法的秩序であった。

朝廷との関係については、毛利元就・隆元（元就の嫡男）は、１５６０年に正親町（おおぎまち）天皇の即位料を献上して陸奥守・大膳太夫に任じられ、また将軍足利義輝からはともに相伴衆という側近格に位置づけられている。さらに隆元は、安芸守護職、つづいて備後の守護職についている。

ところが、毛利氏が出雲尼子氏・豊後大友氏と戦争中に将軍足利義輝は両氏との和平を勧告するが、毛利氏はこれを拒否している。尼子氏は石見銀山を狙っている。大友氏も博多を確保したい。そうした政治的・軍事的に緊張した状況のなかで、毛利氏は戦争を勝ち抜いて、毛利「国家」を存続させるために、将軍の「上意」を無視し、和平勧告を拒絶したのである。

現に、大友氏はこの当時次のような策動をしていたことがわかっている。
輸入品の中には、戦国時代の重要かつ象徴的な武器である鉄砲に用いる火薬の原料である硝石が含まれていた。１５６７年、大友宗麟は中国滞在中の司教カルネイロに宛て、「自分が毛利元就に勝利を望むのは、大内輝弘の地位を回復し、パードレらに山口におけるキリスト教の布教上の庇護を与えたいためである。それを実現する為に必要なことは、あなたの援助を得て、毛利氏が硝石を輸入することを一切禁止し、カピタンモール（司令官）をして大友氏のものに毎年良質の硝石２００斤を運ぶことである。それには銀による支払いを約束する」と述べている。中国大陸では天然硝石が産出されていたのである。

毛利隆元は出雲尼子氏攻撃中の１５６３年に急死する。跡を継いだ輝元を補佐する「御四人」制を作る。吉川元春・小早川隆景・そして毛利氏家中の重臣である福原貞俊と高橋氏一族の口羽氏を相続した口羽通良の四人であり、これが元就没後の毛利氏の最高意思決定機関となっていく。

なお、毛利家は桓武天皇の母方祖母の実家である大江氏（大枝、もとは土師（はじ）氏）の流れである。大江広元が源頼朝側近として鎌倉にあり、その子孫の一人が相模国毛利荘の地頭となり、さらに、一派が安芸に領地を得た。毛利氏は、鎌倉、室町時代を通じて有力国人の一人であったが、大内氏の京都進出に参加したりして見聞を広め、徐々に最有力者としての地位を固めていったのである。

大友氏

九州戦国時代のまた一人の主役として、１５５０年に父大友義鑑（よしあき）の死没によって家督を継いだ大友義鎮があげられる。

大友氏は豊後府内（大分市）を本拠にし、博多や府内、そして堺などの豪商と結んで外国貿易に積極的に関与した。府内の大友館・寺院・町屋などの跡からは、中国・朝鮮・タイ・ベトナムなどの外国産の陶磁器が数多く出土しており、その国際色豊かな日常生活が明らかになっている。義鎮の代にはその勢威は肥後国にも伸びていた。

大友義鎮の動向で注目されることは、幕閣に多額の金銭や稀物を献上して官途や守護職などを授与されていることである。たとえば、１５６０年に義鎮は将軍足利義輝に殿料として３０００貫文を献上し、その褒美として左衛門督に任じられ、桐の紋を授与されている。管領家級の官途であり、また将軍家一門という破格の待遇をもえた。

銅銭の他には、緞子・白糸・黄金・漁父の絵・手火矢・南蛮鉄砲・石火矢・種子島筒などの外国産品が献上されている。これに対して、将軍からは、１５５４年に肥前国守護職、１５５９年に豊前国と筑前国、そして筑後国の守護職、さらに九州探題職と大内家家督、翌年には周防国と長門国の守護職を授与されている。

こうして大友義鎮は、幕閣への工作が興を奏して、島津氏守護職下の薩隅日参加国を除くが、制度的・名目的にしろ九州の支配権を認められ、また大内氏の後継者としての立場も獲得した。

大内氏滅亡後に博多の争奪をめぐって豊前・筑前領国内において大友氏と毛利氏の戦争が続いていたが、１５６２年に大友義鎮は毛利元就を悪逆の企みをなす者として幕府に訴えている。これを受けて将軍は、毛利氏と大友氏・尼子氏の和平を勧告したのである。

将軍から周防・長門の守護職を与えられても、両国は実質的に毛利氏支配下にあり、豊前・筑前の守護職を与えられても、毛利氏との間で争奪戦を展開していた。それは、実力による戦争の結果であった。幕閣に訴えても解決できるような問題ではなかったのである。

一時は東西の両方面作戦を遂行していくことに若干の不安を抱いていた毛利氏は、連合する安芸国衆や毛利氏家中の厭戦気分もあっていったん和睦を受諾する。しかし、毛利氏国家の存続のために結局は拒絶した。そして、１５６６年に尼子氏を討伐し、筑前立花城をめぐって本格的に大友氏と戦うが、１５６９年１０月に大内輝弘（てるひろ）が豊後から山口に侵攻したのを契機に結局九州から全面的に撤退した。

毛利氏の脅威が無くなって北部九州における大友氏の支配が安定したかというと必ずしもそうではなかった。代わりに毛利氏と連絡を取り合っていた肥前の龍造寺隆信が勢威を増して大友氏を圧迫する。

一方、島津氏は肝付氏を服属させた後、日向に侵攻して伊東義祐を討つ。伊東義祐は姻戚関係にあった大友氏を頼って豊後に遁れる。大友宗麟（義鎮）が伊東氏を支援した結果は、１５６８年の高城合戦であったが、島津氏の圧倒的勝利に終わる。こうして日向を支配下におさめた島津義久は西海岸沿いの肥後、筑後、そして筑前へと北上する。

海の大名能島村上氏

能島村上氏は、東の幕府細川氏と西の地域大名大内氏の境目地域に当たる安芸伊予初頭の能島を本拠にして発展し、戦国時代には、１５０８年の大内義興が足利義稙（よしたね）を擁して上洛したのに随い、その褒賞として細川高国から「讃岐国料所塩飽島代官職半」を給与されるなどその拠点を次第に拡大し、瀬戸内から北部九州や豊後水道の広い海域において、通航する日向・薩摩往返の京堺商人から「唐荷駄別役銭」とか「駄別料」と称する通行料を徴収し、その代わりに上乗をして水先案内や警固などを行い、通航の安全を保障するという海上支配権を形成し、それを基盤に権力編成をしていた。

戦国時代の能島村上氏は、毛利氏の水軍と見られやすいが、内海を取り囲む諸大名が相互に戦争してもそれに深入りすることは避け、基本的にはいずれの大名とも等距離外交で友好的関係を保持している。たとえば、１５７１年に毛利氏が前年来の対大友氏戦争への協力不足をとがめて能島城を攻撃した際には、大友氏が軍勢を派遣して能島村上氏を支援している事実もある。

能島村上氏の存在は、地域国家が並存し、相互に相対立し、戦争している列島の文献の時代であったからこそ築き挙げえた海上支配の構造であったのである。

その後の村上水軍一族について、取って置きの話を一つ披露しましょう。大学ボート部後輩に久留嶋庸夫君がいるが、彼は豊後森に陣屋を築き居城としていた来島村上の一族で、大学に入学したら、いの一番にボート部に入部しようと考えていたという。理由は先祖の水軍の血が騒いで仕方がなかったからだと。なかなかの好漢で、酒を酌み交わす機会にはお互い遠慮会釈のない無駄口をたたいている。曰く評して「海賊の面影を残している」「酒がつよいのも海賊の子孫だからだ」などなど。

末広神社清水門
この門と塀に数段の石垣はまさに城の趣

彼の祖先の来島村上通総は三島村上水軍が分裂する末期に、能島村上武吉・河野氏・毛利氏と決別し織田に走り秀吉に仕える。一方の能島村上武吉は秀吉に負け、来島村上通総は風早の地に１万４千石を得て姓を来島に変え住み着く。慶長の役に出陣するが兄と共に戦死した。

その子康親は関ヶ原前後いろいろ紆余曲折あったものの首尾良く復活を果たす。しかし封ぜられたのは風早の地ではなく海を離れた九州の豊後森という山中であった。場所は大分県玖珠郡玖珠町で、九重山の北麓、玖珠盆地のなかにある（JR 豊後森駅近く）。ここに

は室町・戦国時代に森氏によって標高５５７メートルの角埋山（つのむれやま）頂上付近に築かれた高牟礼城があった。豊後森の「森」は森氏に由来し、玖珠川に流れ込む「森川」が残る場所である。山の麓に来島村上氏は陣屋を築き（現在の三島公園）居城としたのである。江戸時代１万４千余石ではあったものの一国一城の規則に縛られ新たな築城は許されなかったからである。

名門の海賊来島村上氏はここ玖珠の奥深い山中に久留嶋に姓を変えて維新まで続く。その八代目久留嶋通嘉は城を持ちたくて大山積神を分祠した三島神社(今残る末廣神社)の改修にあたって神社を壮大な城仕立てにすることを思いつき２０年の歳月をかけて実現する。武家屋敷、それに前面には町屋を配置した。茶室として建てた栖鳳楼は、これを天主と見做していたという。一帯に城下町が残る。

第八部の三　応仁の乱後、覇権の行方（１４７７－１５５０）

①戦国期九州の概観

九州の武家は平家方だったため鎌倉幕府を開いた源頼朝からの信頼感は薄く、頼朝は、九州の抑えとして、関東では無名に近いが近臣として取り立てていた少弐氏、大友氏、島津氏を代官的存在として九州の守護とし、鎌倉時代、筑前・肥前・豊前は少弐（武藤）氏、筑後・肥後・豊後は大友氏、薩摩・大隅・日向が島津氏と九州の統括体制がなされ、その下に地頭として平安時代以来の松浦氏、秋月氏、蒲池氏、菊池氏などの元平家方の武家が盤踞していた。戦国時代当初、少弐、大友、島津の三氏は権益を守るべく、また地頭出自の諸国の国人豪族は自立するべく、戦いを展開していった。

しかし、少弐氏の勢力は九州探題に敵対したために室町時代後期には既に衰えており、宗像氏や麻生氏など筑前・豊前の国人は中国地方の大内氏の影響を受けた。少弐氏は肥前・対馬の兵を率いて大内氏掃討に何度も筑前に侵入するが、逆に大内氏の側についた龍造寺氏の下克上により滅ぼされた。この大内氏が陶氏によって滅ぼされると肥前は自立、筑前と豊前は大友氏の干渉を受けた。陶氏を滅ぼした毛利氏友族が両国に存在したため毛利氏と大友氏は北筑前にて戦いを展開する。

大友氏は豊後を拠点に南筑後の蒲池氏を筆頭とする筑後十五城が盤踞する筑後、さらに阿蘇氏や相良氏の肥後に勢力を伸ばした。陶氏が大内氏を滅ぼすと、これを支援し、豊前・筑前をも得た。また大友宗麟は同時にキリスト教を保護し南蛮貿易を盛んにした。しかし大友氏は島津氏との耳川の戦いで大敗、家臣や幕下の国人の離反が相次いで急速に衰えていく。それを機会に肥前では少弐氏に対する謀反で勃興した龍造寺氏が勢力を拡大、龍造寺隆信の代になってほんの一時期、大友・島津と肩を並べるまでに伸張したが、沖田畷の戦いで隆信が戦死すると急速に衰え、やがて重臣の鍋島直茂が替わった。

島津氏の戦国時代は一族内部の争いで始まった。しかし分家の島津忠良の子・島津貴久が本家を継いだ。祁答院氏、菱刈氏、肝付氏などの数多くの豪族と戦いに明け暮れ、その後、島津貴久の息子の島津義久の指揮の下、薩摩・大隅を統一。木崎原の戦い以後は伊東氏を平らげ、大友宗麟との耳川の戦いで大勝利を収め、薩摩・大隅・日向三州統一を完全なものにし、九州統一戦を開始した。残すは筑前・豊前のみというところで豊臣秀吉の中央軍の介入が始まり、降伏した。

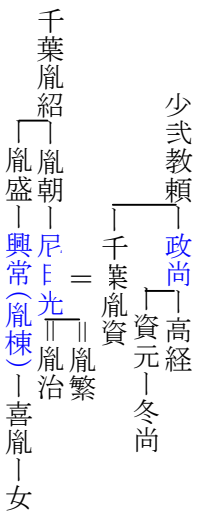
② 大内・大友・少弐・千葉・馬場・龍造寺・筑紫・星野・鍋島氏周辺の出来事

大内氏と大友・少弐氏の戦い

１４７７年、大内政弘は幕府に豊前・筑前を安堵されて帰国し、豊前で少弐政尚を筑前に追い出した。翌年には、少弐政尚（政資）を肥前に追い払い、大内政弘は筑前、豊前を鎮圧した。

大内氏は大友家の家督争いに介入

１４８４年、大友政親は、嫡子義右に家督を譲った。しかし、大友政親は新将軍義澄を支持、一方、子の義右は前将軍義材を支持するという親子の対立が起こり、大友家では内紛が発生した。父との抗争が不利な情勢になった義右は山口に出奔する。大友義右の母は大内政弘の妹であり、また妻は政弘の娘であった。京都の見通しが立たない事を知り、山口に戻った大内政弘は、嫡男義興とともに、大友家の内政に干渉するようになる。



１４８９年、大友義右が山口から帰国し和解するが、大友政親の上洛中に政親の異母弟日田親種が肥後にて挙兵した。これは同じ異母弟親治が平定する。大友義右はこの日田親種の挙兵は父政親の差し金であろうとして、府中（府内とも呼ばれる。今の大分市）に兵を集めた。大友政親は直入郡朽網に退き、国人は二分される。

１４９６年、5月２７日、大友義右が府中で没すると毒殺説が流れた。大内政弘は、下手人は大友政親の仕業と考え、多数の刺客を豊後へ送り込んだ。政親は身の危険を感じ、筑前の立花城に救いを求めた。大内義興は船で筑前に向かう途中の政親を赤間関で捕らえ、出家させ、詰め腹を切らせた。その後の大友家は政親の異母弟親治が家督を継いだ。豊後では政親・義右親子死後も両派に多くの戦死者が出る戦いが起こっている。大内氏を巻き込んだ政親・義右親子の対立は、家督を継ぐことになった大友親治の陰謀であったとの噂がたつほど、大友家の内部に家督ねらいの分裂が起こっていたのである。

少弐氏は千葉氏を乗っ取る

九州千葉氏十一代・西千葉氏初代の千葉胤資は、実は少弐政尚（政資）の弟で千葉胤資と改名し、胤朝の跡を継承し千葉氏となった。その経緯は次の通りである。

１４８６（文明１８）年１０月、千葉胤朝が、弟・胤将によって暗殺されてしまったために、千葉氏の血をひくものは胤将と胤朝の娘と胤朝の甥・胤棟（のち興常）の三人になっていた。少弐政尚は、胤将が独断で千葉胤朝を殺したことを怒り、胤将を討ち取ろうとした。胤将は行方不明となり、また千葉胤棟は大内氏の手にあったことから、少弐政尚は千葉胤朝の娘（日光尼）を弟の嫁として迎え、「千葉胤資」と改名させた弟を小城郡晴気城に入れた。こうして少弐氏による千葉氏の乗っ取りが成功したのである。

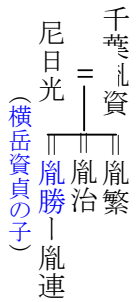
１４８７年、肥前を本拠とした少弐政尚は 龍造寺胤家、千葉胤資と共に肥前綾部城を攻めて渋川万寿丸を筑前に追いやり、筑前亀尾城の万寿丸が家臣に殺されると、それを攻めて筑前の一部も手に入れた。この頃の少弐氏は大宰府を本拠に領国経営を進めていた。

１４８８年、少弐氏は大友政親と示し合わせて東肥前に入り、諸氏を下して筑後にはいったので、筑後の城持ち諸氏は、大友・少弐両氏の支配下にはいった。

西千葉・東千葉の分裂

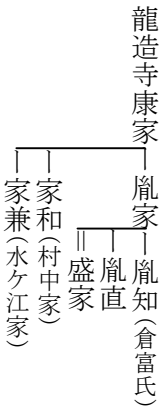
当時、大内政弘は少弐政尚と九州の覇権をかけて争っていた。少弐政尚が弟胤資を千葉氏の当主として据えたことで、肥前小城郡周辺の勢力が少弐方につくことをおそれ、大内政弘は千葉胤盛の子・胤棟（後の興常）を擁立した。

千葉胤棟は小城郡赤目城（三日月町赤司）にあり、大内氏の後援を受けながら１４９１（延徳三）年、小城郡で千葉胤資と戦った。千葉胤棟は小城郡の東部・牛頭山城（胤朝の居城）を攻め落として居城とした。これ以後、東の千葉胤棟（興常）・牛頭山は「東千葉」、西の千葉胤資は晴気城の本宗家を「西千葉」、と呼ぶことになる。



同じ少弐氏一族の馬場氏と筑紫氏の反目

馬場氏は武藤氏系図によると、少弐頼尚の弟政員を祖としている。筑紫系図だと少弐満貞の子頼経としている。何れにしろ少弐一族として東肥前三根郡綾部・中野両城を拠点としていた。１５２４年、馬場頼周は筑紫満門親子暗殺をする。両氏は同族であるのに果し合いに至った経緯を１４９２年ごろまで遡って辿ってみる。以下の通りである。



大内氏が筑前・肥前に侵入

１４９２年、少弐政尚（資）は大内の将・陶広仲と筑前箱崎で戦った。翌９３（明応２）年に東肥前まで勢力を拡大した政尚は、松浦郡伊万里・山代の九州探題・渋川氏の旧臣たちを討つため、上松浦郡に出陣した。

千葉胤資（政尚弟）も龍造寺康家・高木家益らを率いて兄に従軍した。

１４９４（明応３年）には少弐軍は松浦軍を攻め、波多氏、鶴田氏らを降し、肥前高来郡を有馬貴純の支援を受けて、平戸松浦一党も下した。

１４９５年、少弐政尚は大内方の原田が守る筑前高祖城を攻め、翌年末には高祖城を囲んでいる。

大内義興は少弐政尚のこのような横暴な振る舞いを将軍・足利義尹（義稙）に訴えたので、幕府は大内義興に少弐氏追討を命じた。

１４９６（明応５）年１２月、大内義興は幕命によって山口を出発し、翌年正月に中国・四国地方に出陣の触れを出して自ら大将として筑前に上陸した。前年家督を継いだ大内義興は二十歳であった。

少弐政尚（資）は驚いて筑前の高祖城に篭城した。これに対して、政尚の嫡子高経は先鋒杉興正軍を強襲して討った。大内勢は五万の大軍を以って少弐勢に迫った。猛将・陶興房が箱崎まで攻め寄せたために政尚は高祖城（前原市）をすて、兵を二分して、自らは筑前岩門城（太宰府市）、子の高経は勝尾城（鳥栖市）で防戦した。
しかし、猛将・陶興房は少弐政尚の筑前岩門城、高経の勝尾城（鳥栖）を、あいついで落とした。

筑紫満門は元来少弐の一族で、明應六年（１４９７）の戦で大内に敗れ、降伏して大内方の先陣となって少弐を滅ぼした。それによって筑紫満門は大内に賞されて筑前国内の那珂・三笠・早良、肥前國内の基肄・養父・神埼などを与えられて少弐より大身になっていたのである。

少弐政尚（資）父子は大内軍に攻められ自刃

１４９７年、４月８日、少弐政尚（資）は千葉胤資の居城・晴気城（小城市）に逃れた。４月１３日、大内義興の烏帽子子・東千葉初代千葉興常（胤棟が改名）が大内軍に参陣したため、晴気城内にも反少弐氏感情が高まり、身の危険を感じた西千葉初代千葉胤資は、兄・少弐政尚（資）を多久の梶峯城に逃れるように勧めた。１８日未明に政尚は晴気城から姿を消した。１９日には政尚の逃亡の報が大内義興に届いており、大内義興は軍勢を多久梶峯城（多久市）へ向かわせた。その日の夜、逃れられぬと悟った政尚（資）は多久泉称寺で自刃した。政尚の嫡男・頼隆と次男・高経は晴気城から別行動をとっていたが、高経は十九日に勢福寺城にて自害し、頼隆は２１日、市ノ川の山中で自害した。千葉胤資も十九日、晴気城から決死の出撃をして討ち取られた。二十四歳であった。

大内義興は千葉興常を守護代として、筑紫満門に神崎・三根両郡を守らせた。それ以前に筑紫満門はいち早く降伏し、大内方の先陣となって少弐氏を滅ぼす働きをしたからでる。

千葉氏も大内勢に追われる

１４９７年、大内義興が少弐政尚（資）を攻めているとき、千葉胤資（政尚の弟）に命

じられた胤繁は義兄・千葉胤治と義母・尼日光（胤朝の娘）とともに城を抜け出して山野に逃れていた。九州千葉氏十二代・西千葉氏二代目・千葉胤治は小城郡甕調郷（三日月町）の高田城に入った。

１４９８（明応７）年２月２４日、大内方に寝返っていた少弐一門の筑紫満門・東尚盛らが高田城を攻めると、千葉胤治は力及ばず、家臣に守られて佐嘉郡川副郷（諸富町太田）に逃れた。そして、尼日光、千葉胤治らは龍造寺氏をはじめとする旧交の豪族たちに対して援を求めた。１５２４年、馬場頼周が筑紫満門親子を暗殺するまでには、まだまだ幾多の事件が起きていく。それは後述する。

龍造寺胤家も筑前へ逃れる

この当時の龍造寺家の当主は十一代千葉胤資（西千葉初代）に協力的であった龍造寺康家の嫡男胤家（豊前守）であった。胤家はもともと「家弘」と称していたが、千葉胤朝から偏諱されて「胤家」と改めていた。１４７３（文明５）年、康家から家督を相続して当主となっていた。

１４９８年、龍造寺胤家は千葉胤繁の援兵の誘いをうけてただちに出陣しようとしたが、弟の家和が自重論を述べたため、出陣は見送っていたのである。しかし、胤家はその晩にひそかに成富胤秀・木塚直喜・太田和泉守らを語らって高田城へと急行した。そして同日、川副郷太田で大内方になっている筑紫・東勢と合戦して大勝を得た。しかし、この合戦を聞いた牛頭山の千葉興常が急遽、筑紫勢の援軍として駆けつけてきたため、気の緩んでいた千葉胤繁方の形勢は不利になり、千葉胤繁は龍造寺胤家とともに筑前へと逃亡した。龍造寺胤家は、外戚の小鳥居信元（太宰府官吏）のもとで肥前帰国を図ることになる。

●大友氏系図

親著
親繁
親綱
大聖院（宗心）
政親
義右（親豊・材親）
親治
義長（親匡・義親）
義鑑（親安・親敦）

龍造寺家和嫡子となる

大内義興は千葉介興常を肥前国守護代とした。龍造寺胤家が出奔したため、父・康家が一時的に龍造寺氏の家督を継ぎ、この時、龍造寺家和が嫡子となっていたようである。

胤家はすでに六〇歳ほどであったろう。龍造寺胤家には長男胤知、次男胤直の名が見える。それに高木家から胤家の養子になっていた盛家がいた。しかし、帰農した胤知の名は倉富家の系図以外には見あたらない。倉富家の家譜によれば、胤知は病弱であったとも言われている。

③　九州諸大名と将軍

大友親治・義長に対抗する大友族の宗心、これを大内氏援助

１４９８年２月、大友親治は嫡子五郎親匡（義長）を義右の嗣子にするため、将軍足利義澄と越中滞在中の前将軍義材に許可を求めた。八月には親治は豊前国守護職を与えられた。

一方で、足利義材派の大内義興は、大友親綱の子大聖院宗心を還俗させる。その狙いは義右の跡目を相続させることで、大内義興は大友家の撹乱をねらっていたのである。

１４９９年、大友親治は豊前の宇佐・下毛・築城郡を制圧した。１５０１年、親治の隠居に伴って親匡（義長）は家督を継いだ。同年閏６月、豊後・筑後・豊前の三国の守護職を幕府より親匡に安堵され、足利義澄より偏諱を賜り、義親と名乗る。この親治・義親（親匡・義親・義長）の時代は大友氏の大名権力の確立期となった。

前将軍足利義材に組する大内義興、一方将軍足利義澄には大友親治がつく

１４９７年、大内義興は少弐氏を破った後、肥前国守護代として千葉興常を任命し、１５００（明応９）年８月、九州探題家の渋川刀禰王丸を擁立した

１５００年（明応９年）、管領の細川政元に追われた前将軍足利義材は、大内義興を頼り、山口に来ていた（第八部の二「大内氏」の項で述べた）。大内義興は刀禰王丸を足利義稙（義材）に謁見させて偏諱をもらい「渋川尹繁」と名乗らせ、九州探題としたのである。

１５００年、京では細川政元に擁立されていた将軍・足利義澄は、大友親治、菊池武運、阿蘇惟長等の九州諸豪に、山口にいる前将軍・足利義材（義尹）の討伐を命じた。

１５０１年６月１３日、将軍足利義澄は、九州探題の地を大友親治に与えた。さらに大友親治から家督を継いだその子義長には、豊後・筑後・豊前三カ国守護と筑前・肥前両国内の本新当知行所領を安堵した。また、足利義澄は、前にも出していた義材討伐命令を改めて大友親治、少弐資元、菊池武運や大内義興の弟大内高弘（義興に敵対して敗れ、大友氏を頼っていた）らに発している。

１５０１年から１５０３年にかけて、大友親治・少弐資元の連合軍と大内義興の軍は豊前・筑前の各地で攻防を繰り返した。

１５０１年、大友親治と少弐資元は、大内氏の支配する豊前の諸城を攻撃した。大内家でも内訌の危機にあった。大内義興を廃して、弟尊光を家督に据えようという陰謀が露見した。義興二十五歳のときであった。重臣杉武光は自害し、尊光は大友氏を頼って豊後へ亡命した。大友家でも親治の従兄弟である大聖院宗心が大内家と結び、大友一族の田原氏と語らい家督をねらった事件が起きている。

同年７月２３日、少弐資元は大友氏を助けて筑前を奪回しょうとした。大内義興は、これらの大友・少弐氏の軍を、豊前馬ガ岳城に破った。

同年９月、山口にいる前将軍足利義尹（材）は筑前の立花親直に大内義興と大友親治・義

長との両家の和睦を計らせた。しかし、大友親治はこの和睦の進言を聞き入れなかったようである。

１５０３年、大内軍は、大友親治・少弐資元と豊前・筑前の各地で攻防を繰り返した。同年１１月、大友義長は筑後征伐のために、高良山まで軍を進めた。大友氏と大内氏の戦いの中、大友氏に叛する戦が筑後にも起こっていたのである。

１５０５年、大内義興に滅ぼされた少弐政資の子資元は、大友氏の援助を得て、探題を攻める。少弐資元は肥前の神崎勢の勢福寺城を攻め落として、居城とした。

馬場頼周、筑紫満門を謀殺する

１５０４年（永正元）、少弐一族の横岳資貞の元で養育を受け成長していた少弐資元は横岳氏の後援をうけて独立した。

１５０５年、少弐資元は大内方の肥前国神埼郡の勢福寺（神埼市城原）城主・江上興種を追放して占領し、居城とした。さらに千葉氏と龍造寺氏の力を借りて九州探題・渋川尹繁を白虎山城に攻めて、筑後へ放逐した。
その後、少弐資元は白虎山城に重臣・馬場頼経を入れて守らせ、千葉胤治、胤繁らは高田城へ戻った。

少弐氏からは多くの庶家が分かれ出たが、そのなかでも馬場氏、筑紫氏、横岳氏らは少弐氏をしのぐ力を持つようになった。戦国時代、少弐氏が大内氏の攻勢にさらされるようになると、筑紫満門は大内氏に通じるようになった。馬場頼周にとって満門は岳父であり、その変節に頼周は怒っていた。ついには、孫が病気であると偽り、満門を綾部城に誘って謀殺してしまう（既述）。

少弐氏の元で龍造寺家台頭する

少弐氏は大内義興の侵攻をたびたび受けるが、家臣の龍造寺家兼らの協力もあって、それを退けた。しかしこのため、龍造寺氏の力が台頭することにもなり、少弐氏の力は次第に衰退してゆく。

大友親治を通じて将軍家に認められた龍造寺胤家もまた弟・家和に迎えられて大財端城を与えられた。

１５０６年、大内義興は大友親治・少弐資元と豊前、筑前の各地で、攻防を繰りかえした。同年（永正３）１０月、大内方の筑紫満門・東尚盛らがふたたび高田城（小城市）に攻め入ってきたので千葉胤繁は城を捨てて龍造寺氏を頼った。

高田城を追放された千葉胤繁のあとを受けて家督を継ぐことになったのは横岳資貞の子で、幼名は満童丸と言った。九州千葉氏十四代・西千葉氏四代目は、千葉胤資の妻・日光尼（千葉胤朝の娘）の養子となり、千葉胤勝と名乗った。

星野重泰の反乱

１５０６年、大内義興は陶尾張守を派遣し、大友親治・少弐資元と豊前、筑前の各地で、攻防を繰りかえした。「吉井町誌」によると、『１５０６年３月、星野伯耆守重泰は、筑後を支配していた大友氏に従わず、大内氏に応じた。大友氏との連絡を絶ち、妙見城に立て籠もる』とある。

１５０７年３月、大友義長は大軍を率いて妙見城に迫った。少弐資元も大友氏と連絡をとり、筑後に応援に来る。しかし大友軍は白石城の星野一族、猫尾城の黒木氏及び、井上、井手、増田等の勇士の反撃にあった。星野一族は星野重泰とともに行動していたのであろう。

前将軍義稙（義材）と大内義興の中央進出

永正４年（1507 年）６月、足利義澄を第 11 代将軍に擁立して幕政を牛耳っていた細川政元が暗殺された。

京都の政情がこれによって動揺したのを好機として、細川高国と通じて、前将軍足利義稙（義材）は京都奪回を決意した。九州の大名に動員命令を出した。１５０７年、前将軍義稙（義材）は大内義興・大友義長・少弐資元の三者の間に和平を求めている。

義稙（義材）の命によって少弐資元は大内義興と和睦し、少弐資元は「肥前守」とされて正式に肥前国主の座につき、千葉胤治・胤繁も晴気城に帰還が許されたという。一方、大内義興に味方した牛頭山の千葉興常は「屋形」号を許可された。屋形号は一国の国主クラスに与えられる称号であり、東国では武田氏・小笠原氏・佐竹氏・千葉氏・小山氏・宇都宮氏などに許されていた称号であった。

これに対して細川家では、政元の養子であった細川高国が義興と通じて細川澄元と対立・抗争し、永正５年（1508 年）３月に澄元は高国・義興らに圧迫され、足利義澄と共に近江に逃走した。

１５０８年７月、足利義稙（材）は将軍に復職した。大内義興は細川氏に代わり、管領代として山城守の守護を兼ねた。この将軍交代に対して、大友親治・義長父子は、大内義興と和議を結んだ。前将軍義稙（義材）の入洛の際には、原田興種も従い上洛している。

大友氏に抵抗していた星野重泰も大内義興の説得を受けたのであろう。この時、和解して、星野重泰は大友義長の一字をとり長泰に、子は大内義興の一字をとり興泰に、改名したと推察する。大友家の記録に『星野長泰違乱』として、『長泰』の名が記してある。

『三潴町史』によると義材の入京に、大内義興の同行者として相従う諸将の中に、島津貴久、大友義長、龍造寺家兼、星野親忠、渋川義基、犬塚、宇都宮の名が見える。
『黒木町年表』によると『１５０７年１１月、二万五千騎を引率して京へ向かう』とあり、その諸将の中に星野親忠の名が見える。星野一族を代表して親実、親忠が同行したのであ

る。

ところが、細川澄元らは京都奪還を目指してたびたび反攻（如意ケ嶽の戦い）してくる。永正 7 年（1510 年）1 月には大内義興は細川高国と共に近江に侵攻するが、逆に敗北してしまった。これにより足利義澄方は一大決戦を決意し、永正 8 年（1511 年）7 月には摂津に侵攻して決戦を挑んでくる。これに対して大内義興は高国と共に迎撃するも、摂津でも和泉でも敗北して丹波に逃走した。しかし 8 月 14 日に足利義澄が急死するなどの好条件にも助けられて、8 月 23 日に船岡山城の決戦で細川澄元軍を破り、京都を奪還したのである（船岡山の戦い）。このときの義興の活躍は相当のものだったようであり、永正 9 年（1512 年）3 月にはその武功により、従三位に昇位されて公卿に列せられた。また娘を足利義維に嫁がせ将軍家の親族ともなった。

大内義興は、１５１８年に管領代職を辞して帰国するまで、京都で勢力をふるっている。義興が不在の時には、大内氏と大友氏との間に争いはなかったようである。
しかし大内義興は次第に将軍・義稙（材）や細川高国と不仲になり、さらに領国の石見や安芸に対して出雲の尼子経久が侵攻を開始してきたため、永正 15 年（1518 年）8 月 2 日に管領代を辞して山口に帰国した。

筑後の星野親忠や正実の反乱（大内氏と大友氏の対立）

１５２２年、大友親安（義鑑）は筑後に出兵し、下筑後の川崎・溝口氏を討った。同年、大友義鑑は、問注所親照に長岩城から進出した井上城、その詰め城に立石城を築かせ、星野・秋月への前進基地にした。

１５２３年、これまで大友氏に従っていた星野親忠は妙見城に挙兵した。星野一族の不満は、星野親忠にもひきつがれたのであった。筑後の西牟田親毎はこれを援けている。

１５２４年、大友義鑑の後ろ盾であった祖父大友親治の死があり、一族の重臣の巧網親満の反乱が起こった。筑前の秋月種成は、大内氏に応じて、大友氏に叛した。筑前では、少弐資元が、大内氏に通じたということで、一門の筑紫満門父子を謀殺した。これが馬場頼周の仇討ちのことで、長年の恨みを晴らしたのである。(先述の馬場氏と筑紫氏の項参照)

１５２５年正月、大友義鑑は田北親員を将として、筑後平定に出兵させる。降伏し、大友方になっていた星野親忠は、黒木、上妻等と共に、大友幕下となり先陣している。大内の将陶晴賢も筑後に入り、大友氏に対抗した。星野正実は、これに応じて大友に叛している。大内方になっている星野正実とは興泰のことであろうか。

同年２月には、山崎（筑後立花町）で大友軍と大内軍の激しい戦いがあり、大友軍は溝口城を囲んだ。草野氏、溝口氏は降伏した。

同年３月、星野正実は、囲いを破って豊前に逃れ、大内氏の陣に入った。

同年９月、篭城していた西牟田親氏、川崎鑑実は落城と共に戦死し、大友義鑑は筑後・

秋月の叛徒をようやく平定したのである。

１５２６年３月、筑前の大友方の立花鑑連は、豊前馬が岳に布陣し、大内軍と戦っている。

１５２７年、大友方であった星野親忠は、豊後の佐伯惟治、肥後の菊池義国（義鑑の弟）に応じて、再度大友氏に背いた。大友方は、戸次親連等が来て妙見城を攻めたが、親忠を破ることが出来なかった。

田手畷の戦い

１５３０（亨禄３）年３月、義興のあとを継いだ嫡男・大内義隆になると大内家の全盛の時代で、その大内義隆は新将軍・足利義晴から遣明船の復活と少弐氏討伐の許しを得たので、筑前守護代・杉興運（おきつら）に対して、肥前攻撃を命じた。杉興運を大将とする軍勢に原田隆種のほか筑紫尚門、横岳資貞、朝日頼貫らの少弐一族が先陣として加わった。迎え撃つ、これまた少弐一族は、馬場頼周、江上元種をはじめ龍造寺家兼、横岳資貞、小田政光らであった。戦いは田手畷で行われ、一進一退の激戦となった。

杉興運が肥前に侵入すると、少弐資元は多久郡の梶峯城へと退いて静観し、嫡子・冬尚を勢福寺城の城将とした。冬尚（当時は松法師丸）の守る勢福寺城に迫ったため、龍造寺家兼に援軍を依頼する。

同年８月１５日、龍造寺家兼は裏切った朝日頼貫率いる杉興運軍先陣を撃破して頼貫を討ち取った。杉興運勢二陣の横岳資貞・筑紫尚門らの大軍が田手畷（三田川町田手）に現れたために龍造寺勢は徐々に後退した。この戦いの中で、龍造寺氏の家老・鍋島清久軍の異様な軍勢に大内軍は驚き、また不意をつかれ敗走した（後述）。杉興運方にいた千葉胤勝の父・横岳資貞や筑紫尚門は戦死し、杉興運軍は太宰府まで退却した。千葉胤勝はこののち少弐氏に降り、晴気城主に返り咲いている。

度重なる敗戦に業を煮やした大内義隆は、天文６年、みずから兵を率いて肥前に侵攻した。これにはさすがの少弐資元もたまらず、龍造寺家兼らの意見もあって、勢福寺城を開いて大内氏に降った。ところが、大内勢は少弐氏に対する手をゆるめず、少弐資元は多久城で殺害され、少弐冬尚は小田政光を頼って落去した。

その後、再起を図った少弐冬尚は龍造寺家兼に支援をたのみ、冬尚に不憫を感じた家兼は協力を承諾した。そして、冬尚を勢福寺城に復活させると、嫡男の家門を執政とし、馬場頼周と江上元種を補佐とした。

１５３８年、将軍義晴の調停で、大内義隆が筑前国の所領返還を条件に大友義鑑と和平し、北九州を制圧したので、筑前、豊前にも久しぶりに平和が訪れた。

１５４１年８月、大友義鑑は少弐冬尚と筑前で会合し、父祖いらいの旧交をあたためて冬尚への援助を約束した。

１５４２年２月、少弐冬尚は肥前千栗八幡宮に梵鐘を造進した。その鐘銘には馬場政員、馬場頼周、筑紫惟門、宗本盛、馬場周盛、江上元種、龍造寺剛忠、龍造寺胤栄、龍造寺日勇、龍造寺家門、小田政光の名が記されていたという。

龍造寺と鍋島の出会い

先述した**田手畷の戦い**で鍋島清久軍が異常ともいえる姿で大活躍をしたことを記したが、これが戦場での龍造寺と鍋島の実質的な出会いだったといえる。

戦況が不利に陥っていた龍造寺家兼（隆信の祖祖父）の中へ、赤熊（しゃぐま）をかぶった（伝説では鹿島の面浮立（めんぶりゅう）の起こりといわれる）援軍が駆けつけて、大内勢の杉興運軍に突入し、家兼勢を逆転勝利に導いた。赤熊の異形の軍団があらわれたとき、これを芸能集団とみた大内勢が手を休めた瞬間、突如大内軍に突攻したため、大内軍はさんざんに撹乱されて少弐方の大勝利となったのである。その赤熊隊が鍋島清久・清房（直茂の父）父子の一族であった。

鹿島の面浮立

家兼は、その恩賞として清久に本庄の領地を与え、清房には孫娘（隆信の伯母）を嫁がせた。その子が「鍋島直茂」で、隆信とはいとこであり、後に義兄弟のえにしともなっている。

再び鍋島清久・清房（直茂の父）の活躍（少弐氏と龍造寺の対立）

龍造寺家兼と一族は少弐氏を推戴しながらも、大内氏、大友氏らとも通じて、着々と勢力を拡大していった。この龍造寺一門の隆盛を危惧し、あるいは妬んだ馬場頼周は、龍造寺一門の排斥を企むようになった。そして、少弐資元が討たれたのは龍造寺家兼が大内氏に通じたからであり、こうして少弐氏の勢力が衰退傾向なのも龍造寺一門の横暴によるものである、とことあるごとに少弐冬尚（資）に話した。さらに、小田政光、神代勝利、千葉頼胤らを語らって、龍造寺討伐の謀略を練った。

一計を案じた馬場頼周は、有馬氏、松浦氏、多久氏らに謀叛を起こさせ、龍造寺一門にその討伐を命じることにした。

計画通り１５４４年、島原半島の城主有馬晴純が、上司である九州探題少弐冬尚に叛旗を翻して、杵島郡に侵入した。

龍造寺家兼は、少弐冬尚の軍令により、一族を上松浦、多久、杵島に分散させて反撃したが、多くの一門の武将や家臣が戦死し、自らも、長男家純、嫡孫周家（隆信の父）、次男家門、その子家泰が犠牲となった。ことは馬場頼周の筋書通りに運び、あとは仕上げをするばかりであった。

家兼は開城を条件に和議を結び、１５４５年１月、龍造寺家兼は、九十二歳の身で無念の思いで筑後柳川へ孫の鑑兼と、僅かな近臣をつれて逃れた。

筑後へ逃れていた龍造寺家兼は、一族がことごとく馬場頼周の手にかかったことを大いに憤り、佐嘉郡の鍋島清久・清房らは旧龍造寺家臣たちに働きかけて二千人を超す兵を集めることに成功した。１５４５年４月、龍造寺家兼たちを迎えて佐嘉郡川副郷鰡江の無量寺で挙兵する。これに杵島郡白石にいた千葉胤連が呼応して、まず水ヶ江城を攻略して本拠地を取り戻し、馬場頼周親子が修復していた祇園岳城に攻め寄せてこれを包囲した。馬場頼周は兵を督して防ごうとしたが、城を修復していた農民たちまでが頼周に刃を向けたために城を捨てて逃亡した。頼周の子・馬場政員は野田家俊の矢に倒れ、頼周もまた川上まで逃れてきたときに捕えられて斬首される。さらに馬場氏に味方した神代氏も攻め滅ぼし、一族の仇を討ったのである。この後、千葉胤連は龍造寺氏の客将となり、かつての名族・千葉氏も守護大名としての地位を失うこととなった。

１５４６年、龍造寺家の中興の祖といわれた家兼は乱世には珍しく、９３歳の永い生涯を全うした。

千葉氏の没落、千葉城残る

桜と「ようかん」で有名な小城の里には、千葉城、別名「牛頭山城」（ごずやま）があった。関東千葉の名族千葉氏の一族が、鎌倉時代１１８０年、源頼朝から平家討伐の恩賞として、この地の地頭職に封じられ城を築き、肥前の国司とまで言われるほど、在地の地位を高めたが東千葉と西千葉氏とに分かれた。

この城は当時の東千葉の本拠となったが、一族の反乱と謀略によって滅亡している。なお、西千葉氏の本拠は小城町畑田の「晴気城跡」である。

鍋島直茂のこと

のちに肥前佐賀藩の祖となった鍋島直茂は幼名を彦法師丸といった。天文 7 年（1538 年）、肥前佐嘉郡本庄村の在地豪族である鍋島清房の次男として生まれた。天文 10 年（1541 年）、主君・龍造寺家兼の命令により、小城郡の千葉胤連（九州千葉氏）の養子となり千葉氏を名乗る。しかし天文 14 年（1545 年）に少弐氏によって龍造寺家純らが殺され、家兼が逃亡したことにより、龍造寺氏と少弐氏が敵対関係になると、義父の千葉胤連は小城郡牛尾（小城町牛尾）に彦法師丸のために屋敷と所領として自分の隠居料の小城郡美奈岐八十町を譲って与え、譜代の十二士（鍵尼・野辺田・金原・小出・仁戸田・堀江・平田・巨勢・井出・田中・浜野・陣内）を彼の傅役とした。そして１５５１年、直茂の養子縁組を解消して実家の鍋島家に戻らせている。

家兼の死後、数年を経て隆信が龍造寺家を継ぎ、さらに隆信の生母である慶闇尼が父鍋

島清房の後妻として嫁いできたため、鍋島直茂は龍造寺隆信の従弟であると同時に義弟にもなり、隆信から厚い信任を受けることとなる。龍造寺氏は直茂の働きなどもあって、宿敵の少弐氏を永禄 2 年（1559 年）には滅亡に追いやっている。

第八部の四、後期戦国時代の九州、（九州三国志）

戦国時代（１４６７－１５７３）に続く安土桃山時代は１５７５年から１６００年にかけてであるが、それは実質的には戦国時代の延長線上にあり、後期戦国時代とも呼べる時代であった。その頃、１５５０年頃から１６００年にかけての九州は、まさに騒乱の５０年で、古代中国の三国志に因んで「九州三国志」と呼ばれている。魏・呉・蜀三国が死闘を繰り返したのに勝るとも劣らない陰謀・反逆・懐柔・殺戮・謀略が繰り返された悲惨な時代でもあった。

秋月氏も、当然この騒乱の中に巻き込まれる。しかし、家の断絶という悲劇はどうにか免れることができ、子孫は江戸時代に、新しい芽を吹き返す。それが上杉鷹山である。

以下、九州三国志を振り返ってみることとするが、役者は大内、毛利、島津の西国三大名のほか、大友、龍造寺やその他多数の中小大名たちであり、いずれも九州内部に舞台は限られていたが、主役は常に入れ替わっていった。

各地で異変の幕開け

１５４５年３月、筑後へ逃れていた龍造寺家兼は、千葉氏の内紛に乗じて、佐嘉郡川副郷の無量寺で挙兵する。水ヶ江城を攻略して本拠地を取り戻した。翌年、家兼は龍造寺隆信を還俗させるように遺言し、九十三歳で没した。隆信十八歳であった。

１５４８年３月、村中龍造寺の胤栄の病死より、村中家と水ヶ江家の惣領職をともに龍造寺隆信が相続することになった。

１５５０年、大友家の内紛が起こり、大友義鑑は家臣に斬りつけられ、それがもとで没する。二階堂崩れの変である。家督は大友宗麟が継ぐことになる。

１５５１年、大内家の当主大内義隆は、家臣の陶隆房（晴賢）に攻められ、自殺する。その後陶晴賢は毛利元就と厳島に戦って死ぬ。１５５５年には、毛利元就が勝ち名乗りをあげる。

秋月種実（古処山城）、筑紫惟門（筑前）は毛利方に通じて、反大友方として１５５５年に挙兵する。１５５８年に、大友方は毛利方の松山城（京都郡刈田）を攻める。その大友方のなかに、星野家の七人衆の筆頭樋口越前守の勇戦ぶりが、大友家の目にとまったと記してある。

以下、騒乱戦国期の様子を　①大友宗麟と毛利元就の抗争・和睦、②島津動く、③毛利再来、④島津対大友、⑤龍造寺の最後、⑥秀吉来襲に分け話を進める。

①　大友宗麟（義鎮）と毛利元就の抗争・和睦

少弐氏の滅亡

北九州は元々、鎌倉時代の元寇で総大将と言える活躍をし、大きな権力をもった「少弐家」という大名によって支配されていた。しかし、戦国時代の初期に大内家からの攻撃を受けて敗退し、北九州は大内家の支配下になっていた。

かって少弐氏は大友氏と共に九州鎮西奉行となり、当時の博多一万戸余を二人で分治し、少弐氏が西南の四千戸余、大友氏は東北の六千戸余を折半した。

その少弐氏は、永享５年（１４３３）、大内持世との合戦に敗れ大宰府を追われ、北部九州を転々としながら過ごし、大宰府奪還は少弐氏一族の悲願であった。

文明１５年（１４８３）と享禄４年（１５３１）少弐政資・資元がそれぞれ一時的に奪回しているが、大内義隆の攻撃を支えきらず、流転の生涯であった。

大内義隆は、少弐氏の執拗な抵抗を封じる為、天文五年（１５３６）、自身が大宰大弐の官職を許されて、少弐氏の重臣筆頭、龍造寺家兼（隆信の曾祖父）を味方に抱き込み、永禄二年（１５５９）には、少弐氏最後の当主となった少弐冬尚と龍造寺隆信との合戦に龍造寺を支援して滅亡させ、名家少弐家の再興の望みを完全に封じてしまったのである。

具体的には１５５９年１月、龍造寺隆信は勢福寺城に籠る江上武種に奇襲をかけた。その一月前に和平を結んだばかりだったので、不意をつかれた江上は夜陰に紛れて筑後へと逃れた。そして置き去りにされた城主・少弐冬尚は絶望の中で自害する。ここに鎌倉時代から続いた名族・少弐氏は滅亡し、代わって新興の龍造寺氏が北九州に勢力を広げていくことになる。

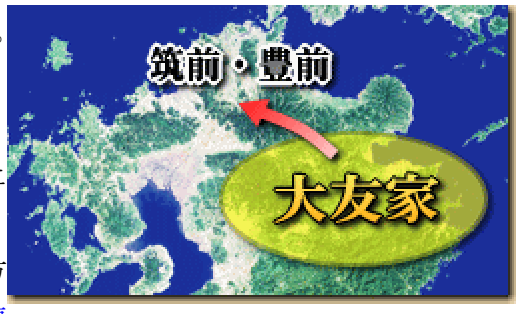
大友家の異変

１５５０年、「二階崩れの変」で、大友義鑑は深手を負い、家督を義鎮（宗麟）が継ぐことになった。「二階崩れの変」というのは、御家騒動

で、長男の宗麟をおいて義鑑は一番可愛がっていた三男を跡取にしようとする。当然家臣は反対するが、義鑑はどうしてもと強行しようとする。主君と家臣の対立である。

そこで義鑑は、反対する家臣を謀殺しようと彼らを屋敷に呼びつける。しかし、家臣も義鑑の意図を事前に察知。そして逆にこれを利用して三男の一派を亡き者にしようと、あえて義鑑の策に乗ったフリをして屋敷に向かう。

結果として、大友家の屋敷では、主君と家臣の血みどろの切り合いとなる。三男は殺され、義鑑も瀕死の重傷を負う。騒ぎを聞いて駆けつけた大友宗麟の前には、切り殺された多くの家臣たちの他に、死を前にした父義鑑が横たわっていた。その義鑑は、宗麟に跡を継ぐように遺言すると、そのまま息絶えてしまう。これが「二階崩れの変」と呼ばれるものである。



大友宗麟の登場には、このようにドロドロした背景があるが、跡取になった次の年１５５１年、早くも風雲急を告げはじめる。北九州と中国地方に大きな勢力を持っていた「大内家」が突如崩壊したのである。大内家の家臣で「西国一の侍大将」と呼ばれた武将「陶晴賢」がクーデターを起した。この突然の謀叛によって大内義隆は追い詰められ自害してしまったのである。

大内義隆の死と博多

大内氏の勘合貿易の独占によって、港町としての「黄金時代」を謳歌した博多に、突然異変が訪れた。

上述のように天文２０年（１５５１）９月１日、博多の支配者であり、博多商人の保護者でもあった大内義隆の変死であった。

西の京と呼ばれた山口で栄華の限りを尽くした義隆は、陶晴賢の謀反によって、防戦のすべもなく長門の「大寧寺」で自害した。

当然、その保護下にあった博多に影響を及ぼした。勘合貿易がこの時点で中断され、さらに通商が途絶えて非公認の私貿易が盛んとなり、日本海賊（倭寇）が再び中国・朝鮮沿岸を暴れまわった。博多がこれら略奪品の陸揚げ地となり、私貿易の根拠地となったようである。

当時、九州探題は大内氏によって九州を追われていた。大内義隆の死によって、大内氏は筑前から全面的に後退した。

山口では、主君を討った陶晴賢は、大内家の跡継ぎとして「大内義長」を擁立する。なんとこの人物は大友宗麟の実弟だったのである。大内義隆には子供が無く義長は以前に跡継ぎ候補として大内家に養子に入っていたのである。

ところが１５５５年、毛利元就が陶晴賢を厳島に破って勝ち名乗りをあげた。毛利元就は古くから大内家の配下であった。そして主君の仇討ちを名目に挙兵したのである。陶晴賢は大軍をもってこれを鎮圧しようとするが、毛利元就の計略にはまり海に誘い込まれ、瀬戸内海の水軍「村上水軍」の協力を受けた毛利軍が奇襲し、陶軍を壊滅させる。この「厳島の合戦」で、陶晴賢は追い詰められ自害。孤立した大内義長もその後、毛利元就に攻められ討ち死にする。

大内家崩壊の後、その領土であった中国地方は毛利氏が権利を主張し占領する。同じく大内家の領土であった北九州は、大友家が、一時的に弟の大内義長が大内家の跡を継いでいたこともあって、大内家の領土であるとの権利を主張して譲らない。

しかし、主君の仇陶晴賢を討ち倒し、旧大内領のすべての権利を主張する毛利元就は、北九州を諦めなかった。というのは、北九州には、大きな経済力を持つ当時屈指の貿易港「博多」があったからである。

１５５６年、秋月文種（または種方）が大友氏に叛した。大友宗麟これを討ち、高橋鑑種（あきたね）（一万田氏だが大蔵流高橋家へ養子入りした人物）を筑前岩屋城におく。

１５５７年、宗麟古処山城にて、秋月文種を殺す。筑紫惟門の五箇山城を攻め落とす。この年、宗麟は肥前の守護を補任される。また肥後の菊池義武を追いつめ、出家に追い込み、豊後への護送中に殺害する。

１５５９年には、大友宗麟は肥前・筑前・豊前を加えて六カ国の守護職になった。毛利元就は中国地方を平定し、秋には門司城を攻めて来た。大友方は田原親堅（紹忍、豊前妙見岳）、臼杵鑑速（筑前柑子岳）、高橋鑑種（あきたね）（宝満・岩屋両城）三氏により北九州の軍事支配を行っていた。少弐氏の被官であつた龍造寺氏が肥前に名乗りを上げ、筑前、筑後の進出を狙い、島津氏は南九州から北九州をうかがっていた。

門司城址遠景（関門橋は城址に突き刺さっているように見える

この頃の秋月氏の様子を見てみよう。

陶晴賢のクーデターで大内家の崩壊が始まった１５５１年から６年が経った１５５７年、大友家に抵抗し、毛利家の後援を頼りに独立を図ろうとする「秋月家」を大友家は打倒した。

秋月家は以前確かに少弐氏の家臣であったが、少弐氏が大内義隆と争って敗れたため、大内氏の家臣となり、1551 年に大内義隆が家臣の陶晴賢に殺された後は、豊後の大友氏の家臣となっていた。しかし 1557 年、毛利氏の勢力が北九州にまで進出してくると、当時の当主・秋月文種（または種方）は大友氏から離反して毛利氏と手を結ぼうとした。このため同年 7 月、文種は２万の大友軍の猛攻に遭って討ち死にし、秋月氏は一時、滅亡してしまった。文種には四人の嫡男がいたが、長男の春種は父親とともにこのとき討ち死、残り種実、種冬、種信の三人の少年達は毛利元就を頼って山口へ落ち延びた。

船に乗って毛利家へと逃れた秋月文種の跡継ぎ「秋月種実」は、毛利元就の長男と義兄弟になり、毛利家に九州に帰還するための支援を要請する。秋月家の復権はその後に実現するが、そのキッカケを作ってくれたのは毛利家である。２年後の１５５９年、毛利家は旧大内家の権利と、北九州の諸勢力の支援を大義名分とし、九州と中国地方の間の「関門海峡」に出っ張るように存在していた最前線の城「門司城」に大軍を持って攻撃し、ここを占領してしまう。

毛利家との対話を続け、毛利家が北九州に攻めてこないという約束を取り付けていた（と思っていた）大友宗麟は、虚を付かれたのである。

怒った大友宗麟はすかさず軍勢を集め、数万の大軍で自ら門司城奪還に向かう。しかし、毛利家の勇将「乃美宗勝」や「小早川隆景」、さらに水際での戦いに長けている毛利家の水軍「村上水軍」の攻勢により大友軍は敗退する。門司城の奪還は失敗したのである。しかも、退却中、小早川隆景率いる水軍が海路で大友家の退却路に先回りし、退却中の大友軍を襲撃した。これにより大友軍は大被害を被る。「門司合戦」と呼ばれているものである。この大敗は大友宗麟にとってかなりショックだったようで、この戦いの後、宗麟は出家してしまう。彼の本名は「大友義鎮（よししげ）」というが、このときに出家により、名を僧名の「大友宗麟」に改めたのである。

「門司合戦」で毛利家に負けてしまった大友宗麟は，この後、作戦を「外交戦」に転換する。

１５６２年正月、大友宗麟は将軍義輝に毛利元就の悪逆非道の行為の停止を訴えて、将軍に黄金五十両を贈って、その収拾斡旋を頼んだ。また、毛利家の中国地方のライバルである大名「尼子家」に連絡、対毛利家の連絡を取れるよう画策する。翌年、将軍義輝は大友、毛利の和解を勧告している。

１５６４年４月、筑紫勢と豊後勢の戦いがあった。筑紫勢は大友宗麟に破られている。第二次侍島の戦いである。（第一次は１５５９年、大友宗麟が筑紫惟門を攻めたが、筑前侍

島（今の筑紫野市）の合戦で敗れた戦い）

同年７月、大友宗麟は毛利との間に講和をようやく成立させ、少弐政興を擁して、肥前の諸豪族に呼びかけた。また宗麟は元就の子で小早川隆景の養子となっていた秀包を娘婿とした。大友方は毛利方の香春岳ほか豊前、筑前の数城を回復し、筑前からも毛利勢力を一掃した。しかし、毛利家は九州からは撤退したものの、前線基地である「門司城」はそのまま保持する。北九州の反大友勢力も、毛利家の支援を得て活発化しており、それは再び北九州に大きな戦乱をもたらすことになる。その前に毛利方は尼子攻撃に専念出来るようになった。

臼杵城について

臼杵城は臼杵湾に浮かぶ周囲４ｋｍの丹生島に永禄５年(１５６２)大友宗麟が着工。翌永禄６年(１５６３)に完成すると、大友宗麟はこれまで大友氏代々の居城であった府内城(大分城)から臼杵城に本拠を移した。

臼杵城は南蛮貿易の基地として最適な地であった。この城で大友宗麟は最盛期を迎え、豊前・豊後・筑前・筑後・肥前・肥後の６ヶ国と日向・伊予の一部を支配する大大名となった。

大友宗麟の後を継いだ大友義統(よしむね)が文禄の役(豊臣秀吉の朝鮮出兵)の際、敵の大軍来襲の報せに前線より逃走したことから秀吉によって改易されると、文禄２年(１５９３)臼杵城には石田三成の妹婿福原直高が６万石で入城した。

福原直高が府内城に居城を移すと、太田一吉が３万５千石で臼杵城主となるが、慶長５年(１６００)の関ケ原の合戦に際して、太田一吉は石田三成方の西軍についたため臼杵城を追われ、同年稲葉貞通が郡上八幡から５万石で入封。

稲葉氏は２代にわたって兵火で荒廃していた臼杵城と城下町を修復し、以後、臼杵城は稲葉氏１５代の居城として明治維新を迎える。

臼杵城空掘跡と「国崩し」

②　島津動く、１５４０－１５７４年南九州での騒乱

島津氏一族と国衆

島津氏は、室町時代から薩摩・大隅・日向三カ国の守護職を有していたが、その支配はまったく不均質であった。大隅・日向は国人領主連合による地域秩序が形成されており、薩摩では島津家当主と一族の結束が図られながら支配が行われていた。

１５２７年に島津勝久が相州家島津貴久に三カ国守護職を譲与するが、それを機に三カ国は内乱状態に入った。

こうした状況が長く続く中で大名権力中枢の結束が図られる。１５５２年１２月に島津貴久、その弟で大隅帖佐領主の忠将、豊州家の忠親、薩摩給黎郡領主の喜入忠俊、樺山幸久、北郷忠豊、同忠相の七名が三ヶ条の起請文に連署したのである。

以後の動向をみると、国衆らは次第に大名権力のもとに編成されていく。そうした動向について、島津氏の支配に最後まで対抗し、１５７４年になってようやく服属した肝付氏の動きを述べる。

肝付氏は、大隅国肝付郡の弁済氏であったが、一族を大隅国内各地や日向南部に分出し、戦国時代には、肝付兼続は日向の伊東義祐（よしすけ）らと盟約し、豊州家島津忠親を破って戦国大名化する。本拠は高山城であるが、島津忠親から志布志城を奪取して著名な国際貿易港を新たな拠点としている。

ついに肝付氏庶子家の兼盛らは島津貴久に敵対し加治木城に立て籠って合戦する事件が発生するが、それは穏便に処理されたようである。

こうした歴史的前提を経て１５５２年の島津氏一族の連署起請文は成立したのである。この後、肝付兼盛は、１５６２年には伊集院忠倉・村田経定・河上久朗らの老中職に加わっている。

その後、島津氏の勢威が大隅国内に浸透するなか、海陸ともに肝付氏討伐の軍が起される。その結果、肝付兼亮（かねすけ）はついに服属し、１５７４年に島津氏老中伊集院忠棟宛てに三か条の起請文を提出する。

こうして薩摩・大隅の統一をやっと果たした島津氏は、北郷氏らの協力をえて、飫肥（おび）をめぐって長年合戦を続けてきた日向の伊東氏との決戦に向かうのである。

上述の島津貴久が先代島津日新斎の跡を継ぎ、島津家の当主となるのは１５６１年のことである。日新斎のころには、肘付氏との確執でまだ苦しんでいたが、貴久の頃になると、島津家は安定大大名に成長していた。

日新斎の頃の出来事で、歴史に残る一つの大きな事件が発生している。それは１５４３年の未知の新兵器「鉄砲」の伝来である。

種子島に漂着したポルトガル人が持っていたこの鉄砲を、種子島の有力者「種子島時尭」が大金をはたいて購入、これが薩摩にも伝わり急速に実用化されたことである。

１５５４年ごろに薩摩国内で起こった、島津家と島津家に対抗する勢力の合戦で、既に鉄砲の撃ち合いが起こっていたのである。つまり、島津家が戦国時代の大名家の中で、もっとも早く鉄砲を使った戦いをしていたのである。

そして、薩摩を治める為の激しい戦いが繰り返されたことと、新兵器をいち早く活用できたことは、その後の島津家の戦力の向上に大きな影響を与えることになる。

酒のケンカが発端で

島津貴久の時代になったある日のこと、「肝付家」と島津家の間で、宴会がもようされることになった。肝付家は島津家とすでに友好的な関係で、互いに娘を嫁がせたりして縁戚関係にもあり、島津家が薩摩の支配を固める際の戦いでも、肝付けは支援を行ってきた。しかし、この宴会の席でケンガが起こり、両家は激突することになる。

記録によると、酔っ払った島津家の家臣が「鶴の吸い物が欲しいものだ（鶴は肝付家の家紋)」といったところ、肝付家の家臣が「次の宴会では狐の吸い物を出して貰おう（狐は島津家の守護神)」と返したことで口論に発展、そのまま大喧嘩になってしまったという。

しかしこれ以前から両家では何かのわだかまりがあったようで、それが酒に酔った勢いで出てしまったのが原因だったようである。

宴会の後、肝付家の当主「肝付兼続」はすぐ城に戻って合戦の準備を開始する。この話を聞いて驚いたのは、肝付家と長い間友好関係を保ってきた島津日新斎である。日新斎はすぐに肝付兼続の怒りを納めて事を穏便に済まそうとするが、兼続はもはやこれを受け付けない。

結局、当主の島津貴久は合戦を決意し、島津軍と肝付軍は戦いに突入することになるが、肝付家は友好関係にあった日向の大名家「伊東家」に救援を要請し、ここから大事に発展する。そして伊東家がさらに、友好関係にあった肥後の大名家「相良家」に協力を要請した為、参戦する勢力が巨大化していった。ついに宴会の酔っ払いのケンカは、南九州全土を巻き込む戦乱へと発展していったのである。

戦いは当初、肝付軍が優勢に展開、島津貴久の弟も戦死し、島津軍は一旦撤退する。伊東家の軍勢も肝付軍とともに島津家に侵攻を開始、挟撃を受けた島津家の城は次々と落城していき、島津軍は防戦気味の展開となっていく。

開戦から３年ほどたった頃、合戦での激務が祟ったのか、肝付兼続は病に倒れる。そして２年後には病死してしまう。そして肝付との開戦から１０年後の１５７１年、ついに島津家の当主「島津貴久」も病死してしまう。こうして島津家の当主は貴久の子「島津義久」となり、ここから島津家は大きな飛躍を遂げていくことになる。

１５７１年、島津家の当主「島津貴久」が病死したことを、肝付・伊東・相良の同盟軍はチャンス到来と判断。翌年、共同で大規模な進軍を開始、島津領に侵攻していく。

島津家は肝付の侵攻に対して防御を固めるが、伊東家・相良家が進軍しれ来る北東方面には、少数の兵士しかいなかった。伊東軍だけで３０００人、それに対し島津家の前線の

城にいた兵士は３００人しかいなかった。
　しかし、この城を守っていた武将こそ、名称として知られる「島津義弘」であった。「勝敗は数の多少ではない。一丸となって勇気を持って戦えば、必ず勝てる」と島津義弘は伊東家の大軍の前にたちはだかる。

　島津義弘は、相良家が進軍してくる西北方面に数十人を派遣し、軍旗をたくさん立てかけて大軍がいるようにみせかけ相良軍の進軍を遅らせると、各所に伏兵を配置して伊東軍を待ち構える。数に勝る伊東軍は一気に島津家の城を攻略しようと、前線の城を包囲していっせいに攻め立てるが、後のない島津軍の必死の奮戦で攻撃は失敗、そのため伊東軍は一旦後退して相良軍の到着を待つ。
　しかし、相良軍は来ない。相良軍は大量に立てられた島津家の軍旗を見て、島津の援軍が来たかと思い引き返していたのである。伊東軍の油断を見た島津義弘は本隊を率い、伊東軍に突撃を開始する。しかし島津義弘の部隊が百数十人なのに対し伊東軍は三千人。多勢に無勢で島津軍は敗退し、そのまま後退することになってしまう。すかさず伊東軍はいっせいに追撃を開始する。しかしこれこそが敵をおびき寄せて敵を殲滅する島津家の得意戦法「釣り野伏」であった。後退を続けていた島津義弘の部隊は突然停止すると、反転して反撃を開始。同時に周囲から伏兵が一斉に現れて伊東軍を四方から包囲する。伊東軍が窮地を悟った時には既に遅く、伊東軍はそのまま崩壊し、総大将も戦死してしまう。さらに島津家の本国から来た援軍がちょうど伊東軍の敗走部隊に追いつき、伊東家は大被害を出す結果となってしまった。

　少数の部隊だったためか、島津義弘も戦いの中で何度も窮地に陥っている。しかし、島津家には家臣が「死ぬまで戦って大将を逃がす」という決死の戦法「捨てがまり」があり、多くの犠牲を出しながらも、島津軍は最後まで踏みとどまったのである。こうした島津兵の強さと結束の固さは、後に全国で語り草となる。
　この戦いの後、多数の将兵を失った伊東家は、その被害を回復することが出来なかった。島津家の攻勢により、事実上、伊東軍は壊滅し、結果的に肝付家よりも先に倒れることとなる。
　伊東家の支援をなくした肝付家は以後は防戦一方、合戦に長けた島津義弘・家久・歳久の兄弟の攻勢をとめることも出来ず、敗退を続け衰退していくことになる。
１５７４年、肝付家は降伏。薩摩・大隅と日向を支配した島津家は一気に勢力を拡大、こうして南九州の覇権を得ることとなった。

③　毛利再来、肥前の龍造寺台頭。１５６７－１５７０

南九州で島津家と肝付家・伊東家の戦いが佳境に入っていた頃、北九州では、大友家がその勢力を大きく伸ばしていた。毛利家に占領された北九州の土地を朝廷への外交手段で取り戻した大友宗麟は、さらに北九州で反乱を起した勢力を鎮圧していく。豊後から肥後の北部、北九州の豊前・筑前まで広がる大きな範囲を支配下とするようになる。

大友方立花鑑載、高橋鑑種、大友本家に叛旗を翻す

永禄８年５月（1565）立花鑑載は大友家に叛乱する。大友氏にとっては晴天の霹靂であった。宗麟は直ちに戸次鑑連、吉弘鑑理を征伐に送り鎮圧、鑑載は一旦は降服する。

１５６７年７月、岩屋・宝満山城監督の高橋鑑種が毛利氏に通じて秋月・筑紫氏と結び、大友氏に反旗を翻した。鑑種は宗麟がもっとも信頼を寄せる将であった。鑑種謀叛の原因は、兄弾正の妻に化想した宗麟が弾正を殺害したためという。次項で述べる。

好事魔多し、宗麟、他人の女房に横恋慕。

大友家には「一万田親実」とう家臣がいて、その奥さんは大変な美人であったという。彼女に一目ぼれしてしまった大友宗麟は、その家臣を追い詰めて謀殺し、その妻を自分のものにしてしまった。

これに怒ったのが大友家の家臣で合戦での功績も高かった一万田親実の弟「高橋鑑種」である（高橋鑑種は養子に入っていたので苗字が高橋だが一万田親実の実弟）。人妻目当てに兄を殺された高橋鑑種はこの一件を理由に、大友家からの独立を宣言、離反してしまう。

しかも、この高橋鑑種の離反を皮切りに、北九州の多くの諸勢力も次々に離反していく。さらに、大友家に一度壊滅させられ、毛利家に逃れていた北九州の名家「秋月家」も挙兵し、毛利家に救援を要請する。まだ北九州を諦めていなかった毛利家は早速反大友側の勢力に支援を開始する。こうして北九州の動乱は再燃しはじめた。

実際には、高橋鑑種の離反は以前から噂されたいたものであり、毛利家にもかなり前から内通していたようである。きっかけは大友宗麟が兄妻を奪った一件だが、それ以前から既に離反の計画はあった模様で、毛利家が裏で手引きしていた可能性も否定できないという。

また、この頃から大友宗麟は「キリスト教」を信仰し始める。もともと彼がキリスト教の布教を許したのは「南蛮貿易」を目当てにしたものだが、徐々に大友宗麟自身もキリストの教えに傾倒していった。

しかしそのために家臣の間では宗教論争や、それに起因するトラブルが起こっており、

これらも北九州で離反があいついだ要因の一つになったようである。

高橋鑑種の大友氏に対するクーデターには毛利元就も驚いたとが伝えられている。永禄５年（１５６２）、石見を制圧しおえた毛利氏は、７月に出雲にむけ大挙侵入するが、その進軍の途上、元就・隆元父子のもとに意外な知らせた入る。大友氏の筑前計略の中心人物であった宝満・岩屋両城の城監高橋鑑種が、毛利氏に一味する用意があることを内々に伝えてきたのである。勿論毛利氏から誘いをかけた結果ではあったが、「高橋存じも寄らざる儀申し越し候」と父子が言うように、まったく期待していなかっただけにその驚きぶりはひとしおであった。

大友一門一万田氏の出身で筑前の名族大蔵流原田一門高橋氏の名跡を継いだ鑑種は、一時大内義長の奉行人となって防長に赴き、そののち筑前古処山城を攻略し秋月文種を滅ぼした際の軍功により、宝満・岩屋両城を預けられ、筑前の方面軍司令官とも言うべき立場についていた。

毛利氏は鑑種を支援し、大友・毛利の和平は破れ、龍造寺隆信も大友氏に反し、毛利氏に通じたのである。

反大友陣営に新たに龍造寺家が加担

肥前の勢力である龍造寺家は、元はこの地方を治めていた大名「少弐家」の配下であった。

しかし戦国時代の初期、龍造寺家が少弐家の敵に内通している疑いがあったことや、龍造寺家の当主「龍造寺家兼」が政務でも軍事でも活躍をして大きな力をもったことなどに、少弐家はその存在に危険を感じ、ある日龍造寺家を襲撃する。こうして龍造寺家は一族のほとんどを殺され、領地も失い、没落していた。

しかしその後、龍造寺家の遺言でその跡を継ぎ、龍造寺家を再興させたのが、後に「肥前の熊」と称される勇猛果敢は大名「龍造寺隆信」である。彼はお寺に奉公に出されていたので、龍造寺家が急襲されたときに、その難を逃れていた。

龍造寺家を継いだ後も、家臣の反乱で国を追われるなど危機的な状況が続いていたが、子供の頃から怪力で腕っぷしが強かった龍造寺隆信は、敵対勢力を打倒して龍造寺家の領地を奪還していった。その後はますます勢力を拡大し、ついに元の主君である「少弐家」も滅亡させ、再び龍造寺家を肥前の有力勢力へ発展させた。

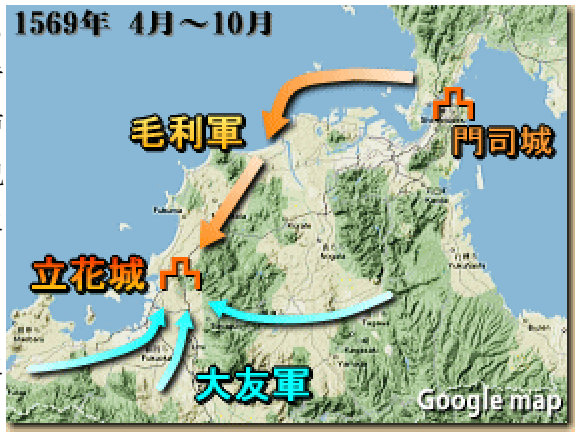
そして北九州で多くの勢力が大友家から離反すると、大友家と対立していた龍造寺家もこれに参加し、反大友陣営の一つとして大友軍と敵対する。１５６８年、４月、龍造寺隆

信、佐賀城に大友氏に叛して、挙兵する。
　龍造寺家を早期に抑えるべく、すかさず大友軍は肥前に進軍してくる。
ところが、永禄 11 年 2 月（１５６８）立花鑑載が再び大友家に反旗を挙げる。この頃大友氏を取り巻く情勢は、永禄 10 年 7 月（１５６７）の宝満城高橋鑑種の謀反をきっかけに、永禄 10 年 8 月より 9 月の秋月討伐での、9 月 3 日秋月種實夜襲戦（休松合戦）における大友軍の実質敗戦などに伴い、毛利方の干渉が一段と強まっていた。
　筑前筑後では秋月、麻生、筑紫、宗像、原田といった國人領主たちの反大友の輪も広まっていた。

　永禄 11 年 4 月（１５６８）中国毛利軍は、筑前原田、高橋鑑種らに先導され清水左近将監率いる八千余騎芦屋に押し寄せる。これに筑前宗像、豊前麻生といった多くの諸将応じ参陣した。状況を見計らっていた鑑載は再び反旗を挙げ毛利に支援要請。
　この頃までは現地における大友氏と反大友氏勢力の動きが先行し、万事対応が後手に回った毛利氏であったが、伊予に出陣していた吉川元春・小早川隆景が 6 月に安芸へ帰陣すすと、両将は休むまもなく豊筑方面に出陣し、やっと反大友勢力と連動して北九州経略に本腰を入れることとなったのである。
　毛利勢は 8 月中旬から相次いで渡海し、 9 月はじめに足立山（北九州市小倉北区・小倉南区）に陣をすえ、長野氏一門が拠る三岳・宮山・等覚寺の諸城を攻め寄せた。 9 月 4 日に小三岳が陥落したのに続いて大三岳の主郭が落ち、長野宏勝が佐波隆秀（さわたかひで）に討ち取られたほか、篭城した多数の人々が殺害された。同月 5 日までには宮山・等覚寺の両城も攻め落とされ、長野氏は壊滅した。
　ついで毛利氏は筑前に直臣の佐藤元実を送り込んで馬見城（嘉麻市）を占拠させ、秋月氏への支援態勢を強化するとともに、豊後・筑前にいたる通路の制圧を図った。また毛利方諸城への兵站基地とすべく、筑前植木荘（直方市）の地を確保した。同地に赴任した佐藤元実は、以後兵粮の輸送や陣夫の調達などで手腕を振ることとなる。遠賀川流域の水運および陸上交通の掌握が毛利方の基本戦略だったのである。
　大友方には元春・隆景が三岳落城後すみやかに立花城へ攻め寄せるとの憶測もながれたが、両将は肥後菊池氏・相良氏など諸方に調略の手を伸ばして、さらなる反大友勢力の糾合につとめつつ、立花城の形勢を慎重に伺いながら、その攻略の準備をすすめていた。

　立花鑑載の反旗の気配は、立花城重臣薦野城薦野三河宗鎮、米多比大学に悟られていたが鑑載は二人を酒宴の席で謀殺してしまう。鑑載は白岳を守っていた怒留湯融泉（戸次一族）をも襲うが融泉は落ちのび大友へ急報する。
　鑑載の兵力は毛利の支援清水左近将監の八千に、立花勢、原田、高橋勢など筑前の加勢合わせて一万余。これに大友軍は豊州三老、鑑連、鑑速、鑑理に志賀道輝に率いられた二万三千で立花山を囲む。

永禄 11 年 4 月 24 日（１５６８）攻撃開始、立花勢は小勢ながら激しく抵抗、戦いは熾烈を極め崖下の戦いでは、鑑連は至近距離から弓で射抜かれそうになり、家臣が身を以って盾となり一命を拾う。この窮地は、戸次刑部ら戸次の手勢が駆けつけ切り抜ける。こうした戦況の中、鑑連は鑑載の将野田右衛門大夫と密かに内通する



右衛門は大友軍を大木戸へ誘導、これにより木戸を破った大友軍は城内へ雪崩れ込む。遂に立花城は陥落。支援の毛利勢清水左近らは引き上げる。

立花鑑載は、僅かな手勢で落ち延び。一旦北へ向かい古子山で体制を整えようとするが叶わず、海を目指して逃げようとするも、野田右衛門が察知する。
これを鑑連の手勢八千余が追い詰め、鑑載は山中に入り腹十文字に掻切り、喉突き刺し、立ちすくんで死ぬ。

１５６９年正月、大友宗麟は高良山に本陣を置いた。龍造寺隆信討伐のために宗麟は戸次鑑連（のちの立花道雪）らを指揮官として豊後の朽網氏、吉岡、斉藤、一万田氏、筑前の蒲池氏、田尻氏、溝口氏、三池氏、問註所氏を主兵力とする討伐軍を派遣した。

同年３月、一部の兵を生葉郡妙見城に拠って大友氏に反抗する星野鎮忠を攻める。しかし、容易に落城しなかった。そして、星野筑後守（鎮忠）は島津氏に従うようになる。筑紫広門は宗麟と和し、大友軍として、龍造寺軍を攻めている。

同年４月１５日、筑前では毛利軍は立花城下を包囲し攻めた。この知らせを高良山で聞いた宗麟は、２月以来、戦っていた龍造寺隆信と和を結び、戸次、臼杵、吉弘の三将を肥前より引き揚げ、立花城救援を命じた。降伏寸前だった龍造寺隆信は弟鍋島房重を人質として差出し、和平条件を受け入れた。隆信は一旦和議を成立させたが、大友軍が筑前で戦っている間に、肥前における大友方の諸城を再び攻撃したのである。

立花城の攻防

立花城はもともと 1330 年、当時豊後を治めていた大友貞宗の子、大友貞載（後の立花貞載）によって立花山山頂に築かれた。貿易港博多を臨む立花城

を手中にすれば、同時に多大な利益が手に入るとあって、戦国時代には多くの武将がこの城を狙った。

最初に食指を動かしたのは中国地方の大名、大内義隆。九州進出をもくろむ義隆は 1532 年、立花城を攻め落とし自領とした。しかし義隆の死後は大内氏の勢いが衰え、立花城は再び大友氏の手に戻る。城主には七代目立花鑑載が任ぜられる（大友氏一族）。

ところが立花鑑載は先述の通り１５６５年、主君大友宗麟と不仲となり敵対する。大友宗麟は、この頃黄金時代を迎えてもっぱら遊蕩淫楽にふけり、性格的に奇矯な面が多く、特に好色ぶりは並外れていたといわれている。立花鑑載の反逆は、そんな宗麟への批判から生じたのかもしれない。

怒った宗麟は戸次鑑連（後の立花道雪）・臼杵鑑速・田原親堅らに二万三千騎をつけて鑑載討伐と立花城奪還を命じた。数カ月に及ぶ激戦の末鑑載を自刃させ、立花城は三たび大友氏の手に戻る。　１５６８年のことである。

毛利元就は、その時すでに実子の吉川元春、小早川隆景が率いる約四万人の軍勢を北九州に差し向けていた。門司に上陸し、途中大友氏の城を落としながら福岡方面に向かう毛利軍は、翌１５６９年、ついに大軍をもって立花城を包囲する。立花鑑載は既述の通りすでに大友軍に討ち取られており、立花城は大友軍が守っていた。

毛利元就の軍勢約四万人が立花城に迫る中、立花の城側もよく守ったが、城内の飲み水や食べ物が底をついてしまう。一方、大友宗麟は高良山に本陣を構え龍造寺との合戦中であり、筑前の高橋・秋月討伐も手がけ、その上、立花城援軍もせねばならず、三方に展開する羽目になってしまっていた。結局、主力が未だ佐賀で龍造寺と戦いの最中とあって立花城への援軍が間に合わず、ついに立花城は毛利の手に落ちた。立花城落城の急報で駆けつけた大友勢は三万数千人。立花城のすぐ西方の多々良浜に到着した。彼らはここで博多湾に流れ込む多々良川を挟んで毛利勢に対峙することになる。後に言う「多々良浜合戦」の始まりである。

多々良浜合戦（１５６９）

（足利尊氏と菊池氏との間で１３３４年におきた合戦にも「多々良浜合戦」の名があるが、それとは別である）

その一（５／６）

大友勢は戸次道雪の指揮で長尾に陣取る毛利勢に仕懸かけた。この時、道雪自身が槍をとり駆けた。また田尻鑑種の奮戦目覚しく、後日、大友宗麟より賞されている。

その二（５／１３）

毛利軍の先鋒部隊は多々良川を渡り松原近辺に進軍し、周辺に火を放った。この時、大友軍と四回交戦したが勝負はつかず、毛利軍は香椎方面に引き揚げた。

最大激戦日（５／１８）
　毛利両川は四万を出撃させ松原に進軍した。これに対して戸次道雪・臼杵鑑速・吉弘鑑理ら大友三将は、一万五千の兵を三手に分け先陣とし、脇備えに志賀氏・田原氏・朽網氏・一万田氏・清田氏・木付氏・利光氏ら豊後勢と、江上氏・草野氏・星野氏・三原氏・薦野氏ら筑後勢ら、豊筑両国衆二万余騎を配置した。両軍合わせて参戦兵数八万人にのぼる九州の歴史の近世における最大の合戦規模であった。
　道雪隊の法螺により大友軍は前進を開始、槍衾で撹乱し、騎馬による突撃という作戦であった。道雪は果敢に攻撃し、そのため毛利の楢崎氏・多賀山氏ら両隊が危機に陥った。これを見た毛利両川は危機の両隊を訪れ、粥と水を振る舞い、激励した。矢合わせして数刻、毛利軍の鉄砲隊の効率的な攻撃により次第に大友方が劣勢となってきた。しかし道雪は冷静に、長尾に陣取る毛利の小早川隊の左翼が手薄な事を見ぬいた。道雪はすかさず虎の子の八百の鉄砲隊に、そこに射込ませた。
そして道雪も自ら刀を抜いて小早川隊に斬りこんだ。
　これに続いて十時氏・安東氏・由布氏・原尻氏・後藤氏・足達氏・森下氏らもあとを追って斬りこんだ。そのため、押された小早川隊は東に向かって退いた。そのせいで、毛利全軍も小早川隊の後退に合わせ、三丁ほど後退した。他の大友勢も道雪隊の勢いに触発されて次々毛利勢を追いたてた。勢いに乗った大友軍は、軍鼓と法螺をけたましく鳴らし、気勢を上げた。そのため毛利両川は、たまらず一時退却を決断。立花に向かって退いた。その後も大友軍と毛利軍は多々良川を挟んで、１８回の矢合わせを行う事になる。しかし、この日の合戦で奈多政基が討ち死にしている。
◆大友軍の一隊、新宮浦にて毛利軍の補給作戦を叩く（８／２５）
　新宮浦にて補給物資の陸揚げ作業をしていた毛利水軍と宗像軍であったが、これを大友軍に察知され、襲撃を受けた。
◆大友宗麟、豊後に帰陣（９／）
　５月１８日の合戦以来、何度となく大友軍と毛利軍は交戦したが、決着はつかず膠着状態となっていた。そのため、吉岡宗勧は大友宗麟に奇襲作戦の指揮のため豊後に帰陣する事を進言した。そのため宗麟は高良山の本陣を引き払って帰途についた。
　この宗麟の帰陣は、毛利陣地に大友側の余裕の行動として噂が伝わった。
老齢の毛利元就は長府にあって、安芸国に帰陣する事もままならず、宗麟の豊後帰陣の報に接した。
◆大内輝弘、大内家督の認可状を手に合尾浦に上陸（９／）
　豊後に帰国した大友宗麟は、大内家で政争に敗れ、大友氏に亡命した大内輝弘・武弘親子を呼び出し、海路で山口にのり込み、撹乱する奇襲作戦を打ち明けた。
その際、宗麟は足利将軍家よりの大内家督相続の認可状を輝弘に渡した。
これに喜んだ輝弘は、大友よりの援兵六百を引き連れ、若林鎮興ら大友水軍、軍船百艘に護衛され吉敷郡秋穂浦に上陸した。その後、大友水軍は毛利水軍の補給船や港を攻撃し、

毛利軍の兵站線を遮断する作戦にでた。
この海戦で毛利側の将、市川経好が討ち死にし、毛利勢は甚大な被害を受けた。
◆毛利元就愕然。大内輝弘、高嶺城を奪回する（１０／１２）
　山口に進軍する大内輝弘のもとに、次々大内の旧臣が馳せ参じ、三千までふくらみ、その輝弘軍の勢いの前に、遂に高嶺城は落ちた。また時を同じくして、出雲の尼子氏の遺子、尼子勝久は山中鹿之助に擁立され、大友氏の援助を受け、五千の兵で今は毛利領となった出雲に乱入し、月山富田城に進軍した。この事態に、長府の本陣の毛利元就は驚愕した。元就は涙を飲んで、立花表に布陣している毛利両川に撤退を命じた。
◆西国分け目、多々良浜合戦の決着。そして毛利軍の撤退
　１０月１５日夜、乃美宗勝・桂元重・坂本祐を立花城に残して全軍が撤収を開始するが、これを察知した大友勢が宗像まで追撃する。どうにかこれをかわして芦屋にたどり着いた毛利軍は、ここから乗船して１８日に長府へと帰着した。
　立花城に残った乃美宗勝らは、その後一ヶ月あまり持ちこたえ、防長両国で毛利氏が大内輝弘とその与党を掃討するのを見届けた上で下城し、無事帰国した。毛利軍が門司城一箇所を残して豊筑から完全撤退したため、両国の国人達は相次いで大友氏への降伏を余儀なくされる。高橋鑑種については所領を召し上げられた上豊前小倉に移され、宝満・岩屋両城には高橋氏の名跡を継いだ吉弘鑑理の子鎮種が入城する（のち高橋紹運）

　その後毛利氏は東方から進出してきた織田信長との戦いに追われ、ついに九州進出を断念。つかの間の平和が立花城に訪れる。１５７１年、戸次鑑連（立花道雪）（＊）が立花城主となる。
　大友勢はその後、立花城に戸次鑑連（立花道雪）、宝満・岩屋城に吉弘鎮理（招運）、柑子岳城の臼杵鑑速の三人組により、北九州の支配を行った。

　立花城に関する後日談であるが、戦国末期の天正 14 年（１５８６年）７月末、当時弱冠 20 歳の立花統虎（のち立花宗茂に改名。柳川藩藩祖）がこの立花城に篭もり、実父高橋紹運の岩屋城を落とした島津氏約 4 万の侵攻に徹底抗戦した。
　豊臣秀吉の九州征伐により立花氏は筑後国柳川城へと移封となり、新たな城主として小早川隆景が入城するが、堅固な守るための山城である立花山城はその存在意義を失い、名島城築城後は支城となり、その後黒田長政が１６０１年に福岡城を築いた後は廃城となってしまった。
　なお福岡城の石垣は主に立花山城から石垣を移築して作られた。現在は山頂の本丸跡にわずかに石垣跡、そして古井戸跡が残るのみである。

（＊）立花 道雪/戸次 鑑連（たちばな どうせつ/べっき あきつら）について
　大友氏の重臣として各地を歴戦し、戦国大名大友氏の全盛期を築き上げた。耳川の戦い

で大友氏が衰退した後も大友氏を支え続けたが、高齢を押して出陣したために病に倒れ、死去した。

自らは半身不随でありながらも、ほとんどの合戦に勝利を挙げた名将である。

「立花道雪」という名前で広く知られているが、立花姓を名乗るのは次代・立花宗茂からであり、道雪自身は生涯「立花」の姓を実際には名乗ってはおらず、立花氏の攻略後も、「戸次姓」で署名し、死去するまでこれを使用し続けている。（道雪はたびたび立花姓の使用許可を求めたが、謀反を起こした立花鑑載の不忠を大友宗麟が嫌い、重臣中の重臣である道雪に名乗らせる事に反対した為とされる。宗茂が立花姓を公式に使い始めるのも、宗麟が死去、大友家が没落し、立花家が独立しはじめた頃になってからである。

戦後に取り残された龍造寺

騒乱の発端となった「高橋家」、それに大友家に抵抗し続けた「秋月家」も降伏し、反大友陣営は従属を余儀なくされ瓦解してしまう。こうなると孤立してしまうのが龍造寺家である。

龍造寺家は肥前の有力勢力となっていたが、まだ肥前全土を掌握しているわけではなかった。毛利軍が北九州に来たとき、その援護を受けて肥前の大友側の勢力を打倒しようとしたが、毛利軍は「肥前の情勢は複雑である為、ヘタに介入しないように」と毛利元就から命令されていた為、龍造寺隆信は援護を受けられかった。おまけに毛利軍は中国地方に撤退し、北九州の諸勢力も次々と大友家に降伏している。

龍造寺家もすぐに大友家に和平を申し入れるが一蹴され、大友家の大軍が龍造寺家の城「佐嘉城」に進軍してくる。つい前年、大友宗麟は立花城援護の為に龍造寺と休戦講和したばかりであるが、身勝手な行動はお互い様である。大友軍の軍勢三万以上、一方、龍造寺軍の総兵力は約五千人。まさに絶体絶命であった。

しかし、後のない龍造寺軍の士気は高く、城を攻撃する大友軍も、なかなか決定的な勝利を得ることが出来ない。そのため、大友宗麟はさらに増援を派遣、必勝体制を整える。そしてこの増援部隊を率いていた大将が「大友親貞」であった。彼は龍造寺家の城「佐嘉城」の近くにある山「今山」という場所を押さえ、ここに布陣する。

今山の戦い

１５７０（元亀元）年８月１９日、大友宗麟の大軍に佐嘉城を囲まれた龍造寺隆信は、四面すべて囲まれて絶体絶命の危機に陥っていた。宗麟は久留米の高良山に本陣を構え、龍造寺氏と対峙していた。一向に城がおちる気配がなく、８月になって大友親貞を派遣し、直ちに攻め落とすよう厳命を下した。親貞は佐嘉城の北、六キロの今山に本陣を構えて、二十日に総攻撃との陣ぶれをした。

一方、佐嘉城内では降伏か玉砕かの選択の会議が開かれていた。さすがの龍造寺隆信も、このときは降伏を考えていたようである。これに反対したのが龍造寺隆信の義兄弟でもある龍造寺家の名将「鍋島直茂」である。

彼は、間諜からの情報に基づいて、「明日は敵の総攻撃が開始される。今宵敵は酒宴を開いて油断している。今宵夜襲をかける以外に我らが生き残るすべはない」と主張した。龍造寺軍は総勢五千人、対する大友軍は、親貞を総大将とする三万人であった。奇襲以外に勝つ見込みはなかった。

こうしてその夜、鍋島直茂はわずか１７騎で城を飛び出し、大友親貞の本陣に向かって出撃する。あまりにも少数だが、話を聞いた龍造寺軍の武将「成松信勝」や「百武賢兼」」など、龍造寺家の武士たちが次々と合流、さらに龍造寺家や鍋島直茂を慕う農民に加え、山伏の一団まで加わって、最終的には７００人近くの増援を得ることになる。

夜陰にまぎれて嘉瀬川を渡った直茂は総大将・大友親貞陣の裏手の山に登り、朝になるのを待ったのであった。

２０日未明、霧のかかる山の静寂は直茂の率いる軍の鉄砲の音で破られた。大友軍は昨晩の酒宴のために夢の中にいて、何が起こったのかわからなかった。「裏切り者がでた」との偽情報に混乱に拍車がかかった。さらに直茂の率いる決死隊の斬り込みのために、ついに大友軍は壊走をはじめた。踏みとどまって兵を叱咤していた総大将・大友親貞も太刀を振るって防戦していたが、ついに「成松信勝」によって討ち取られたのであった。総大将を失った大友軍は四散し、大友直属の士は宗麟の本陣へと逃げのびていった。

その後、大勝した龍造寺軍の士気は、当然の事ながら高まる。そして大友親貞の軍勢が壊滅したうえに、佐嘉城が落ちる気配もなかった大友軍は、龍造寺家と一旦講和。こうして大友軍は本国へと撤収して行った。その後、龍造寺家はこの戦いで敵対した肥前の勢力に進攻を開始。次々と撃破していき、ついに肥前一国を掌握する戦国大名へと躍進、その後もさらに勢力拡大を続けていく。こうして九州には、九州北東部の「大友家」、九州北西部の「龍造寺家」、南九州の「島津家」とう、三つの大きな大名家が君臨することとなる。

少弐氏滅び「少弐山城」残る

三養基郡中原町に少弐山城が残った。標高１２５メートルの室町期の山城で大宰少弐氏（旧姓武藤）の本拠があった城である。

渋川氏が関東に異動した後の１４８３年、少弐氏が「探題職」を継いだのであるが、少弐山城には１５０４年に入城している。その間大宰府か岩屋城を本拠としたのであろう。

１５７１年、支配下の龍造寺氏によって滅ぼされ、今も堀切と堅堀が残され城址の面影を忍ぶことができる。

④　島津対大友

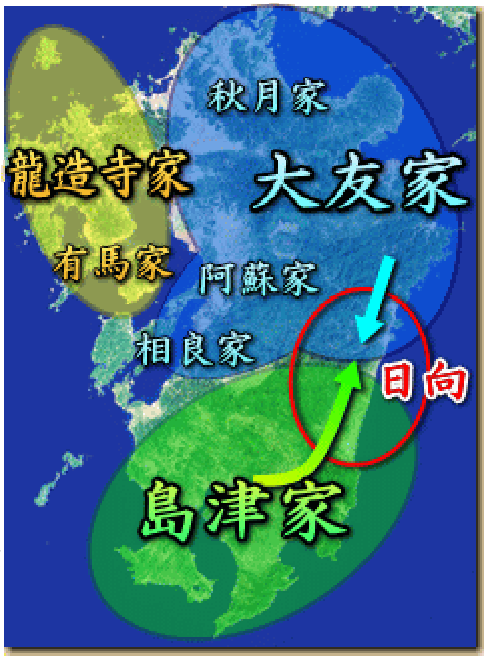
島津家の攻勢で滅亡した日向の大名「伊東家」の当主「伊東義祐」は、友好関係にあった大友家に逃れていた。

一方、島津家の進出により、日向の有力勢力は次々と島津家の傘下に入っていく。そしてついに、大友家の本拠地である豊後と日向地方の国境沿いを治めていた小勢力が、島津家になびく。

「このままでは本拠地の統治も危うくなる」と考えた大友宗麟は、日向国境への進軍を決意する。３万の軍勢を日向に派遣し、島津家に寝返った勢力の討伐を命じる。
そしてこの戦いは、大友軍の大勝利に終わった。大友家に敵対していた日向地方の北部の勢力は打倒され、再び日向と豊後の国境付近は安定する。

そして、大友宗麟は、二度目の日向進攻を計画する。大義名分は、大友家に逃れてきた大名「伊東義祐」の領地を奪還し、伊東家の「お家再興」を支援すること。

１５７８年、中央で勢力を伸ばし始めた織田信長に援助を求めた。全国制覇をねらっていた織田信長は九州の諸城主を調査していた。その中に八女郡の星野吉実、黒木家永、蒲池鎮広、三潴郡の蒲池鎮並･江上家種･江島修理亮の名が見えた。この年、宗麟はカブラルのもとで受洗していたのである。この入信をさかいに、豊後における入信者は一変した。またキリスト嫌いの妻と離婚し、二男親家の妻の母を後妻に迎えている。



大友宗麟の日向進攻の本音はまったく別のところにあったようで、本当の目的は、日向の地にキリシタンの理想郷、「神の王国」を築くことであったといわれている。この頃、大友宗麟は完全にキリスト教に傾倒していた。二人の息子とともに正式なキリシタンの洗礼を受け、「ドン・フランシスコ」のクリスチャンネームを与えられ、日々キリストの神に祈りをささげる毎日を送っていた。

しかしもともと、北九州は大きな神社が多く、お寺や神社の勢力が強い地域であった。それでなくても当主が異国の宗教に改宗したしまったのだから、家臣の反発は避けられなかった。おまけにキリシタンとなった息子がキリスト教の布教のために地元のお寺や神社を破壊した為、領民からも反発が起こり、大友家では宗教をめぐるトラブルが続発してい

た。そのためか大友宗麟は日向を占領し、そこにキリシタンと宣教師を集めた神の国を作ろうとしていたのである。

しかし、この二度目の日向進攻に家臣たちは猛反対する。なにせ相手は屈強で知られる島津家。そう簡単に勝てるはずが無く、被害も大きくなることは必至である。おまけに進攻の一番の理由が「キリシタンの国を作りたい」というのは家臣も知っていたから、立花道雪をはじめとして、反対者が多数であった。特に大友家の軍師であり、立花道雪の師匠でもある「角隅石宗」は「毛利や龍造寺が攻めてきたり、反乱が起こったらどうするんですか！今は国内の整備を優先すべきです」と強く反対したが、神の国の理想に燃える大友宗麟はもはや聞く耳をもたなかった。こうしてついに、日向へと南下を開始した。１５７８年４月、大友宗麟は、新当主の嫡男大友義統に三万の将兵を率いさせ日向に出陣させた。日向国十七ヶ国の城主を服属させた大友義統は、まず島津方に寝返った延岡城の土持親成を誅伐した。

１５７８年９月、宗麟は十字架の旗を掲げ、日向に理想のキリスト教王国を建設すると宣言して、宣教師・修道士らと数百人のキリシタン将兵をつれ、海路で臼杵から延岡に向かった。

大友宗麟は船で移動を行ったが、その船の帆には金縁の飾りと大きな赤い十字架が描かれていて、まさに「十字軍」のようだったと伝えられている。陸路で南下した本隊も、行く先々に十字架の旗を立てて移動していたという。

延岡では本営を築き、仮会堂を建築し、教会や住院の建築にかかった。キリシタンの将田原親賢は、先陣の総指揮をとり、南下して島津家久を財部城（宮崎県高鍋町）まで退却させた。

一方、この大友軍南下の知らせを受けて、島津家も急いで軍勢を集める。北九州最大の勢力である大友軍が大軍を率いて南下してくるのである。島津家はこれを家の存亡をかけた一大決戦だと考え、各地から出来る限りの兵力を招集する。

耳川（みみかわ）の戦い

１５７８年１０月末には、大友軍は耳川を越えて小丸川（高鍋町）のほとりにある島津方の

高城を包囲した。

同年１１月９日、大友軍の先鋒が、名貫川に布陣していた島津家久勢を破ると、大友勢は進んで山田有信の守る高城を包囲し、兵糧攻めを開始したので、両軍は小丸川を境に対峙することとなった。

島津家にとってこの「高城」は、突破されると危険な重要拠点であったため、すぐにこの地方を守っていた島津家の勇将「島津家久」が守備に向かうが、その軍勢は約３０００人。４万の大友軍の前には、いかにも小勢である。

しかし、高城の城主「山田有信」が奮戦し、さらにこの城が川や崖に囲まれた難攻不落の城であったこともあって、簡単には落城しない。城からの鉄砲の砲撃も激しかったため、大友軍は一旦後退して持久戦に入る。そしてそのうちに島津軍の本隊が戦場に到着する。こうし両軍は高城の側で、にらみ合いとなる。しかし、この睨み合いは長くは続かなかった。大友軍の中で、武将同士の仲間割れが発生していたのである。

軍師の角隅石宗は「後方から援軍が来るまでは、慎重に行動しよう」と進言、総指揮を勤めていた「田原親賢」もこれを支持していたが、武将の一人「田北鎮周」が「敵を目の前にして黙っていられるか！　どうせ死ぬなら自分だけでも突撃する！」と言い出して聞かず、勝手に自分の陣に帰って最後の別れの酒盛りを初めてしまう。しかもこれに賛同した武将も多数現れ、討ち死にを覚悟した酒盛りが各所で始まる。

実は、大友軍の武将の多くは、出陣前から討ち死に覚悟できたものが多かったのである。キリスト教徒でない武将にとっては、この出陣は本意ではなかった。そのためか多くの武将が最初から負けを覚悟していて、出発前から最後の宴会や茶会などが行われていたという。

また、角隅石宗をはじめ、田北鎮周などの武将はこの二度目の日向進攻に大反対だったのだが、田原親賢はこの出陣に賛成していた。このような事情から田原親賢が総指揮を採ることになったのだが、そのため最初から、田原親賢と田北鎮周の間には確執が生まれており、仲間割れの原因となっていた。

おまけに戦いが始まってからは、大友宗麟は武将達の出陣要請を拒否して、後方に造った聖堂で「お祈り」をささげていることが多く、主君が現場にいなかったことも武将の分裂を誘発することになったのである。

翌朝、田北鎮周の部隊は、大友軍と島津軍の間にあった川を渡り、島津軍に突撃する。田北軍に従う部隊も次々と川を渡り、結局田北鎮周の行動を抑えられなかった大友軍の本隊も、これを見捨てることが出来ず攻撃に参加する。こうして大友軍の一斉攻撃ははじまる。

序盤戦は覚悟を決めた大友軍がさすがに強く、島津軍の前線部隊は崩壊し、先陣の武将にも大きな被害が出る。しかし大友軍はそのまま島津軍の本陣へ突撃しようとし、結果、

敵の中に深入りする格好になったしまう。この機を島津軍は見逃さなかった。

１１月１２日、島津義弘の軍勢が渡河中の敵に鉄砲を放つと、大友軍の側面を攻撃。さらに島津義久の主力軍が背後より総攻撃を仕掛ける。多方面から攻撃を受け始めた大友軍はまともに戦えるような状況ではなくなり、田北鎮周などの武将も次々と討ち死に。開戦前から敗北を悟り、秘伝の書を焼き捨てていた角隅石宗も、自ら敵陣に突撃して戦場に散る。大友軍は壊滅状態となって敗退した。大友方は三千余の将卒を失い、さらに敗走する途中、城の北方の耳川を越えて後退しなければならなかったが、川が増水していてここを渡るのに手間取ったこともあり、島津軍の迫撃に合い、戦死者の総数は二万人にも達したと伝えられている。大友軍は多くの勇将を失い、宗麟の威勢は衰えていくことになった。

大友家にやむを得ず従属していた「秋月家」などの北九州の勢力は、耳川での大友家の大敗を聞いて再び反乱を起し、大友家から離反していく。

大友家と講和していた龍造寺家も、大友家の弱体化をみて大友領への進攻を再開する。島津家もさらに日向の占領を進めていき、こうして九州の戦力バランスは、大きく変化することになる。

⑤　冷徹政治の末、龍造寺家の最後　（１５７９－１５８４）

耳川の戦い後の南部九州大名

北九州最大の勢力であった大友家が「耳川の戦い」で島津軍に大敗して弱体化してしまったことは、九州各勢力に大きな衝撃を与えた。特に影響が大きかったのは、大友家の配下となり、その支援を受けて国を維持していた中小の勢力である。

肥後の南部に位置していた「相良家」と、肥後の中部に位置する「阿蘇家」は、大友家に従属し、その支援を受けて独立を維持していた大名であった。特に相良家は、かって肝付家・伊東家と協力し島津家に対抗していたため、肝付家・伊東家が滅亡した後は危機に陥り、大友家の傘下に入って、その支援を受けて島津家から身を護ろうとしていた。ところが、大友家が島津家に敗れて衰退してしまったため、必然的に島津家の矛先が向くことになる。

「耳川の合戦」が起こった翌年、さっそく島津家は相良家に進攻を開始した。しかし相良家にも「深水長智」「犬童頼安」などの勇将がいて、島津家の最初の侵攻を撃退する。しかしすでに相良家と島津家の国力の差は大きく、２年後、再び島津家は相良家に大規模な進攻を行い、対抗しきれなくなった相良家の大名「相良義陽」は降伏を決める。こうして

島津家の勢力は肥後へと伸びていく。

肥後の中部には「阿蘇家」という大名家があり、勢力は大きくなかったが、知勇兼備の名将として知られる「甲斐宗運」とう武将がいて、それは遠からず島津家の障害となる存在であった。そこで島津家は、降伏した相良家に阿蘇家への攻撃を命令する。

しかし相良家の当主相良義陽と甲斐宗運は盟友の関係にあり、相良家は本当は、阿蘇家と戦いたくなかった。だが、命令を断れば相良家が滅ぼされる危険もあったため、相良義陽は心ならずも阿蘇家に出陣し、甲斐宗運と対峙することになる。

そして戦場で、相良義陽は、自ら不利な場所に陣を張り、敵を待ち構えた。甲斐宗運は最初は罠かと思ったようだが、相良義陽が自ら死を選ぼうとしていることを知り、その運命を嘆く。その後、甲斐宗運は相良軍を奇襲し泣く泣くこれを討ち滅ぼしたが、「相良を失い阿蘇家もまた、３年経たずして滅亡するであろう」と語ったという。

相良義陽の義理に準じた死と、相良家の家臣の外交努力によって、相良家は島津家の配下として存続を認められるが、相良義陽の死から２年後、甲斐宗運も病死する。さらに阿蘇家の当主や跡継ぎまでが次々と病死したため、阿蘇家は急速に衰退、そのまま島津家の進軍で滅亡することになる。

こうして肥後の国の南側を支配下に納めた島津家は、遂に九州の南半分を支配する大勢力となった。

龍造寺隆信筑後に侵入

一方その頃、九州の北部でも、龍造寺家はその勢力を拡大していった。

１５７８年、大友方が日向耳川で島津軍に大敗して以来、筑後での大友氏の支配力が衰え、そこに龍造寺の勢力が侵入していったのである。親大友派であった筑後の雄・蒲池鑑盛が耳川の戦いで戦死すると、蒲池家を継いだ鎮並は妻が龍造寺隆信の娘であったからか、大友家から離れて龍造寺家と親密になる。筑後の地は大友派と龍造寺派に別れたので、龍造寺家と大友家の戦いは、叔父、甥や時には兄弟が敵味方に別れる結果になっていった。

龍造寺隆信は筑前の原田・秋月・筑紫・宗像などと結びつき筑後・肥後北部の地域でも反大友の勢力の狼煙を上げた。隆信は筑後・肥後北部を平定し、秋月種実の軍は日田まで侵略した。筑紫広門も隆信軍と結んで、岩屋城の高橋鎮種と戦った。

１１月１９日、この時、すでに肥前国内を平定していた龍造寺隆信は、筑後に入り、三潴郡酒見に陣を張り、筑後の諸将に味方になるように呼びかけた。この時、隆信の陣に駆けつけたのは筑後の雄・柳川城主蒲池鎮並、山本郡の草野鑑員（鎮永）、山門郡の堤貞之、三井郡の西牟田鎮豊（家周）等の武将達であった。これに対して、大友方に残った上妻郡の戸原入道紹真、三池郡の上総介鎮実、山下城主蒲池鑑広等は反龍造寺の旗を揚げて各城に籠もった。隆信は戸原城を攻めるために龍造寺信家、同信門、姉川信安、副島光家、鹿江信明らをこの方面に向かわせた。ところが、上妻郡の生駒城主川崎鎮尭が、多くの軍兵

をもって戸原を救援したので、龍造寺軍はこれを落とすことができず退却した。

星野鎮胤はこの時、龍造寺に降りている。隆信は筑前に侵入し、大友方の宝満城の高橋紹雲、立花城の立花道雪らと対立関係にはいる。

１５７９年正月、大友義統は龍造寺隆信に降りた諸氏の所領を奪い、大友方に留まった問注所統景や小河鎮昌らに与えた。同年３月、龍造寺隆信は再び筑後に出陣した。大友方の山下城主の蒲池鑑広や三池鎮実、山門郡鷹尾城主田尻鑑種らを討つために、筑後の水田村に在陣した。大友方であった田尻鑑種は、伯父田尻宗達や甥の蒲池鎮並の斡旋で龍造寺の陣営に来て神文を取り交わし、隆信の配下にはいっていった。田尻鑑種は三池鎮実と義兄弟の間柄であったので、三池鎮実に人質を出して、龍造寺方になるように調停した。しかし、鎮実がそれを拒んだので、すぐさま隆信は三池城を攻め落とした。まもなく八院の鐘ケ江長門守も神文を呈して、龍造寺方に降りたのであった。

同年７月２１日には、隆信は川崎出羽守の生駒城を攻落した。

同年１１月、籠城数ヶ月していた山下城の蒲池鑑広は、秋月種実の仲介で、隆信の陣に来て降伏し、弟の鎮行を人質として出した。隆信は高良山に陣を置き、秋月種実、筑紫広門と見参した。

１５８０年、隆信は佐賀城を政家に譲り、須古城へと隠居した。

信長の豊薩和睦推進の本意

織田信長は１５８０年８月に島津義久に宛て、また９月に大友宗麟・義統（よしむね）に宛て、両者の和睦を勧告している。それは、この時期に激化していた備前・美作・因幡地域における毛利氏との全面戦争を大友氏に「後巻」として牽制させるのが目的であった。したがって、毛利氏と結ぶ秋月種実・龍造寺隆信という大友にとっての脅威は、島津氏をして討たしめるとしている。注目されるのは、信長が、島津氏と大友氏が協力して織田氏の毛利攻めに馳走をすることは「天下に対し大忠なるべく候」と断じている点である。

信長の関心はそうした意味における豊薩和睦にあったが、九州の現実は、勢力拡大をはかる龍造寺隆信の動きに焦点があった。高城（たかじょう）合戦後の大友氏領国の不安定な情勢の中で筑後から大友氏を圧倒した隆信は、１５８１年に天草へ攻め込んで人質をとり、また肥後隈本でも人質を押し取っている。そして、島津義久が相良義陽の水俣の宝川内城を攻撃すると、相良氏を後援している。こうした龍造寺隆信の動きを島津義久は肥後尾船城の甲斐宗運に当てた多数の書状の中で「薩摩に対し隔心之根元」と激しく非難している。

龍造寺隆信が南下して肥後に侵攻したことによって、三者鼎立の攻防戦が本格化した。

この戦争のなかで有明海、島原湾、八代海の制海権を巡って活発に動きまわった龍造寺氏、そして境目の有馬氏、蒲池氏、田尻氏、相良氏らには注目を要する。

芋河の戦い

１５８１年８月１３日、大友方の星野鎮虎は問注所統景の援助を受けて弟鎮種のいる本城の白石城を奪った。鎮虎は龍造寺隆信に奪われていた城を回復したのである。これに対して、反大友方の星野中務（鎮胤）・星野伯耆守（鎮忠）・秋月治部（問注所鑑景）がこれを攻めている。芋河の戦いである。

同年９月２２日、田籠村で両軍の戦いがあった。大友方に田籠大橘介、佐藤弥衛門尉、反大友方に芋川新左衛門尉、星野神五郎、井上源三郎の名が見える。

原鶴合戦

１５８１年１１月、筑後川を挟んで大友軍と秋月・星野の軍との間に戦いがあった。これが原鶴合戦である。大友方の臣岐部山城守等は福益城及び居館を襲った。星野伯耆守高実（鎮忠）は一族を挙げて応戦し、星野氏も一時豊前に去っている。大友方の麦生宗雲（鑑元）、星野鎮虎は日田勢と共に秋月方の針目山（筑前）の砦を攻めている。立花宗茂は父高橋紹運とともに出陣し、対秋月戦の嘉麻、穂波の戦いで初陣を飾っている。

龍造寺、肥前西部・肥後北部へも侵入する

現在の長崎県にまで侵入した龍造寺家は、肥前南部を支配する大名「大村家」「有馬家」も従属させ、肥後（現在の熊本県）北部にまで勢力を伸ばし、九州の北部に大きな勢力を築き上げた。この頃の龍造寺隆信は「五州二島の太守」と呼ばれ、龍造寺家はその全盛を極める。

ただ、九州北部で龍造寺家が勢力を伸ばし、九州南部で島津家が勢力を伸ばしたことで、遂に両国が接することになってくる。領土拡大を続けている両大名家が接したことで、両者の緊張がどんどん高まっていくのである。

龍造寺への離反の芽

龍造寺家は隆盛を極めていたが、この頃の隆信には非道さ・残忍さが目立つようになる。敵対するものは一族や兵士もろとも皆殺しにし、自分に反対する者も容赦なく粛清し始める。人質に送られてきた幼い子供二人を張り付けにして、処刑したということもあったようである。

隆信のこのような冷徹な仕打ちに対して、軍師になっていた「鍋島直茂」は何度もやめるよう忠告するが、隆信はもはや聞かず、遂には

鍋島直茂を別の城に移転させ遠ざけてしまう。
　人心はどんどん龍造寺家から離れていき、ついに筑後で配下の蒲池鎮並が反乱を起す。この蒲池家は龍造寺隆信が龍造寺家を継いだばかりの頃、配下に反乱を起されて行き場を失ったときに、彼をかくまって復帰を支援してくれた恩のある家柄であった。
　その蒲池鎮並はもともと大友方であった。それが妻が龍造寺家からという関係で、父の反対を押し切って龍造寺方についていたのであるが、次第に蒲池鎮並は龍造寺方のやり方に不信を抱くようになった。ついに天正８年（１５８０年）２月１０日、蒲池鎮並は柳川城にたてこもった。籠城三百日に及ぶと、さすがに城中にも疲労の色が見えてきた。
　１５８１年、蒲池鎮並が島津氏に通じていたことが、龍造寺隆信に知れることになった。隆信は柳川に出撃せず、討ち果す計略を練った。田尻鑑種は肉親の情を利用して蒲池鎮並をくどき、和議を結ばせようとする。しかし蒲池鎮並は佐賀城に来るようにとの龍造寺隆信の使者にもかかわらず、病気と称して返答しなかった。

　同年５月２６日、隆信の再三の使者と母と伯父鎮久等の説得に、蒲池鎮並は応じることにした。一族大木兵部統光は、「鎮並が敵陣に行くようなものだ」と言って、行くのを止めさせようとした。
　同年５月２８日、佐賀城にて龍造寺政家により歓待を受けた。翌日、隆信の隠居地、須古城に向かう途中、興嘉の宮の前で、鎮並一行は待ち伏せを受けて討たれたのであった。そして龍造寺隆信は、田尻鑑種に、柳川の蒲池残党討伐を命じた。蒲池と田尻には親類縁者同士も多く、同族同士で殺し合いをさせるという非惨な戦いとなった。戦いの後、鎮並の居城である柳川城には鍋島信生(直茂)が入った。

　余談であるが、筑後国を支配していた蒲池氏（松浦党の一族）は、歌手「松田聖子（本名：蒲池法子)」の先祖であり、彼女の兄が現在の蒲池氏当主である。

＝　　余　談　　＝

　ジャパニーズ・ポップス・グループ「ＺＡＲＤ」のボーカル坂井泉水（さかい・いずみ）も久留米市の出身で、本名は蒲池幸子（かまち・さちこ）と言った。
　出身地、苗字とも松田聖子と同じなので、彼女も蒲池氏の一族だと思うが、縁戚関係はないとも言われる。それにしても、蒲池氏はご先祖の徳(のり)姫以来、女性の方が活躍しますね。
　蒲池氏一族滅亡の中で、只一人、生き残ったのが、蒲池鎮漣の娘「徳(のり)姫」である。
　未だ十代の若い乙女だった徳姫は、龍造寺軍の柳川城下での蒲池氏残党狩りの厚い包囲網を、少数の家臣と共に突破する。
　その後、長崎の有馬氏の元へ落ち延びる。この徳姫の母は、肥後国(熊本県)の菊池氏一族の赤星統家の娘とされている。

美貌にして気丈な女性でもあった徳姫（松田聖子や坂井和泉を見れば納得！？）は、その後、滅びた蒲池家を再興することになる。
その後の蒲池家や現在の松田聖子は、この徳姫の子孫ということになる。
徳姫は寛永９年（1632 年）に６６歳で没し、蒲池氏の菩提寺「崇久寺」には、「見性院心空妙安大姉蒲池徳女」と記された自然石の碑が立っている。

調氏（つきし）御三家（黒木・星野・河崎）について

帰化系氏族調忌寸（坂上氏同族）の後、調宿禰祐能が黒木郷木屋村に住み猫尾城を築いたのに始まるという。**秋月・原田氏と同じく東漢氏一族である。**

調氏本家は黒木氏を称し、代々黒木町木屋の猫尾城に拠り、祐能の長子貞宗は犬尾城に拠って河崎氏を称し、次男の胤実が八女郡星野三十二村、六百町を領して筑後国星野谷に拠り星野氏を称したと伝える。

調祐能は惟宗基言の女を妻としたというから、島津忠久や比企能員とは縁続きであり、また後妻として迎えた待宵小侍従は後鳥羽院の側女を賜ったということから、上洛して院の側近に侍し、調朝臣姓を賜ったかともいわれる。いずれにしても、調姓であることは動かし難い。

調党三家の歴代についての史料が乏しいが、祐能は大蔵大輔に任じられ、『吾妻鏡』にもみえ、鎮西御家人であったことは間違いない。下って、南北朝時代には黒木・星野氏らが南朝方として菊池氏に従っていることなどが散見できる。

黒木家永も龍造寺方に反旗を翻す

１５８２年２月に黒木家永は、龍造寺家に反旗を翻した。

蒲池氏に対する龍造寺隆信の冷酷な行為に反感を抱いた筑後の大身領主達は次第に龍造寺氏から離れ、蒲池一族殺害に協力した田尻鑑種をはじめ、黒木家永などが龍造寺氏に対して兵を起こすことになる。

黒木家永は、龍造寺家に反旗を翻したが、この時の龍造寺軍との戦いは激戦であったものの、草野長門守の仲介により、家永は和睦した。この戦いで、家永は嗣子定安を失い、嫡男となった次男の幼児四郎を、家来の釜瀬大和守を護衛につけて、人質として出したのである。

星野吉実島津方に走る

龍造寺隆信の蒲池鎮並謀殺以来、龍造寺軍であった秋月種実や星野吉実（鎮胤）は島津氏に心を寄せるようになる。天正１１年（１５８３）、７月、秋月種実・星野鎮胤・鎮豊の軍勢は、大友方の問註所統景兄弟の長岩城を攻撃した。７月２５日、救援に駆けつけた日田勢と長瀬城付近で合戦をする。

諸氏の龍造寺離反が島津介入を呼び込む

これらの事件により、龍造寺隆信の非道な行為はさらに噂となり、今度は従属していた長崎の島原半島を拠点とする大名家「有馬家」が離反を起す。

龍造寺隆信は最初、これを息子の「龍造寺政家」に討伐させようとしたが、政家の妻は有馬家の姫であった。そのため政家はまったくやる気が出ず、その様子に怒った龍造寺隆信はついに自ら大軍を率いて有馬家を滅ぼそうと出陣してしまう。

話を聞いて驚いた鍋島直茂はすぐに駆けつけ、「大将が自ら出陣しては危険！」と忠告するが、もはや聞き入れられない。こうして龍造寺軍３－５万の軍勢が、長崎の島原半島へと進軍していくことになる。

一方の有馬家は龍造寺軍が迫っていると聞き、急いで軍勢を集めるが、その数は約３０００人のみ。さすがに勝ち目がない。そこで有馬家の当主「有馬晴信」は島津家に救援を求める。

しかし、救援要請を受けた島津家も、九州各地で大友家や龍造寺家と対峙しているため、そんなに多くの兵は派遣できない。加えて島原半島の地理に詳しくなかったため、援軍は送らないほうが良いという意見が多く出される。

しかし当主の島津義久は、「当家を慕って一命を預けてきた者を見殺しにすることは、仁義に欠ける。戦いは兵の大小で決まるものではない。知略と勇烈があれば、小勢でも勝つことが出来よう」と、援軍の派遣を決定する。こうして合戦に長けた「島津家久」を総大将とした精鋭軍３０００人が、船団に乗って島原半島へと向かっていく。

龍造寺軍は島津軍来援の情報を聞いて警戒していたが、島津軍が思ったより多くなかった為、そのまま進攻を継続。一方、上陸した島津軍は有馬軍と合流後、船を繋ぎとめておく綱を全てきり、兵士達に決死の覚悟をさせて、文字通りの「背水の陣」をしく。そして有馬家と作戦を相談し、城で守っても包囲されるだけであり、これ以上の援軍も期待できない為、こちらから打って出て有利な地形に敵を誘い込み、敵本陣を狙うしかないという結論に至る。

その後、島津家久は部隊をいくつかに分けると各所に潜ませ、先鋒部隊を龍造寺軍の前面に配置する。この先鋒部隊には、幼いわが子を張り付けにして処刑され、龍造寺家から離反した「赤星統家」の部隊も加わっていた。

島津家久自身は鉄砲隊を率い、龍造寺軍の進軍先で敵を待ち伏せる。龍造寺軍は最初、部隊をい

くつかに分けて慎重に進んでいたが、敵が少勢なのを知った龍造寺隆信は、島津側がすでに布陣を完了しているのを知らなかったこともあり、予定を変更し一気に敵の城に攻め込もうと、自ら本隊を率いて進撃する。そしてそのまま、島津軍の先鋒部隊と戦闘に入る。数が違いすぎて島津軍の部隊は早々に敗走。すぐに龍造寺軍は追撃に入る。

しかしこれが、敵をおびき寄せる島津軍の得意戦術「釣り野伏」であった。龍造寺軍の主力は、そのまま「沖田畷」（おきたなわて）という場所に誘い込まれてしまう。「沖田畷」の畷（なわて）とは、田んぼの間にある狭い「あぜ道」のことである。沖田畷はこの頃、周囲を泥田にかもまれた細長いあぜ道が、ずっと続いていたという。

島津軍を追撃中の龍造寺軍の戦闘部隊は沖田畷に入り込み、そのまま島津軍を追っていたが、ここで身を隠していた島津家久の鉄砲隊が出現する。突っ込んできた龍造寺軍に一斉掃射を開始する。龍造寺軍の部隊はあわてて後方に下がり、体制を立て直そうとしたが、そのとき、予想外の出来事が起こる。

後方の道から味方の兵士達が、すごい勢いで次々と押し寄せてきたのである。これでは下がれない。その少し前、龍造寺軍の本隊も、沖田畷に差し掛かっていた。しかし、こんな狭い場所を大軍で通ろうとすると、当然のように渋滞が引き起こり、隊列も細長くなってしまう。そのため進軍が進まないことにイライラした龍造寺隆信は伝令を呼び、前の方にいる部隊に早く進むよう伝える命令を出したのである。ところがこの伝令が、「後ろがつがえて殿が怒っているから早く進め！」と叫んで回った。冷徹が容赦のないことで有名な龍造寺隆信が「怒っている」というのである。これはヤバイ。そのため前方にいる将兵はあわてて前進を開始。それが先頭の部隊にどんどん押し寄せてきた為、最前線では島津軍の鉄砲射撃の前に兵士達が次々押し出される格好になり、凄惨な状態になってしまった。

加えて、有馬軍の軍艦が、海上から龍造寺軍を砲撃開始する。これらによって龍造寺軍は大混乱となる。この状況を島津軍が見逃すはずはない。そして島津家久の号令の元、各所に潜んでいた島津軍が一斉に現れ、龍造寺軍の本陣に向かってなだれ込む。混乱している上に隊列が細長くなり、連携も取れない龍造寺軍は、周囲の泥田で大軍が機能しなかったこともあり、次々と分断され壊滅してしまう。

龍造寺家の武将「成松信勝」は最後まで龍造寺隆信を守ろうと奮戦していたが、もはや龍造寺軍は潰走状態になっており、遂に敵を支えきれず戦死。龍造寺四天王と呼ばれた「百武賢兼」や「円城寺信胤」などの主力武将も次々と討ち死していく。こうして龍造寺隆信も乱戦の中、ついに島津兵によって討ち取られてしまう（１５８４年３月２４日）。龍造寺隆信の死を聞いた龍造寺軍の武将「江里口信常」は、島津兵を装って島津家久に接近、一矢報いようと斬りかかるが、傷を負わせたのみで周囲の近衛兵に殺されてしまう。

龍造寺の軍師「鍋島直茂」は不幸中の幸いというか、本隊とは別の部隊を率いていたため、敗走するものの何とか戦場から脱出、生還を果たしている。しかし、当主に加えて主

力武将の大半が戦死してしまった龍造寺軍の損害はあまりにも大きく、すでに龍造寺家が人心を失っていたこともあって、各地の勢力は次々と龍造寺家から離反する。この時期、鍋島直茂は柳川城代であったが、義母ぎんや政家の願いで佐賀に帰り、政家の後見役となって、龍造寺家再興のために全力を尽くした。

北九州最大の大名家であった龍造寺家は、あっという間にその勢力を衰退させてしまった。そして、大友家・龍造寺家の双方を打倒した島津家は、名実ともに九州一の勢力となり、いよいよ九州の統一に向けて動き出していくことになる。

こうして島津氏の行く手を遮る者はなく、１５８６年に大友氏の博多守備の砦であった宝満城・岩屋城が島津氏に攻略された。この島津氏の勢威に圧倒され、大友氏領国では謀反や内応するものが続出し、大友宗麟・義統は豊後に孤立した。一方その頃、日本の中央では、戦国は覇者「織田信長」が「本能寺の変」によって急死してしまう。織田家の家臣たちの後継者争いの末に「豊臣秀吉」が次なる天下人として台頭し始めていた。

こうした緊迫した情勢の中、大友宗麟は上坂して豊臣秀吉に救援を嘆願したのである。秀吉は、前年に降伏させていた土佐の長宗我部元親、つづいて毛利輝元、伊予に封じられていた小早川隆景らを動員して九州に攻め込むことになる。この辺の事情は後で再述するが、一時島津氏の軍勢は豊後府内に入るものの、秀吉は大軍を動員して押し返し、翌１５８７年５月には島津義久を薩摩泰平寺に降伏させた。

龍造寺滅んで「佐賀城」残る。

１５９６～１６１５年、「佐賀城」と「蓮池城」は同時に築城されている。

佐賀城は、別名龍造寺城といわれて、龍造寺家藩主、政家・高房親子が存命中の居城であった。明治７年の「佐賀の乱」で書院・御居の間・鯱の門のみを残して焼失し、現在天守跡に「協和館」という木造建築がある。

佐賀城の鯱と続櫓

蓮池城は、１４２７年に小田氏が築いた城であるが龍造寺の勢力下に入り、鍋島氏の政権交代で、実質的には鍋島氏の居城となっている。徳川幕府の「一国一城令」によって破却され、現在「蓮池公園」となっている。

初代藩主となった鍋島勝茂が佐賀城本丸に居城したのは１６１１年といわれ、勝茂は弟忠茂（人質として三大将軍家光の小姓であった）に鹿島藩２万石を分与し、城跡は現在鹿島高校である。

肥前有馬氏のその後

危うく攻め滅ぼされかけた有馬氏であるが、しぶとく生き残り、江戸時代には越前・丸岡まで続いた。

島原半島の旧主、有馬氏は久留米の有馬氏とは無関係で、藤原純友子孫と称する高来郡有馬荘の地頭であった。

龍造寺隆信に属したこともあるが、恩人である筑後の蒲池一族まで滅ぼした隆信のやり方に不安を覚えてか、島津氏と組んで叛旗を翻した。不利の戦いのはずだったが、沖田畷（おきたなわて）の戦いで龍造寺隆信を討ち取り、一躍力を回復した。

有馬晴信は、天正遣欧少年使節に千々石（ちじわ）ミゲルを送り出したキリシタン大名だった。後、本田正信家の内紛に巻き込まれ自害している。しかし、嫡子の直純は延岡に移封されただけで存続した。だが、このキリシタン大名を移封して、筒井順慶の家臣からのし上がった野心満々の松倉重政を当地に入れ、残酷な弾圧をさせたことが、島原の乱をもたらした。

⑥　秀吉来襲！　九州戦乱の結末（１５８５－１５８７）

「沖田畷（おきたなわて）の戦い」 で 龍造寺家 を打倒した島津家はそのまま北へと進軍、肥後全土を支配し、北九州の諸勢力も次々と島津家の傘下に加わる。
その頃の筑後・筑前の状況は次の通り。

１５８４年３月、龍造寺隆信が、島津氏との島原の戦いで敗死し、隆信の子・政家は、龍造寺家臣団の中で信望の厚かった鍋島直茂（信生）の援けを借りることによって、切り抜けようとした。柳川にいた直茂を佐賀に迎え、国政をまかせ、動揺する一族や家臣団をまとめた。隆信と直茂は従兄弟でもあり、母慶闇尼（ぎん）が直茂の父清房と再婚しているので、兄弟の関係でもあった。

猫尾城城主黒木家永の戦死

天正１２年（１５８４）、３月２４日、高橋紹運は立花道雪と共に龍造寺隆信によって侵略された筑後への遠征軍を組織して、豊後本国の大友勢と共同行動をとる。しかし、筑後の諸氏は龍造寺家とのきづなは、以前に神文や人質を取られていたので、離れることはできなかった。

同年５月、黒木氏は大友方の津江を侵すが、撃退される。

同年、６月大友義鎮は、筑後侵入に際し、戸次宗利を黒木に遣わし、縁故により諭した。しかし、黒木家永は大友家と和睦するわけにはいかなった。幼児の四郎を肥前の龍造寺方に人質として送っていたし、舎弟蒲池益種は蒲船津城主として龍造寺方にいたのである。

１５８４年７月初め、大友軍は志賀太郎親次、朽網三河守紹斉を大将とし、大友宗麟の次男田原親家を総大将として筑後に入った。大友氏の豊後軍は玖珠・日田を通って筑後の生葉郡に攻め入り、生葉郡に領のある問註所統景を案内人として妹川谷より北川内に進み、猫尾城の攻略をめざしたのでる。筑後の武将、矢部の五条鎮貞や上妻、稲員らの親大友派も、黒木攻略戦に参加していた。

同年７月２０日、大友軍は、猫尾城の総攻撃を行なったが、黒木勢の猛反撃に遭い、激しい攻防戦が、昼夜にわたって続けられた。こうした戦は、ひと月余りにも及んだが、黒木勢の反撃は、猛烈で兵力に優る大友軍もしばしば敗退して、攻撃は中断された。城主黒木家永は、龍造寺方の援軍を頼みに篭城をしていた。兵力に勝る大友軍は耳川の戦いで、多くの勇将を失っていたので、若い武将の指揮官が不慣れな戦いをしたので、なかなか攻略できないでいた。そこへ筑前から友軍の到来である。

同年８月１８日、大友宗麟から命令を受けた筑前の立花道雪と高橋紹運は筑紫軍や秋月軍のいる敵中の中、夜を徹して歩き、黒木領に進入した。１９日の夕方には、豊後の大友軍と共に、猫尾城を囲み野営した。大友軍は支城高牟礼城を守る家老椿原式部の内応工作を進めた。椿原式部は立花軍の到着を知り、２４日に至り、ついに降りたのである。黒木と同族の犬尾城の川崎重高（河崎？）も降りている。残るは猫尾城のみである。

猫尾城本丸跡の石積
八女郡黒木町北木屋

道雪、紹運の両将が大友氏の筑後奪回戦に出陣している頃、立花宗茂は道雪出陣後の立花山城を守っていた。この時、秋月種実率いる八千の兵が攻め寄せたが宗茂は夜襲でこれを撃破した。立花宗茂は高橋紹運の子で道雪の養子となっていた。道雪没後、家督を継いだ立花統虎である。

天正１２年（１５８４）９月５日、７月以来、猫尾城内では二ヶ月の籠城で、すでに糧道は断たれていた。折から大友方に内応した椿原の兵らが、かって知ったる間道から本丸を急襲して来た。城主の家永は、敵となったかっての配下の軍兵に銃口を向けていた。配下の者にはほとんどのものが知りあいであった。迷い、動転している撃ち方に厳命した。

「鉄砲に弾を込めず撃て」

空砲で撃つことを命じたのである。家永は楼上にかけ上った。敵が直ぐ近くまで押し寄せてきたとき、傍にいたのは三女の十三歳の娘であった。家永は切腹の介錯をその娘にさせたのである。娘は父の首を城の上から敵に向かって投げつけた。戦国の世とはいえ、父も父なら子も子である。これが小国大名の運命であった。黒木家永享年六十歳であった。家

永は部下や家族の助命を大友氏の将・田北宗哲に乞うて自刃を決意していたのである。黒木氏滅亡後の猫尾城は、田北宗哲が城番として入った。

星野の諸城も焼かれる

１５８４年９月、大友軍は黒木家を滅ぼした後、同年１０月に、大友家の家臣、岐部山城守、本荘左衛門等が筑後に来て、各所の神社仏閣を焼き払っていった。篭城していた発心城の草野鎮永や、福丸城、井上城等の根小屋が焼き払われて裸城となった。妙見城の星野鎮豊は攻められて、降伏した。

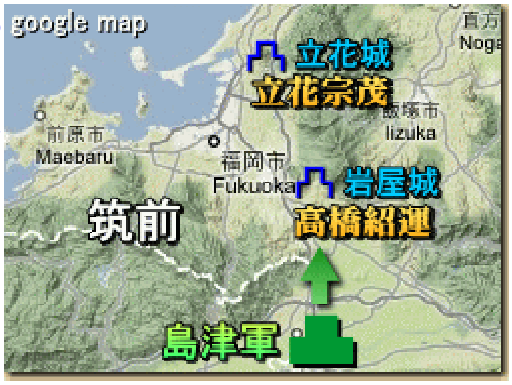
同年１２月には秋月種実、星野鎮豊の両勢が大友方の長岩城を襲ったが、問注所統景兄弟の奮戦により撃退された。

同年、島津氏は肥後の隈部・小代氏をしたがえ、翌年阿蘇氏をしたがえて肥後国全体を島津領国に加えた。

戸次道雪が病没する

黒木の猫尾城を攻め落とし、山門郡の龍造寺諸城を落とし、大友軍は筑後における龍造寺勢力の最重要拠点である柳川城をも脅かす勢いであった。しかし、大黒柱の立花道雪が天正１３年（１５８５年）６月上旬、長陣による疲労からか陣中で発病する。闘病三カ月後、９月１１日、北野の陣中で没した。　享年七十三歳であった。

大友軍は筑後から撤退することになった。その後、龍造寺氏は島津氏に従属する。これによって島津氏の攻撃目標は大友氏だけにしぼられる事になった。筑後の武将は大友方と島津方に別れることになる。



大友宗麟の最後の策

大友家と対立していた北九州の勢力　「秋月家」なども、島津家の配下に加わっていった。島津家はそのまま大友家を打倒して九州を統一すべく、軍備増強を続ける。

一方 大友家は、龍造寺家の崩壊に乗じて北九州の支配を取り戻すべく、立花道雪などを派遣して進軍を開始。立花道雪は筑後（現在の福岡県南西部）まで進軍し、さらに留守を狙って進攻してきた秋月家の当主「秋月種実」の軍勢を、立花家に婿入りした名将 「立花宗茂」が夜襲と火計で撃破。一時的に北九州の支配地を取り戻すが･･･　ここで、先述したように陣中で立花道雪は病死したのである。彼の死の影響は大きく、結局 北九州を完全に取り戻すことは出来ずに終わる。

事態が迫っているにもかかわらず、もはや独力では島津家に対抗できない事を悟った大友宗麟は次の行動を起こす。 1586 年、高価な茶器を手みやげに大阪城に向かい、豊臣秀吉

に謁見。島津征伐を上訴した。この時、筑前の三城（立花、宝満、岩屋）を献じて「豊臣家の傘下に入るので、島津家の進攻から守って欲しい」 と嘆願する。

これを受けて豊臣家は和平交渉を行おうとするが、島津はこれを無視し、６月には筑後に入り、高良山に本陣を置いた。もはや戦いは避けられない状態となっていく。秀吉は宗麟の要請で、仙石秀久を九州に派遣し、薩摩を偵察させていた。この頃、秀吉は徳川家康と小牧・長久手で戦いをしていた最中のことである。

戦いは、「天下人・豊臣家 VS 九州の覇者・島津家」 へと移っていくことになった。

島津軍北上する

秀吉が九州に乗り込む前、島津家はすでに北上の準備を進めていた。しかし、この段階では対秀吉ではなく単に豊後の大友家をどの方面から攻め込むか当主「島津義久」は悩んでいたのである。大友家の本拠地に最短で攻め込めるのは、九州の東側 「日向（現在の宮崎県)」を通るルートとなる。

しかし秋月家などからは、「北九州の占領を進めるには諸勢力が混在している筑前・筑後・肥前などを先に抑えることが必要不可欠」という進言があり、島津義久は思い悩んでいた。

島津義久は一度、日向から攻め込む最短ルートを取ろうと決定するが、その後に思い直して取りやめる始末で、そうこうしているうちに半年近く経ってしまい、それは大友家に貴重な時間を与える結果となってしまった。

結局、１５８６年の６月、西から迂回していくルートを主力とする２方向からの進攻作戦が決定されて、島津軍は進攻を開始した。

東から進む軍団は大将・島津義久に加え、島津義弘・家久などが率いる３万の軍勢。

一方 西から回り込む軍団は島津義久のいとこ「島津忠長」が大将を勤める２万の軍勢であった。

西からの軍団は最初は２万の兵力であったが、途中で北九州の諸勢力が次々と合流し、最終的には約５万の軍勢に膨れ上がった。

東から進む軍団は、西からの軍団と同時に大友領に攻め込むため、日向の地で一旦停止する。そして７月、西から進む島津軍は北九州に入り、大友家の拠点「岩屋城」 を包囲する。

この「岩屋城」にいた兵力は、わずか 800 人足らずであった。戦力差からしてまさに絶望的な状態。しかしここを守るのは、大友家の名将「高橋紹運」であった。

高橋紹運の子「立花宗茂」は、このとき立花城にいて「兵力が違いすぎ、城の守りも弱い

ため合流して敵に対抗しましょう」と勧めるが、高橋紹運は「別の軍と合わされば人の和が乱れる恐れがあり、この危機にあって数人の大将が同じ場所にいるのも良くない。命の限り戦えば 14、5 日は持ちこたえ、敵兵三千人は討てるだろう。そうすれば島津軍も進軍が遅れ、そのうちに豊臣家の援軍が到着できる」と、決死の覚悟で敵を食い止める決意を語る。

そして配下の兵と共に死の覚悟を決めると、城を包囲する島津家からの降伏勧告を断り、「我々は命の限り戦うため、いささか手強いと覚悟されよ」と返答、島津軍の前に立ち塞がる！

こうして、島津軍５万の一斉攻撃が開始され、岩屋城で激戦が繰り広げられる。
攻撃側は数にものを言わせて攻めかかるが、岩屋城を守る 高橋紹運の兵たちの防戦は凄まじく、城は全く落ちない。
そのうち島津軍の損害は大きなものになっていき、島津軍も急がなければ豊臣軍が来てしまうことを知ったため、持久戦に入ることは出来ず、そのまま力攻めが続く。
開戦から１０日、昼夜を問わず戦い続けていた高橋紹運の兵はさすがに疲労の極致に達していたが、それでも降伏勧告をはねつけ、徹底抗戦を続ける。
そして開戦から 13 日目、壮絶な戦いの末、ついに城は落城。城兵は一人残らず戦死し、高橋紹運も自害する。
しかし攻撃側も 5000 人前後の大被害を受け、この場所で半月近く足止めを受けてしまう結果となった。

その後、島津軍は立花宗茂が守る「立花城」に進軍して行くが、すでに疲弊と疲労が重なっており、さらに立花宗茂の 「詐降の計略」（投降を偽って近づき奇襲する計略）などを受け、攻めあぐねてしまう。そして８月下旬･･･ ついに豊臣家からの援軍の毛利家の「小早川隆景」の軍勢が北九州に上陸する。その報告を受け、西回りの島津軍 はこれ以上の進軍を断念した。

秀吉の先陣毛利軍、筑前・筑後に至る

天正１４年（１５８６）８月下旬には筑前に、９月には筑後に毛利の軍勢が押し寄せ、島津軍を追い払った。９月、毛利軍小早川隆景から家臣への書状には、毛利方についていた星野伯耆守親子（鎮忠・鎮豊）の領地安堵の件が伝えられた。また島津方についた上筑後の者共を討ち果たせと記されていた。毛利の総大将輝元も下関の吉川陣営に到着した。

１０月２７日、小早川隆景より問注所統景へ、長岩城の修理に加え、星野与党の籠もった妙見山の城をとり崩すべき旨の書状が与えられていた。

１２月１９日、小早川隆景より統景への書状には、小早川の臣、入江、木原と謀って、三ヶ所の敵を討ち退けるようしたためられていた。問注所統景、鎮春の兄弟は力を得て、

秀吉の命によって、福丸、妙見、井上の三城を破却した。

星野吉実（鎮胤）・吉兼（鎮之）兄弟の死

島津方についた秋月種実は天正１４年（１５８６）７月、岩屋城に入った。そして、星野吉実（鎮胤）・吉兼（鎮之）の兄弟は念願の平城である高鳥居城に入った。この城は若杉山の西に連なる山にあり、当時は無住の荒城であった。星野兄弟は大工、左官などを入れて修理させ、食糧、武器、荷物を運び入れた。８月２０日一族郎党５００余を率いて入城した。星野一族はこれを草城と呼んだ。しかし、豊臣秀吉派遣の毛利軍の立花救援の噂が流れると、島津方陣営には、戦わずして国元に帰るものが出てきた。

８月２２日、九州に上陸した毛利軍は筑前に向かってきた。８月２３日、島津軍は状況の不利を察して立花城下を撤退していった。２４日、毛利の先遣隊が到着した。鎮胤は高鳥居城で討ち死にする覚悟が出来ていた。前日に若者を筑後の地に帰らせていたのである。８月２５日、立花・毛利連合軍は星野兄弟の守る高鳥居城に押し寄せてきた。星野兄弟は壮絶な戦いで、討ち死にした。毛利軍は岩屋城をも奪還し、筑紫広門も勝尾城を回復した。

吉塚地蔵

戦後、立花統虎は高鳥居城の戦い振りが壮絶であったので、星野吉実・吉兼兄弟の首を検分し丁寧に葬ったという。福岡市の吉塚の地名（JR にも吉塚駅あり）は吉実・吉兼兄弟の首塚から起きたと云われている。現在では、７月下旬に吉塚地蔵尊祭りとして毎年、供養が行われている。

星野兄弟を破った立花宗茂は、島津家により落とされた城を次々と奪還、抵抗していた 秋月家も立花宗茂の前に敗れて後退、島津家に降伏していた龍造寺家も島津陣営より脱退し、豊臣軍に参加する。こうして事実上、島津家の西回りの作戦は失敗に終わり、北九州は豊臣・大友軍により制圧されていく事となった。

高鳥居城跡。糟屋郡須恵町

島津東回り軍は善戦する

９月に入り、四国に領地を持つ大名「仙石秀久」「長宗我部元親」「十河存保」が、豊臣家からの援軍として大友家の本拠地「豊後（大分県）」に到着する。
しかし、この時に到着したのはまだ大友家を救援するために駆けつけた先発部隊で、豊臣

家の本隊は、まだ兵を集めて準備している最中であった。
そのため豊臣秀吉は、豊臣軍や大友軍に「堅く守って本隊の到着を待つように。決して軽率な行動をしてはならない」と厳重な命令を与えていた。しかし･･･　この命令は、あっさり破られてしまう。

九州の北部、大友領の「豊前（福岡県の東部）」で反乱が発生し、大友家の跡を継いでいた大友宗麟の子「大友義統」が、仙石秀久 にこの反乱の鎮圧を要望したことから、大友宗麟の制止も聞かず、２人で軍勢を率いて豊前に向かってしまったのである。

一方 島津軍は、西回りの軍勢が北九州から後退した報告を受け、南から大友領へと進攻する事を決意し、その機会をうかがっていた。そんな時、豊臣軍と大友軍が、反乱鎮圧のために北に向かっていくという。もちろんこれは島津家にとっては最大のチャンスである。

10 月、島津軍は日向（宮崎県）と肥後（熊本県）の２方向から進軍を開始。
ついに九州東側で大友・豊臣軍と島津軍の戦いが始まったのである。

しかしこの島津軍の進攻は、大友家の若き武将「志賀親次」「佐伯惟定」などの活躍で押し止められてしまう。さらに、前線の城にいた大友宗麟も自ら防衛戦を指揮する。
さすがにこの時は祈っているだけではダメだと悟ったのか、積極的に陣頭指揮を行い島津軍の攻勢を防ぐことにしたのである。
また、ポルトガルから輸入し、大友宗麟が自ら名付けた２門の大砲「国崩し」も島津軍に炸裂する。「国崩し」はその威力もさる事ながら、着弾時の轟音がもの凄く、それによって兵や馬が恐れをなして混乱、さらに兵がなぎ倒された木々の下敷きになるなどして、島津軍の攻撃が阻まれる。

結局、北に向かっていた 仙石秀久の軍勢もあわてて戻ってきたため、島津軍の本隊は一旦下がって軍勢を再編成。そして大友家の本拠地である「府内城」に向かって進軍を再開した。

12 月、大友家の本拠地に向かって進軍する島津軍の本隊は、その途中で「鶴賀城」という城を包囲する。城の兵士は約二千人、一方 包囲する島津家久の軍勢は一万八千人であったが、城の兵士は頑強に抵抗していた。

これを聞いた豊臣軍の「仙石秀久」は、今度はこの城の救援に向かおうと主張する。
しかしこれを聞いた豊臣軍の「長宗我部元親」と「十河存保」は、共に大反対。豊臣秀吉から「堅く守って、決して軽率な行動をしてはならない」と言われたはずだと語り、仙石

秀久を止めようとする。
しかし仙石秀久も「味方の危機を見捨てるのは武士として義に反する。誰も行かないなら自分だけでも行く！」と言って聞かない。結局、豊臣秀吉の直属の家臣である仙石秀久の方が立場が上だった事もあって、長宗我部元親と十河存保は仕方なくこれに従う事になり、豊臣軍約六千が鶴賀城へと向かっていく。
　島津家久は豊臣軍が来るのを聞いて城の包囲を中断し、「戸次川」という川の後方まで下がって、そこで敵を待ち構えた。
　戦場に到着した豊臣軍の仙石秀久は、さっそく 「川を渡って敵を蹴散らせ！」と命令を出す。しかし長宗我部元親と十河存保は再び反対する。「川を渡っての攻撃は不利です！ここはにらみあいつつ援軍を待ち、改めて作戦を練りましょう」と進言する。
　しかし今回も、立場の影響があったのか、それとも仙石秀久が強硬だったのか･･･
結局、渡河攻撃をする事が決定されてしまう。

　こうして翌日早朝･･･　豊臣軍は川を渡って一斉に攻撃。しかし島津軍は豊臣軍が思ったほどの兵力ではない事を知り、すでに反撃の体制を整えていた。
それでも 長宗我部軍が率いる四国・土佐の兵は強く、島津軍の第一陣は崩壊、序盤は豊臣軍が有利になる。しかし島津軍もすぐに第二陣を繰り出して第一陣を収容、さらに長宗我部軍を押し返す。
　その後、島津軍の第三陣が豊臣軍を側面から攻撃、そのまま両軍かなりの激戦に入ったが、兵力差と寒い冬に渡河した影響もあって、豊臣軍は次第に不利になっていき、ついに敗走状態に陥る事となる。
　そしてこの時、敗走する四国の兵を逃がそうと長宗我部元親の長男で武勇に長けた「長宗我部信親」が島津軍の前に立ち塞がり、奮戦を見せるが･･･　多勢に無勢で、島津兵の猛攻の前に戦死してしまう。

　信親の戦死を聞いた長宗我部元親は悲しみのあまり自分も敵に突撃しようとするが、家臣に止められ、戦場から逃れる。
しかし最愛の息子を失った長宗我部元親の悲しみは深く、後継者が戦死した事で長宗我部家では跡継ぎ争いも発生し、それにより家臣同士の対立も起こり、こうして長宗我部家は以後、没落の一途を辿る事となった。
　また、この戦いで 十河存保も戦死。仙石秀久はあまりの失態に誰にも顔向けできなかったのか、そのまま四国まで逃げ帰ってしまい、秀吉の怒りを買って領地を没収されてしまう。
こうして九州の豊臣家 VS 島津家 の初戦となった「戸次川の戦い」は、島津家の勝利で終結する。

秀吉本人が九州に乗り込む

天正１５年（１５８７）正月、かねて九州を征して、天下統一の機をうかがっていた秀吉は、諸国の群雄に九州平定（島津征伐）を命じた。

全軍を七軍団に組織し、２月５日、弟の羽柴秀長を先陣総大将として、養子宇喜田秀家や小早川隆景・吉川元長・蜂須賀家政らと共に九万人の将兵を西下させ、豊後を経て日向に進撃させた。

秀吉は、甥秀次を大坂城代として三万人を残し、冬季の渡海をさけて、天正１５年（１５８７）３月１日、浅野長政、佐々成政以下七万人の将兵を率いて大阪港から出陣した。

これを迎え撃つため秋月種実父子は３月９日、秀吉が宮島の厳島神社に参詣の時を図って、重臣恵利暢堯（えりのぶたか）（初代秋月種男の弟種久子孫）を敵状偵察のため「偽」の降伏使として、秀吉の下に送ったのである。

使者となった恵利は、秀吉の軍勢と器量の前に圧倒されて心に秘めていた真実を吐露し「なにとぞ御旗下の末にお加えくださいますよう」と、降和を申し入れたのである。

秀吉は、「島津との同盟を解き、朝令に従うならば秋月氏に、筑前・筑後の二カ国の所領をみとめよう」と、朱印状を与え、恵利にも褒美として“一振りの刀”を与えている。

秋月家の悲劇はここから始まった。恵利は帰国後、主君種長に秀吉の人物見識や軍勢の巨大なることを説いて血涙をもって島津との盟約を解き、秀吉との和議を結ぶことをひっしに諫言したが、種長は激怒し「平素の武勇にも似ず、秀吉ごときに独断で降和を結んだ不忠のうえに、褒美まで受けたとは“奇怪千万”敵の大軍に心臆したか」と叱りつけた。

恵利は３月１４日の早晩、死をもって最後のお諫めを決意し、兜岩（甘木市秋月町）で家族を道連れに切腹した。

恵利３８才、妻３１才、幼少の娘二人、今も巡礼者の参拝が絶えないといわれる。徳川時代に秋月は、黒田福岡藩の支藩（５万石）となり、藩主黒田長興（長政三男）は、観音堂を建立してその死を哀れんだといわれる。

羽柴秀長は大友義統と黒田孝高に命じて、豊後の島津軍への攻撃を開始した。府内にいた島津家久は大軍到来の報を聞いて日向に撤退した。

３月１２日、秀吉は九州に入った。

４月２日、秀吉が見守る中、秋月種実の岩石城（英彦山の北尾根に隣接する岩石山）を一日で攻め落とした。島津家と共に大友家に抵抗していた秋月家も、３月末に豊臣軍の武将「蒲生氏郷」の軍勢に敗れ包囲されていた。秋月家の当主 「秋月種実」 は本拠地の城で守り時間を稼ごうとしていたが、近くの破棄した城を豊臣軍が一晩で修復、ここを拠点に豊臣軍が攻撃を開始してきたのである。

この「一夜城」で豊臣家の兵力・財力を見せつけられた秋月種実 は、それから間もなく

豊臣家に降伏することとなる。秋月種実・種長父子は降伏し、秀吉と対面し、家宝の楢柴肩衝の茶入れを献上した。北九州の大小の豪族は秋月城に在陣中の秀吉に謁見し、降伏を申し出た。そして秀吉軍は龍造寺政家や筑紫広門の軍を加えて、４月１０日に筑後に入り、高良山吉見岳城に着陣した。筑後の国人はことごとく後人となった。

豊臣軍の総勢は、なんと 20 万。

この大軍を前に、九州の諸勢力は次々と豊臣家に従属。もはや戦局は豊臣軍の方に傾いてしまう。圧倒的な豊臣の大軍を前に、兵力が分散していては勝ち目がないと考えた島津家は後退を開始、北九州方面から撤退する。

その後、「豊臣秀長」 が率いる軍勢は九州の東側、日向（宮崎県）方面から南下。一方、豊臣秀吉自身は肥後（熊本県）を通って、九州の西側から南下するルートを通る。

４月、島津軍は日向の南にある「高城」付近に兵力を集め、ここで豊臣秀長の軍勢を待ち受ける戦法を採ることに決める。この高城はかつて、「耳川の合戦」で島津軍が大友家の大軍を撃ち破った、難攻不落の城である。

この付近に島津軍は３万５千の兵力を集め、南下してくる大軍を再び撃ち破ろうと考えていた。

しかし、８万以上の大軍を擁する豊臣秀長の軍勢は高城を包囲すると、その周囲に陣地や砦をいくつも構築し、あわてて攻め込まず、持久戦の構えを取る。

これは島津軍にとって最も嫌な戦法であった。 なぜなら九州の西側から豊臣秀吉の軍勢が南下しているからである。この場所でそのまま睨み合いを続けていると、西側から進む豊臣秀吉の軍勢が、島津家の本拠地・薩摩に攻め込んでしまう。

高城も難攻不落とはいえ、そのまま大軍に包囲されていれば、いずれ陥落は免れない。

そして４月中旬･･･ ついにこれ以上待てなくなった島津軍は、包囲された高城を救援すべく、「根白坂」という場所に豊臣軍が築いた砦を急襲する。この攻撃は最初から無謀なものだという事が解っていた攻撃であり、大将を勤める島津家久は反対していたのだが、だからと言ってこのまま立ち止まっている事も出来ない情勢であり、もはや島津家には他に選択肢はなくなっていた。

一方、「根白坂」は島津軍が高城を救援するのに絶対に通らなければならない場所であったため、豊臣軍の武将 「宮部継潤」 がすでに守りを固めており、敵を待ち構えていた。

こうして高城の南、根白坂で激しい戦闘が開始される。島津義弘や島津家久など、島津軍の歴戦の猛者が先頭に立ち、二万の軍勢が根白坂の砦を急襲する。しかし対する宮部継潤の一万の軍勢も、柵や堀で砦の周囲を固めており、さらに多数の鉄砲隊が配備されていて、襲いかかる島津軍を次々と砲撃で撃ち崩す。豊臣軍の鉄砲は改良が重ねられており、連射性能も高く、必至で柵を押し倒して突破しようとする島津軍は次々とその餌食になっていった。

そして疲弊した島津軍に、「藤堂高虎」が率いる 500 人の部隊が攻勢をかける。藤堂高虎の部隊は少数であったが、巧みな指揮で島津軍を翻弄した。
浮き足だった島津軍を、さらに豊臣軍の「小早川隆景」と「黒田官兵衛」の軍勢が攻撃する。こうなると、兵力差に劣る島津軍にもう勝ち目はない。
大被害を被った島津軍はそのまま敗走し、そして４月中旬、高城も総攻撃を受けて落城した。ついに島津家の最重要拠点は、ここに陥落する事となったのである。

豊臣秀吉、島津も征する

１５８７年４月１３日、筑前・筑後を制圧し南下した豊臣秀吉は川内の太平寺に本陣を置き、島津の動きを見ることにした。

同年５月３日、秀吉の弟・羽柴秀長に説得された伊集院忠棟は、秀長の重臣に案内され、太平寺の秀吉に拝謁した。島津の使者として出頭していた忠棟は、本領薩摩の安堵を聞くことになる。鹿児島本城では、義久は、忠棟から本領安堵、処分なしの話を聞き、驚いた。
秀吉は、秀長に島津に対する処置を書状で、「島津家中諸将より人質を差し出させよ、応じない者は征伐せよ」等が言い渡されていた。

同年５月８日、剃髪僧衣の島津義久は頭を丸めて、豊臣秀吉 の元に謝罪に向かい、川内太平寺に来て降伏した。義弘・家久も人質を出して降伏した。秀吉は薩摩一国を島津義久に安堵し、大隅一国を義弘に、義弘の嫡男久保に日向国諸県郡を、義弘の末弟家久に日向国砂土原を与えた。このように島津家の薩摩・大隅（現在の鹿児島県）の領土を保証する約束を行った。

これらは豊臣秀吉が天下統一のため、豊臣家に敵対することの愚かさと豊臣家に従属することの利点を世間に訴えるための、政治的なアピールでもあったのである。
それでも 島津義弘 など一部の武将は徹底抗戦を訴え、その後も戦闘を継続していたが･･･
島津義久の説得によって降伏し、５月の下旬には完全に戦いは終結する。
こうして九州の各地の勢力も全て豊臣家の傘下に入り、九州の戦乱は終結した。

「九州三国志」はここに終わりを迎え、それから三年後の 1590 年、豊臣秀吉により日本は天下統一される事となる。

秀吉の九州国割（天正１５年）

秀吉の「国割」の目的は、北部九州に重臣を配置し大陸遠征の布石とし、同時に博多を貿易基地としてその復興に意を注いだことである。

居城	石高（万石）	領主	領地
立花山名島	33.6	小早川隆景	筑前・筑後・肥前
中津	12.3	黒田孝高	豊前
小倉	6.0	毛利勝信	豊前（企救・田川）
久留米	13.0	毛利秀包	筑後（山本・竹野・生葉）
柳河	13.2	立花宗茂	筑後（山門・下妻・三潴）
山下	1.8	筑紫広門	筑後（上妻）
三池	1.0	高橋統増	筑後（三池）
佐賀	35.7	龍造寺政家	肥前（三根・神崎・小城・杵島・藤津・神代）
唐津	8.1	波多親	肥前（東松浦・西松浦）
日野江	4.0	有馬晴信	肥前（島原）
大村	2.1	大村嘉前	肥前（東彼杵・西彼杵）
平戸	6.3	松浦鎮信	肥前（北松浦・壱岐）
福江	1.5	五島純玄	肥前（南松浦）
厳原	10.0	宗義智	肥前（対馬）
熊本	49.0	佐々成政	肥後（隈本・宇土）
人吉	2.2	相良頼房	肥後（球磨・葦北）
大分	18.5	大友義統	豊後（臼杵・直入・速見・大分・日田・球磨）
延岡	5.0	高橋元種	日向（県・西臼杵）秋月種長弟（養子）
高鍋	3,0	秋月種長	日向（新納院・櫛間）筑前秋月藩から
飫肥	5.7	伊東祐兵	日向（飫肥・会井・清武）
佐土原	2.8	島津義弘	大隅（日向諸県）
鹿児島	55.9	島津義久	薩摩（除琉球）

旧領との比較から見れば、強く抵抗した島津氏の処遇には寛大で、恵利暢堯の忠義の諫言に耳をかさず、無謀な抵抗を試みた秋月氏の処遇はもっとも過酷であった。封を筑前から日向に移されたうえに、旧領の十分の一にも満たぬ所領でしかなかった。体面に拘泥し、時代の潮流に逆行した種長の決断はあまりに大きな代償であった。

このようにして、春実以来の名家であり、一時は３６万石の太守として九州にその名をとどろかした秋月家は墳墓の地を失ったのである。

なお、博多を含む筑前国を秀吉は、毛利家の名将小早川隆景（毛利元就の三男、三本の

矢の一人）に与えている。隆景ははじめ黒田家の居城立花城に住していたが、博多の支配に不便であり、山城のため水に乏しかった。そこで翌年、糟屋郡名島にあった立花城の「砦」を改造し名島城を築いた。築城には、博多の豪商嶋井宗室・神屋宗湛の二人が協力し、その城下町づくりにも尽力している。

茶人であった嶋井宗室は、三千貫の価であった楢柴肩衝（ならしばかたつき）の茶器を手に入れていた。この茶器は秋月家に召し上げられ、秋月家が秀吉に献上し、最後は徳川家の所蔵となった名品である。

ここで久留米篠山城に触れておく。
豊臣秀吉は九州平定後、毛利秀包（ひでかね　毛利元就九男）に３万５千石を与えて久留米城主に任じた。のちに秀包は朝鮮の役に外征し功績によって１３万石に加増された。

秀包は、熱心なキリスト教徒で、城の改修とともに城下に教会を建ててキリスト教を保護した。関が原の戦いで西軍に属して改易され、その後任として、三河（愛知）岡崎藩田中吉政が関が原の戦いで石田三成を生け捕った功績などで、筑後一円三十二万石を領有した。

田中吉政は、柳川城を居城とし、久留米城には次男の吉信を城代にしたが、吉信は性格粗暴で、無闇に家臣を斬りその数５０人を越えたという。

慶長１０年（１６０５）、吉信１９才のとき、剣術指南役をお手うちにした際に、自分も傷つき、のちにそれが元で他界するといった不祥事を起こした。

このあと老臣が城代となったが、吉政の死後、二代目忠正に嗣子がなく田中家は断絶したのである

このために元和６年（１６２０）、久留米城には丹波（京都）福知山藩主であった有馬豊氏が入城した。有馬氏は福知山８万石の外様大名であったが大坂の陣や江戸城などの普請奉行の功績が認められ、１３万石加増の久留米２１万石の領主となった。
なお、柳川城には立花宗茂が１０万９千石で再び返り咲いた。
有馬氏は西国の監視役的任務を帯び、城は徳川幕府の支城的性格であったとも伝えられる。

第八部の五、（後日談）　関が原の戦乱の果て

ここからは、九州三国志の後日談である。

九州での戦いは、もう少し続くことになる。１５９２年から、豊臣秀吉は「朝鮮出兵」を開始する。そして多くの大名家の軍勢が朝鮮半島へと渡っていった。

九州はその前線基地となったため、多くの兵士が駐留することとなる。また、朝鮮出兵で大きな活躍をした島津義弘・立花宗茂・加藤清正・小西行長 は、みな九州に領土を持っていた（および豊臣秀吉から九州の領土を与えられた）人たちであった。

ただ、大友家の跡継ぎ「大友義統」は、朝鮮出兵中に誤報を信じて城を捨てて撤退してしまうと言う失敗を犯して、領地を没収されてしまう。

大友宗麟は豊臣家が九州を制圧した頃にすでに病死しており、これにより実質、大友家は滅亡する事となってしまった。

また、朝鮮出兵の最中、豊臣家では「文治派」（内政や補給などを担当する政治家）　の家臣と、「武断派」（合戦で戦う武将）　の家臣の対立が深刻化する。

特に肥後では、武断派の武将　「加藤清正」　と、文治派の武将　「小西行長」　が領地を持っていたため、両者の対立が激化する。

加えて豊臣家の軍師で、切れ者と呼ばれ野心家でもあった「黒田官兵衛」も九州に領土を与えられており、没落した「大友義統」も、黒田官兵衛と協力してお家再興の機会を伺っていた。

１５９７年、豊臣秀吉の病死によって、朝鮮出兵は終了した。そして豊臣家の文治派と武断派の対立はさらに悪化していき、豊臣家の文治派のトップ「石田三成」が率いる西軍と、武断派を味方にした大名「徳川家康」率いる東軍の合戦に発展した。

１６００年、日本を二分する天下分け目の大合戦「関ヶ原の戦い」が勃発する。

黒田官兵衛　はこの動きを早くから予期していて合戦の準備を整えていたため、関ヶ原の戦いの勃発と同時に挙兵した。黒田官兵衛はこの「関ヶ原の戦い」を利用して九州に一大勢力を築こうとしていたと言われており、天下への野望を持っていたとも言われている。

西軍の主将・石田三成と対立していた黒田官兵衛は東軍への参加を宣言し、西軍側の城を次々と攻略していく。

名島城主小早川秀秋（小早川隆景の養子、秀吉正室ねねの甥）は、黒田長政の助言もあって豊臣方（西軍）を裏切り、土壇場で徳川方に走り、これがため徳川方の最終的勝利に結びついたといわれている。

加藤清正も東軍として挙兵し、西軍の首謀者の一人となった小西行長の領地に攻撃を開始する。

一方、立花宗茂　は「秀吉公の恩義を忘れ東軍に付くことなど出来ない」と語り、西軍への参加を宣言、「関ヶ原の戦い」に参加するため近畿地方へと遠征した。

しかしすでに龍造寺家の実権を握っていた鍋島直茂は東軍への参加を宣言し、立花宗茂の領地へ攻撃を開始する。

大友宗麟の子「大友義統」は黒田官兵衛と協力する予定であったが、旧知の間であった西軍の大将「毛利輝元」からの説得を受けて、土壇場で寝返りをうつ。西軍への参加を宣言して大友家の旧臣と共に挙兵し、毛利家の援助を受けて「お家再興」を狙ったのである。

黒田官兵衛は大友家の力も借りて戦おうとしていたのだが、この土壇場の寝返りで、まず大友義統と戦わなければならなくなった。

一方、島津家は東軍に参加しようとして島津義弘を近畿地方に派遣するが、東軍に合流できないまま島津義弘は石田三成の説得を受けて、西軍に参加することになる。

こうして･･･　九州は、まるでまだら模様のように各勢力が東軍と西軍に分かれてしまう。当然のように各地で同時多発的に戦闘が発生し、九州は大乱戦の様相を見せる事となった。しかし、九州がそのまま戦国時代に戻ってしまう事はなかった。

「関ヶ原の戦い」が短期間で決着し、西軍のトップである石田三成・小西行長なども処刑され、戦後処理も早いうちに片付いていったからである。

肥後（熊本）の小西行長の領土は、加藤清正によって制圧され、後に加藤清正は肥後全土を治める大大名となる。

大友家の再興を目指した大友義統は、黒田官兵衛の軍勢と戦うが、豊臣家の軍師であり合戦経験も豊富な黒田官兵衛と、失敗続きで家臣からもその力量を疑問視されていた大友義統では、勝負にならなかった。

大友家の旧臣が一時奮戦を見せるも敗退し、これにより大友家の再興戦は失敗、完全に滅亡してしまう。

島津義弘は「関ヶ原の戦い」で苛烈な突撃を見せ、その戦いぶりを称えられるものの、大被害を受け撤退する。

立花宗茂も西軍が敗れたため撤退し、仇敵だった両者は和解すると、共に並んで九州へと帰る。

しかし九州では、鍋島直茂が立花家へ進攻中であった。大友家を片付けた黒田官兵衛も加わって、立花宗茂は包囲される。

立花宗茂は鍋島直茂に決戦を挑むと、1300 人程の部隊で鍋島軍３万の軍勢を一時撃破するが、兵力が違いすぎて結局押し込まれ、城で守りを固めることになる。

これに対し、島津家が立花家へ援軍を派遣し、戦乱はさらに拡大しそうになるが･･･

徳川家康 からの停戦命令が各勢力に届けられたことと、加藤清正の説得もあって、立花宗茂は降伏した。

こうして、九州の「関ヶ原の戦い」の裏で行われた戦乱は、幕を閉じることとなる。

この戦いの功績で、鍋島直茂は正式に龍造寺家を継ぐ事となり、以後 龍造寺家は「鍋島家」に変わった。

黒田官兵衛は停戦命令が来ると占領した城を徳川家に献上し、以後、動くことはなかった。ただ、関ヶ原の戦いで活躍し、徳川家康から褒美をもらった息子「黒田長政」が帰っ

てきた時、「なぜ家康を刺して来なかった」と言ったというエピソードが残されている。
　豊前中津十八万石の大名であった黒田家は、一躍五十二万石に抜擢され、名島城主となった。それまでの城主小早川家は備前岡山へ栄転となった。また、博多入りした初代黒田長政は、名島城に一旦は落ち着いたが、筑前一国の支配地としては名島の城の周辺が狭く、不便を感じ、翌年には新しい築城を思い立って、那珂川を越えた那珂郡警固村福崎の地（現城跡）が選ばれ着工している。

　降伏した立花宗茂は浪人となったが、加藤清正の説得や島津義弘の推薦などにより、後に大名に復帰している。
こののち･･･　徳川幕府が開かれ、時代は「江戸時代」に入る。

　九州では関ヶ原の戦いから 38 年後、長崎の島原半島でキリシタンの反乱「島原の乱」が起こるが、これが戦国時代の最期の合戦となった。

こうして日本は、長い 「天下太平の世」 に移っていく事となる･･･

第九部、秋月氏

第九部の一、原田家より分家の秋月氏

秋月氏の始祖は、建仁３年(1203 年)に武田有義の謀反をいち早く鎌倉幕府に通報した功績により、鎌倉幕府二代将軍・源頼家から恩賞として筑前国・夜須郡・秋月荘を領した原田三郎あらため秋月種雄（たねかつ）である。

原田種雄が秋月荘（現在の福岡県甘木市秋月）に移り住み、姓を「秋月」と改め、秋月種雄と名乗り、初代秋月氏となったのである。

秋月氏はもともと平家の家人であったが、源平合戦においては源氏方に与したため、鎌倉幕府の鎮西御家人となっていた。本家原田家が壇の浦に滅んだ平家没落とともに岩門郷（早良）の三千七百町の領地を没収され、原田種直は１３年間も鎌倉に幽閉されたのとは、別の生きかたをしていたのである。

しかし源頼朝からの信頼は薄く、頼朝の代官的意志を帯びて、鎮西御家人の抑えを含め守護として赴任してきた新参の少弐氏、島津氏、大友氏など東国御家人の傘下に置かれることになる。平安時代に九州に土着し平家方となっていた武家と、鎌倉幕府の意向を帯びて下ってきた少弐、大友、島津との関係が、その後の九州での勢力構造を形成する。幕府の意向を帯びた少弐、大友、島津は九州の三大名となり、元平家方の武家はその勢力下に置かれることになっていったのである。

1203	建仁　3	鎌倉幕府二代将軍源頼家は恩賞として原田種雄に秋月荘を与える。種雄はここに移住し初代秋月種雄となる。 古処山頂に山城を築き、宮園（垂裕神社付近）のあたりに杉本城を築き居館とする。
1274	文永 11	文永の役はじまる
1276	建治　2	元軍の再襲来に備え博多湾岸の石塁構築開始　秋月種頼（四代）
1281	弘安　4	弘安の役に秋月種家（三代）は一族郎党 2700 人余を率いて博多の津に出陣し大いに戦って武勲をたてる 竹崎季長の「蒙古来襲絵詞」に（筑前国の御家人秋月九郎種宗の（ひょうせん）という小舟がえがかれている
1336	建武　3	１３３６年２月、足利尊氏が九州に落延びてくる時、少弐氏は兵力を二分して貞経が大宰府を守り、子・頼尚が尊氏を迎えに出た。菊池武敏はこの機会を逃さず他の豪族と語らって三千の兵で大宰府を攻撃した。少弐貞経は守りきれぬと見て大宰府の

		東北にある要害・有智山城に篭って戦ったが、遂に敵わず２月２９日に、一族数百人と共に討死した。この戦いに星野家能、秋月種貞（第六代）、草野永久は菊池軍に加わり参戦している。
1338	延元　3	多々良浜の敗戦。多々良浜に菊池勢とともに足利尊氏を迎えうったが、利あらず秋月種貞（六代）は大宰府まで落ちのびたものの足利直義等に取り囲まれ、一族郎党２０余人枕を並べて討ち死にした。
1359	正平 14	秋月種高（七代）は今度は足利方の小弐頼尚とともに、宮方である菊池武光軍と筑後川を挟んで対陣する。筑後川の戦い。 秋月種顯（八代） 秋月種道（九代）多々良浜にて宮方として戦う。敗れて自刃。 秋月種忠（十代）
1368	応安　1	この頃になると、秋月氏は菊池氏をはじめ、周辺の武将とともに宮方につき、朝敵退治のため太宰府を進発する。 この時代の秋月氏は、昨日は足利今日は宮方と如何にも節操がないように受け止められるが、戦国の世の中では、自衛保身のためには止むに止まれぬ行為であったにちがいない。
1429		秋月種氏（十一代）大内氏の推挙により幕府より所領安堵さる。
1464	寛正　5	秋月種照（輝）（十二代）応仁の乱にて西軍の山名宗全に従って戦った。
1477	文明　9	古拠山城・杉本城をはじめ、領内の砦を修復、更に新砦を築く。古拠山城の前方左手に見える荒平城もこの時期に築かれた。（里城で、天正 15 年 3 月 6 日　豊臣秀吉はここに２泊したといい伝えられている）
1486	文明 18	秋月種朝（十三代)鳴門山の谷奥に、種月山大竜禅寺を建てる。現在その寺の上に種時（十四代）の墓が残っている。
1507	永正　4	秋月種朝（十三代）は大友義継・菊池武重の軍を古処山下に誘い寄せ、これを撃退する。種朝は城を出て一戦を遂げ、三家の大軍を突き破り、二千余人を討ちとって、大勝利をおさめている。
1524	大永　4	秋月種時、大友義継と知略の和議を行い、益々兵備を厳にする。
1531	亨禄　4	秋月種時（十四代）も、少弐・筑紫らが筑後国中の兵を率いて領内を掠略するのに、筑前国にて合戦し、大いに勝利をえている。古拠山城の防備を固めつつ死去する
1541	天文 10	大内義隆中国地方においてますます勢威盛んとなり、民国との貿易によって、莫大な利益を得る。

1543	天文 12	我が国の南端種子島にポルトガル船、銃を伝える。
1546	天文 15 年	種方（文種・文衆、十五代）は天文十年（1541）、大内義隆から幕府番衆に推挙されている。 古処山は岩場多く険阻であるが、本城より下がったあたりに水船があり、1000 人を養う湧水があると言う。今日秋月にある黒田五万石の城址にある「秋月黒門」は、古処山搦手門にあったものを移したものと云う。
1551	天文 20	大内義隆、重臣陶晴賢に攻められ大寧寺（長門市）にて自刃する。
1555	弘治元年	陶晴賢、毛利元就との厳島の戦いで自殺する。 大内氏なき後秋月氏は毛利氏と款を通じ大友氏と抗争を続ける。 この頃キリスト教の布教活発となる。大友義鎮（宗麟）は豊後に来たポルトガルの宣教師を保護し、外国との貿易を盛にして巨万の富を得る。鉄砲や大砲の新兵器を大量に輸入する。
1557	弘治　3	

「秋月氏」は大内氏の滅んだ後、大友氏と通じたこともあったが、「毛利元就」が中国を掌握すると、毛利氏と通じ常に大友氏と対抗した。

大友と元就との間には、中国は筑前には干渉しないと言う密約があった。しかし元就の味方をすれば「筑前、豊前」を与えようという言葉に、「秋月文種（種方）十五代」が呼応した。弘治 3 年 7 月（1557）古処山で兵を挙げ、再び大友に対峙する。これに対し「大友義鎮」は戸次鑑連を総大将に、高橋三河守、臼杵鑑速、田原親宏、志賀親度らの二万の大軍で古処山へ向かわせた。

大友軍は古処山への攻撃開始、麓の邑城（さとじろ）落とし、峰伝いに古処山本城へと迫った。篭る秋月文種（十五代）が手勢は二千余騎、古処山の岩場地形を利用したこの山城は、天嶮の要害であったが、多勢に無勢よく戦うも秋月勢の多くが討ち死。文種の嫡男「晴種」も戦死。古処山城は遂に落城「文種」は自刃する。

この古処山の落城には、「小野九朗右衛門という者と、その従兄弟「和泉」と云う者が裏切って大友勢を城内に入れ、城が落城、「文種」も討ったともいわれている。秋月の損害は、「坂田和泉」「桑原内膳」の老臣や侍大将含む、数百人が戦死し、秋月は壊滅した。

しかし秋月にとって幸運であったのは、当時十三歳（九歳とした書もある）の「種実（十六代）」ら三人の遺児は家臣「大橋豊後守」らに守られ、密かに中国「毛利」の許へ逃げ「庇護」された事である。

「秋月文種（種方）」の死によって、ひとまず筑前を取り巻く情勢は混乱が収まる。この秋月攻めの功労に対し「大友義鎮」は「戸次伯耆守(鑑連)」に領地の宛

行状を送っている。永禄 2 年(1559)6 月 26 日には「義鎮」は、豊前、筑前の守護となり、11 月に九州探題となる。

1559　永禄 2　　秋月氏の旧臣・深江美濃守は毛利氏の兵三千の支援を得て、秋月種実（十六代）を居城に迎えると、古処山城を占拠していた大友軍を破り、秋月氏の旧領をほぼ回復した。
種実の弟・種冬は高橋鑑種の養子として豊前小倉城に入り、種信は長野氏を継いで豊前馬岳城主となり、元種は香春岳城主となり、それぞれ大友氏に対抗した。

秋月氏の名が最も表れてくるのは、秋月種実（たねざね）（十六代）の頃からである。山口に毛利元就を頼って三年の後、家臣らの手によって、秋月城を大友氏から奪還、再び旧領に返り咲いた。

永禄５年頃より、毛利氏に与し、その九州進出に尽くして大友氏と戦った。

秋月氏最盛期（種実の頃）の支配地は北部九州（筑前）の十一郡、二十四城を数え、３６万石に及んだ。

永禄１２年には大友氏に従ったが、大友氏が島津氏との耳川合戦（１５７８）で大敗すると再び反大友氏の連合を組むなど、ほぼ大友氏に対抗している。

秋月城址

秋月城陣屋

1564　　英彦山座主、秋月と同盟

1567　永禄 10　　7 月大友氏宝満城（高橋鑑種）を攻撃する。
8 月大友軍二万余騎秋月におしよせる。高橋鑑種とともに種実は、9 月 3 日の休松の戦いにて大友軍を叩きのめした。これにより熱望の秋月家再興見事に結実した。この戦いで戸次鑑連（のちの立花道雪）の一族は大打撃を受け、鑑連は無事だったものの、その弟らは討死した。双方の決着はつかなかったものの、大友、秋月共に損害は大きかった模様。このことは後の種実の行動に

も見て取れる。

1568	永禄 11	毛利元就の九州侵攻も始まり、永禄 11 年（1568 年）には立花鑑載が大友氏に反旗を翻すなど、一時は反大友勢力が優勢だったが、7 月 23 日に立花山城が大友軍によって陥落され、永禄 12 年（1569 年）5 月 28 日に毛利軍も多々良浜の戦いで大友軍に敗れたため、8 月に種実（十六代）は大友宗麟に降伏した。このあと、筑前における大友の体制が確立する。
1570		高橋鎮種（紹運）、豊満、岩屋城督となる
1571		戸次鑑連、立花城城督となる「道雪」と名乗る。
1575	天正　3	龍造寺隆信・高橋鑑種・秋月種実［打倒大友」の共同目標で友好を暖める。
1578	天正　6	大友氏日向耳川の戦いで島津軍に敗れる。大友氏に翳り。 これより種実近隣を奪って旧領を復し、荒平城、坂田城、福嶽城、観音寺城、道場山城など近くの砦を固め全盛時代を迎える。（筑前、筑後、豊後 3 ヶ国 11 郡を領す。） 秋月種実、筑紫連合、岩屋城高橋紹運攻める「柴田川合戦」。戸次道雪、高橋紹運は一旦退却。　深追いしてきた秋月種実軍を待ち伏せ攻撃。秋月勢総崩れ敗走
1579		二日市合戦。秋月、筑紫勢大宰府に出陣、立花勢と戦うも撃退される
1580		高橋旧臣「北原能登守鎮久」、秋月に内応謀反企てるも紹運に誅伐される。 紹運に父を切られた「北原進士兵衛」は、秋月の内田彦五郎を使い「父の敵を討つ」と「種実」に策略しかけ、これにだまされた秋月勢、500 あまりで岩屋城に出陣する。 夜となったので一隊は、蘆木山と言うところに分散し陣を張る。これに進士兵衛、酒を振舞い。秋月勢の寝入った所を高橋勢襲い秋月惨事となる。 この敗戦に、種実は弔い合戦とばかり一万二千もの軍勢を「奈須美」と云うところに繰り出し、豊満、岩屋を覗う。 これに「道雪、紹運」の両将も奈須美に陣を進め両軍相乱れて戦う。しかし、紹運の知略に「綿貫」らが奮戦、秋月勢は崩れ古処山へ引く
1581		秋月種実大宰府観音寺口へ押し出す。「戸次統虎」立花城へ婿養子、筑後における大友勢の秋月攻勢を支援する。 戸次道雪、高橋紹運の撹乱作戦。両将は、六千の兵で嘉穂、穂

		波に打って出る。八木山、石坂,大日寺あたりで秋月勢と衝突。立花、高橋勢、秋月の首級 760 挙げる。しかし、秋月の新手の投入で立花、高橋にも 300 の討死。この双方の戦死者葬った「千人塚」が八木山の残る この合戦に「戸次統虎」初陣。　秋月勢の中で武勇をもって知られる「堀江備前守」と組討ちこれを討ち取る。原鶴合戦、八木山合戦、英彦山焼討事件
1582		秋月種実、豊満城の米ノ山砦の手薄突き占拠するも、紹運直ちにこれを奪回
1584	天正 12	沖田畷の合戦にて龍造寺隆信最後を遂げる。
1585		種実　家督を「種長」（十七代）に譲る
1586	天正 14	7 月岩屋合戦、高橋紹運 600 の篭城兵と共に玉砕する。 岩屋城落城。　高橋紹運自刃　39 歳。　秋月勢は二手に分れ、一隊は日田方面の大友の押さえに。一隊は岩屋へ参陣したという 8 月秀吉軍の先鋒毛利勢　海を渡り、小倉・香春城を占拠。 秋月勢・島津勢と共に、立花城を解き後退を開始する。 12 月 1 日秀吉九州征伐を正式に発令する。 兵３０万人分の糧食、馬３万頭分のそれぞれ１カ年分、その他合戦に必要な品々細引まで準備させる。
1587	天正 15	１月第一・二軍九州征討軍出陣・　３月第三軍　秀吉出陣、海路にて九州に向かう。 恵利内蔵助暢尭　広島にて秀吉に謁見、偽りの降伏を申し出る。このとき秀吉は大人物であり、決して敵対すべきでない事を身をもって感じ、その旨を秋月種実親子に逐一報告。血涙をもって和睦することを勧める。 しかし、願い聞き入れられず恵利内蔵助暢尭妻子と共に鳴渡大岩の上で諫死する（これを「腹切岩」と言い伝えている。） 種実・種長はついに豊臣秀吉に降伏する。家宝の茶入栖柴を捧げた。 秀吉に下った秋月種実、種長親子は、秀吉の国割りにより日向高鍋三万石へ。秋月氏は、小藩ながら徳川の時代を生き抜き名門大蔵一族を守り通した。 「種実」は慶長元年伏見の屋敷で、波乱の生涯を終えたという。
1588	天正 16	秋月は小早川隆景の所領となる。

秋月氏は豊臣秀吉の九州征伐のとき、島津氏に属していた。

しかし、天正１５年（1587 年）に秀吉の大軍に抗するもあたわず、秋月種実は嗣子の秋月種長（十七代）と共に剃髪し、墨染の衣に身を包んで、秀吉の本陣に降り「楢柴の肩衝」及び「国俊の刀」を献上して、本領を安堵された。

文禄の役（豊臣秀吉の朝鮮出兵：1592 年）には、秋月種長が出陣している。

第九部の二、高鍋藩の秋月氏

文禄の役（豊臣秀吉の朝鮮出兵：1592 年）には、秋月種長が出陣している。

1600 年の関ケ原の戦いで、秋月種長は西軍に属して大垣城を守備していたが、9 月 15 日の本戦で西軍が敗れると東軍に内応して大垣城にて反乱を起こし、木村由信らを殺害した。戦後、その功績を認められて徳川家康から所領を安堵され、その後の秋月氏は江戸時代を通じて、高鍋藩として存続した。秋月種長が初代高鍋藩主となる。

高鍋藩（たかなべはん）は、日向国に存在した。現在の宮崎県児湯郡の東部（高鍋町、川南町、木城町、都農町、日向市の美々津）と串間市、宮崎市（瓜生野・倉岡の一部）、国富町（木脇）を領有していた。藩庁は高鍋城（宮崎県児湯郡高鍋町）。高鍋は初期、財部と呼ばれていたため財部藩（たからべはん）とも称する。

1604 年（慶長 9 年）居城を財部城（高鍋城）に移し、正確にはこの時点より高鍋藩が成立したと言える。

三代種信は、1673 年（延宝元年）財部から高鍋に城地の名を改めた。

四代種政は、1689 年（元禄 2 年）弟の種封に 3 千石を分与したため、以後の表高は 2 万 7 千石となった。

江戸時代中期、六代種美の次男は米沢藩（上杉氏）に入り、名君で有名な上杉鷹山（治憲）となるが、その兄に当たる七代種茂も、高鍋藩の歴代藩主の中の名君として、治績を上げた。1778 年（安永 7 年）には藩校明倫堂を開いた。

種茂・種美兄弟の母は、秋月藩主・黒田長貞の娘・春姫で、その縁で、七代種茂の二男が、天明 5(1785)に秋月藩主・黒田長舒(ながのぶ) となった。その彼もまた秋月の名君として知られている。

七代種茂の長男・秋月種徳(たねのり)八代目。

秋月種徳の二男・秋月種任(たねただ)九代目。

種任の長男・秋月種殷(たねとみ)十代目は、天保 14 年襲封。　文久 3 年に軍制改革を行い海防に務めている。早くから勤王的で、薩摩藩に従い新政府軍に与し、東北地方にも転戦した。慶応 4 年正月、鳥羽戦に御所諸門の警衛を担当した。

6 月、越後口軍に属し、新潟に進出。　雷、大島、関川を転戦し、8 月に庄内へ進んだ。

1871年、　高鍋藩は高鍋県となる。

1871 年（明治 4 年）廃藩置県により高鍋県となる。その後、美々津県、宮崎県、鹿児島県を経て、鹿児島県より分離、宮崎県となった。藩主家は 1884 年（明治 17 年）子爵となり華族に列した。

教育の藩としても知られる。

1873 年、　藩校・明倫堂が廃止となった。美々津県へ。
明治 9 年に鹿児島県、宮崎県へ。

1876 年、　宮崎県庁止め鹿児島県合併。

1877 年、　西南戦争が起きる。

元高鍋藩家老・秋月種節(たねよ)は、明治 10 年 6 月 23 日、西南戦争の西郷軍に幽閉され、獄中の病によって 64 歳で病没した。

種節は、旧高鍋藩士の西郷軍への参戦に対し、逆賊になると反戦論を唱えたためであった。

西南戦争では、鹿児島藩の影響の強かった日向の士族も西郷軍に参加。

日向の戦死と行方不明は９００人を越すほどだったという。

第十部　米沢藩の上杉鷹山

まず、上述した秋月家系図の中で、上杉鷹山なる人物がどこに位置しているかを見てみよう。

日向高鍋藩の六代藩主種美の跡は当然長男の種茂が継ぎ第七代藩主となるが、次男、つまり種茂の弟が米沢藩上杉家に入り、藩政改革を見事に成功させた、かの有名な上杉鷹山治憲である。

ところで、兄弟の母は秋月藩主・黒田長貞の娘・春姫で、その縁で、種茂の 2 男が、天明 5(1785)に秋月藩主・黒田長舒(ながのぶ) となり、彼もまた秋月の名君として知られることになる（秋月家の本家はすでに日向高鍋に移封となっており、筑前秋月の地には黒田家から藩主がでていた。そこへ高鍋の秋月本家から黒田藩主が登用されたということ)。種茂の長男が第八代高鍋藩主秋月種徳(たねのり)である。種徳の跡は次男の秋月種任(たねただ)が第九代を引き受ける。

上杉鷹山は、1751 年に日向高鍋藩の江戸藩邸で、藩主秋月種美（あきづきたねよし）の次男として生まれた。幼名は松三郎である。

鷹山は小さい頃から頭がよいと評判の子供であったが、江戸時代は長男が家を継ぐのが普通であり、どんなに優秀でも次男が長男をさしおいて家を継ぐということはなかった。したがって、普通であれば、そのまま殿様の親族として平凡な一生を終えたかもしれない。ところが、鷹山が９歳の時、突然、祖母の瑞耀院（ずいようういん）の推薦によって、出羽米沢藩十五万石・上杉重定の養子になった。

上杉重定の正室に男子がなかったため、重定の正室が生んだ幸姫（ゆきひめ）と将来結婚することを前提に、正式に上杉家の養子となったのである。

日向高鍋藩二万七千石のただの次男坊が、十五万石の大名家を継ぐことになったのだから、誰もが驚く出来事であった。確かに、祖母の瑞耀院が上杉重定と従姉弟だったという縁もあったが、優秀な子であるという評判があったからこそこの縁組が成立したのであろう。

しかし、優秀で心優しい少年を待っていたのは、非常に過酷な現実であった。

1766 年、数え年１６歳になった鷹山は、将軍徳川家治の前で元服し、将軍の一字をもらって治憲（はるのり）と名乗った（鷹山と号するのは、ずっと後に養父の重定が死去してから)。

そして翌年、重定が隠退して、鷹山は上杉家の家督を継ぎ、第九代米沢藩主となったのである。

この米沢上杉家は上杉謙信の家系で、越後を中心に一時は２５０万石を誇る大身であっ

た。１６０１年、会津若松城を拠点に米沢・庄内を含む１２０万石を領していた上杉景勝（謙信の子）は、関が原の合戦で西軍に加担したため敗戦の憂き目にあい、徳川氏によって米沢に移封されて３０万石の藩主となった。当時の米沢は８００戸の田舎町で、６０００人の武士を城下に収容するのは不可能だったため、下級武士を郷士として郊外に屯田させることになった。これが原方衆と呼ばれる人々である。更に三代藩主の綱勝が世継ぎがないまま急死すると、四代藩主綱憲のとき、さらに１５万石に減封され、藩の財政は会津１２０万石時代と比較して六分の一にも減額されていたのである。ところが、藩士の数はというと、会津時代そのままの藩士を抱え、格式を重んじ、大藩としての派手な出費を続けていた。明和年（１７７１年）の米沢藩の財政収支は収入３万両、支出７万両うち４万両は借金の返済という状態で、米沢藩は未曾有といっていいほど藩財政が極端に窮乏しており、家臣も領民も貧困にあえいでいた。そして更に悪いことに、数度にわたって大凶作が起こり、財政難に追い打ちをかけていた。

時に、鷹山少年十七歳。若い藩主には、あまりにも厳しい現実であった。

しかし、鷹山は挫けなかった。

藩主になった直後、鷹山は自らの決意を二つの誓詞にしたため、氏神の白子神社に奉納した。一つは自分自身を律したもので、「文学・武術を怠らないこと、民の父母である心構えを第一にすること、質素倹約を忘れないこと、言行が整わなかったり賞罰に不正があったりしないようにすること」等を神前に誓ったものであった。

もう一つは、「毎年国家が衰微し人々が困窮しているが、大倹によって必ず中興したい、その決意を怠るようなことがあれば神罰を蒙ってもよい」という意の誓文であった。
実は、鷹山はこれらの誓詞を密かに奉納したので、領民は誰もこのことを知らず、発見されたのはずっと後の時代になってからであった。

鷹山はこれらを乗り越えるために、自分から模範を示し節約に努め、一汁一菜で通したといわれるほど、徹底した倹約を進めた。藩主の生活費のすべてである江戸における年間費用は、それまで千五百両であったが、これを二百九両にまで減らした。実に七分の一という大幅な節約になる。日常の食事は一汁一菜、衣服は綿衣として、五十人もいた奥女中も九人に減らした。

こうして鷹山は、竹俣当綱（まさつな）や莅戸善政(のぞきよしまさ)といった改革派の強力なブレーンを得て、藩政改革を推し進めていくことになった。
たとえば、米の増産のため、武士にも開墾作業に従事させ、その延べ人口は一万三千人に達したといわれる。
鷹山の意をたいした竹俣は富国生産の政策を積極的に推進する。
富国政策とは、ろうを採るためのウルシ、養蚕の桑、和紙原料のコウゾが、それぞれ百万

本植樹から手がけられた。
　しかし、このように若くて新しいリーダーが旧習を破る行動をし始めると、いつの時代でも旧体制の幹部達は反発するものである。
米沢藩もまさに同様で、鷹山の行動は上級家臣や老臣たちの反発を招くことになり、彼らは何かと鷹山の新政策に横槍を入れた。藩の守旧派の抵抗勢力は強く、鷹山の改革政策に反対したため、鷹山は窮地に立たされる。
　ついに、1773 年、譜代の老臣７名が鷹山に対して反旗をひるがえした。
鷹山を中心に改革派が推し進めてきた政策をすべて否定するという訴えを起こしたのである。「七家訴状」とよばれる四十五力条からなる訴状には、鷹山に対する批判や、鷹山側近に対する不満、新政策への非難がつづられていた。
その中心人物となっていたのが、藁科立沢（わらしなりゅうたつ）であった。
　鷹山はこの重大な局面に際し、果断であった。
三日後に７人の重臣すべてを処分する行動をとった。中心の藁科は打ち首、他の２名は切腹、残りは隠居閉門とした。
これによって、改革政策はさらに活発に推進されていくことになる。

　竹俣は最初に「樹養篇」を提案し、この頃、その計画が協力に推進されていた。
それは「ウルシ」を領内全土に植え、実から蝋をとり、専売することによる利益を目指すもので二万両の増収を見込み、米沢三十万石時代を取り戻すという壮大な計画であった。
実際に苗木を植え、収穫の時期にかかったのであるが、これが大誤算であった。
　理由の一つは、ウルシ蝋の品質の問題であった。その頃、西日本ではハゼから蝋をとる産業が定着していたが、品質はハゼの方がよく米沢蝋は悪蝋と呼ばれた。そのために蝋が売れず、せっかくのウルシの木が遊んでしまっていたのである。
　第二の理由は、計画遂行の中心となっていた竹俣の横柄なあるいは不謹慎な行動（スキャンダル）であった。米沢藩では、上杉謙信の命日には、毎年、禁酒し一日を厳かに過ごすという慣わしがあったが、竹俣は命日の前日から飲み始め朝まで酒浸りだったことである。

　鷹山は竹俣を不謹慎の咎で隠居にし、禁固の刑に処し、ウルシに見切りをつけて樹を切り取ってしまう。半年後、もう一人の改革推進派莅戸善政(のぞきよしまさ)も自ら隠居を願い出ることになった。挫折である。
　このような時、天明３年、浅間山が大噴火する。米沢藩の米生産十五万石のうち十一万石が被害を受ける。さらに、義父重定の家が火事となり、その新築に五万両を要するといった事態まで発生した。
　挫折を感じた鷹山は１７８５年、３５才の時、藩主を退き、隠居することとなる。
跡を継いだのは治憲（鷹山）の養子、治広であった。

隠退にあたって鷹山が治広に与えたのが有名な「伝国之辞」で、鷹山の政治理念を象徴する名言として知られている。

一、国家というものは先祖から子孫に伝えるもので、藩主の私有すべきものではない。
一、人民は国家に所属するもので、藩主の私有物ではない。
一、藩主は国家人民のためにいるのであって、藩主のために国家人民が存在するのではない。

上杉鷹山立像
（米沢市、上杉神社内）

挫折して隠居した鷹山であるが、その後も藩政に助力を惜しまず、十代藩主治広、十一代斉定をも後見して、米沢藩の経営を終生リードし続ける。

最初はまず治広への指導である。寛政元年（１７８９）治広のお側役丸山平六が、藩政改革について「自由な発言を認め批判的な意見にも耳をかたむけること」「中心となる人物を厳選して権力を集中させ、政治の仕組みを単純化すること」「厳しすぎる統制は現実にあうように加減すること」を進言する。これを見た鷹山は改革の機運が高まってきたのを悟って、治広に佼成改革の実行を進言する。

治広が藩政に関するさむらいたちの意見を募ると、藁科立沢（打ち首になった重臣）の長男立遠が「管見談」（かんげんだん。藩内の風俗が乱れているのをなげいて、米沢藩が立ち直るためにはどうしたらいいか、その方法について自分の意見を纏めた冊子。医者）をはじめ３４０通の上書が寄せられた。不正な代官や諸役人は辞めさせ、思い切った人材の登用が実施されて、隠居中の莅戸善政(のぞきよしまさ)が奉行格の中老に、黒井半四郎忠寄が中之間年寄に、丸山平六が大目付に、提学（主任教授）の神保綱忠が中之間年寄に、それぞれ抜擢された。また、庶民一般の意見を藩政に反映させる試みとして上書箱が設置された。

莅戸善政は就任早々、四十七カ条にのぼる政務の改革案を進言した。のちに米沢藩「寛三の改革」と呼ばれるもので、遠大な計画であった。農業振興のために生産者人口の増加、殖産興業を徹底しての国産品の増産、借金解消による藩財政の安定、農民教導による物心両面にわたる農村の復興を目指して、綿密な長期計画を立てた。

鷹山隠居から７年の１７９２年（寛政４年）には、植樹や特産物奨励の為の御国産所が設置されるが、とくに桑の栽培が普及していく。１５０万本の桑の樹が植えられ、鷹山の隠居所でも、お豊の方（鷹山夫人）がみずから奥女中たちと養蚕や絹織りを手がけた。そ

れにならってさむらいや町人の家庭でも養蚕が行われるようになり、絹織物は米沢を代表する産業に発展していく。所謂寛政の改革（第二次鷹山改革）である。

この他にも様々な行政改革を実行し、見事に瀕死状態だった財政危機を乗り越えたのである。第二次改革に着手し３３年後のことである。

ここで絹織物に触れておかねばならない。
米沢は江戸時代初期から青苧（あおそ）を生産して収益を上げていた。古い時代の布は、それぞれに家が家族の衣料としての必要に迫られて織っていた。その主な材料は、からむし（苧麻）といわれる植物の皮の部分で、色が青いので青苧といわれていた。米沢での青苧を織る技術は幼稚なものであった。また、桑を植え、蚕を飼って絹糸をとっても、織る技術を身につけたものはほとんどいなかった。

このとき、小出村（今の長井市）の肝煎（村長）横沢忠兵衛が越後布織の技術をとりいれて国益を上げようと進言した。それを実行に移す事業が進められ今の新潟県から源右衛門が１７７６年に米沢に招かれた。藩では縮織（ちぢみ）伝習所を建てて、織る技術を見につけさせた。中級以下の家臣の婦女子を選んで織物の製法を習わせたのである。はじめは青苧の晒し方、紡ぎ方、機ごしらえ、織り方を身につけさせ、後には絹による織りも習わせた。

織物も染めなければ実用にならない。まず藍の生産であるが、仙台の大友次郎を米沢に呼んで栽培方法の指導をしてもらった。次に藍の本場阿波から藍問屋の志摩氏をよんで米沢に店を出させた。藩の家臣町田八之丞は藍の買い入れ係りを命ぜられるとともに、藍を求めると今度はねせ方を命じられ、藩内の三箇所にねせ場が創設された。藍は玉になっていて、これを甕に入れて発酵させるのだが、ねせ方は温度加減が大変難しいという。

先進技術の導入はその後も精力的に進められ、１８０２年には丹後の織師、宮崎球六を雇い入れて、さまざまな絹織物の技法を採り入れた。また、１８１２年には町田八之丞が数年間にわたる研究の結果、絹縮（すきや、縦糸を絹、横糸を麻で織ったもの）を開発した。「すきや」は一大ヒット商品となった。開発した町田は３万両の大金持ちになったと言われる。

また１８２７年には帯地が、１８５０年には黄八丈が、絽・紗・縮緬（ちりめん）、１８６０年には桐生から来た田島常右衛門によって米沢節糸織（ふしいとおり）が織られた。

こうして米沢の繊維産業は、かっての原材料の移出から出発して、素材の麻から絹への転換、製品の多様化・高度化を精力的に進めることにより、今日も地場産業として確固たる地位を占めている「米沢織」にまで発展したのである。

むかし、みちのくといわれ後進国であった米沢が、江戸時代の後期に名をなしたのは、米沢織に負うところが大きい。

鷹山は 1822 年に病に倒れて静かに息を引き取る。享年７２歳であった。その翌年には米沢藩は借金を完済したという。

興譲館

最後に鷹山の教育を取り上げる。その影響が久留米有馬藩の明善堂にも残るからである。

天明３年、奥羽地方はそれまで例のない大凶作に見舞われ、各地で多くの人が飢えて死んでいった。米沢藩の収穫も非常に少なく、平年作の２０パーセント程度をいう未曾有の凶作であった。このとき藩主治憲（鷹山）が出した命令が残っている。

富める者も貧しい者も、領内すべての家で粥やかてを食べて、米をすこしでも食い延ばすこと

米や雑穀を用いる酒や、豆腐・納豆・貸しを作ってはいけない

越後と酒田から１万５千俵（約９００トン）の米を調達するほか、藩の米蔵を開いて、貧しいものには男一日三合、女は二号五勺と、味噌十匁を与える

衣服を買えない者には、銭四百文を与える

このように難民の救済に努めた結果、米沢藩では他国でしきりに起きた一揆や盗賊の横行もなく、一人の餓死者も出さずに難局を乗り切ったという。

鷹山が生涯の師と仰ぎ敬慕したのが、細川平州である。平州は、藩主が心がけなければならない第一の徳目として、身分の高いものが、下々の者に親しく接する「先施」の道を説いた。これは身分制の厳しい封建時代では異例の教育であった。
また、次のような「建学大意」を示した。

「要職には徳の高い謙虚な人格者を任命し、学館の教育は遜譲の徳を磨くことを目的としなければならない。師長（教師）は先聖（孔子）の教えを受け継いでその徳を人々に正しく伝えるもっとも重要な役目であるから、誰からも尊重されなければならないし、一方、師長は子弟の信頼を得ることを第一と自覚し、子弟は師長に従順にもっぱら学徳を磨くことに精励しなければならない」と。そして細井平州の勧めで鷹山は藩校「興譲館」を開設する。その目的は、学問のための学問ではなく、儒教の実学思想を学ばせ、有能な役人や学徳を備えた賢明な指導者を養成する実践道場とすることであった。

興譲館が設立されると、優秀な諸生を江戸の細井平州の嚶鳴館に遊学させる制度が出来る。遊学制度は儒学のほかに医学にも広げられ、蘭学が盛んになる。そして医学校好生堂が設立された。

その後、十一代藩主斉定の難病が、シーボルトの弟子湊長安の投薬でなおると、西洋医学への関心が急に高まり、好生堂は漢方にかわって蘭方が主流となり、藩内一般への種痘

も普及していく。幕末になると、米沢は「東北の長崎」といわれるくらいに蘭学がさかんとなる。

今日、米沢興譲館高校には「先生教えを施し、弟子是れ則る」と一句が扁額として引き継がれている。

米沢興譲館から久留米明善堂へ、（椛島石梁（かばしませきりょう）の果たした役割）

久留米藩は、わざわざ隣の熊本藩から左右田尉九郎（そうだじょうくろう）を招いて藩学の振興にあたろうとするが、なかなか実効が上がらない。そこへ上述の米倉藩指導者細井平州門下の椛島石梁が帰藩し、尉九郎と力をあわせ、明善堂を新設し、人材の育成を目指して藩学教育を一新した。

尉九郎は元々ここ久留米藩の人間ではなかった。肥後山鹿の出身で、熊本藩に仕える儒者であった。当時久留米藩では藩財政の逼迫に苦しんでおり、一方で藩士たちは文武の修業からはなれ、遊芸にうつつを抜かしている状態であった。従来の学問所である講談所が何の効果もあげておらず、まずこれを改革しなければならないと、藩の儒者広津藍渓と井上正伯は痛感していたのである。そこで二人は、藩政改革に実効を挙げていた熊本藩から優れた学者を教授に迎えることを考え、あえて藩の垣根を越えて尉九郎を招聘することにしたのである。新教授を迎えるにあたって校舎を新築し、修道館と命名した。

ところがその修道館は寛政七年（１７９５）炎上してしまう。その年六月、江戸藩邸講談所教官椛島石梁は若殿有馬頼端（よりなお）の帰国にしたがって久留米に帰ってきた。

石梁は１７８４年、江戸に遊学すると米沢藩興譲館で腕を振るって名を上げていた細井平州に入門し、その後平州にしたがって名古屋藩明倫堂へ赴き、平州の仕事を手伝いながらその学問と学校観、および学校経営について多くを学んだ。そして椛島石梁の名は、平州の一番弟子として全国に知られるようになっていた。

最初に石梁がしなければならなかったことは、新しく学校を建設する為の金策であった。これは御原郡（小郡）の豪農樋口甚蔵の積極的な協力が得られ、１７９６年に新講談所が落成した。

藩は尉九郎と石梁二人の顔をたて、尉九郎には今まで通り明善堂の教授として教育の全責任をおわせるように、また再建の立役者である石梁には肝煎方（運営上の最高責任者）として明善堂の経営を任せるように命じた。しかし、石梁はその職を辞退し一教員として尉九郎に協力することにした。そして寛政九年（１７９７）明善堂の経営が軌道に乗ったのを見届けるとすべてを尉九郎に委ね、再び江戸へと旅たって行った。

「久留米藩のために役に立つ人材の育成」が尉九郎の目標であったが、彼は孤独であった。尉九郎は熊本藩で徂徠学を学んだ身であったが、久留米藩は「朱子学」であり規則づめの学風、彼はそれに従わざるを得なかったのである。「白鹿洞書院掲示」を壁上に掲げて学規とするという闇斎学の方式を遵守しなければならなかったのである。

ところが、そのことを石梁に相談すると、彼は直ちに同意し、明善堂新築を理由に掲示を新しくすることにして、二人で「白鹿洞書院掲示」を取り外し、新しく「恭謙遜譲」（きょうけんそんじょう）を掲げることにした。新しい掲示の意味は、細かい規則は一切定めず、「恭謙遜譲」の精神に照らし、すべて自分で考え、判断し、行動せよ、というものである。身分制社会で、普段の私生活まで口うるさいくらいの約束事やしきたりが支配していた時代、そして約束事やしきたりを教えるはずの藩校で、規則をなくすなどということが許されるとは誰も思っていなかったことである。これは故郷に錦を飾って戻ってきた石梁だからこそできたことであろう。

壁書にある「恭謙遜譲」は、慎み深く謙虚で譲り合うという精神により、自分が譲ること（自己否定）によってお互いに共存することができる、というのが石梁が師の細井平州から学んだ人間観だったのである。その教育における実践がこの壁書なのである。

例えば、それまでは講釈の時に座る位置について、身分や格式に準じ席順が決まっていたが、新生明善堂では当然のことながらこのルールはない。ある時、何を思ったか一人の徒歩組の者（乗馬しない下級侍の組）が頭役（上役）よりも上座に座ってしまった。この頭役は石梁に向かって「いったいどういう了見なのだ」と苦言を呈する。これに対し石梁は「壁書をご覧ください。あの人一人の心得違いにすぎません。だからあなたがとやかく言う問題ではありません」と答えたという。

上杉鷹山という秋月家の血筋を介して、立派な子弟を育てるという教育思想が久留米の明善校にブーメランのように舞い戻ってきたということですが、これも何かの縁でしょう。ここで鷹山に関する有名な話を、最後に一つご紹介しよう。

鷹山が亡くなってから約 140 年後の 1961 年、第３５代米国大統領に就任したジョン・F・ケネディは、日本人記者団からこんな質問を受けた。

「あなたが、日本で最も尊敬する政治家はだれですか」

ケネディはこう答えた。

「上杉鷹山です」

その時、日本人記者は誰も「上杉鷹山」が誰なのかを知らず、言葉に窮したと言う。

ケネディは「国に何かしてもらおうと思わず、国のために何ができるかを考えよう」という立場を貫いた政治家でしたが、まさに鷹山の「伝国之辞」の理念に一脈通じており、これを厳しい情勢の中で一貫して断行した鷹山を、真に尊敬していたのだと思われます。「伝国之辞」をここに再記します。

一、国家というものは先祖から子孫に伝えるもので、藩主の私有すべきものではない。

一、人民は国家に所属するもので、藩主の私有物ではない。

一、藩主は国家人民のためにいるのであって、藩主のために国家人民が存在するので

はない。

米国に留学したことのある内村鑑三が、明治時代にすでに「代表的日本人」の一人として上杉鷹山を海外に紹介しており、故ケネディ大統領はそれを多分読んでいたのであろう。それがケネディをして「最も尊敬する日本人」と言わしめた理由と思われる。

上杉鷹山の基本理念は、藩そのもの、また家臣・領民を私しすることなく、共有の財産であり価値であること、そして民主政治を説き自らの責任を明確に示し、何よりも自ら率先垂範した点に鷹山の真骨頂があるが、それが、ケネディの有名な就任演説の一説、

「国家が諸君に何をなすかを期待しないでもらいたい。
諸君が国家に何をなしうるかを考えてほしい」

の中にも共通する理念として残されているように思える。

以上

あとがき

日本史や世界史は確かに高校で習った。しかし、骨格だけで、特別興味が湧いたわけではなかった。以来半世紀以上が過ぎ、テレビを観るにも知らない新しい歴史の世界が毎日飛び込んでくる。それらを追いかけることも、またとない楽しみの一つではある。

私は九州出身である。教科書で習った歴史では九州の田舎に伝わる伝説や古跡譚を理路整然と説明することは不可能であった。今日世の中にはたくさんの本が溢れているので、それらを買って読めばすむことであるが、なかなか手が出なかった。

そうしたとき、共編者石井秀夫氏が九州武家の歴史を小気味よくまとめてくれた。旧家であり、周りを歴史に詳しい人たちに囲まれていたことが、彼を歴史好きにしたのかもしれない。

よい素材の資料を得たので、それを利用し自分用九州史を纏められるはずだと気づき、ついでにそれを親しい人へもと思い本稿を起こすことにした。

内容は極めて荒っぽく、肉付きの悪い文章であるが、少しでも参考になれば勿怪の幸いである。

最後に、石井氏の家系に少し立ち入ろう。祖父のご母堂は「包末系国武家」、またご母堂は「宮田系国武家」出、両家の総本家は浮羽市にある「姉川国武家」とのことであるが、その国武家は星野氏の分流であると言う。本稿で取り上げた「秋月家」は「東漢氏」の末裔で、その東漢氏の一族に「調氏」があり、調氏子孫に黒木、星野氏があることは本稿で縷々述べてきたところである。その「国武家」はその星野氏につながる家系だったのである。

本稿では国武氏の名前は一度も出てこない。機会があれば、追跡したいと考えているが、石井氏によると、国武家は戦国時代の筑後の星野氏の別れであり、初代は国武薩摩と系図では記されている由。この国武家に伝わっている系図は昭和の始め大村の漢学者・石井慎太郎氏を中心とした星野一族の子孫の方々によって編纂されたものという。

（伊藤記）

私は我が家の歴史に関心を示したのが、学生時代、母の実家である宮田の国武家にある星野氏一族の系図を見たときからであったかもしれない。そこに「初代**星野中務大輔藤原胤実**」の名を**メモしていた記憶がある。その時は、**それで終わっていた。石井家や国武家にさらに詳しく関心が深まったのは、私の住んでいる筑紫野市に図書館が出来てからであ

ろうか。国武家の祖である星野氏が有名な歴史上の事件とどんな関係があるかを調べるようになり、それ以外のいろいろな歴史事件に関心が広がっていった。

昨年であったか、兄の紹介で歴史に関心のある伊藤氏のグループと知り合う機会を得た。そのグループと歴史ものでまとめたものを遣り取りするようになり、私の「九州武士の生き様」を読んでもらう機会を得たのである。その結果がこの共編に名を載せてもらうことになった次第である。

（石井記）

引用・参考文献

●『武藤少弐興亡史』渡辺文吉、海鳥社、一九八九年
●『肥陽軍記』原田種眞（田伝村合戦）
●『歴史読本』一九九三年、七月号（鍋島直茂）
●『日本の名族』九州編、新人物往来社（龍造寺氏）
●『武家家伝』（千葉氏）インターネット
●『フロイスの見た戦国日本』川崎桃太、三晃印刷、２００３年
●『九州戦国史』吉永正春、葦書房、昭和五六年
●『筑後武士物語』江崎龍男、芸文堂、平成二年
●『郷土の文化財改定第一集』（八女郡黒木町）
●『九州太平記』荒木栄司、亜紀書房、一九九一年
●『大友一族』芥川龍男、新人物往来社
●『福岡県の歴史』佐賀県、山口県、大分県、熊本県、各県の歴史
●『吉井町誌』『浮羽町史』『久留米市史』『津江村誌』『浮羽郡誌』
●『歴史と旅』平成七年２月号（黒木家永）

●大和の豪族と渡来人　加藤謙吉　吉川弘文館
●武士の誕生　関　幸彦　ＮＨＫ　ＢＯＯＫＳ
●藤原純友　松原弘宣　吉川弘文館
●大化の改新と壬申の乱　平野邦雄編　作品社
●帰化人と古代国家　平野邦雄　吉川弘文館
●九州人　房総にはまる　伊藤久　うらべ書房
●戦国の地域国家　吉川弘文間「統合へ向かう西国地域」岸田裕之
●武士の成長と院政　下向井龍彦　講談社
●戦国大名、県別国盗り物語　八幡和郎　ＰＨＰ新書
●ブログ「九州三国志」（株）コーエー
●ブログ「おとくに」（古代豪族）
●ブログ「九州安東氏」（多々良浜の合戦）
●ブログ　地方別武将家一覧
●ブログ　各種「Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ」
●ブログ　絵歴 Talk 2000
●ブログ　今日の韓流通信Ａｃｔ
●ブログ　エピソード高校日本史
●福岡県の歴史　諸氏　山川出版社
●博多・福岡と西街道　丸山雍成　長洋一　吉川弘文間

●博多　武野要子　岩波新書
●西国の戦国合戦　山本浩樹　吉川弘文館
●人づくり風土記　山形　諸氏　農山漁村文化協会
●人づくり風土記　福岡　諸氏　農山漁村文化協会
●城と人と　出原博人　葦書房